

Z/Xの世界に転移 ～この世界で幸せを見つける～（番外編）

黒曜月華

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Z/Xの世界に転移　　この世界で幸せを見つけるこの番外編です。

Z/X原作を知らない方、本編を読んでいない方はブラウザバックを強く推奨致します。

上記二つともクリアしている方々に読んで頂きたい小説ですので。

片方だけだと満足して頂けないと思われまます故。

此方の作品は本編に対してのネタバレを強く含みます、本編を楽しみたい方は閲覧されない方が宜しいかと。

※※※

現在のZ/X原作のキャラは話の内容次第では全員出ますので、ご了承ください。

既に死亡設定キャラもいますので悪しからず。

5月31日追記

バレンタイン最終話後のイメージ挿絵・蝶ヶ崎ほのめ&九条大祐。

←←←

12月25日

メリーリゲスマス!

(挿絵間に合わない……!)

「Z/Xの世界に転移　この世界で幸せを見つける」本編は下記

1 / h t t p s : / / n o v e l . s y o s e t u . o r g / 8 4 4 4 9 U R L ←

目次

番外編：クリスマスイブ（前編）	1
番外編：クリスマスイブ（後編）	23
番外編：クリスマス	46
番外編：大晦日	71
番外編：元日（前編）	89
番外編：元日（中編）	102
番外編：元日（後編）☆	117
バレンタイン（前編）	139
バレンタイン（前編2）	152
バレンタイン（中編）	165
バレンタイン（中編2）	185
バレンタイン（後編）	210
バレンタイン（後編2）	233
各務原あづみ happy birthday!	257
各務原あづみ happy birthday! No. 2	260
各務原あづみ happy birthday! No. 3	264
各務原あづみ happy birthday! No. 4	270
各務原あづみ happy birthday! No. 5	274
各務原あづみ happy birthday! No. 6	279
各務原あづみ happy birthday! No. 7	283
各務原あづみ happy birthday! No. 8	287
各務原あづみ happy birthday! No. 9	292
各務原あづみ happy birthday! No. 10	297
各務原あづみ happy birthday! No. 11	302

h a p p y	h a p p y	h a p p y	h a p p y	各 務 原 あ づ み	各 務 原 あ づ み	各 務 原 あ づ み	各 務 原 あ づ み	各 務 原 あ づ み	各 務 原 あ づ み	各 務 原 あ づ み	各 務 原 あ づ み	各 務 原 あ づ み
V a l e n t i n e ,	V a l e n t i n e ,	V a l e n t i n e ,	V a l e n t i n e ,	h a p p y	h a p p y	h a p p y	h a p p y	h a p p y	h a p p y	h a p p y	h a p p y	h a p p y
b i r t h d a y	b i r t h d a y	b i r t h d a y	b i r t h d a y	b i r t h d a y	b i r t h d a y	b i r t h d a y	b i r t h d a y	b i r t h d a y	b i r t h d a y	b i r t h d a y	b i r t h d a y	b i r t h d a y
N o.	N o.	N o.		N o.	N o.	N o.	N o.	N o.	N o.	N o.	N o.	N o.
4	3	2		2 0	1 9	1 8	1 7	1 6	1 5	1 4	1 3	1 2
409	402	397	391	361	352	343	336	329	323	317	312	307

番外編：クリスマススイブ（前編）

「うーん…どうするか」

華美と呼ぶに相応しい程綺麗な白い結晶が降り積もるある日。

九条大祐は一人、様々な種類の店屋に足を運んでいた。

彼此四時間は立ちっぱなしの歩きっぱなし。

自らが探し求める物に出会うまで、その歩みは止まる事を知らない。

最初は洋服店から始まり、次にアクセサリー等を取り扱う小物専門店、そこでも探し物が見付からない、と…

更には本屋へ寄り、オススメの旅行先が紹介された雑誌を物色。

それでもピンと来ない九条大祐は、頭を抱えて悩んでいた。

彼が何故、こんなにも苦悩しているのか。

気になった方々も少なくとも無いだろう。

抑、前提として九条大祐には二人の恋人が存在する。

別に浮気だとか、彼自身が女つ誑しという訳ではない。

相手二人の了承をしつかりと得ての関係だ。

間違っても昼ドラ、深夜ドラマの様な泥沼は無い。

至って普通の、純粋な恋愛だ。

例の相手二人が少々特殊である事も含め。

「いやあ…やっぱり寒いな。早いところ切り上げないと凍え死ぬ事間違いない」

その前提を踏まえ、彼が頭を抱える理由。

先程の彼女二人に上げるプレゼント選びをしていたのだ。

プレゼント？一体何の日？

まさか彼女二人が同日誕生日だったり？

いや、そうではない。

しんしんと沢山の雪が降る季節、冬。

そんな冬に起こるイベントと言えば、先ず最初に思い浮かべるであろう。

そう、今日はクリスマススイブ。

残念ながら当日ではないものの、明日にはクリスマスという特別な日を迎える。

故に九条大祐はプレゼント選びに苦悩を強いられていたのだ。

(女性が貰って嬉しい物かあ…考えた事も無いな)

? 指を口元に当て、下を向きながら兎に角歩く。

? 一番手っ取り早いのは本人達に聞く事だが、彼は二人に内緒で外出している。

? サプライズとしてプレゼントをあげたいからだ。

? それがバレては元も子もない。

? 今日は二人も外出するという、タイミングが合わさった為に勢いで出てきたものの。

? 手詰まってしまったのが現状。

(流石に何も渡さないってのは嫌だし、意地でも探すか)

? クリスマスという特別な日に大切な人へのプレゼントは絶対。

? 彼の中ではそれが最もとなっている。

? だからこそ、ここまでプレゼントに執着しているのだ。

「さて…漂う詰みゲー臭。ここは誰か違う女性に聞いてー」

? 彼女達に聞けないのであれば、自分の知っている女性に相談すれば良い。

? そう思った九条大祐は片っ端から女性の知り合いを思い出そうとする。

? が、次の瞬間。

「大祐くん、み〜つ〜けたっ♪」

「おあっ!?!」

? 急に後ろからど突かれた様な衝撃が体全体に走り、九条大祐は前に押し出される。

? 更には首元に腕を絡ませられ、身動きが制限された。

? 一瞬何が起こったのか分からなくなった九条大祐だが、直ぐに察しはついた。

? 自身の首元に回されている華奢な腕。

? 自身の背中に押し付けられる二つの大きな物体。

? その気になれば男性を一発で落とせそうな艶やかな、そして少しの幼さが混じった声。

? 明らかに自分の物では無い綺麗な紫色の髪の毛。

? 加えて、自身を指して呼ぶ一人称。

? 九条大祐は思い当たる人物が1人しかいない。

「…ルクスリアさん、何故普通に出てきてるんですか」

「面白そうだったから?」

? そう、先程九条大祐に背後から襲い掛かって来たのは『七大罪色欲の魔人・ルクスリア』

? 何時も自由奔放な彼女の名前だ。

「はあ…ルクスリアさん、来るのは一向に構いませんよ? ですが、その服を何とかして下さい」

? 今二人が話し合っているのは、大勢の人が行き交う大通り。

? そんな場所で、ルクスリアは何時も通りの露出が高い衣服を身に付けていた。

? 通り過ぎる男性は皆足を止めルクスリアに魅惑され。

? 通り過ぎる女性は皆嫉妬という感情を顔に出し。

? ある意味九条大祐も注目の的になっていた。

? 人気者として受ける視線は誰も嫌がりはしないだろう。

? 事実、九条大祐もその一人だ。

? だが、今浴びている視線はそういう類の物では無い。

? 嫉妬や哀れみといった視線だ。

? それでいて、ルクスリアは相変わらずニコニコしている。

? 対して九条大祐の表情は萎えていた。

? 一刻も早くこの場から消えたいと思った彼だが、それよりも気に掛かっていた事があった。

「えーと、この服じゃ駄目だったかな…?」

「悪くはありませんよ。けどですね、此处は大勢の人が居るんです。派手過ぎじゃー」

「私はこれが普通だけど」

「…何より、寒く無いんですか? そんなに色々露出してて」

? 九条大祐はルクスリアの体を心配していた。
? 幾らZ/Xとはいえ、体は人間。

? 冷やしてしまつては風邪を引いてしまつと、気を使つてい
だ。

? その気持ちに気付いたルクスリアは、もつと強く彼の体に抱き付
く。

? 周囲の男性の嫉妬度が100上がった。

「大祐くんつて、何かといつて私を気遣つてくれるわよね。流石私の
大祐くんっ♪」

「俺はルクスリアさんの物になつた積りは無いですから!...ほら、早
く洋服屋に行きますよ」

「えっ?」

? ルクスリアは自分が予想していた未来と違い、少し驚愕の音を漏
らしてしまつた。

? 彼女の予想。

? 彼に抱き付く↓引き剥がされる↓帰れと言われる↓それでも強
引に付いていく。

? だつた筈が、まさかの展開。

? ルクスリアは少しの時間思考がストップした。

? 彼女は九条大祐の体に抱き付くのを止め、彼の後ろで呆然とす
る。

? すると、ルクスリアの前に九条大祐の右手が差し伸べられた。

「その服じゃ幾ら何でも寒いでしょう。俺からお金出すんで、新しい
服を買いに行きましょう? 移動中は俺のコートを貸しますから」

「えっあつ...う、うん」

「サイズは大丈夫だと思ひますが...デカ過ぎても文句はー」

「言わないに決まつてるじゃないっ、ありがとね♪」

? そう言いながら、ルクスリアは手渡された彼の黒コートを羽織
る。

? 何時も素っ気無い反応を返す九条大祐に優しくされた彼女は、満
面の笑みを浮かべた。

? その笑顔を、不覚にも可愛いと思ってしまうた九条大祐。

? 彼はルクスリアから視線を逸らし、遠目に見える洋服屋を目指す。

「やっぱり大祐くんは優しいわね」

「…」

? 九条大祐は彼女の言葉に一瞬反応してしまったものの、無言の早歩きを始める。

「あつ、女の子を置いてっちや駄目なんだぞー」

? 少しの幼さが混じった声でそう呼び掛けながら、九条大祐のゼロ距離まで近づく。

? 丸で本物の彼女の様に、ルクスリアは彼の腕を離さずに付いて行った。

? 道中何人もの男性に睨まれながらも九条大祐は気にせず目的の洋服屋に歩みを進める。

? そんな彼とは正反対の如く、彼女はるるん気分で楽しんでいった。

…言うて遠目に見えるだけ。

? 徒歩5〜10分程で二人は洋服屋に到着。

? 外装は、若い者達が入りそうなキャピキャピしてるものではなく、何方かと言えば清楚な見た目。

? 建物自体は黒く、店の名前等の文字系統は白。

? そこはかたなく高級感のある洋服屋だ。

? ドアは手動。

? 九条大祐が手前に引き、ルクスリアを先に入店させる。

? 常にレディーファーストの精神を持つ彼にとって、最早この行為自体が体に染み付いていた。

? ルクスリアは一言御礼を言いながら、洋服屋へと入って行く。

? その後に続く様に九条大祐も入店。

? 内部は外装と違い、仄かなオレンジ色の暖かな光で包まれていた。

? 何とも目に優しく…そして売り物の衣服に映える。

? 売られている服に奇抜な見た目の物は少なく、シンプルな仕上がりの物が置かれている。

「どれがルクスリアさんに似合うかな…」

「ここのお店の服、随分と露出を押さえてるわねえ」

「普通ならこれ位ーいや、ルクスリアさん基準じゃ押さえてる方か

…」

「？」

? 九条大祐はルクスリアに聞かれないよう、小声で声を漏らす。

?? 取り敢えず目の前に台に置いてある衣服を見つめ、ふと大事な事を思い出す。

「…????」
「こんな質問したくないんですが」

「私なら何時でもオツケーよっ♪」

「ルクスリアさんのスリーサイズ」

「んもうっつれないわねえ。…私のスリーサイズ：94―60―90

ね。もしかして大祐くんは巨乳派？それなら、大祐くんと私がー

「…何言おうとしてるんですか!？」

「ーすれば、もっとおつきくなつて、大祐くんを満足させてあげれるわよ♪」

? ルクスリアの放送禁止用語は九条大祐の大声で掻き消されたが、周囲の客の視線を一気に集める始末となつてしまった。

? 九条大祐は無言で頭を下げ、彼女の腕を引っ張つて試着室まで連れて行く。

? その間にルクスリアが甘い声を出し続けるも、彼は無視を貫いた。

? ルクスリアを連れ、彼女を試着室の中に押し込む。

? 一緒に行動をしなければ静かにする筈だと思つた九条大祐。

? 考えられる方法は、これしか無かつた。

? 彼は苦虫を噛み潰した様な表情でルクスリアを見る。

? 彼女はその視線に体をくねらせる、九条大祐は呆れて溜息を吐く。

？誰かにヘルプを出したくなつた彼であつた。

「良いですかルクスリアさん、俺が服を選びますから、貴女は此処に居て下さい。良いですか、絶対ですよ。分かりました？」

「…むう、つまらないわね。まあ、大祐くんが選んでくれるなら素直に待つてるとするわ」

？そんなルクスリアの言葉に強い不信感を抱いた九条大祐は、彼女を睨む形で見つめる。

「なーに？丸で発情期の動物みたいな目をしてるわよ。大祐くんって試着室でヤつちやうタイプ？」

「あああああ！もう、ちよつと行ってきますから！」

「行ってらっしゃい、旦那様♪」

「…疲れた…精神的疲労で死ぬ…」

？フラつく足取りでありながらも、約束は守る為に努力する。

？九条大祐はルクスリアに似合う衣服を探しに店内を歩き回る。

？彼の顔は若干老けていた。

？途中倒れ掛けた体を、服選びの相談を受けてくれていた男性の店員に助けて貰った。

(…あれ、当初の目的って…何だっけ)

――

？凡そ20分程。

？試行錯誤の末、ルクスリアに着せる為の衣服を何着か見つける事に成功。

？サイズの問題や見た目、何より彼女が気に入ってくれるか。

？この三点を重視して選んだ為に時間が少々掛かってしまった。

？九条大祐は選抜した衣服を片手に急いで試着室に戻る。

？其処には、待ち草臥れた様子のルクスリアが頬を膨らませて待つていた。

? 試着室の外で。

「女の子を待たせちやいけないつて前にもー」

「言われた覚えはありませんからね。…けどまあ、待たせてしまい申し訳御座いません」

「でも、大祐くんが私にお似合いの服を探してきてくれたんだから。私が気に入ったら許してあげても良いよ?」

「…気に入らなかつたら?」

? ルクスリアはその言葉を待っていたと言わんばかりに、舌で唇をペロリと舐める。

「気に入らなかつたら…勿論、大祐くんを頂いちゃうから…♪」

「何故そうなるんですか!」

「損害賠償?」

「意味違いますからね」

? 衣服を買ってあげ、その衣服が彼女に似合うか悩んだ末に、損害賠償請求。

? 冗談でも止めて欲しいと九条大祐は願った。

? 兎に角、このままでは話が進まない。

? 九条大祐は片手に持ち掛けている衣服をルクスリアに手渡す。

? これさえ済めば、後はルクスリア本人で何とかしてくれるだろう。

? 彼の心に一瞬の安堵、そして油断が生まれた。

「それじゃあ、何かあったら俺を呼んで下さい。ルクスリアさんが出てくるまで此処にいますんで。あ、コート」

「勿論お返しするわ、ありがとねダーリン♪」

「…もう好きに呼んで下さい」

「ふふっ♪」

? ルクスリアは可愛らしい笑顔を彼にプレゼントし、試着室の中へ入って行く。

? 女性の着替えに長いと認識している九条大祐は、近くの壁に背中を預ける形で靠れる。

(ダーリンで…相馬さんは何処へ)

? 彼の中では思う所が多々あるのだろう。

? 然しそんなどうでも良い事を脳内から振り払う様に、頭を左右にブンブンと動かす。

? 取り敢えず何もせずルクスリアを只管待つ。

? 腕を組み、目を瞑って、その状態が10分程経過した時。

「大祐くん、ちよつと良いかしら…?」

? 彼女が試着室から顔だけを出し小声で九条を呼ぶ。

? 九条はルクスリアと呼ばれ、試着室へと近付いていき。

? 要件だけを聞く為に耳を寄せる。

「この服の着方なただけだね」

「…俺は試着室の悪魔にでも取り憑かれているのか」

? 彼がこんな事を言うのには訳があった。

? 以前、九条大祐は各務原あづみという少女の着替えを手伝ってあげた事があり。

? その時以来、あまり女性の試着に付き合うのは遠慮していた。

? 各務原あづみと彼はお互いを理解し合っていたから良かったものの。

? ルクスリアと九条大祐は其処まで親密な関係では無い。

? では何故、例の少女は大丈夫だったのか。

? 単純に、その各務原あづみという少女は前述に記されている九条大祐との親密な関係を築いた女性だ。

? そしてもう一人、九条大祐と相思相愛の仲の女性とは。

? 各務原あづみを一番大切に自身の宝物とする、各務原あづみのパートナーであるZ/X「リゲル」。

? この二人が九条大祐と恋人同士なのだ。

? だが、リゲルは最初の頃、各務原あづみを愛し過ぎていたが故に自分自身が彼に好意を抱いていようが各務原あづみが九条大祐と繋がる事を応援していた。

? 然し幾度と無く彼の魅力に惹かれたリゲルは九条大祐に対する思いが我慢の限界に達し。

? 遂に彼へ、自分の気持ちを素直に伝えた。

? その後は色々であったが、三人承知の上で結ばれる結果に。

? 二人の女性の真つ直ぐな気持ちだが、こうしたハッピーエンドを迎えた。

? 因みに最初は各務原あづみから自ら好意を伝えたいらしい。

「…で、要件は」

「…やっぱりなんでもなーい」

「いや、必要なら何でもしますけど。性的行為以外なら」

「だって大祐くん、嫌々そうなんだもん。だからもうちよつと待って
てくれるかしら? 私だけで解決するから、ね?」

? そう言つて、ルクスリアは試着室の中へ戻っていった。

? 九条は直様察する。

? 彼女は自分を思いやり、一人で何とかすると言ってくれた事を。

? そしてその彼女の表情は何処か寂し気な雰囲気醸し出していた。
た。

? 少しの罪悪感に包まれつつも、言われた通りにルクスリアを待
つ。

? 下手な手出しは無用と考えたのだろう。

? 今度は、ルクスリアを心配する様に試着室を見つめる。

? 大体20分程経過した時。

? 再度ルクスリアが試着室から出てきた。

? 今回は顔だけでなく、しっかりと全身を。

「じゃーん、似合ってるかしら?」

? 彼女はそう言うと、その場でくるつと一回転をして見せた。

? 対する九条大祐はルクスリアの姿に無言となる。

? 彼は自ら彼女に似合う服を探していた。

? だが、あまりにもルクスリアの容姿とマッチし、可愛さに絶句と
い訳だ。

? 思わず視線を逸らす九条大祐。

? その反応を面白く感じたのか、ルクスリアが前屈みになってゼロ
距離まで詰め寄る。

? 彼女の顔は笑顔で一杯だった。

「あれ？何か言ってくれると思ったんだけどなあ？」

(完全にルクスリアさんになめられてる…！)

「い…いや、純粋に可愛いと見て取れますよ」

「本当!?やった〜♪」

? 九条は精一杯の受け答えをした。

? 自分に嘘は吐かず、素直に感じた事を彼女に伝える。

? するとルクスリアは彼に褒められたのがよっぽど嬉しかったのか、機嫌良さ気に九条の腕に抱き付く。

? 急に何かと内心構えてしまった九条だが、次の彼女の発言で抵抗するのは止しとした。

「ありがとっ、大祐くん♪」

(ルクスリアさんにとっては、これが普通なんだろうな)

? スキンシップを好むルクスリアに、馴れ合いを嫌う九条大祐。

? 性格的にも性的な面でも正反対な二人の会話を遠目に見ている人達は、口を揃えてこう言う。

『付き合いの長い恋人同士か?』

? だが。

『違っっ!』

『あつたり〜♪』

『1ミリも合ってませんからね!』

? その質問に対しての答えは何時も変わらない。

? 九条が否定しルクスリアが肯定。

? 相変わらず正反対な二人だった。

(というか…ここまでとは想像していなかった)

? 九条とルクスリアの茶番劇は置いておき。

? 彼は目を逸らしつつも偶にルクスリアをチラ見する。

? そして又逸らす。

? 気付かれない内に。

? 万が一気付かれてしまえば厄介事からは免れないからだ。

? では、九条が彼女に選んだ服とは。

? ルクスリアが凄く満足した服とは。

? 髪飾りやアクセサリー等の小物は一切無く、彼女の角らしき何かが生えている位。

? 上半身には肩出しの白いセーターを、下には黒いミニスカート。

? そして九条大祐コーデイナート恒例の黒いニーソを穿いている。

? 言うてそれだけ。

? だけなのだが、ルクスリアはそれさえも可愛く、そしてそこはかとなくエロく着こなして見せた。

「でも、これじゃ寒いままだよね?」

「なので、ルクスリアさんにはこの白いコートか薄く赤いカーディガン、若しくは俺と似たような黒いコートを御自身で選んでー」

「じゃあ大祐くんと一緒のっ♪」

「: 早いですね。それとも、一応全部買つときますか?」

「此れだけで私は充分よ?」

? 黒いコートを両手に持ちながらルクスリアはニコニコと、今日一番の笑顔を見せる。

? その純粹無垢な表情に、九条も思わず笑顔で返した。

? が、一瞬で我に返り無表情へと顔を変貌させる。

? 彼がほんの僅かに見せた笑顔をしつかりと記憶しておきながらも、ルクスリアは静かに黙っていた。

? あまりしつこくちよつかいを出せば彼に嫌われる事位彼女も承知済みだからだ。

「んじゃ、会計済ませてーあ、そうだ」

「どうかしたの?」

「いや、ちよいとルクスリアさんに相談事が。後で宜しいですか?」

「もっちろん☆お姉さんにまっかせなさい」

「有難いですよ、ほんと」

? そんな会話を交わしながら、彼女の服の会計を済ませるべくレジへ向かう。

∴前に、ルクスリアが服を着替えるのを待つ。

? 着衣したままでは買い上げる事が出来ないのは常識だ。

? その後九条が勘定を進めている間ルクスリアは、彼に買って貰っ

た衣服の入っている袋を大切そうに抱いて持っていた。

?やはり何処か幼さを感じる彼女を見て、九条は微笑みを零す。

?して、二人は買い物が終わらせて外に出てみると。

?右斜め前方に見える大きな交差点を、九条の知り合いが全力で

走っていった。

(…え、へっきー?)

「…大祐くん?」

「あ…すみません、知り合いが居たもんですから」

「そうなの?でも、今は私とのデートに重点を置いて欲しいなっ」

?内心デートじゃないと突っ込んでおき、何方かと言えば親友の森山碧が全力疾走していた事が気になった九条だった。

?だが、同時に鉢合わせをしたくないと思ったのも事実であった。

――

?森山碧の案件を気に掛けつつ、九条はルクスリアと二人で飲食店へと足を運んでいた。

?九条がオススメの店があると言うと彼女は直ぐにでも行きたいと言い出して聞かなかつた。

?テンションが異常に高いルクスリアに嫌な予感を感じながらも、渋々例の飲食店へ行く事に。

?この飲食店はカレー等を主なメニューに、+αで様々な食材を扱う此処らでは人気の高い店だ。

?然しながら表通り等には店を構えずに、人気ながらも所在地は余り知られずひっそりと経営している、謂わば隠れた名店。

?九条とルクスリアは人気の無い裏通りを進み目的のこの店へ到着。

?既にその店の椅子に座りながら何を頼むか悩んでいた所なのだが。

「ルクスリアさんはお決まりで？」

「大祐さんと一緒のなら何でも」

「こういう時位は自分の好きな物を頼めば……まあ、貴女が良いなら大丈夫ですけど」

「うん♪」

?メニューを決め、呼び出しのベルで従業員を呼び付ける。

?あまり関係無いが現在ルクスリアは何時もの服を着衣中。

?彼からプレゼントの服は折角買って貰ったのに汚したく無いとの事。

?そんな彼女の反応について嬉しくなった九条だった。

?それはさて置き、従業員が二人の座る席に着き。

?いざメニューの中から飲食物を頼もうとした、その時。

「いらっしやいませ!」注文は何にしはりますか?」

「えーと、………ん?」

「ありや?」

?九条は注文を受けに来た店員の声を聞いて動きを止めた。

?して、徐々に徐々に顔を視界に入れていく。

?相手方も九条の存在に気付いたのか、彼をじっくり見つめ続ける。

?ゆっくりと重なっていく目線が丁度一直線に繋がった時。

?目と目が合う。

「飛鳥君!」

「大祐君!」

?驚く。

「うおっ」

?九条が手を滑らせる。

ガッツ!

「痛った!」

?結果、近くの窓淵へと頭をぶつけた。

「ちよっ、大丈夫かいな!」

?天王寺飛鳥は手に持っていた注文を記す為の表をテーブルに置

き、手を差し伸ばした。

? 若干の痛みが残る後頭部を摩りながらも、九条は飛鳥の手を取る。

? しつかりと握られたのを確認した飛鳥は一気に引っ張り上げた。

? それと同時に体勢を整た九条はテーブルの上に項垂れる。

? あまりの痛さに目からは涙が少量溢れていた。

? 未だに後頭部を摩り続けている九条。

? その光景に我慢が利かなくなったのか、ルクスリアが自身の掌を上から重ねる。

? 無論、それで痛みが引く事等無いのだが、彼女は咄嗟に行動へと移してしまった。

? 気持ち少しでも治まってくれば良いなという感情で。

「うう…ありがと、ルクスリアさん…」

「どうせなら私の膝の上に乗せる? 前みたいに膝枕をしてあげても良いのよ♪」

「いや、遠慮します。そのまま何されるか分かりませんから」

「むく…偶にはしてくれても罰は当たらないと思うけどなあ」

「ルクスリアはんがして欲しいだけやないかい。相変わらずラブラブやな!」

? 天王寺飛鳥の言葉を耳に入れた瞬間、九条は徐ろにバトルドレス『サバーニャ』を装着し。

? 飛鳥の額にGNピストルビットをゼロ距離で構えた。

「もういっぺん言つて?」

「…ほんま、冗談やて」

「飛鳥の身に危険が…! 其処の貴方! 今直ぐにその銃をー」

? 威嚇の積りで行った行為が、奥の厨房から天王寺飛鳥のパートナージ／X「ファイエリテ」を呼ぶ事となつてしまった。

? 更にファイエリテはこの一部始終しか目に収めていない為に九条を敵対視し始める。

? 彼女自身、相手が世界の一悶着を一つに纏めた人物と知った一瞬は動きを止めたが、それを悟られぬよう一伯置いて飛鳥へと駆け寄

る。

? フィエリテが、大好きな彼を敵対関係者として見なした事に気付いたルクスリアも立ち上がって九条の前に出る。

? 今にも戦闘へ発展しそうな程に威圧の空気が漂っていた。

「…七大罪色欲の魔人「ルクスリア」。例え相手が誰であろうと飛鳥を狙うのであれば…!」

「あらあら、私を敵に見るのは好きにして構わないけど…大祐くんをその対象にするのだけは許せないわね」

「…ルクスリアはん、大祐君にぞっこんやないか」

「飛鳥君が言う…!」

? 女性側二名は争い始め、男性側二人は引き気味に距離を取る。

? だが、店の店長が困っている事に目が行った天王寺飛鳥は引くに引けなくなってしまう。

? 無言でフィエリテの腕を掴んで厨房の奥へと連れて行った。

「何をするんですか! 飛鳥!」

「…このままじゃ僕の給料が激減してまうやないか。それだけは嫌や」

? 独り言を呟く飛鳥に怒鳴り散らすフィエリテ。

? そんな二人の背中を見ながら、九条とルクスリアは静まり却ってしまった。

? 今日とは他に人が居なかったのが不幸中の幸いだっただろう。

? 人気といえど隠れた名店の宿命だ。

? それが功を奏したとも言えるのが現状、彼等の場。

? ルクスリアと九条はどうする事も出来ずに唯呆然と飛鳥の帰りを待つ事にした。

…凡そ五分程。

? 互いの問答が済んだのかフラフラとしながら天王寺飛鳥が奥から姿を現した。

? それに続き、未だに頬を膨らませ腕を組み、決して九条と顔を合わせようとしないフィエリテが後ろを歩いていた。

? その光景に九条は苦笑い、ルクスリアは気付かれないように笑い

を堪える。

「…大祐君、ご注文はお決まりですか」

（飛鳥君の魂が抜けて、標準語になつて…!?）

「酷い有様ね」

「七大罪に言われたくありません」

? 意気消沈した天王寺飛鳥を尻目に二人の険悪な雰囲気。

? 味方の居ない九条はこの場から一刻も早く逃げ出したいと思うばかり。

? そして幾ら話し合いをしたとは言えど、ルクスリアとフィエリテの仲が解消される事は無かった。

? 無論、話し合いをしたのは天王寺飛鳥とフィエリテであり、ルクスリアは関与していない。

? 当然距離が縮まる事も仲良くなる事も無い。

? そうして女性側二人が言い合っている隙に、九条は天王寺飛鳥へと注文を済ませる。

? 勢いで目に付いた品々を頼んでしまった所為で彼自身、何を注文したのか覚える暇すら無かった。

? が、唯一つ。

（あれ? 俺…頼み過ぎたんじゃ…）

? 彼がその事実気が付いた時には最早手遅れだった。

? 急ぎ注文、後々後悔。

? 早く頼んで早く食べ終わり、そうでもしないと早く帰れないという風に自分を急かし、あわや大惨事を招く結果になりうるとは。

? 注文の品々が目の前に運ばれてきた瞬間、九条は笑いながら涙を流した。

（あはは、俺のばーか…食いきれねえよ…）

「わあ、凄い量ね。あれ? でも大祐くんってこんなに食べれたっけ?」

「無理ですよ…」

「じゃあ何でーあ、私を喜ばせようとしてくれたのね? もうっ、私は大祐くんと一緒に居れるだけで悦び溢れるのに♪」

「…あ、はい？あー…じゃあもうそれで良いですよ…うん」

？九条は、ずらつと並んだ飲食物を少しずつ退かし、僅かに空いているテーブルの上に両腕を置き。

？その両腕の上に自身の頭を乗せて落胆していた。

「大祐君が危ういやんか!!」

「良い加減萎えますよ…何処に俺の居場所がー」

「…はっ！大祐くんの今の言葉、略すと苗○になるわよー」

「ルクスリアはん…それはあかんやろ…」

？天王寺飛鳥の発言に、ルクスリアはてへつと笑顔を見せる。

？フイエリテは聞かなかった振りをしており、飛鳥は九条に憐憫の視線を送る。

？天王寺飛鳥のその気配を感じ取り、九条は顔を上げた。

？だが、ルクスリアよりも目の前に沢山と置かれている料理に萎えて、再度顔を俯ける。

？生まれた時から…等とは言わないが、元々小食な九条。

？されど彼は完璧主義者。

？幾ら自分の間違いで頼んでしまったとはいえ、全部食べきらないと気が済まないのが九条だ。

？事の元凶は考え無しに行動した彼の問題ー

「…いや違うだろ。この現場がこんなにも混沌とした首魁はルクスリアさんじゃないのか？」

？頭を下げっぱなしに一人でぶつぶつと喋っている九条を、ルクスリアは心配そうに見つめていた。

？彼女は彼女なりに罪悪感を感じている様だ。

？主に、というか九条だけに対して。

？流石のルクスリアも、このままでは彼に嫌われるという危機感を察したのか。

？一向に独り言を止めない+顔を上げない九条に近付き、謝罪しようとしたその時。

？店の扉が開く音が周囲に響き渡り、全員がその扉に視線を釘付けとされた。

? 唯一人、九条だけを抜いて。

? 誰もが地味に入って来て欲しくないと願うも、段々と開かれる扉。

? 其処から姿を現したのは。

「ろーぜ、ここどこ?」

「人があまり居ない、けれど人気なお店…とでも言えば理解出来るかしら?」

「うゆ…ろーぜ、ひといっぱい」

「まあ、何れきさらにも分かろーえ?」

? 現実とは非常だ。

? 然し、それが時には救いの神にもなる。

? 入店してきた百目鬼きさらとヴェスパローゼの声を耳にした瞬間、九条は即座に立ち上がった。

? そう、俯いていた状態から即座に。

? 最初は気付かなかったきさらやヴェスパローゼも、九条大祐の存在にぴたりと動きを止めた。

? 取り敢えずお客様の来店という事で、天王寺飛鳥が「いらっしやいませ」と言葉を投げ掛けようとした一瞬。

「だいですけっ!」

? 百目鬼きさらは、九条大祐を視界に入れた瞬間に彼の元へと走って行く。

? 勢い良く飛び込んで来たきさらの抱き着きを、九条は膝を着き両腕を広げて受け入れる。

? が、きさらを受け止めたと同時に割と強めの衝撃で後ろに倒れ掛ける。

「おっと…偶然だね、きさらちゃん」

「ういー!」

「きさらったら…他の誰にも目をくれずに真っ先に大祐の所へダイブするなんて」

「……………しっかし、きさらちゃんて思い出したんだけど」
「?」

「そう言えば皆さん、どうして青の世界に居るんです？」

？ 此処で唐突なる質問。

？ そう、一応だが九条の家は青の世界に位置する場所に建っている。

？ 加えて各務原あづみやリゲルと同棲しており、中々に豪邸。

？ 彼の家内情報等は置いといて構わないのだが、という事は九条が青の世界にいるのは何ら可笑しく無い。

？ だが、一応ながらこの場にいる全員が違う世界という事に疑問を抱いた九条。

？ ルクスリアは黒の世界。

？ 天王寺飛鳥&拗ねて何処かに行っているフィエリテは白の世界。

？ 百目鬼きさら&ヴェスパローゼは緑の世界。

？ 其々の世界のいざごきは九条や彼の親友が鎮めたが、やはりまだ各々の世界の概念は消えていない。

？ 世界を一つに纏めた張本人がこんなんでは未来が不安だ。

？ という声が無いとも言えないのが現状、彼の立場。

「まあまあ、そう言うのは無しで行こうや！」

「そうね、私もそれにさんせい！」

「ルクスリアさんは元から固定の世界が無かった様な…」

「大祐、今更そんな事を気にしても仕方無いわ。貴方が先陣切って全員を導かないでどうするのよ」

「きい、ずっとだいですけについてく！」

「ヴェスパローゼさんにきさらちゃん…」

？ 二人の意見に感極まる九条。

？ ぶーぶーと、彼に受け入れられたきさらを羨ましがり、横から九条の肩に引っ付くルクスリア。

？ 彼女の体を引き剥がそうと試みる九条だが、どうやっても離してくれないルクスリアに諦め。

？ 至ってシンプルな結論、放置という対処を取らざるを得なかった。

？ それに甘えてルクスリアはどんどん顔を近付かせていく。

? 遂には手を出しかねた九条だったが、天王寺飛鳥とヴェスパローゼの「恥ずかしくないのか」という質問に身を引いたルクスリアを見て、自身の心と体を鎮めた。

? そんな、九条にとつて1日たりとも無聊な日々の無い空間に包まれていると、又もや扉が開き始める。

? 今度は九条を含めた全員が同じ方向に視線を集めた。

? すると思いつきり、バン!と開く扉。

? 荒々しくダイナミック入店して来た人物を見て最初に反応したのは。

「はあ…はあっ…逃げ切ったか?」

「そーま…あたし、もう無理…」

「相馬君!」

? ルクスリアがその人物に声を上げる。

? そう、もう何度目かも分からないZ/X使い&Z/Xの入店。

? 既にこの場がZ/Xに関する人物の集会所みみたいになってしまっている。

「なっ!ルクスリア!?…:…:というか、何だこの賑やか振りは。随分と異色過ぎる面子だな」

「…んで、相馬君とフィークさんは何から逃げてたの」

「せやな。凄い焦ってるやん」

「あのへんたいにつかまったらおしまいだぞ!みつかるまえににげなきや…!」

? 生憎話が噛み合っていないようにも見える。

? だが、九条は変態という言葉に少なからず疑問を覚えた。

? それは何故か。

? 彼の身内に一人、思い当たる人物がいるからだ。

? 九条はまさかと、嫌な予感を察する。

? それに気付いた時には既に体が動いていた。

? 百目鬼きさらをお姫様抱っこし、ヴェスパローゼに耳打ち。

? ルクスリアや天王寺飛鳥、先程来店した剣淵相馬とフィークには何も言わずに。

？ヴェスパローゼは九条の忠告を受けて直ぐに「有り難う」と伝え、幸甚の意を示す。

？その後九条、百目鬼きさら、ヴェスパローゼは一緒に店を出る準備を始めた。

「すまん飛鳥君！勘定はテーブルの上に置いといたから！お釣りは要らないよ！あと、俺の頼んだ飲食物お好きにどうぞ！最後に良かったら明日のクリスマスパーティーに招待するから！んじゃあ!!」

「えつちよ待っ…」

「大祐くん、私も行くからね♪」

？準備と言っても、九条が自身の注文した品々の会計を済ませるだけ。

？金銭を店のテーブルの上にざらっと置き、三人は風のように外へと出て行った。

？そんな彼の行動に天王寺飛鳥等は只々困惑した。

？少しすると、扉が静かにパタンと閉まる音が店内に響き渡る。

「一体…何だったんや」

「あ、ああ」

？その10数分程経った、わいわいと賑わいを見せるその店に例の変態が来た事は、九条は予想済み。

？だが、フィードとやらがもみくちやにされた事実は明日のクリスマスパーティーにて知る事となった。

番外編：クリスマススイブ（後編）

「…あの子達、可哀想ね」

？九条大祐に連れられ移動中のヴェスパローゼは、静かなる眩きを漏らす。

「まあ…あのフィークって子が一番災難な目に遭うんじゃないですかね」

？それに対して九条は飽くまでながら、自分の予想でありながらも的確に答える。

？丸で最初から分かっていたかの様な口調だ。

？彼が此処まで言い切れるのには訳があるのだが、一言で片付けるのであれば【身内】。

？九条が感じた嫌な予感の正体だ。

「ですが、あの場から早々に撤退して正解だったんじゃないですか？」
「それもそうね。でない」と『冥滅』と呼ばれる彼女と鉢合わせしてしまうもの」

『冥滅』：エレシユキガルの事かしら？」

？百目鬼きさらをお姫様抱っこしたままの九条、その彼と意気投合しているヴェスパローゼ。

？二人が先程の事を話題に話を進めていると、ふと目の前に金髪ポニーテールの女性が姿を現す。

？それに一瞬虚取った九条。

「何故イシユタルさんが此処に？」

？突如として現れたイシユタルさん。

？一応程度の説明として、彼女は自らを『神』と呼ぶ。

？願い事という願望を持ち得る人々やZ/Xの目の前にこうやっ

て出現し、如何なる願いも難無く叶えてみせる。

? 代わりに叶えさせて貰った側と契約し、自らを信奉させ、今度は自身の野望を満たす為の手や足として使う。

? 神ーいや、神と偽った悪魔だ。

? 物で相手を釣り、欲しければそれに値する重い代償を払えと。

? 甘い言葉で誘惑という、もしかしくとも悪魔より太刀が悪いかも知れない。

? だが、『神』と呼ばれる者達はイシユタルさんのみならず、他にも多数存在する。

? 更にそれと重ね掛けに神様等は互いに唾み合っているようだ。

? 要は神に願いを叶えさせて貰った者達は、その意味不明な神同士の戦争に巻き込まれる。

? 何の苦勞もせずそんな馬鹿みたいな癒しを求めるから、当たり前の結果だ。

? 当然の…報いだ。

?

「だいすけ?」

「貴方…私が来たからって泣く事無いじゃない」

「ああ…：：：申し訳ない、ちよいと嫌な記憶を思い出してしまつてね」

「嫌な?…：：まあ、確かに。貴方にとつて神とは害悪でしかないものねえ…」

…いや、あれは既に過ぎた事だ、忘れろ。

? 最終的にあづみさんもリゲルさんも助けが間に合ったから良いものの。

? あの時1分でも…1秒でも手遅れだったら。

? 二人はお互いに殺し合つてー

? 想像したくも無い。

? 相思相愛、丸でそんな言葉が当て嵌まるあづみさんとリゲルさんが一瞬でも敵対したなんて。

? あの時は夢でも見ているのかと自分の目を疑つた。

? 現実逃避も視野に入れたな。

? まあ、迷わず二人の間に突っ込んで正解だったという訳だ。

? 結果良ければ全て良し。

? 勝てば官軍負ければ賊軍だ。

…さて、何だかしんみりとした雰囲気になってしまったな。

? その中で俺にお姫様抱っこされながら小首を傾げるきさらちやん。

? 可愛い、非常にもふもふしたい。

? 恐らくこの発言をした瞬間、大抵の人はこう思うだろう。

『おう、このロリコン野郎』

? 違う、この言い方は何処ぞの森山☆碧だ。

? 言ってる意味は合っているが。

? うん、話が大人逸れたな。

? 全力で戻さねば。

「えっ、で…イシユタルさんは何しに来たんですか?」

「きさらちゃんとかと貴方が隣…じゃないわね。お姫様抱っこしてさせているから、丁度挨拶がてら警告をね」

「警告?」

? ? 今から地球に隕石降ってくるから素手で受け止めなさいってか?

? 無理無理、んな事出来ないから。

? なら神様が何とかしてくれるでしょう。

? それを端から見てるからさ。

? え? 俺?

? 俺なんかがあったら「バトルドレスの力は…!」とかなんとか言っただけ、押し切るもその場で食い止めるもくそもなくボムって終了だろう?

? 嫌だよそんなの。

? 葬式に骨一本すら無いって…。

? いやそういう問題じゃないって。

? 然もこれじゃ、警告よりもイシユタルさんからの頼み事だっ。

? っつって五月蠅いな。

「で、警告って何の?」

「ナナヤが貴方を探していたわよ」

「…はあん?」

? イシユタルさんが口にしたこの「ナナヤ」という人物。

? ん? 人物じゃないな。

? そのナナヤという、見た目は少女らしき全開の神。

? 人ではなく、神様。

? が、どうやら俺を探しているらしい。

? 何か全うな理由が無い限りは構う必要が無さげ。

? というか俺は忙しんだ。

? あづみさんとリゲルさんにあげるプレゼント選びに手も足も出ないでいるんだよ。

? の前に、ルクスリアさんに「女性は何を貰えば嬉しいのか」って相談出来なかったし。

? もういつそのこと、ヴェスパローゼさんにもプレゼント渡すから代わりに選んでくれないかなあ。

? きさらちゃん?

? ああ、きさらちゃんはあげる前提でいたから気にしてなかった。

? 兎に角それは置いといて。

「何故ナナヤ嬢が俺を?」

「さあねえ…、あの子はまだ幼い所があるから…もしかしたら遊んで欲しいんじゃないのかしら?」

「憶測ですら聞きたくない言葉を飛ばして来ましたね」

「だって貴方、ナナヤのお気に入りじゃない」

? おいおい、随分と嬉しく無い事を言ってくれるじゃないか。

? あの子(ナナヤ)に構うのは結構体力使うんだぞ。

? 軽く口にしないうで貰いたい。

「じゃあ、きいとあそんでくれる…?」

「あ、きさらちゃんは大喜び。何時でも良いよ」

「うゆゆ〜♪」

? 全くもって、きさらちゃんは可愛気が満載だな。

? お姫様抱っこしている今だからこそなのかもしれないが、態々顔を近付けて頬擦りしてくれるなんて。

? 思わず口元が緩んでしまう。

? ずっとこうしていたい。

…すりすりすりすりすりすりすりすりすりすりすりすりすりすりすり…

…はっ!

? 意識が何処か遠くへ飛んでいた。

? 危ない危ない…きさらちゃん癒しパワーに負けるところだった。

? 既に敗北済みだが。

「もう、きさらはずっと大祐の側に居れば良いのに」

「ろーぜもいっしょ」

「じゃあ大祐は居なくてもー」

「やつーだいすけ、ずっといっしょにいる!」

? おおう、きさらちゃん、幾らそれが嫌だからって急に抱き締められるのは流石にビビる。

? まあ…幼い少女の抱き着きなんて可愛い物だよ。

? 油断しているとあの色欲の魔人とかいう女の人の胸に埋められてしまうからな。

? 例えば今みたいな、きさらちゃんに癒されて隙だらけな状態の時とかにー

「こんな感じでね♪」

「るくすりあ!」

? ほらな、言っただろう。

? だから正直諦めはついてたさ。

? 今更その事実気付いても遅いって。

? だが、ルクスリアさんは何故俺達が此処に居る事を分かっていたんだ?

? 確かにあの店から出てからそこまで時間は経っていないが…

「やあ、俺だ」

「ああ、君か」

「そうさ…変態という名の紳士、所謂オ・レー参上！」

? うん、此方もある程度予測していたさ。

? こういう謎事態には必ずと言って良い程に、この森山碧さんが関わっているんだよなあ。

? 森山クオリテイ、やるわ。

? さてさて…その最も避けたい人と合流してしまったが。

? ヘっきーがいるという事は近くにエレシユキガルさんもいるという事だ。

? 今は姿が見当たらないが何処に居るのやら。

? まあ。

? どうせ。

? ヘっきーの背後に。

? 居ると予想して回り込んでみるう!

「あれま! 大祐さんではないですか!」

「うわあ!?!」

? 何だと!?

? ヘっきーの背後にいたのはエレシユキガルさんではなくて…骨

…骸骨…が黒いスーツを着て…スケルタルセールスやん。

? まさかの出来事に驚かされた。

? 親友の恋人を一目見ようと回り込んだら骨て。

? いや、エレシユキガルさんがいられても困りものだが。

…でー、ですね。

? どうして此処にスケルタルセールスが?

? ヘっきーとこの骸骨さんが一緒に行動してるのは其処まで珍しい光景ではないのだが…やはり商売の手伝いか。

? それともスケルタルセールス商品に対するクレームの後始末か。

? 何方もあり得るのが嫌だな。

「大祐、こんな場所で何してんの?」

「きさらちゃんと仲良く話してた」

「ういー!」

「良いなー良いなー、俺にもお姫様抱っこさせー!」

「やあっ！」

? 何だ今のきさらちやんの拒絶っぷり。

? 身を縮こませながら震えてんぞ。

? へつきーが何をしたのか分からんが、この二人はあまり近付けない方が吉か。

? きさらちやんがここまで拒絶する理由が知りたくもあるが。

? って、へつきーが頭を抱えて項垂れてる。

? 相当シヨックだったんだろうな、こんな美少女に拒否されて。

? 彼方ではルクスリアさんとスケルタルセールスで何か企んでるし。

? ヴェスパローゼさんはイシユタルさんと、きさらちやんの可愛さを語り合ってるし。

? ああやつて見ると、ヴェスパローゼさんがきさらちやんの本当の母親に見えるのが不思議だ。

? 最初の頃は「道具」やら何やらとしか考えてなかったらしい。

? それが今は……Z/Xも神様も変わるって事だな。

「んで、へつきーは何してたの」

「スケルタルセールスの商品を繁盛させて、フィークをもふもふする為に追い掛けて、スケルタルセールスのクレームから逃げてきた」

「繁盛させて直ぐにクレーム来たんかい。……成る程な、あの時嫌な予感したのはフィークの件か。通りで二人が焦ってた訳だ」

「クレーム大歓迎☆馬鹿か」

? 何やらへつきーが一人でボケ始めた。

? まあとはいえ、この場でスケルタルセールスやルクスリアさん、へつきーに会えたのは幸運か?

? あづみさんとリゲルさんのプレゼントは何が最適か、多数の意見を述べて貰えるし。

? 万が一はスケルタルセールスにオススメを聞いてー

「あ、大祐さん? 今私の商品に目を付けて頂きましたよね? いや〜お目が高い! 私個人の意見ですと、女性の方へのプレゼントはこの「アイアンメイデン」なんかがおススメですよ!」

「何故処刑道具を勧められたし、てか何故悟られた」

「前回のアイアンメイデンとは違いますよ！この商品は大人の二人は入れるスペースが御座います。アイアンメイデンの中で二人、しっぽり朝まで誰にも邪魔されずに楽しめます！」

？最早聞いとらん。

？まあ、後半の説明には魅力を感じるし聞こえは良いが、残念ながら二人じゃ足りないぞ。

？第一、あづみさんはまだ14歳だ。

？言うて俺も15歳。

？ちよつとそういうのは早くないですかね…期待してる自分が憎いわ。

？然もメイデンプレイとか斬新過ぎる。

？誰がやるんだ、それ。

「更に、今なら何と！横向きも用意させて頂いております！どうです？この扉を閉じるとー」

「よし」

「お、まだまだ説明途中ですよ？それでもお買い上げを決定なされましたか？」

「聞くより試せだ」

「じゃあじゃあ、私と大祐君が一緒に入って朝まで…きやつきやうふふって♪」

「きいがいすけと…はいるっ！」

「いや、スケルタルセールス、お前が入れ」

「はい!？」

？横で何やら妄想を膨らませている魔人を無視し、抱っこ中のきさちちゃんを一旦降ろして、スケルタルセールスの両肩を掴み。

「おつ？おつとこれは？」

？やつぱり、骨だからそこそこ軽いな。

？なんて思いながら例のアイアンメイデンとやらに打ち込む。

ぶんっ

？自分の両腕を大きく動かすと固形物を思いつき振り回した時

の様な音が耳に伝わる。

?それと同時にスケルタルセールスの体(骨)がアイアンメイデンの鉄部分に当たり、ガツンと良い音が響きわたった。

?するとあら不思議。

?アイアンメイデンが物体を感知したと共に、分厚い鉄の扉を閉じていくではないか。

?処刑道具だけあってびっしりと針?棘?が張り詰めているのは目を向けないでおこう。

「ちよつと!?!ここから出して下さいよ!早くしてくれないと私の体がー痛いっ、痛いですって!こいつう♪」

「…あの骨さ、自分の商品に対して愛着沸かせ過ぎじゃないか?」

?何故だろう、何処からかミシミシと擬音が鳴り響いているな。

「止めて!それ以上スケルタルセールスを虐めないで!」

?へつきーがなんか言ってるが無視。

?暫くこの映像を眺めるとしよう。

?ちよつとへつきー止めなさいよ、肩を揺らさないで。

?ルクスリアさんは一度俺から離れて。

?きさらちゃんは何時から俺の足にくっついてたんだ?

?しようがない、お姫様抱っこ再開だな。

「うゆ?だつこ♪」

?ぐふう可愛い。

?もうこの場で癒しを求めるのであれば、きさらちゃんを抱く位しか無いな。

?後はきさらちゃんと遊んであげるとか…というか此処に癒しを求めてはいけないような気が、しなくもない。

?取り敢えずスケルタルセールスの処理は終わったから皆さんにプレゼントの件をー

「なあなあ」

?なんだへつきー、きさらちゃんは渡さんぞ。

「いやそうじゃなくてだな」

「ああ違うの」

? なんだ、なら良い。

? 軽く心中を見切られたのは気にしないでおう。

「お前さ、ニーソ穿いてる女性が好みなんだよな? 詳しい部分は除いて」

「まあ…強ち間違っちゃいない」

「きさらちゃんニーソ穿いてないけど」

「にーそ?」

? 如何にも平仮名で表記されそうな言い方でニーソと口にするきさらちゃん。

? そしてじつと此方から視線を外さない。

? どうして獲物を捕らえる様な目をしているのかは分からない。

? それすら可愛いと思えるのもまた不思議だ。

「えーとねえ…きさらちゃんは論外。ニーソじゃなくても関係無し」

「あ…さいですか。逆にきさらちゃんの男性に対する理想像は?」

「りそうぞう?」

「例えば、こんな男性が好きとかー」

「だいすけっ!」

「畜生めえ!」

「ふっ」

「笑ごっっちゃねえぞ、大祐!」

? なんかもうコントみたいになってきてるな。

? 正直察していたが、へっきーは漫才の道を進む事をお勧めするよ。

? ツツコミ役として誰かに付き合って貰ってさ。

…あ、待てよ。

? 確かトーチヤーズにいたよな「バシバシするジャネット」とかい
うのが。

? へっきーとその相方虐待娘を組ませればもう完璧な布陣じゃね
? ?

? 漫才で二人の右に立つ者は居ないみたいだね。

? うん、例の相方虐待娘の隣に立っていた森山碧が何時の間にかい

なくなつてそんな予感。

? 悲しきかな悲しきかな。

? 後程ルクスリアさんに頼んでみようかな、ジャネットと漫才の事は。

? 尚、へつきーに拒否権は無し。

「はあ全く、これだからハーレム野郎は……あ」

「ハーレム言うな。てかどうした?」

「私もそのハーレムの一人にー」

「ルクスリアさんは相馬氏がいるでしょう!」

「あの人構つてくれなーい」

? いや知らんがな、構つてくれる人なら誰でも良いんでしょ、ルクスリアさん。

? 誰か、この人の旦那さんになつてくれる方募集しまつせ。

? 四六時中ルクスリアさんと遊んであげれるって人は最適。

? 更には体目的じゃなければもつと最適。

? この方、口では好き勝手言つてるけど変態は好きそうにないんで。

? 寧ろそれに関する事に無関心な人を揶揄うのが好きらしいですよ。

? Sだな、この人!

? さて、ルクスリアさん旦那募集のチラシは後で貼っておくとして。

? ルクスリアさんの所為で話の内容に齟齬をきたしてしまつたではないか。

? だが、彼女は色欲の七大罪でありながらも行き過ぎた行為はそりゃ、自分の一番大切に好意を抱いている人物以外とはしないだろうし。

? 間違つても彼女をビッチなどという流言に惑わされてはいけない。

? 実際に現場を見た訳でも無い奴等に、そんな事を言う権利は無い。

? ルクスリアさん本人が断言するなら肯定する他、選択肢がないけど。

「話、戻して良いか?」

…へつきーも、もうちよつと押し通す力を付けて欲しいものだ。

? そんなんじやルクスリアタイプの人物に歯が立たないぞ。

? ん? あ、俺がこんな言い方するから、彼女が勘違いされるのか。

? 残念ながらこれは実体験だ。

「あの上よ、大祐よ」

「その喋り方をなんとかしなさい」

「いや、早く家に帰ってやれって話。もうそろそろ17時過ぎんぞ」

「それが?」

「まあまあとやかく言わずに、しっかりとプレゼントも買って帰るんだぞ」

??

? 森山碧君が急に態度を変えたな。

? 然も、何やら含みのある言い方で帰れって…

? んな事を唐突に言われたってどうすれば良いのやら。

「明日お前ん家でパーティーやるんだろ? 忙しくなるのは目に見えてんだから、今日位は彼女達と楽しく過ごせって」

……成る程な。

? へつきーは気を使ってくれたのか。

? それならお言葉に甘えさせて貰おう。

「…だな。んじや、もう帰るわ」

? 俺はお姫様抱っこしているきさらちゃんをゆつくり下ろす。

? どうやらヴェスパローゼさんは分かってくれている様子で、此方に笑みを浮かべていた。

? イシユタルさんは…既に何処かへ消えている。

? 本当にきさらちゃんを見に、俺に警告を言いに来ただけだったな。

? 神様とは気紛れだ。

? スケルタルセールスは変わらずアイアンにメイデンされている。

?ルクスリアさんはー

「ほら、早く行つてあげなさい?」

?と、背後から両肩に抱き着かれた。

?相変わらず、根は優しくて芯の強い、可愛らしい人なんだと思
わせられる。

?割と本気で良い人を見つけて欲しい。

?てな訳で、ルクスリアさんの旦那さん募集中!

「だいすけ…もうかえつちやうの?」

?いざ帰ろうとすると、きさらちゃんが寂し気な表情でコートの端
を掴んでいた。

?こうされると弱いのが俺なのだ。

?が、今日だけは理性を振り絞って。

「今から家で遊ぶ?」

「うい!」

「帰れえ!」

「…という訳なんだ。ごめんね、きさらちゃん。良かったら明日は
ヴェスパローゼさんと一緒に家においでよ。歓迎するからね」

「うゆ…:…うい」

?ああ、そんな悲しまなくても。

?顔を下に向けて、大きな黒い帽子だけが俺の視界に映る。

?何だろう、頗るいたたまれない。

?明日は存分に遊んであげよう。

?仕方が無いがルクスリアさんも。

「じゃあね」

「あした、いっぱいあそぶっ!」

「うん。きさらちゃんが満足するまで付き合うよ」

「ろーぜ!かえつてねよっ!」

「きさらったら…気が早いわね」

?やれやれといった表情を見せるヴェスパローゼさんだが、丸で母
親の様な優しさが伝わってきた。

?あの人いきさらちゃんの実親でも可笑しくないよな。

? 外見に難があるが。
? して、その面子とは其処で別れた。
? 一応ながらクリスマスパーティーの詳細時刻等を教え、来場人数は不特定という注意事項も付けて。
? するとルクスリアさんは、絶対に、何があつても行くからと言いつつ残して去っていった。
? きさらちゃんやんは夜眠れるのか不安になる程にるんると、テンポ良く歩きながらヴェスパローゼさんと帰って。
? へつきーは穴だらけのスケルタルセールスを担いで新しい商品売り込みをしに、目の前から消え。
? 俺は一人、帰り道と重なる店で二人へのプレゼントを買い。
? 二人以外に渡すプレゼントも買って帰路へついた。
? 自宅は既に目と鼻の先だった。

? 青の世界で一番の大きな家——何方かと言えば要塞と例えた方が正しい程に城らしい自宅を持つ九条大祐。
? 先ず手始めに指紋認識での解読を行い、檻と間違える位に頑丈で縦に長い黒い門を開く。

? 次にガラス張りにされた扉：結界に見えなくもない扉を、虹彩認識で抜け。

? 最後にカードをスキャンして終了。

? 此処までは全て一本道。

? これでやつと九条家の敷地内に入る事が出来る。

? 視界一杯に広がる庭を抜けて後は自宅の扉へ歩みを進めるだけ。

「ただいま」

? 九条は家の鍵を外し、帰って来た事を知らせる為に一言口にする。

? 次は直ぐ側に設置してある殺菌作用の高い消毒液を手に付け、その隣にある洗面台で手を洗い流す。

? それが終わると、広々とした玄関をスルーしてリビングへと向かう。

? 因みにリビングは二つ。

? 一階に一つ、最上階に一つ。

? 玄関の横隣にエレベーターが設置されており、それで最上階へ移動出来る。

? いや、エレベーターと偽ったワープが正解。

? 彼は迷わずそのワープゾーンに足を踏み入れた。

? すると一瞬にして最上階、リビング手前に到着。

? 其処で漸く靴を脱ぎ、リビングへと続く扉を引いて入室。

? 先ず目に映るのは配列が綺麗に整われた椅子&ソファ。

? その二つの間に挟まれるかのように置かれている横長のテーブル。

? 更にその後ろは全面ガラス張りの周囲一帯が見渡せる窓。

? 此処から見る夜景は素晴らしい位に綺麗だとか何だとか。

? 九条は取り敢えず、疲れた足を休めるべくソファに歩いていく。

? 流石に数時間歩きっぱなしは辛かったのか動きがグダグダだ。

? 丸でゲームに出てくるゾンビの様に背中を丸くして移動していると。

「あつ、大祐くんっ」

? 少し離れた右手から、可愛らしい、幼い少女の声が九条の意識を驚掴みにする。

? 直ぐに姿勢を正し、即座に声のした方に顔を向ける九条。

? 其処には水色よりも薄い青色の、ウェーブがかかった長い髪の毛。

? 思わず吸い込まれそうになってしまう大きくて紅い瞳。

? ふわふわとした印象を受ける衣服を身につけている少女が、何かを持って立っていた。

「あづみさん…ただいま」

「えへへ、おかえりなさい、大祐くん」

? そう、彼女は九条大祐と愛を築いた一人の女性『各務原あづみ』。
? 未だ14歳ながらも辛い運命を辿り、九条と共に乗り越え、最終的に互いが繋がるまでに成就した。

? 兎に角彼女を愛して止まない九条は直ぐ様各務原あづみの元へ足を動かす。

? 既に彼は疲労という概念を忘れていた。

「だ、大祐くん、ちよつと待ってて!」

「り、了解」

? そう言うのと彼女は曲がり角の奥へと走っていった。

? 各務原あづみの唐突なるストップタイム発言に一瞬体を揺らした九条大祐。

? 更には戦闘中に多用する言葉「了解」を使って受け答えをする。

? 年齢的には彼が1歳年上なのだが、九条からすれば各務原あづみという存在は高嶺の華なのだろう。

? 以前までは敬語を使用して会話していたらしい。

? だが、華と例えるのを九条は嫌う。

? 一見綺麗で可憐な印象の「華」という言葉。

? 自分の手では届かない存在を高嶺の華と言うのだが、それ程に地位が高い、可愛い等と色々な意味で見受けられる。

? 相手方からすれば褒め言葉として受け取れるが、九条は逆だ。

? 何故なら「華」というのはこういう風にも使えるからだ。

? 華の命は短くて

? 好きな人程ずっと一緒に居たいと思える。

? だが、華という言葉を使用した文章、言葉は先程の意味としても受けられる。

? だからこそ彼は華といった言葉をあまり使用しない。

? 名前や技名に入れると中二感が増す為に使う時はあるらしいが。

(…ていうか、彼処ってキッチンがあったような。)

? 話を戻すが、彼女は何かを手を持っていた。

? 然もエプロン姿。

? 九条大祐は察しつつも本人の前では知らない振りを貫こうと心の中で決める。

(帰って来たらあんな美少女がエプロン姿でニコニコしながら「おかえりなさい」って……ヤバイ、何か唆られる)

? 九条大祐は理性を抑えるのに必死になっていた。

? 各務原あづみから待機指令を出されてから1分。

? いや、1分も経っていないだろう。

? 彼女は焦りながら九条大祐の目の前まで走ってきた。

? 少しの息切れを見せながらも彼に笑顔を向ける各務原あづみ。

? 何をそんなに急いでいたのか気に掛かった九条だが、取り敢えず彼女の背中を摩って落ち着かせる。

「一体どうしたんだい?こんなに息切らして」

「う、ううん。何でもないよ。大祐くんのお出迎えにあの格好は恥ずかしくて…」

「じゃあ、この頬に付いてるクリームは?」

「えっ!?…ほんと、に?」

? 各務原あづみは自身の手で頬を触り始める。

? だが、惜しい所で一步届かずに苦戦していた。

? そんな光景を見ている九条大祐。

? 彼はゆつくりと手を伸ばし、各務原あづみの頬に付いているクリームを取って見せる。

「ほら、取れた」

「うう…リゲル、教えてくれれば良いのに…」

「まあまあ、クリーム付けた可愛いあづみさんが見れて俺は満足だよ。後はこれを頂くだけだから」

「私は恥ずかしーえっ?」

? すると九条大祐は、各務原あづみの頬から取ったクリームを趣に口に入れた。

? 自分の指は入れずに。

「うん、おいしい」

「えと…大祐くん、汚いから駄目だよ」

「あづみさんの頬に付いたクリームは俺だけの物だ。無論、あづみさんもね」

「あ、ありがと…えへへ／＼／＼」

? 顔を真っ赤にさせる各務原あづみを、九条は和かな表情で見つめていた。

? その視線に気付いた彼女も恥ずかしがりながら笑顔で返す。

? だが、各務原あづみは違う所へ目が向いた。

? それは、九条大祐の傍らに置いてある何個か束ねた袋。

? 然も袋自体はかなりの量がある。

? 一括りにして持ち帰って来た九条大祐の手には、持ち手の跡がくつきりと残っていた。

「大祐くん、その袋ー」

「あづみー、どうかしたの?」

? 各務原あづみが彼の持ち帰って来た袋の事を聞こうとした時、キッチンの方から女性の声が響き渡る。

「あつそうだ。二人共まだ、大祐くんが帰って来た事知らないんだつた」

「俺もキッチン行って良いですか?」

「うん!二人を驚かしてあげてよっ」

? 瞳をキラキラとさせる各務原あづみ。

? 九条大祐はそんな彼女の思いに応えるべく、買った物をソファアの上に置いてキッチンへと足を運ぶ。

? その後ろをドキドキしながら付いて行く各務原あづみ。

? 目的地のキッチンに近付く毎に二人の女性が話し合っている声が九条の耳に入ってくる。

? どうやら、何かを言い争っている風な口調だ。

? キッチンに誰が居るかなんて既に分かっている九条大祐だが、分かっているからこそ少し緊張してしまうのが今の彼だ。

? 恐る恐る近付き、遂にキッチンは横を曲がった所に。

? いざ踏み出すといったその時。

「あづみー、何かあったの?」

「い、今行くー！」

? 一瞬の気の緩みが九条大祐の体を凍り付かせた。

? だが、何時までも固まっている時間は無い。

? 彼は各務原あづみのフォローを無駄にはさせまいと一気に二人の居るキッチンへと体を進ませた。

「…これはここに乗せるべきだと思っわ」

「いえ、此方の方が大祐は喜ぶと考えます」

「でもそこじゃあ目立たないわよ？」

「無駄に派手で無いのも彼は好むと言っていました。リゲルはあの人とずっと一緒に居て、好みの一つも聞いてないのですか？」

「し、知ってるわよ!…でも、ここは敢えてあづみに任せましょう」

「リゲル、呼んだ？」

「その意見には賛成です。あづみ、貴女は何方が良いと思っわー」

「勿論私の方に賛同よー」

? 言い争いをする二人の女性。

? 目の前に立つのは一人の少女と。

「だ、大祐!?!」

「何してんですか…リゲルさんにベガさん」

? 九条大祐に見られたくも無い状況を見られてしまった二人の女性。

? 右で目をぐるぐると回す金髪ロングヘアの『リゲル』に。

? 左でそっぽを向きながらも頬を赤く染めている水色髪ポニー

テールの『ベガ』。

? 前者は各務原あづみのパートナーZ/X&九条大祐と昵懇な間柄を築き上げ。

? 後者は各務原あづみの実の母親でありながら、九条大祐に少しの気を持っている。

? 尚、その事実は本人とリゲル、各務原あづみの中でしか知られていない。

「ていうか何で二人共クリームまみれなんですか!?!」

「こ、これには深い事情があつて…」

「リゲルの料理スキルは見直しが必要です。誰か料理の上手い方がいらつしゃれば…」

「じゃあ何でベガさんまでクリーム沢山なんですか」

「これには深い事情があるのです。出来れば貴方には知られたくないのですが…」

？互いに同じ言い訳をする二人。

？これはどうかしないと、と思う九条だが、それよりもある所に意識を持っていかれていた。

？誰を横に並べようと変わらぬ美しさを持つ美人女性二人の体の彼方此方に、真つ白いクリームが。

？年齢的にも身体的にも健全な男の子をしている九条大祐にとって、その光景は目に毒其の物だった。

？彼はその場で、バトルドレスを持ち得る者のみが扱えるデータボックスを展開。

？メニューから持ち物と表示されているアイコンをタッチし、その中から仕舞っておいた厚く大きなタオルを二枚と、そこそこ大きな桶を取り出す。

？して、次はキッチンに設備されている蛇口を捻って温水を流し始めた。

？先程取り出した桶を幅の広いシンクに設置しそれに温水を流し込み、中にタオルを一枚ずつ着水させていく。

？ある程度の温水が溜まったのを確認すると、蛇口を逆に捻って閉める。

？先ずは先に入れた一枚のタオルを持って強く絞る。

？極力温水を残さないように、且つクリームの汚れを取る為に少しの水は残しておいて。

？そんな絶妙な力加減で絞ったタオルを、横で興味津々気味に見ていたリゲルに渡す。

？先と同じ要領で絞ったタオルを今度はベガへと渡し、事無きを得る努力を尽くした九条大祐。

？最早タオルどうこうの問題よりも精神的に疲労した彼であった。

「…で、何故ケーキ作りに俺を呼んでくれなかったんですか？」

「えーと…サプライズ！みたいな…？」

「リゲルさん、その無理は通せませんよ」

「道理は？」

「引つ込みません」

？笑顔で何とか誤魔化そうするリゲル。

？九条大祐は彼女の目の前まで近付き、顔に触れ始める。

？彼の唐突なる行動にピクツと体を揺らしたリゲルだが、そのままじつと、九条を見て動きを止めた。

？そんなリゲルのありと凡ゆる所に目を配り、手を離す。

？すると今度はベガの頬に手を当てる九条。

？男性に触れられる事があまり無かったベガは、行成自身の顔を触られて身を小さくする。

？両手を重ね合わせて落ち着き無くもじもじとするベガ。

？九条は、一切視線を合わせてくれない彼女の顎を人差し指で上げ上げる。

？俗に言う「顎クイ」だ。

？だが、こうして強制的に目と目を合わせる理由が九条にはしつかりとあった。

「…二人共、怪我は無いようですね。なら良かった」

「もしかして…心配してくれたのですか？」

「当たり前じゃないですか。これから何を作るのかは分からないですが、俺も手伝いますよ」

「んじゃ俺もー！」

？と、リビングの方から聞き慣れた感じの男性の声が周囲に響き渡る。

？九条が其方の方へ様子を見に行くと、人の家にも関わらず誰かが勝手にソファーに座っていた。

？普通ならここでバトルドレスを装着↓不法侵入者を即刻排除するところなのだが。

「…へつきー、頼むから一言掛けてくれ」

「はは、すまん。お前と美女二人、美少女一人のラブラブシーンを見せられたんじや声をかけ辛くてな」

「後でセキユリティ強化しとかないと何時か親友にやられるわ」

「…ねえ、まさか碧の方が強いのか？」

「九条と森山碧が何時もの調子で話していると、彼の背後から銀髪ロングヘアーの美人女性が姿を現した。」

「彼女の背中には小さな黒い翼が生えており、頭からは角らしき何かも生えている。」

「露出度は異常に低く服全体が黒で統一されている。」

「…え、エレシユキガルさんもお手伝いに？」

「勘違いしないで。貴方の手伝いなんかじゃなく、私は碧の手伝いをしに来ただけだから」

「勘違いなんてしませんよ。まあでも、有難うとは言っておきます」

「好きにすれば？貴方には関係の無い話だから」

「誰もが分かっていた事だ。」

「前々から説明はしていたが、森山碧を好む人物は九条大祐を滅法嫌う。」

「？そして逆もまた然り。」

「例としてあげるならば、百目鬼きさらんかがそれに該当する人物だ。」

「？九条大祐には甘えて。」

「？森山碧は拒絶。」

「彼女以外にもベガヤリゲルといった女性等は大概がそんな感じだ。」

「？各務原あづみは遠慮して言わないのが目に見えている。」

「大祐くん、お客様ー」

「？事実、森山碧を視界に入れた瞬間に九条大祐の後ろへ隠れた。」

「？最早お客様どうこう等関係なくなっている。」

「？だが、それ程までに二人を好む女性は対照的だというのが見受けられる。」

「取り敢えずへっきりが来たなら手早く終わるだろう」

「…大祐、本当にこれに手伝って貰うの？」

「これ言うなや」

「碧の悪口は私が許さない」

「…一向に話が進まん。じゃあ、最初の内は俺とあづみさんとリゲルさんにベガさんでやるから、其方は好きな様にやって頂戴な」

「おう、任せとけ。料理に関しては長けてるからな！自負するぜ」

「ああ、料理に関してはな。それ以外は…」

「うるせえ！」

？そんな会話で笑い合う二人。

？九条大祐と森山碧、彼等の仲は非常に良好なのに対して、女性同士は何故こんなにも険悪なのか。

？これは既に諦めるしかないのかもしれない。

…その日は6人で夜中近くまで料理を作り続けた。

？どうせだから泊まっていけと九条大祐の配慮に甘え、森山碧とエレシユキガルは九条家に一泊する事に。

？値段の高いホテルの様に部屋数が凄まじい九条家にとって、二人が泊まる事など人数的に気にする程度ですらない。

？更に二人は一緒に部屋が良いとの事で部屋自体は一室しか埋まっていない。

？そんなこんなでクリスマススイブは終わりを告げた。

？だが、明日はクリスマス当日。

？まだまだ疲れている暇の無い九条だった。

――

番外編：クリスマス

?朝。

「突撃！隣のハーレムさん！」

「うえあ!？」

ガタツガシャンツ

「痛って！」

「あれ、嫁さん達は？」

「別室だから！てか嫁言うな!!」

「そうか、すまん」

「許すかあ!!!」

――

「…ってな事が朝から勃発してた」

「それは大変やったな」

? 昨日から1日経った今日。

? 待ちにも待つていないクリスマスが訪れた。

? 朝からテンションの高いへつきーに起こされて頭をぶつけて、朝のシャワーを浴びに大浴場へ行ったらあづみさんとベガさんが仲睦まじく話している。

? 可笑しいな、何で男湯に二人がいるんだろうって思って暖簾を確かめに行ったら男湯と女湯の暖簾が逆になっている。

? 森山の碧野郎に殺意が湧いた。

? その後はあづみさんとベガさんが話を分かってくれて一大事に
ならず済んだが。

? 何であんなにテンションが異常なんだ、あの変態は。

? 去年なんかはサンタがソリからひっくり返って死ねば良いのに、
すればクリスマスなんか無くなるだろ。

? 的な発言をしていたのにな。

? エレシユキガルさんが居てくれるからクリぼっちという呪縛から逃れられた、そんな解放感を味わいたいのだろう。

? いや、それは一向に構わない。

? だがこれだけは言わせてくれ。

? 人を巻き込むなど。

「まあまあ、そんな事気にしてても良い事起きへんで。今はクリスマスパーティーを楽しまな!」

「: 飛鳥君の優しさに乾杯」

「何故僕に乾杯してんねん!」

? いやー打てば響く様な突っ込みを有難う。

? 飛鳥君は: 何かこう、普通だから話し易いってどうか。

? ヒ首が良いんだよな。

? 気が合うってどうか。

? 昨日の騒ぎの件は謝ったら軽く許してくれたし。

? 彼は単純に優しいんだろうな。

? だから周りに女性が集まってくるのか?

: それは違うよな。

? 飛鳥君が好きな女性達は如何にも彼の人間性に惹かれたのだから。

? ハーレムどころ言うなら俺じゃなくて飛鳥君に言えば良いのにな。

「おい」

? なんて、飲料の入ったグラス片手に飛鳥君と話していると、不機嫌そうな表情の相馬氏が仲に入ってきた。

? 何だ、話し相手がいないから寂しかったのかな?

? だからそんなに機嫌悪そうにー

「昨日、彼奴があのお店に来るってどうして教えてくれなかったんだ?」

「確信が持てない以上は唯の迷惑行為にしか過ぎないからね」

「あの虫と幼女は別だった」

「ヴェスパローゼさんもきさらちゃんも、俺を信頼してくれていたか

ら」

「…まあ、良いか。今日はパーティに誘って来てくれてありがとな。それを言いに来ただけだ」

「え、今のは俺が殴られる風な流れじゃないの？」

「相馬さんもツンデレやな！」

「男のツンデレとか誰得」

「でも…ああいう感じでも御礼を言われれば嬉しい。」

「素直に伝えられない相馬氏、ルクスリアさんも大変、ルクスリアさんの相手をする相馬氏も大変。」

「結局どっちもどっちじゃないか。」

「そんな相馬氏。」

「現在フィーユを追いかけ回しているへっきーを追い掛けの中。」

「森山氏もエレシユキガルさんがいるんだから止めた方が良くと思うんだけど。」

「あ、エレシユキガルさんから制裁が食らわされてる。」

「…ていうか、大祐君家はほんまに広いなあ。住んでるの四人だけやろ？」

「ベガさんからのプレゼント。家庭を築く為に必要なんだと」

「それ結構意味深な発言やん！要するに大祐君とー公共の場で言う事じゃないな」

「うん？」

「すまん飛鳥君。」

「其方関連の事は察しが悪いんだ。」

「中学三年間溝に捨てた様な奴だからさ、保健体育には疎いんだ。」

「公共の場で言えないって事はそういう事だろう？」

「駄目だぞ飛鳥君、そんな事を言うとは何処ぞの七大罪とー」

「あつ、大祐君見つけた！」

「何処ぞの変態がー」

「お？ピンクな話か？」

「くるなああ!!!」

「全く…何だ？」

? フラグを立てると直ぐに回収してしまう病でも患ったか?

? 飛鳥君、頼むからその目をやめてくれ。

? 然も苦笑いて、物凄い悪意感じるよ、うん。

? ルクスリアさんと表情が対照的過ぎる。

? ああもう、この場から早々に退出したい。

? まだ始まって10分も経ってないのに疲れて来た。

? 自室で休もうかな。

「てか相馬氏は!?!」

「巻いた」

「だからって此方に来なくても…疲れた」

「せや、あづみちゃんの所へ行きーや。すれば少しは気持ちも落ち着くで」

「大祐君、あづみんにぞつこんだもんね」

「逆もまた言えるな」

「…いや、それだけは駄目だ」

「どうして?」

? 確かにあづみさんは少し離れた正面位置でリゲルさん、ベガさんと楽しく話をしているけど…。

? あの輪に入って行く自信は無いし。

? 何より年に一度のクリスマスなんだ。

? 親子水入らず楽しんで貰いたい。

? リゲルさんはもう、あづみさんにとっては友達以上の関係なのだろう。

? ベガさんもそれは承知の上か今は仲睦まじく、料理を片手に会話している。

? 何だか見慣れない光景だけど不思議と違和感はない。

? 嬉しいと思える自分しかない。

? 3人がああやって和解出来た事が。

「…俺は遠くから見ているだけで満足だよ」

「大祐は積極性が足りないな」

「そうね。時には嫌われる勇気も必要よ?」

「踏み出す一歩が大事や！」

「…でも…それが大祐くんのこと…良いところなんじゃないのかな」

？へつきーを除いた二人が俺の背中を押してくれていると、いつの間にか輪の中にソリトウスさんがいた。

？その姿に少しばかり驚くルクスリアさんだが、直ぐに表情を切り替える。

？うむ、どんな時でも思う。

？二人が姉妹に見えない。

？外見、中身何方も似つかない二人が姉妹だなんて…初見で聞いた時はビビり物だったぞ。

？だがまあ似ていないからこそ良いのかも知れないが。

？似過ぎた物同士は憎み合うと聞いた事あるし。

？ちよいと気になる二人の事情だが、あまりズケズケと踏み込むのは宜しくない。

？彼女達には彼女達なりの問題がある訳だし。

「あら、お姉様も大祐君狙いで？」

「ルクスリア…それは貴女でしょ。私は…えと…その…あ、あす」

「ソリトウスさん、無理しなくても察してるから大丈夫」

「何の話や？」

？流石、鈍感系主人公は違いますわ。

？君の事が好きな女性が君の名前を呼ぶ瞬間に限って肉食べてるってどういうこっちゃ。

？この人ファイエリテさんの気持ちにも気付いてないし…後、上柚木の綾瀬嬢でしょ？

？他にも誰か居た筈だけど忘れた。

？唯、一つ言えるのはまだ飛鳥君を想っている女性はいるという事。

？鈍感系主人公を好きになっていく女性達…これこそハーレムの典型だよな。

？でもなあ、飛鳥君がハーレムになっていくのは分かる気がする。

? 人間性も勿論の事、氣遣い出来るし戦闘嫌々系男子だし。
? とどのつまり野蛮な部分が一切見受けられないという事だ。

? 女性に対しても男性に対しても優しく接し、誰に対しても態度を変えない。

? 素晴らしいね、モテる男は違う。

? だが逆に、俺がモテるのはどうかと思う。

? あづみさんにリゲルさん、きさらちゃんは…あの子は俺をどう捉えているのか。

? それに加えてベガさんやヴェスパローゼさんは何だか、何時でも優しいし。

? ナナヤ嬢には気に入られてるらしいし。

? 分からない、何故俺がこんなに優遇されているのかが分からない。
い。

「大祐くんが頭を抱えてる……」

「に、大丈夫？」

「大祐さん!?!何があつたんですか?」

「おお…世羅に怜亜くんか…。お兄さん疲れたから外出てくるね…」

「世羅も行くっ」

「お共しますよ!」

? いや、違うんだ。

? 決して君達が嫌いな訳じゃないんだよ。

? 唯ね、一人になりたいんだ。

? じゃないとね、俺の精神が…

「わあ〜雪だ♪」

「世羅! 大祐さんに迷惑掛けないでよ!」

「むう…怜亜くんのケチ…」

「…連れて来てしまった」

――

? 九条は庭に出る一歩手前で倉敷世羅、戦斗怜亜の雪遊びを呆けつとしながら見つめていた。

? 後ろの、玄関を抜けた先にあるパーティ会場では更なる盛り上がりを見せている。

? だが、彼自身はあまり乗り気では無かった。

? 自分以外の人達が楽しんでいる姿を見て満足してしまっているからだろう。

? この世界のZ/X、人間が分かり合えてこうして賑やかに暮らせる日々に。

? 大切な人達が害に怯える事無く平穏に暮らせる日々に。

? 九条大祐はもう既にこれ以上の幸せは無いと確信している。

? 未だ小学生の二人が目の前で存分に遊んでいる光景を見れば誰だってそう思える。

? 家の壁に寄り掛かりながらそうして佇んでいると、左側から白い髪の子が此方に近付いていた。

「…あの二人の相手、疲れるだろ」

「幼い子供の面倒を見るのがお兄さんの役目さ」

「…ふっ。どんよりとした顔でそんな事言われても、丸で説得力が無いぞ」

「雷超君にはお見通しだったか」

? 白い髪の男の子：雷鳥超（らいちょう　すぐる）は九条大祐と同じ様に壁へ体の重心を預ける。

? 彼の目は九条大祐を心配するような眼差しだった。

? それに気付いていた九条だが、敢えて何も言わない選択肢を取る。

「……………」

「……………」

? お互いに話す話題が無いのか、沈黙が二人の間を支配する。

（雷超君は何をしに来たんだろう）

? 二人が静まり返っている空間には只管に倉敷世羅、戦斗怜亜の楽し気な声が響き渡っていた。

? 雷鳥超は彼等と1歳年上なだけなのだが、幼さという言葉から掛け離れている。

? そんな彼を内心逆に心配し始める九条大祐。

? その気持ちちが沈黙を打ち破った。

「…雷鳥君って怜亜くん達みたいに遊んだりしないのかい?」

「彼奴等と同じにされたら困る。各務原あづみとやらも似た質問をしてきたな」

「あづみさんが?」

「年下にさん付けか」

「まあね。…で、あづみさんも同じ事を?」

「ああ。面倒だから追い返した」

「どうやって?」

「邪魔だから早くお前の所に帰れって催促したら顔真っ赤にして何処か行っただぞ」

「意味が良く分からないや」

「俺の台詞だ」

? 雷鳥超の答えに疑問を浮かべる九条だが、一番謎に思ったのは雷鳥超彼自身だ。

? 相手をするのが面倒なあまり付き合いをしている九条の元へ追いやろうとしたら謎の反応。

「あづみさんは天然だから。可愛いから」

「…話が噛み合わないな」

? 全くの受け答えになっていない九条に呆れつつも苦笑いをする雷鳥超。

? 各務原あづみの事になると何時も「可愛い可愛い」と言ってしまう九条大祐にとって、その苦笑いの意味は理解出来なかった。

「…で、何か用があつて話してきたんだよね」

「ん? あ、ああ…まあな」

? 九条は知っている。

？雷鳥超という男が何の用も無しに話し掛けてくる奴では無いという事を。

？でなければ、態々会いたくも無いであろう倉敷世羅や戦闘怜亜の前に出てくる筈も無い。

？雷鳥超のお兄さん役として手は何時でも貸すと言わんばかりに、何でも任せなさいといった表情で要件の話を待つ。

？その顔が気に食わないのか雷鳥超は目を背けるが、ふっと鼻で笑いつつ九条へと向き直る。

「…今日位は好きに過ごせ。只何も無いっていうのも一つの選択肢だ。…彼奴等の面倒は俺が見る」

「君ほんま小学生か？」

「五月蠅い、分かったらさっさと行け」

「へえ…雷鳥君って、何かと言って優しいよね」
「…っ！」

？九条大祐の言葉に、雷鳥超は顔を真っ赤にさせながら何かを言うとしたが。

？溜息一つ吐き、倉敷世羅、戦闘怜亜の元へと歩いて行った。

『お前等、今日は大祐に関わるな』

『えー何で雷鳥に指図されなきゃなんねーの？』

『世羅、にいと遊びたい！』

『止めろ』

『俺、大祐さんの所にー』

『…いい加減にしないと』

『ひいつ、雷鳥さん、すみませんでしたあ！』

『…野蛮』

（あの3人、あんな調子で大丈夫か？せめて七尾嬢さえ居てくれれば…）

？熟気を使わされる九条。

？小学生組が気になりつつも雷鳥超の気遣いを無駄にしないよう、その場を静かに立ち去った。

？最後に後ろを振り返ると、3人が雪の上で楽しく遊んでいる光景

が目に焼き付く。

？唯一、1人を抜いて。

――

？九条は1人、誰も居ない廊下を歩いていった。

？パーティ会場とは別方向へ向かっているのだから当たり前と言えは当たり前だろう。

？彼は一体何処へ行くのか。

？階段という階段を上って行き、九条はある部屋の前で立ち止まった。

？そして何の躊躇いも無しに部屋の扉を開く。

？入室して二歩三歩進んだところで、一般家庭のリビング並みに大きな部屋の真ん中にあるソファアが視界に映る。

？その上でゆっくりと寛いでいるヴェスパローゼに、彼女の膝の上でスヤスヤと寝ている百目鬼きさら。

？九条大祐は百目鬼きさらを起こさない様、静かに歩いて近付いていく。

？彼がソファアの直ぐ傍まで歩いて行くと、ヴェスパローゼは自身の隣をぼんぼんと叩いて此処に座れと合図する。

？言われた通りに隣に座る九条大祐。

？横から見るヴェスパローゼの、百目鬼きさらに対する母親の様な笑顔に彼の心には様々な感情が湧いた。

？だが、その中でも大きく存在する感情は「嬉しき」。

？2人が幸せそうな時間を過ごしている光景を目にして、九条大祐までつい嬉しく、ほのぼのとしてしまう。

？自分の願った夢が一つ叶った事に喜びを隠し切れない。

？彼の顔は自然と笑顔になっていた。

「…きさらのこんな寝顔が見れるなんて、本当、貴方には感謝しきれな

いわね」

「前々から見てませんでした?」

「確かにそうね。でも、こんな気持ちは初めてだわ。以前は面倒な子
としか思っていなかったのに…」

? そう呟きながら、ヴェスパローゼは百目鬼きさらの髪の毛を触り
始める。

「人もZ/Xも、変わるって事ですよ」

「あら…私を変えてくれたのは貴方よ? これでも本当に感謝してるん
だから」

「それはどうも」

「ふふっ、私の台詞よ」

? ヴェスパローゼは九条大祐へ和やかな笑みを浮かべる。

? そして直ぐに百目鬼きさらへと向き直り、今度は彼女の頭を撫で
始めた。

「…むー…ろーぜ…」

「あら、寝てるのに名前を呼んでくれるなんて、きさらは嬉しくなる事
をしてくれるわね」

「…楽しんでるところ悪いんですが…それで、きさらちゃんの体はど
うです?」

? 百目鬼きさらは癒されているヴェスパローゼに、九条大祐は真剣
な表情で質問を投げ掛けた。

? 一体何の話かと言うと、百目鬼きさらは一回だけデインギルと呼
ばれる神様に願い事を叶えさせて貰った事がある。

? その契約者がイシユタルなのだ。

「今は何も無いし、イシユタルも代償は要らないって言ってくれてる
から大丈夫だと思うわ」

「神様も可愛さには負けるんですね」

? 九条は今の、それからこれからの百目鬼きさらの未来を心配して
いた。

? 幾ら神様本人が代償無しと言ったとはいえ、決して無害という訳
では無いだろう。

?まだ7歳と幼い百目鬼きさらを最大限気に掛ける九条。

?それはヴェスパローゼも同じだった。

?表情に余裕はあるものの、内心では不安と心配で沢山なのが彼は直ぐに分かった。

?今日は百目鬼きさらと遊ぶ約束をしたのもあるが、そんなヴェスパローゼを安心させたいと思いこの部屋に呼び出した九条。

?彼の中では既にクリスマスパーティー等どうでも良くなっていた。

「もし何かありましたら、何時でも呼んで下さい。話でも何でも聞きますから」

「それは心強いわね。丸できさら専用の医師みたい」

?余程の安心剤を求めていたのか、九条の言葉にヴェスパローゼはクスクスと笑みを返す。

?彼女のその笑顔に少し気持ちを高ぶらせた九条だが、悟られぬ様に顔を直ぐ背ける。

?だが、ヴェスパローゼには既にお見通しだった。

?然し彼女は内緒に、気付いた事がバレない様に寝ている百目鬼きさらを再度撫で始める。

「ねえ大祐」

「何で御座いましょう」

「少しきさらの面倒を見てくれるかしら?ちよつとパーティー会場から食べ物を持借して来るから」

?そう言うと、ヴェスパローゼは百目鬼きさらを九条の膝の上に預けて立ち上がる。

「それなら俺がー」

?見兼ねた九条は動くなら自分かと言い張ろうと前に出ようとする。

?だが、ヴェスパローゼに肩を掴まれソファに座らされた。

「良いの、私が取ってきたんだから。貴方は此処できさらと待って頂戴。ね?」

?それだけ言い残してヴェスパローゼは部屋を出て行った。

?直後、百目鬼きさらが腕を伸ばして九条の体をよじ登る。

？ 卒然過ぎる出来事にソファア—ごと後ろに倒れそうになるが、何とか持ち堪える。

「き、きささらちゃん!? 寝てたんじゃ…」

「おきてた」

「えつと…いつから?」

「ろーぜがたつて、だいすけのひぎにのってから」

「ついさつきか…」

？ 九条は取り敢えず百目鬼きさらを膝の上まで下ろそうと両脇を抱える。

？ すると彼女はそれに反抗するかの如く首元に腕を回してギュツと抱き着いた。

？ 疑問に思いながらも九条はどうすれば良いか考える。

？ このまま好きだけ遊ばせてあげるか、一度離れて貰って膝の上だけに留めて貰うか。

(いや、好きにさせるって言ったんだから自由にして貰おう)

？ 九条は前者を取り、百目鬼きさらが満足するまでそのまま何もせずに待とうと考える。

？ 彼の気持ちを感じ取った彼女は抱き着く力を弱めた。

？ それでもゼロ距離から離れようとはしない。

「きささらちゃん、急にどうしたの?」

「なんえもない…だいすけに、あまあたかった」

「…分かった、じゃあ俺はこのままにいるよ」

「うい」

？ 先程まで流暢に話していた百目鬼きさらは、何故か以前の口調に戻ってしまった。

？ 一応ながら説明すると、彼女がイシユタルに叶えて貰った願いは「ヴェスパローゼの為に頭を良くしてくれ」という願い。

？ その御蔭で前々から続いていた、言葉として成り立つか分からない曖昧な片言が治ったのだが、今になって逆戻り。

？ 百目鬼きさらは自分の口調に違和感を感じて咄嗟に、両手で口を隠す。

?だが、九条大祐は一瞬無言になった程度。

?後は何時も通りの笑顔を彼女に見せる。

?それでも百目鬼きさらは顔を下に俯けた。

「どうしたの?きさらちゃん」

?彼女が目を合わせてくれない理由等とつくに知っている九条大祐。

?じゃあ何故質問するのか。

?何が彼女を嫌な思いにさせてるかなんて本人にしか分からないからだ。

?それに相手から直接聞き出さなければ断定すら出来ない。

?というのが彼の思考。

「…きい、あたまよくない。ろーぜにきあわれる…」

「いいや。それは無いかな」

「うゆ?」

「ヴェスパローゼさんは最早、きさらちゃんを自分の娘みたいに思っているからね。嫌われる事は先ず無いよ」

「…じゃあ、だいすけは?」

?百目鬼きさらは少しばかりビクビクとしながら彼の目を見つめる。

?彼女が至極怖がっているのは見なくても分かる事。

?九条大祐は震える彼女の体、背中に手を回す。

?そして今度は彼の方から百目鬼きさらを抱き締めた。

「だいすけ…?」

「大丈夫。俺がきさらちゃんを嫌う事は絶対に有り得ないから。君に誓うよ」

「…うい…だいすけっ!」

?九条は彼女の小さくて細い体を優しく、包み込む様に腕の中へ。

?受け入れてくれた彼に百目鬼きさらは存分に甘え始める。

?先よりも強く彼を抱き締めるものの、言うてまだ7歳の力。

?だが、百目鬼きさらが九条を思つて精一杯抱き着いているのは遠目から見ても分かる光景だった。

? その状態で20秒程経過後。

? 百目鬼きさらが絡ませていた腕を離し、再度九条大祐の膝の上へちよこんと座る。

? 九条はそれに合わせ自分の腕を前に出して後ろから彼女を抱く様に、百目鬼きさらの腹部へと手を当てる。

「こうしてても良いかな?」

「こえ、しいき!」

? 本人はそう言っているが本当に嫌がっていないか、後ろから彼女の顔を覗く。

? 然し、九条大祐の不安は無駄な物となった。

? 百目鬼きさらはニコニコと満面の笑みを浮かべながら体を左右に揺らしている。

? この状態が余程嬉しくて楽しいのか、彼女は鼻歌を歌い始める。

? そんな、可愛らしい声で歌う鼻歌を九条は後ろから満喫していた。

? ほのぼのとした空間が2人を包み込む。

「〜♪♪」

「…ふう」

「だいすけ?」

「きさらちゃんの鼻歌は癒されるなあ」

「じゃあ、うたう」

「ありがとね」

「〜♪♪」

? 百目鬼きさらは九条大祐の要望に応えるように鼻歌を続ける。

? 偶に後ろを振り返る彼女に対して、九条は頭を撫でてあげ。

? そんな時間が30分程経った頃。

? 九条の膝の上で、百目鬼きさらはスヤスヤと眠りに就いた。

「――」

「申し訳無いわ。イシユタルとの話が長引いて……あら」

? その後、ヴェスパローゼが部屋に戻って来た時には既に九条大祐の姿は無かった。

「…うゆ…だいすけ…しゅき…」

? 部屋に残されたのは熟睡中の、ソファアからベッドへ移された小さな少女と。

? その少女の枕元に置かれた、赤い包装紙と金色のリボンで華やかに彩られているプレゼントだった。

「…ふふ、きさら専用の医師、は嘘ね。きさら、後でサンタさんに感謝しないかね」

「……………うい……………」

——

「よし、きさらちゃんへのプレゼントは渡せた」

? サプライズという言葉が好きで彼にとつて先程の行いは自己満足にも近い。

? だが、百目鬼きさらという少女にプレゼントを渡せた事が何よりも嬉しいかったのか、相も変わらず誰もいない廊下で喜んでいる。

? その後直ぐに気持ちを切り替え何処か別の場所へと足を運ぶ。

? 彼が向かった先は彼自身の部屋だった。

? クリスマスパークティの主催者である九条本人が姿を見せないとこのもあれな話だが、彼の中では雷鳥超の気遣いを無駄にしたくないという思いがある。

? 恋人という存在の各務原あづみやリゲルには存分に楽しんで貰い、自分は素直に休もうと彼は考えた。

? どうやら、各務原あづみの母親であるベガにも今日一日位は好きに過ごして欲しいと思っっているらしい。

? 九条は自分の部屋の前…最上階一歩手前の部屋の扉を開けようとドアノブに手を掛ける。

? そして握り、そのまま手前へ引くとガチャリという音が周囲に響き渡った。

? 開いた扉の隙間から自身の体を通す。

? しっかりと扉が閉まったのを確認すると、九条は前へ前へと足を

進ませた。

? 彼の部屋の構造は右手に寝室、左手に客が来た時などに使う所謂客間、真ん中はどの部屋とも同じくりビング。

? 入室すると同時に見えるのがこの大きなリビングだ。

? 部屋の中心にはテーブル一つ、それを囲う様にソファアが二つ。

? 奥には九条大祐専用の椅子と机が置いてあり、丸で一国の王が座ってそうな雰囲気漂っている。

? 然し、九条は右へ曲がり寝室の方へ向かう。

? ちゃんと寢床で休みたいというのが彼の現状だろう。

? 九条大祐は寝室の扉をゆっくりと開ける。

? だが、次の瞬間彼の心には焦りが生まれた。

「あの…ベガ、さん?」

「…!」

? 九条の寝室のベッドの上にベガ。

? 更に彼女は、何故か彼の黒いコートを抱き締めながら息を荒げている。

「えつと…パーティ会場は彼方ですよ?」

? 最早どうやって部屋の鍵を開けたのかすら聴かない九条。

「…あづみのクリスマスプレゼントに相応しいかどうか、見定めていたのです」

(ベガさん、それは流石に無理があるよ?!というかあづみさんに俺のコートなんか渡さないで下さい!?)

? 色々と突っ込みたくなった九条だが、一度深呼吸をして心を静める。

? そして一歩、また一歩とベガに近付いて行く。

? 九条が迫ってくる度に体をビクつかせるベガ。

? 例えるなら人間に慣れていない小動物の様だ。

? そんな彼女の反応を可愛いと思った九条は、一気にベッドへダイブする。

…手前で、動きを止めた。

? ベガと彼の顔の距離が略ゼロに近い。

「で、俺のコートで何してたんです?」

「あつ…えつと…その…」

? 見た目は大人の女性其の物なのだが、如何にも初々しい反応を返すベガ。

? 彼女の予想外な弱点を発見した九条は勢いで攻め立てる。

「気になる事でもありました? それなら直接聞いてくれればー」

「ち、違います」

「じゃあ何ですか? 何をしてたんですか?」

「うう…／＼／＼」

? ベガは顔を真っ赤にさせ、九条の黒いコートで顔を隠す。

? 自分の衣服を、こんな美人が顔に当てているのを直で見せられると彼にも来るものがあつた。

? このままでは精神的に持たない、取り敢えずリビングのソファーに移動しようと九条は試みる。

「…ベガさん、それ持っても良いので彼方の部屋に行きましょう?」

「わ、分かりました」

「さあ行きますよ」

「えっ?」

? 九条大祐はベガの足、背中に手を回し、軽々と彼女を持ち上げる。

「…あ、貴方、意外と力持ち…なのね…」

「反応するのそこでしたか。てつきり恥ずかしがるかと」

「十分恥ずかしいです…が、何だか心地良いですね。これならあづみが好むのも分かります…」

? ベガは最後に小さく眩きを漏らす。

? その眩きを聞き逃した九条大祐は頭にクエスチョンマークを浮かべながらベガをソファーへ運んでいった。

? だが、九条とベガがソファーへ到着した瞬間。

? 彼の部屋の扉の方から力強くボタン! と音が鳴り響いた。

? 突如として起こった出来事に二人共驚くが、中に入って来た人物を見て更に驚愕する。

「大祐の部屋に入る不届き者は排除しまー!」

「待って！お、お母さん!？」

「…あづみに…リゲル」

「えつと…大祐とベガ、が…え？」

「二人共、取り敢えず此処に座ってくださいます？」

「？互いに互いを見て驚愕し合う3人だが、その中で一人冷静な判断を下す九条大祐。

？話がややこしくなってしまうのを未然に防ぐ為だろう。

？ベガをソファアの上へ、ゆつくりと下す。

？すると今度は各務原あづみとリゲルの前まで歩いて行き、二人に有無を言わずソファアへ誘導する。

？九条があまり面倒事にしたくないという気持ちを察した各務原あづみとリゲルは、素直にその誘導に釣られて行った。

？四人全員が座つたのを確認した九条は、早速本題へと移る。

「で、何故ベガさんと俺があんな状況になっていたのか。先程までの状態を二人に教えますね」

？その話を聞いた二人が動揺したのは言うまでもない。

？然しながら、各務原あづみもリゲルも笑って許したという。

？ある意味3人の意思の共有が成功した様にも見える。

？唯一人、何故二人が許してくれたのか分かっていない男を抜いて。

――

「あつ、そうだ！大祐くんに渡したい物があるのっ」

「渡したい物？」

「言ってしまうとクリスマスプレゼントなのだけれど…受け取ってくれるかしら？」

「無論、私からもあります」

？それを聞いた九条は片手に持っていたグラスを一旦テーブルに

置き、3人へと体を向ける。

?とは言ったものの、各務原あづみは先程の許してあげるという代わりに膝の上に乗せてくれと、顔を真っ赤に至極恥ずかしそうにして九条に頼み込んだ。

?リゲルは隣に居させてくれるだけでも良いからと彼の右隣に座っており、ベガだけ一人は駄目だと彼の左隣に座っている。

?元は大人3人が座れる位には大きなソファアーなのだが、流石に窮屈そうな九条大祐。

?前に女性、両隣に女性と。

「…ていうかこれ、両手に華以上じゃないですか」

「大祐くん苦しくない?」

「狭いと感じたら直ぐに言って頂戴」

「そしたら私とリゲルが対面に移ります」

?各務原あづみを動かそうとしない辺りがやはり母親、等と思っている九条をじっと見つめる3人。

?窮屈ではないというのが彼の内心だが、居心地の悪さを感じているのは間違い無い。

「俺は大丈夫ですよ。話の続きをどうぞ」

?それでも無理矢理話を進めようと、自分の心配はするなアピールをする九条。

?彼の表情を疑いつつも各務原あづみは口を開く。

?だが、偶にーというよりも頻繁に九条の顔を伺うのは本心から彼を心配しているからだろう。

?対してベガやリゲルはプレゼントについて話し合っている。

?すると二人はバトルドレスを装着。

?目の前にプレゼントボックスを合わせて3箱取り出す。

「…あれ、3人はもう?」

「交換したよー♪」

?その言葉を聞いた九条もバトルドレスを装着。

?データボックスを漁り、中からプレゼント箱を3箱取り出す。

?同じバトルドレスが故に作業工程としてはベガやリゲルと何ら

変わらない。

?自身に目の前：では無く、各務原あづみの前に唐突に出現した事により、彼女の身体がビクツと跳ねた。

?九条は3箱共見事にテーブルの上へ落下するように出現させる。

?然し、箱からは軽いコトンといった音が鳴った。

?要するに大きい物ではないと。

?そう見受けるのが妥当だ。

?だが、九条は又もやデータボックスを弄り始める。

?そして今度は大小混じった袋が三つ、テーブルの上に置かれた。

?更にテーブルと接地した際の音も別々。

「えつとですね…これがあづみさん、リゲルさん、ベガさん」

「どうして箱と袋があるのかしら」

「プレゼントは二つという事です」

「それじゃあ私達からも」

?九条大祐が3人其々にプレゼントを手渡しすると、相手3人からもプレゼントが返ってくる。

?丸でプレゼント交換…いや、プレゼント交換其の物だ。

「じゃあ、3人から開けてくれますか?」

「あら?こういうのは全員で開封するものではないのですか?」

「うん!大祐くんも一緒に開けようよっ」

「…そういうもんですかね」

「そういうものよ」

?九条大祐は3人の勢いに負け、全員で一斉に開封する選択肢を選んだ。

?本来は先に開けて貰いたかったというのが彼の本心だが、彼女達の思い遣りや笑顔に勝てる筈も無かった。

?因みに3人共座る位置を変え、九条大祐の隣に各務原あづみ。

?正面にはベガとリゲルという位置決めになっている。

?そして彼は三つのプレゼント箱を綺麗に並べ、左から順に開けていく。

?九条が最初に開封しようとして手を掛けたのはベガの物だった。

？それが合図代わりになり、3人共九条からのプレゼントを開けていく。

「…ベガさん…これって」

「どう？大祐なら気に入ってくれると思って」

「いや、あの…んん？」

「大祐くん、どうかしたの？」

？九条大祐の反応が気になったのか、各務原あづみが横からチラッとプレゼントの中身を覗く。

？だが…それを見て絶句したのは彼女自身だった。

「…お母さん、これ…」

「そう、あづみ。貴女の母親だからこそ出来た事よ」

「恥ずかし過ぎるよう！大祐くんも何も言えずにー」

「あづみさんの…嬉しいけど、どうすれば…」

「必死に使う用途を考えてくれてる……」

？一体、ベガからのプレゼント箱には何が入っていたのか。

？一言で片付けるなら「各務原あづみの写真」だ。

？確かに、彼女の事が好きで片時も離れたくないと思っている九条にとつては最適なのもかもしれない。

？だが、その写真の中には各務原あづみの幼少期時代等の、本人からすれば恥ずかしい事この上無いであろう物も混じっていた。

「ていうかベガさん、こういう写真をいつの間に…？」

「うう…大祐くん、そんなにまじまじと見ないでえ／／／」

「ふふっ、照れてるあづみも可愛い」

「あ、リゲルの物も混じってますよ」

「マジですか!？」

「うそ?!大祐!そんな勢い良く探さないでえ!」

？プレゼント箱の真ん中にきつちりと固定されたケースの中身を隈無く探す九条。

？すると本当にリゲル本人の写真が出てきてしまった。

「…二人共、可愛い…」

「わあああ?!?!」

「このままではリゲルが壊れてしまいますね」

「次！大祐くん、次のプレゼントを開けて！」

「り、了解」

？自身の一番最初の頃、まだ青の世界に忠実だった頃の写真を見られて発狂するリゲル。

？中にはある時の、九条に抱かれた時の物まで撮られていた。

？その写真を見た瞬間は九条も目を逸らした。

？状況が状況だったとはいえ、流石に自分のした行為を恥じている様だ。

？そんな二人を見てくすりと笑みを零すベガ、自分の写真がこれ以上見られる前に次のプレゼントへ意識を移そうと、九条に催促する各務原あづみ。

？焦りを隠し切れていない彼女の催促を受け入れ、九条は隣に置いてあるプレゼントに手を伸ばす。

？それは各務原あづみ、彼女自身のプレゼント箱だった。

「おお…あづみさんのプレゼント可愛い！」

「えへへ、リゲルとお母さんにもこれにしたんだ。どう…かな」

「すっごく嬉しいよ、ありがとう」

？九条は各務原あづみからのプレゼントを絶賛した。

？少し横に長いプレゼント箱に入っていたのは赤いマフラー。

？各務原あづみ、リゲル、ベガ、四人お揃いになるように彼女が選んだという。

？最高のプレゼントを貰った九条は笑顔を、各務原あづみは彼のその笑顔に頬を赤く染めてテレテレする。

「外出する際はこれ絶対だな」

「そこまで嬉しがって貰えると…何だか渡したこっちの方が嬉しくなっちゃうな」

「私のプレゼントでは不満でしたか？なら今直ぐにでもー」

「いや、ベガさんのは精神面で有難いです」

「じゃあ私のはどうかしら？」

？九条が二人のプレゼントに感謝の気持ちを伝えていると、先程ま

で疲れ果てていたリゲルが自信満々な態度でプレゼントを勧める。

「? 余程外れる事が無いと信じているのか、少しドヤ顔が混じりつつある表情で九条を見つめていた。」

「? ここまでされたのでは期待せざるを得ない。」

「? 九条はドキドキと、心臓の鼓動を早めながらプレゼント箱を開けていく。」

「? リゲルが彼にプレゼントした物とは、一体何なのか。」

「これは…日本刀?」

「? 横長な箱の中に入っていたのは本物の日本刀。」

「? 振れば何でもスパツと切れてしまっそうなの日本刀だった。」

「? 九条は試しに鞘の部分握り締める。」

「? 何故急に日本刀?」と思っただが、次の瞬間頭の中に聞き覚えのある音が響き渡る。

「解放条件物質を確認しました。新しいバトルドレスを解放します。」

「何故今!? 然もレッドフレーム! 嬉しい!」

「え、えっと、良かったわね。…大祐が何言ってるか分からないわ…」

「有難う御座います! リゲルさんの御蔭で新しいバトルドレスが解放されました!」

「そ、そうなの? なら私も嬉しいわ!」

「? 九条の勢いに流されるがままに流されるリゲル。」

「? だが、彼が嬉しがっている事だけは分かった彼女は素直に喜んだ。」

「? 新しい戦力が増えたやらそういった訳ではなく。」

「? 彼の笑顔が見れたから。」

「いや、本当。皆さん有難う御座います」

「良いわよ、お礼なんて」

「リゲルの言う通りです。それに…」

「私達も大祐くんからプレゼントを貰ってるから」

「…それじゃあ、今度は俺のプレゼントをどうぞ!」

「? そしてその日は…いや、その日も、四人は仲睦まじく笑い合っ

ながら1日を過ごした。

――

番外編：大晦日

「はあ…今年も終わりを告げるのかあ」

？俺は自室で一人、自分用の椅子に座りながら呟く。

？去年は確か…豪邸で一人年末を迎えたのか。

？此方の世界に来てからは波乱万丈？な生活を過ごしていたからな。

？今ではこうして平和になったから気楽でいれるものの、此れ迄の選択肢を一つでも間違えていれば今俺は此処に居ないだろう。

？過去で行った行為が此れ程までに関わってくるとは予想だにしなかった。

？ふと、机の上にある時計に目移る。

？23:15

？時計にはその四つの数字が表示されていた。

？席から立って窓を見てみると外は真っ暗な闇に包まれていた。

？今日はリゲルさんもベガさんも、ある用事で家を出ている。

？二人が無事に帰って来れる事を願いながらも、内心今年も一人で年末を迎えるのかと少し寂しくなる。

？そんな気持ちで窓に手を当てていると。

コンコン

？と、扉をノックする音が俺の意識を搔つ攫った。

？それでも急かずに歩いて向かう。

？走る程でもなからう。

？俺はドアノブをゆっくりと引き、客人を出迎える。

「大祐くん、ご一緒にしても良いかな…？」

「あづみさん！どうぞソファアへ」

？ここでもさかのサプライズゲストの登場。

？今思い出せば出掛けたのはベガさんとリゲルさんだけだったな。

？という事はあづみさんが居ても可笑しくない、ていうか当たり前前というか。

？確か二人が家を出たのはついさっきだから…あれ、その間あづみ

さんは何してたんだろうか。

? 彼女に関する事はついつい気になってしまおう俺だ。

? 取り敢えずあづみさんにはソファアへ座って貰って…あ、後は。

「今、菓子やら飲み物やら持ってくるから」

「そんな…お構いなくーで、合ってるよね…?」

「合ってるけど構わせて貰うよ。何も無いのは味気ない、それにあづみさんに申し訳ない」

「別に、私は大丈夫だよ」

? 無駄に動いて欲しく無いのか、少し強請り気味なあづみさん。

? だが、彼女が良いと言っても俺が許さない。

? 折角あづみさんが来てくれたのにお持て成しの一つも無いだなんて。

? 男…いや、人として失格だ。

? 等と勝手な思い込みをしながら、冷蔵庫や、菓子類を保管してある部屋を物色。

? 飲み物も菓子もあづみさんの口に合えば何でもええんや。

? 兎に角色々持ってくか。

「この位かな…」

「あ、大祐くーで、何か大変な事になってる!?!」

「大変な…ああ、確かに凄いな」

? 選んだ物があづみさんの嫌いな物だったら嫌だな。

? なんて考えながら様々な種類の菓子を取り出してきたら…彼女がびつくりした表情でテーブルの上を見つめていた。

? 自分でも改めて見ると、うん、素晴らしい。

? 軽く2mはあるであろう横長のテーブルが隙間無く埋められていた。

? 何故こうなるまで気づかなかった、俺。

? これじゃあ飲み物置けない。

? そして何処に何があるのかすら分からない。

? 然もあづみさんが好きそうな菓子があるか未確認。

? その所為で要らない類の菓子は戻さなければならぬ。

? 考えなく出してくるからこうなるんだよ。

「…そうだ。あづみさんは何か食べたい物とかある?」

「えっと、今はカレーが食べたいかな」

「カレーかあ。軽いのだったら作れるけど」

「本当!? 大祐くんの作ったカレー、食べたいなあ…」

? あづみさんに其処まで言われると最早引けない。

? 基本的な材料とかは一応認知してるけど、彼女に食べさせるのであれば上品な仕上がりの物を出したいな。

? へつきーならそういうのに詳しいし、材料なら何でも揃ってる。

? あの人に連絡すれば答えてくれるだろう。

? 一番手っ取り早いのはへつきーに作って貰う事だが…それは、俺のプライド的な何かが許さない。

? さて、もたもたしていると年が越してしまう。

? 後30分位あるから心配はない、と思いたい。

? 何とかギリギリで作り終わりそうな雰囲気だな。

? キッチンには直ぐ其処だ。

? さっさと行ってきっちり作って、あづみさんにご馳走して。

? 恐らくおかわりするであろう彼女の為に余分に作り置きでもしとくか。

「よし、じゃあ行ってくる」

「…あ、あのっ」

? 早速作りに行く…前に菓子類を仕舞っていると、後ろからあづみさんが尋ねるように話し掛けてきた。

? 一体何事か。

「どうかしたかい?」

「えっと…あのね、一緒に作りたいなあ…なんて」

「よし、菓子類は放置! さあ行こうか」

「あつ、うん!」

? あづみさんが自分から言ってくれるなんて。

? 実は一人でキッチンに立つとなると、お互い孤立してしまうから

どうしたものかと考えていたが。

?これならその心配は無さそうだ。

?勇気を出してくれたあづみさんに拍手喝采だな。

「大祐くん、その…」

「あづみさんと二人だけでカレー作りなんて、夢でなら幾らでも妄想してた」

「ええっ／＼／＼」

「だからね、ありがとう。誘ってくれて。そして宜しくね」

?俺がそう言うと、あづみさんは俯きながら顔を真っ赤にしていた。

?更に両手を握って、もじもじと、恥ずかしがっているのが目に見えて分かる。

?そんな彼女をじっと見つめていると、あづみさんは顔を上げて逆に見つめ返してきた。

?思わずその赤い、大きくて綺麗な瞳に吸い込まれそうになる。

?然しお互いで見つめ合うというのには限度があった。

?俺も彼女も、ハツとして直ぐに目を逸らす。

?だが、再度彼女の方を向くと…あづみさんも此方をチラッと見ていた。

?又もや行動が被ってしまった。

?そして何故か笑ってしまう。

?それはあづみさんも同じだった。

「…そろそろ行くかい?」

「えへへ、そうだね。今日は宜しくお願ひします」

「いえ、此方こそ」

?そんな会話を交えながらキッチンへと向かう俺とあづみさんだった。

?二人で仲良く話しながらカレーの材料を準備し、必要な物は携帯でへつきーに連絡を取りつつ確認。

?あづみさんと楽しくお喋りをしていた御蔭で早く準備が整った。

?後はカレー作りを始めるだけだ。

「切る作業等は私(わたくし)が致しますので、あづみ姫は包丁にお手を触れぬよう」

「だ、大祐くん…何だか執事さんみたいだね」

「俺みたいな執事を誰が求めるのやら」

「…私は、欲しいかな」

?マジか。

?案外、というか普通にあづみさんに受けて頂けた。

?凄く嬉しい。

?んで、俺の執事ごっこは置いていて。

?えーと…へつきーからの情報によるところ、水を使わないでトマトジュースを使え、チョコレート等の隠し味は不味くなるから止める、但しポテチは除く。

?更に砂糖を用意しろって…んな専門的な事は聞いてない。

?まあ、指示された通りに作れば上手くいくんじゃないのか?

?それじゃあ始めよう。

?…どれどれ、先ず最初は…と。

「野菜を切る、指示されんでも分かるわ」

「もう包丁使うんだ」

「使わないで手刀とかで切れれば早いですよね」

「わあ、大祐くん出来るの?」

「無理っす」

?彼女との会話を弾ませながら事を進めていく。

「わりとマジで包丁危ないので、ジャガイモと玉葱、そして人参の皮剥き頼んでも良いかな?」

「うんっ!」

?俺からの頼み事を快く受け入れてくれるあづみさん。

? 玉葱の皮剥きは簡単だが、ジャガイモや人参は如何だろうか。
? ピーラーも一応ながら刃物は付いているし、不安で不安で仕方がない。

「ゆっくりで大丈夫だからね」

「ありがと、やっぱり大祐くんは優しいね」

? お互い少し離れた位置で作業しているにも関わらず、俺は不意に顔を隠す。

? 自分でも咄嗟に判断してしまった所為で何故隠したのかよく分からない。

? このままでは何も進まない為、へっきーからの連絡の中に表示されている「カレーに入れる野菜」の項目をチェックする。

? あづみさんが皮剥きをしてきている間、俺は切る作業をしておこう。

? まあ取り敢えずはあづみさんと具材を決めてからだな。

「キャベツとか春菊とか書いてあるけど…あづみさんはどうしたい?」

「うんとね、私はシンプルで良いと思うな。今ある食材だけでも十分じゃないかな」

「流石あづみさん。あれ…じゃあこれ、俺も皮剥きするしか無いやん」
? 個人的にはマツシユルームなんか入れたいけど、あれは切るんじゃないかとスライスだし。

? まあまあ、あづみさんと一緒に皮剥きしようじゃないか。

? 楽しい楽しい作業が待ってー

「待ったあづみさん。エプロン着てない」

「あっほんとだ!」

「直ぐ其処にあるから、着ておいで。俺がやっておくから」

「…此処で着ても大丈夫?」

「勿論」

? 俺が了承すると、あづみさんはキッチンの壁に掛かっている彼女専用のエプロンを手に取る。

? そしてぎこちない手付きでしっかり紐を結んで…いや、後ろの紐

で苦戦していた。

? 至極可愛い、凄く手伝いたい。

? だが俺には皮剥きという作業がある。

? そんなものは放っておいて今直ぐ彼女に手を貸したいが、自分自身で頑張っているあづみさんはそれを望まないだろう。

? ここは見守ってあげるのが吉。

? 俺的にも、あづみさんがエプロンを目の前で着ている姿を見たい。

? とか言う自分の欲望は投げ捨てて。

? 俺はこの皮剥きに専念しなければ。

? 大体五分程。

? 漸くエプロンを着れたあづみさんはクルツと回って此向く。

? 最早、超絶可愛い最高、に似た言葉しか思い浮かばない。

「大祐くんごめんね、私も頑張るから!」

「そこまで張り切らなくても、マイペースだよマイペース」

「ううん、大祐くんがやってくれた分、頑張るのっ」

? 両腕を曲げてヤル気ポーズを見せてくれる彼女に、元気付けられる自分がある。

? というかあづみさんのエプロン姿に理性が抑えきれないのですが、それは。

∴ つと、今はすっかりカレー作りに集中集中。

? 何処か一步でも間違えると不味くなってしまふからな。

? その点からすれば人の人生と言えなくもない。

? なんて思いながら作業を再開した。

「さて、ジャガイモは終了」

「玉葱も終わったよ」

? 凡そ五分も掛からずに二種類の野菜の皮剥きを完了した。

? 後は人参だが。

? ピーラーは意外と危ない。

? これは俺がやってあげるのが一番だ。

「あづみさんは剥き終わった野菜を洗って、ボウルの中に入れて、俎板

の近くに置いといて貰えるかな」

「はい、」

? 何だか凄い上機嫌なあづみさん。

? 何時も一人で何かしていた俺にとっては共同作業とは慣れない物がある。

? だが、こうしてあづみさんと二人だけで楽しく、色々な事をするのには抵抗が一切無い。

? それもこれもまた、彼女の御蔭なのだろう。

? 優しく接してくれるあづみさんが居てくれてこそ、俺はそう思える。

…さて、人参の皮剥きも終わり、水で綺麗に洗って。

? 元からあづみさんが洗ってくれていた野菜の入っているボウルに、これも入れて。

「さあ、次は包丁で切りますよ」

「…ちよつと、怖いな」

? 大丈夫だよあづみさん。

? 包丁持つて万が一指を切るのは俺だから。

? そんな光景、彼女に見せたくもないな。

? だからこそ気を付けよう。

? 最初はジャガイモを切ろうと俎板の上に置き、いざ包丁で切ろうとすると。

? あづみさんが俺の背中にくっ付きながら興味津々に見つめていた。

? 彼女はリゲルさんが料理する所を見た事が無いのか、俺が右手に持っている物体Xから目を離さない。

? 丸で包丁を使う作業工程を始めて見るかの如く、素晴らしい食い付き様だ。

? 俺はあづみさんの視線を気にしつつ野菜を切っていく。

? あまりぶつ切りにはせずに、あづみさんの口に合うサイズで調整。

? 結果、小さくて細やかな切り方になった。

?そして、流石に高い包丁なだけあって切れ味は抜群。

?下手すれば手を切るじゃなくて指を切り落とすになりそうだ。

?然し、プロの人達は高い包丁ではなく、愛用のMY包丁を使うらしい。

?やはり自分の手に馴染んだ物が一番使い易いという事なのか。

?料理に関しては其処までガチる気は無いのでどうでも良い話ではあるが。

「うん、ジャガイモはオツケー。次は玉葱かな」

「大祐くん切るの上手だね。どうしたらそんなに上手く出来るの?」

?未だ背中にくっ付きながら質問してくるあづみさん。

?だが、この手の問いに対する答えは一つしか無い。

「完璧に慣れが関わってきますよ。やってればその内出来る様になります」

「そうなんだ…」

「俺で良かったら教えてあげるよ。丁度、切り易い野菜の人参があるからね」

「えっ、良いの?私がやっても…?」

「手取り足取り、あづみさんが満足するまで付き合おうよ」

?そう言うのと彼女は笑顔で「ありがとっ」と、嬉しそうな表情を俺に返してくれる。

?全く、あづみさんの可愛さは卑怯だよ。

?誰が何と言おうが彼女のその魅力は本物だ。

?というか、あづみさんの可愛さに口出し等させて堪るか。

?つて、いつの間にかあづみさんを語る時間になってしまった。

?気を抜くと直ぐにこれだ。

?ちやんと反省しなければならぬ。

「…あ、俺から離れたほうが良いよ。玉葱切るんで」

「玉葱…切ると涙が出るって聞いた事ある…」

「ささつと終わらせるんで、そしたら人参切ろうか」

「うんっ」

? 元気な返事をしてくれたあづさんは、少し俺から距離を取る。
? ゼロ距離だった先程から、一步引いた程度で。

? 然も恥ずかしそうに俺のコートの裾を掴んでいる。

? だが、逐一そんな事を気にしていたら年越しを迎えてしまう。

? それにあづみさんの可愛さに耐えられないーふう、自制自制。

? 略さなければ自粛規制。

? 頗るどうでも良い。

? さて、玉葱は微塵切りにして終了。

? 玉葱を切った時に散る成分が鼻や目に入って涙が出るらしいが、俺は何故かそれが効かない。

? 理由は自分でも分からない、後で色々検証してみようと思う。

? 因みに少し後ろにいるあづみさんの瞳からは綺麗な滴が…。

? 俺は彼女に、棚に常備しているタオルを手渡す。

? するとあづみさんは真っ白でふかふかなタオルに顔を埋(うず)める。

? その状態が2分程経つと、彼女はタオルから顔を離す。

? どうやら、既に涙は治った様だ。

「大丈夫かい?もしあれなら人参も俺がー」

「私がやりたいっ。…駄目、かな」

「それじゃあ、十分に気を付ける事だよ。後ろから俺が支えてあげるから」

「う、うんっ。頑張るっ!」

? あまり力み過ぎないのも大事な必要事項なんだが…今それをあづみさんに言っても、余計緊張するだけだ。

? だから最大限俺が出来る事をしてあげて、彼女の心を安定させる。

? そうすれば間違つて指を切る事も無くなると思う。

? あづみさんを第一に考えているからここまで思考を働かせてしまおうのだろうな。

「俺があづみさんの後ろに立って、切り方を教えるから」

「えつと…確か、猫の手にするんだよね?」

「正解だよ。第一第二関節を曲げた所に包丁の横を当てて」
「こう？」

「？おお、言った事を直ぐに実行、そして完璧なフォームで俺の指示を待ってくれてる。」

「？あづみさんは料理系統の事、磨けば光るんじゃないのか？」

「：彼女だけを過大評価するのも反省の一つだったり。」

「？それでも、初見でしっかり行動しているんだから過大評価でも何でもないと思おう。」

「次はその包丁を下に落とす」

「下に……………」

「…あづみさん？」

「？やはり、分かってはいたが包丁を使用して物を切るという行為が怖いらしい。？」

「？そりゃあ始めて人殺しに使われる道具なんて持ったら恐怖しかないよな。」

「？生半可な力で刺すと肋骨を貫通しないに定評のある包丁さん。」

「？切れ味が良過ぎるのも問題だ。」

「ちよつと御手に触れますよ」

「えつあつ…うん」

「？俺はあづみさんの後ろから、包丁を持って震えている彼女の手に自分の手を添える。」

「？左手でしっかりと人参を押さえ付けているあづみさんの手の上に被せる様に、包丁を握っている彼女の右手を俺がぎゅつと握る。」

「あうう／＼／＼」

「大丈夫、ここにクツと力を入れる位で切れるから。あまり力を入れないように」

「は、はいっ」

「？この会話のやり取りは丸でーいや、何でもない。」

「？兎に角、あづみさんが危なくないように事を進めていかねば。」

「？これで怪我なんてさせたらリゲルさんに申し訳が立たない。」

「？何より、あづみさんが傷付くなんて一番駄目なルートだ。」

? 彼女が怪我するくらいなら俺が身代わりになる。

…ふと、包丁と俎板が互いにぶつかり合う「ストン」という音が頭に響く。

? 意識を其方に向けると、あづみさんが凄く嬉しそうな表情で俺を見つめていた。

? 彼女から俎板に視線を移すと、見事に人参の端が切られていた。

「流石あづみさん！次に行きますか」

「始めて…切った。大祐くんの御蔭、ありがとっ！」

「さあさあ、ゆつくりで良いですからね。どんどん行きましょう！」

「うんっ！」

? 一度やってしまえば早いもの。

? オドオドとしながらも勢い付いたあづみさんは一気に人参を切っていく。

? 俺が後ろから手を添えながらだが、それでも軽く作業を終わらせた彼女の表情には達成感が宿っていた。

「…なんかこうしてると、その…夫婦…みたいだね」

「新婚さん？俺的には付き合い始めた彼氏彼女みたいな感覚だけだね」

「そ、そうだよね！行成夫婦とか、私何言ってるのかな…／／／」

「あづみさんと夫婦関係かあ…憧れるな」

「ふええっ!?!」

「あづみさんはどう思います?」

? そんな他愛も無い、自分的には至って本気な話をしながら手を動かす。

…とは言っても後は一般レシピ通りに作るだけだ。

? 厚手の鍋にサラダ油を熱し野菜を炒めて、水ーじやなくてトマトジュースを加えて、へつきーレシピによると最初は弱火で煮込むと。

? 結構時間が掛かるな。

? 沸騰してきたら湧き出てくるあくを取り除いて、今度は野菜が柔らかくなるまで又煮込む。

? これ、まだ弱火で良いのかね。

? 何時もならここらで中火にしてるんだけど…まあ、従うか。

? 後はタイマーを15分に設定して。

? その間、待っている時間はあづみさんと仲良くお喋りタイム。

? 例え煮込むのを待っていなくとも話しているけど。

「私が…大祐くんと夫婦に…?」

「俺はもう夢にまで見るよ」

「えへへ…／＼／＼私も、かな」

「…いや、全てが上手くいって、僅か一年間で世界の問題が解決出来るなんて。その御蔭で今こうしてあづみさんと居られる」

? そしてこんな小っ恥ずかしい話だって出来る。

? 俺がこの世界に転移してから何もかもが上手く働いてくれて、苦労をしたときも確かにあったが…それでも選んだ全ての選択肢が正しくて。

? あづみさんやリゲルさんを幸せにしてあげられたのは何よりの喜びだ。

? それに加えてベガさんとも和解、誰一人として傷付く事なくこの世界に平和が訪れた。

「…そう言えば、あの時私達の未来を変えてくれたのは大祐くんなんだよね」

「あの時?」

「うん。私達と大祐くんが初めて会った時。緑の世界を目的地として旅をしていた私達に、大祐くんは「白の世界に行きましょう」って言うてくれたよね」

「…本当、あれが原点みたいな物だよなあ」

? 二人の行く先を否定して白の世界へ。

? それがこの物語の始まりだった。

? 理由等無い、唯勘で話してみただけ。

? それを何とか誤魔化そうと様々な理由を付けて話を進めた。

? 碌にこの世界の事なんか知らないのに、下手すれば二人の命を危険に晒すかも知れないのに。

? けれど、不思議な事にそう思えなくて…只管に白の世界を強く押しして。

? 結局、最終的にはリゲルさんが折れて白の世界へ行く事となった。

「最初の頃は、大祐くんの装着してたあのバトルドレス…リゲルが凄く戦力になるって言ってたんだよ?」

「ああ、ストライクフリーダムだね」

「…本当はね、自分達を守る為の駒だってリゲルが。でもその本人が大祐くんを好きになっちゃったね」

「俺なんかの何処に惹かれたのかー『ピピピッ』ーあ、15分経った」

? あづみさんと過去の出来事を思い返している内にタイマーが15分経過の合図を知らせてくれる。

? 一旦火を止めて粗熱を取る為に時間を置く。

? まだまだ浮いてくる細やかなあくが頗る目障りだ。

? 再度レードルを使つて取り除いていく。

? 大体5分程。

? その場に放置していた鍋にカレーのルーを割り入れて投入。

? ちゃんと溶けたのを確認してなら再び弱火で煮込んでいく。

? 今度はタイマーを10分に設定。

? 年越し前には何とか出来上がりそうだ。

「あ、砂糖入れろって連絡来てるー」

? へつきーからの唐突な連絡に慌てて砂糖を入れる。

「あつぶねー…ここにきて失敗するところだった」

「でも、大祐くんは手際が良いね。羨ましいなあ」

「一人暮らしは伊達じゃないよ。…もう、一人じゃないけどね」

「えへへ…私とリゲル、お母さんだつて居るからねっ」

「ありがとう、あづみさん」

? 二人親密な空気に包まれていると、徐々にあづみさんが近付いて来ている事に気がつく。

? いつの間にかゼロ距離、腕と腕同士がくっ付き会う程にまで彼女

は接近していた。

?まさか俺が気付かないまでに隠密スキルが上達したのか…って、そんな冗談は良いんだ。

?今はあづみさんがゼロ距離な理由を考えよう。

?えーとね、料理を教えてあげたお礼?

?俺は包丁の扱い方を教えたただけだ、それは無い。

?待てよ。

?ちよつとテンパってるな、大丈夫か俺。

?焦るな、さつきもゼロ距離だったじゃないか。

?寧ろ俺からお近付きになったんだ。

?それが今はあづみさんから来たっただけで。

?落ち着け、俺。

「あ、あの…あづみさん?」

「…そうだよ」

「一体どうしー」

「…うん。大祐くんはもう、一人じゃないよ」

?そう言いながら、彼女は此方に体を向けて両手を広げている。

?言動の割には頬を真っ赤に染めながら、恥ずかしながら、俺に對して、一人だった俺を受け入れようとしてくれている。

: 今年は大好きな彼女とーあづみさんと一緒に年越しを迎えられるんだ。

?こんなに幸せな事は無い。

?ならば俺も、一人で苦しんでいた彼女を受け入れて…。

?いや、元からあづみさんの事は、彼女の全てを受け入れる気しかない。

?だから。

「…有難うと言っても伝え切れない。これしか言えない自分かもどかしい。でも、言わせて貰うよ。有難う、あづみ」

?俺はそう言って、彼女の片腕をクイッと自分の方へと引っ張る。

?そのまま両腕であづみさんを抱き寄せる。

?彼女は突然の出来事にも動じず、俺の背中に手を回して抱き締め

た。

「…私からも、こんな私を好きになってくれて、ありがとう。大祐くんと一緒になれた事が、生まれて一番の幸せだよっ」

？彼女の、俺を抱き締める力が強くなった。

？それに合わせて俺もぎゅつと、あづみさんの細い体を抱き締める。

？今この瞬間、彼女と一つになれた気がした。

？

「…あづみさん」

「大祐…くん」

？このまま勢いに乗じさせて貰おう。

？今まで、世界のいざこざが終わるまでは彼女と出来なかった。

？本物のキスという物をさせて頂こう。

？あづみさんは俺の想いを察してくれたのか、以前と同じく目を瞑る。

？躊躇いなんて要らない。

？俺がするべき事は唯一つ。

？彼女の唇と自分の唇を、重ねるだけだ。

？俺は、目を閉じて少し息を荒くしているあづみさんの唇に、段々と自身の唇を近付けていく。

？やっとこの時が来たんだ。

？前みたいに邪魔が入らない内に、させて貰おう。

？そして、あづみさんと俺の唇同士が粗ゼロ距離になった。

？瞬間。

『ピ。ピ。ピッ』

「ふえあっ!?!」

「うえ!?!」

？設定していたタイマーさんが、丁度10分を知らせてくれた。

？…この野郎…!?!

「タイマー君は壊されたいのかなあ？（にっこり）」

「大祐くん叩きつける気満々だよ!?!」

「…まあ、焦げたら元も子も無いですもんね」

？彼女の大好きなカレーを不味くしてしまつては本末転倒。

？今までの時間が水の泡となつてしまう。

…それでも、あづみさんとキス出来たなら関係無いんだけどさ。

？然し、それは飽くまで俺の都合だ。

？時間を設定したのも俺だ。

？元凶、俺だ。

「取り敢えず、カレー食べますか」

「うん、そうだね。楽しみだなあ♪」

？予め炊いておいた白飯を皿に盛り、その上からカレーを盛り付けていく。

？そうだ、肉が入つてないんだから、最後にアスパラガスでも切つて飾り付けようか。

？茹でる時間は…無さそうだな。

？しっかりと洗つて、俎板の上に置いて、斜め半分に切ればー

スパツ

……………やらかした。

「痛つてえ」

「大祐くん!?!指から血が出てる!」

？焦つた結果、自らの指を切る羽目になつてしまった。

「…つて、あづみさん?どうしました?」

「えつとこういう時は……………はむっ」

「ええええええええ!!?!」

？彼女の予想外な行為に、思わず声を上げてしまった。

？だつて血が出る俺の指を、あづみさんが口にパクツと…えええ!?

「リゲルが、応急措置だつて」

「いやでも駄目ですよ!」

「ただいまー!あづみいるー?」

「こら、リゲル。夜中に五月蠅くしてはいけませんよ」

「…噂をすれば何とやら」

？外出中だったリゲルさんとベガさんが、俺の部屋を勝手に開けて

入室する。

? 鍵を掛けてなかった俺が悪いんだが、まあ…良いか。

? 折角だし四人で食べよう。

? その方が賑やかで楽しい。

「年越し蕎麦じゃなくて、年越しカレー」

「そうだね。…蕎麦じゃなくても、ずっとずうっと、大祐くんの傍に居るからねっ♡」

「上手い。…あづみさん、こんな俺だけど、これからも宜しくね」
「うんっ！」

? そして俺を含めた四人で年越しを迎える事が出来た。

? テーブルに並んだのは蕎麦では無く、カレー。

? それでも3人共、満足気な表情で食べてくれていた。

? 無論、俺も例外ではない。

? 4人で色々な事を話して、盛り上がって。

? 疲れてそのまま眠ってしまったあづみさんをお姫様抱っこし、俺の使っているベッドの上で寝かせる。

? 二人は自分の部屋へと戻っていった。

? 俺は何処で眠ろうか考えていると、寝ている筈のあづみさんから服の裾を掴まれた。

…一緒に寝るしか無いよな。

? その日、俺とあづみさんは一緒にベッドで一緒に眠りに就いた。

? お互いに抱き締め合いながら。

? 二人で就寝した時刻は午前12時37分だった。

――

番外編： 元日（前編）

「……翌日……」

「ふ……ああ……」

? 年が明けた日の朝。

? 今日は何だか気持ちの晴れた寝起きだ。

? 何時も感じていたあの気怠さも無く。

? 一年の厄全てが体から剥がれ落ちた感じ、とでも言えば説明つくか?

? 心身共に切り替わった気分だ。

? とはいえ本当にそうだった訳では無いので注意と。

…さて、それよりも何時も通り部屋の換気をするべく窓を開けるか。

? 寝起きでぼーっとする頭から身体に無理矢理指示を出して。

? 外は寒いから、本来なら開けたくないのが本音だ。

? 然しそれをしないと淀んだ空気が部屋に籠ってしまう。

? なら開けるわ。

? 取り敢えずは体を起こしてっと。

「ん？」

? 何だろうか、左腕が動かない。

? 金縛り? 部分的な金縛りとか聞いた事無いぞ。

? 然もなんだかもふもふしてー

「…あ、そうだった」

? 俺はふと、昨夜の出来事を思い出して布団の上部分を剥ぐ。

? すると左側…其処には可愛い女の子が「くー…すー…」と寝息を

立てながら熟睡していた。

? 自分の左腕が動かない理由は、この少女が俺の左腕を抱き締めながら寝ているから。

? ぎゅっと抱き締めて離さない。

? 何とも言えんな。

? だが、このままでは俺が動けない。

? 何とも言えんな。

? まあ、一回起きて貰えば良いだけの事。

? 俺はあづみさんの肩に右手を掛けた。

「…うみゆ…だいすけ…くん…」

? そして左手で自身に右手をpushさえつける。

? 何とも、言えんな。

? 更に両手を胸に当てて悶絶する。

? 分かつてはいたーというかずっと思っていたが、この子の可愛

さは異常だ。

? その可憐さ故に道端で攫われないか心配になる。

? だがまあ、リゲルさんが何時も傍にいるから安心だろう。

? 後一つ、ずっと思っていた事と言えば。

「…くー…」

? 今は寝ているあづみさん。

? 彼女と俺は昨日の夜、碌に着替えもしないで寝てしまった。

? だからあづみさんは何時もの水色主体の大きなスカートにリボンが特徴的な衣服、俺は言わずもがな。

? 二人共普段着で就寝してしまったのだ。

? だが、今現在のあづみさん。

? 普段着では無く、青いラインの入った真っ白でひらひらとしているネグリジエに着替えて隣で寝ている。

? 然も彼女にしては珍しく、足を殆ど、加えて腹部を露出していた。

? 下から覗けば見えてしまいそうな彼女の胸。

? 更には、下着と見間違えてしまいそうになる…というか、見た目完全に下着…。

? なに? ネグリジエってこんな服なの?

? というかあづみさん、一度起きてネグリジエに着替えてから、また俺と一緒にベッドで寝始めたのか。

? 一体、何時着替えたのやら。

…その着替えシーンを見たかったなあ、とか言ったら変態扱いされるんだろうな。

? じゃなくて。

? ずっとこうして、あづみさんが起床するまで待つても良いのだが…そうもいかない。

? 俺は彼女の胸元に拘束されている左腕をスルツと抜き取る。

「んっ…あっ」

? 何やら寂し気な声が聞こえたが、気にしたら負けだ。

? 彼女の反応に気を取られていては何時まで経っても事が進まないー

「…んん……」

…どうした、あづみさん。

? 其処には何もありませんよ。

? 何故そんな、何かを求める様に手を動かしているんですか?

「…だいすけくん…」

…ああ、無理、耐えられない。

? こんな美少女に求められたら誰だって我慢出来ないでしょ。

? 寝ているのにも関わらず手で探り始めるなんて…。

? 俺はあづみさんの可愛さに屈し、一度抜いた腕をもう一度傍まで持っていく。

? 換気は後で良いや。

? 内心そう思った。

? 彼女は俺の腕を見つけると、即座にギュウっと抱き締める。

? その姿は完全に見た目年齢同等の幼い少女だ。

? とはいえ、あづみさんは14歳。

? 俺と彼女は年齢が一つしか違わない。

? なのにこうも甘えて貰えるなんて…嬉しい事この上ない。

? これは年齢では無く、信頼度の証だろう。

? 其れ程までにあづみさんから信頼されると考えて間違い無い。

…よな?

? 兎に角、彼女が起きるまでの辛抱だ。

? 幸い片腕はフリーだから、何か片手だけで出来る事をして暇潰し。

?これまで、そしてこれからもお世話になるであろうブラックボックスの整理とか。

?片腕…そうだな、それ以外思いつかなー

「…だいす…き…」

?あづみさんはそう言いながら、俺の腕をより一層強く抱き締める。

?凄くにここにこしながら。

?その瞬間、俺は片手で出来る事を閃いた。

…いや、閃きという程でも無いけどさ。

?俺はフリー右手君を、あづみさんの頭の上に優しく乗せる。

?そしてそのまま右へ左へとゆっくり動かししていく。

?彼女の頭を撫でる度、さらさらとした髪の毛の触り心地を体感出来る。

?それにあづみさんは元からウェーブ掛かった髪の毛。

?触っている内に手全体に絡んでくる。

?然し上にスツと上げるだけで指と指の間からするりと抜けていく。

?女性の髪の毛って皆こうなのか?

?リゲルさんの髪の毛も触らせて貰った事があるが、あづみさんと同じ感想しか出て来ない。

?唯、リゲルさんの場合は髪の毛がストレートな御蔭もあって余計そう感じたのかも知れないけど。

「…うん…ふあ…」

「あつ、あづみさん…」

「大祐くん…おはよう…」

「…ごめん、起こしちゃったかな」

?俺があづみさんの頭を撫でていると、彼女は虚ろ虚ろとした瞳で意識を起こした。

?そして此方を向き、何だか気の抜ける感じの声で朝の挨拶をくれる。

?対して俺は、自分の所為で起こしてしまったのでは無いかと心配

になつて謝る。

「…?どうして謝るの?」

「いや…俺があづみさんの頭を撫でていたから起きちやつたのかなと…」

「ううん、そんな事無いよつ。寧ろ気持ち良かったなあ…」

?何かを思い出す様に目を瞑り、心配ないよという風に態度を表すあづみさん。

?彼女が気にしていなければ何でも良い。

?なんて思っていると、あづみさんは瞑っていた目を開いて、此方をチラチラと目配りをする。

?同時に体も揺らして…なんかもじもじしてないか?

?なんか…恥ずかしがつてる…?

?まあ。

?誰だつて。

?異性に頭撫でられたら恥ずかしいよな。

?因みに俺は異性だろうが同性だろうが頭を触られるのを異様に嫌う。

?理由、知らない。

?知つてたら苦労しない。

?心では何と無く嫌いだなと思いつながらも、体は拒絶反応を示す。

?だからルクスリアさんは天敵だ。

?俺が頭を撫でられるの嫌っている事を知っているのかいないのか、偶に手を伸ばしてくる。

?ああ、クリスマススイブの時のカウントは無しで。

?あれは不可抗力だ。

ーて、俺の話は良いんだよ。

?今は彼女が恥ずかしがつている理由を聞かねば。

「……………」

「……………」

「…ええと、あづみさん?どうかした?」

「……………うんとね…その…また、撫でて欲しいなあ…なんて」

? あ、成る程。

? ならば。

「御構い無しに」

「あ、ありがと…えへへ…／＼／＼」

? 俺は彼女が望んだ事は何でも実行する。

? 右手を徐にあづみさんの頭の上へ、そつと置き。

? 軽く左右へ動かす。

? すると、彼女はニコニコとしながら気持ち良さげにしていた。

? 何だか小動物を撫でている気分になる。

? 何時迄もこうしていたい。

「……あ」

? ふと思いつく。

? 換気という名の2文字を。

「大祐くん?」

「ごめんねあづみさん。少し布団に潜っていて」

? 俺はあづみさんにそう促し、ベッドから下りて、自身の部屋の窓を思いつきり開ける。

? 外は一面、真っ白い気色に包まれていた。

? 降る雪が青の世界を白に変えていく。

? 心成しか綺麗に見えた俺だった。

? というかー

「くしゅんっ」

? あづみさんの嚏が可愛い。

? じゃなくて。

? 流石に雪の日に窓全開は寒い。

? 加えて此処は割りかし高い標高に位置する場所。

? 余計に温度が下がっている。

「寒いな…冬真っ盛りだからだろうけど」

「大祐くんはこっちに来ないの?」

? あづみさんは此方を心配そうに見つめている。

「…入っても良いんですか?」

「えつと…二人の方が…暖まる、から」

?顔を真っ赤にさせながら、途切れ途切れの言葉を繋げて会話にしているあづみさん。

?やはりゼロ距離という物は誰でも恥ずかしいよな。

?彼女が俺を気遣ってくれての事なのか、将又一緒に居たいだけなのか。

「……………／／／」

?布団で目の下辺りまでを隠して、じつと此方を見つめて視線を外さない。

?この光景、凄く可愛い。

?もうこれは俺に選択肢等無いでしょ。

「…彼方に炬燵が有るけど…それでも?」

「う、うん…」

「了解。お邪魔するね」

?炬燵の存在すら拒否した彼女の望みに従い、窓からベッドへ近付いて行く。

?そしてあづみさんが潜っている布団を一度渡して貰い、羽織る様に布団をひろげてから彼女を包む様に後ろから覆い被さる。

?その後足を胡座の状態にさせ、あづみさんに上へ座って頂き。

?彼女の体全体を布団で包めば完成。

?うん、異常に恥ずい。

?暖かいのには間違い無いが。

?この気不味さを掻き消そうと何か話題を考えていると、先に喋り始めたのはあづみさんだった。

「…大祐くん、あのね」

「ん?どうかしたかい?」

「ずつと思ってたの。大祐くん、私やリゲルの願いを聞き入れ過ぎないんじゃないのかなって。それじゃ大祐くんが疲れちゃうんじゃないかって」

「…いや」

?俺は彼女の腹部に両手を重ねて当てる。

? あづみさんの柔らかくて触り心地の良い肌に、直で。

「ひゃうっ」

「あつ、ごめん…大丈夫…?」

「だ、大丈夫。ちよつとびっくりしちゃっただけ」

「…このまま話を続けても?」

「えつとね、寧ろこのままが良いな…」

? あづみさんもあづみさんで、人の事言えない位に献身的だ。

? もしかしたら「このままが良いな」という言葉、俺を氣遣って言うてくれたのかもしれないし。

? まあ…気にしても仕方ないよな。

? 彼女の許可も頂き、この状態で話を進める。

「何時も言ってると思うけどね、俺は二人の望みを叶えてあげたいんだ。それが俺の幸せであり、生きている意味でもある。この気持ちはずっと変わらない。死ぬまでーいや、死んでからも」

? 死んだら先ず存在自体が危うくなるけどな。

? なんて心で突っ込みを入れておきながらも、これは本心から思う気持ち。

? 言葉にして述べた通り、一生変わる事は無い。

? 二人の幸せが俺の望みでもあるのだから。

「…私だって、同じだもん…」

「あづみさん?」

「…あつ、ううん!何でも無いよ?」

「?」

? あづみさんが何か呟いたが、残念ながら言葉を聞き取れなかった。

? 彼女は偶に、こうして小さく呟く事があるんだけど…今まで耳に入って来た事は一度も無い。

? そろそろ歳かなあ…嫌だなあ…。

「…でも」

「でも?」

「大祐くんが生きて傍に居てくれるだけで、私トリゲルは幸せなんだ

よ?」

「それ、本当ですか?」

「本当よ」

? 何やら今日初めて、然し乍ら聞き慣れた感じの声に慌ててあづみさんの腹部から手を離す。

(むうく…離さないもんつ)

「おあつ!」

? なんか凄い力で両手を掴まれてる。

? 離せない、でも…暫くあづみさんに掴まれたままでも良いかな。

? つて、一番手っ取り早い方法があった。

「ひあつ!」

? 俺は自身の手をワシヤワシヤと動かして、彼女の露わになっている腹部を擦ぐる。

? こうすれば直ぐに拘束を解けるだろう。

「大祐くんっこれっいやあ…」

「え? 何の話です?」

「あ、あづみ、大丈夫?」

? 布団の中でもぞもぞと動くあづみさんを、リゲルさんが不思議そうに見ている。

? そんな中でも俺は擦ぐりを止めない。

? まだ拘束されているから。

「これ以上はっ…壊れひやう…」

「じゃあこの手をー」

「いやあつ」

「二人で何して…まさか! 大人の階段を!」

? 布団から顔だけを出して怪しげな動きをする俺とあづみさん。

? それが余程気に掛かったのか、リゲルさんが思いつきり布団を剥いだ。

? その衝撃であづみさんが下にスルツと落ちてしまい。

? 胡座の状態をキープしていた俺がそれを食い止めてギリギリ落ちずに済んだものの。

? あづみさんの着ているネグリジエの中に手が入りそうになって
いるのが現状。

「大祐!? 何しようトー」

「違いますからね!? 断じてあづみさんの胸部を触ろうとだなんて…
!」

「……………」

「…あづみ…さん?」

? 唐突に、急に、黙り込むあづみさん。

? 一度自分の胸元を見つめ。

? そして頬を真っ赤に染めながら此方を振り向き。

「…大祐くんになら…触られても…良い」

? 衝撃の一言。

? アニメとかで良くある、唇だけズームインして放たれそうな一
言。

? 無理、耐えられない。

「あづみ!」

「…耐えろ、俺」

「大祐! 手が動いてる! 駄目え!」

? 今度は何事かと思いきや、リゲルさんが隣へダイブ。

? そして俺の手を鷲掴みにして。

「さ、触るなら…その…私ので我慢しなさいっ!」

「リゲルさんまで!」

「べ、別に大祐に触りたい訳じゃないわ! あづみが襲われない為に
言ってるんだから!」

「ああもう! 襲いませんから!」

? なんかもう…朝から波乱の幕開けとなってしまうた。

――

「…と、いう訳です」

「成る程…私の勘違いだったわね。ごめんなさい…」

？ソファアに座りながら落胆するリゲルさん。

「いえ、側から見ればあれ、結構危ない映像でしたもんね」

？あづみさんの表情も、何だかとろろりとしてたし。

？凄く…こう…心の底から襲いたくなった。

「あづみさんも何故あんな事を…」

「そうよ！幾らあづみでも年齢的にあれはー」

「ご、ごめんなさい…気付いたら、その…つい、自然に…」

(可愛ええ!!)

(困ってるあづみ…可愛い)

？至極言い辛そうに喋るあづみさん。

？次第にその声は小さくなっていき、遂には縮こまってしまった。

？俺は、そんなあづみさんの肩をポンポンと叩く。

？すると地味に半泣きになりながら此方を向いてくれた。

「…あづみさん、先の発言。冗談でも嬉しかったよ」

「…えっとね…あれ…本気だったの」

？俺から視線を外して恥ずかしがる彼女に、俺はぐいっと顔を近付ける。

「だとしたら凄く嬉しい。ありがとね」

「~~~~／／／」

「…少し羨ましい…」

？リゲルさんがじつと此方を凝視しながら、寂しそうにしている。

？だとすれば。

？後でリゲルさんだけを部屋に呼んで色々と話し合ったりしようかな。

？二人つきりで。

「取り敢えずリゲルさん。貴女も衝撃発言してましたからね」

「えっ…な、何の事かしら？」

「そうだね。あのままだったら、大祐さんとリゲルがー」

「あ、あづみ、それ以上は…」

? ベッドからソファアへ連れて来たのは良いが、赤裸々な話に変わりは無さそうだ。

? このまま話を続けられると俺の精神が死んでしまう。

? 一旦別の話に切り替えて…。

? そう思った俺は時計の時刻を確認する。

AM 6:00

? 6時ぴったりか…。

? 今日って何か特別な行事とかってー

「あー」

「…びっくりしたわね」

「どうしたの? 大祐くん」

「けましておめでどう御座います。今年も宜しくお願い致します」

「急に礼儀正しい挨拶ーそうだ…:今日は元日だったね」

「私とした事が…すっかり忘れていたわ」

? どうやら三人共、元日という概念が頭から消え去っていたようだ。

? 一年を越して、又新しい一年を始める一步の日。

? そんな特別な日を思い出しすらしなかったとは。

「大祐くん、リゲル、明けましておめでどうございます。今年もよろしくお願いします」

「あづみ、大祐、明けましておめでどう。今年も宜しくお願いするわね」

? 後はベガさんだけなんだけど今は外出中で家に居ないらしい。

? 昨日から忙しそうにしているのを見ると、何か秘密の行事に出ているとか…。

…秘密の行事って何だ?

? まあまあ、ベガさんには会った時に挨拶するとして。

? 全員新年の恒例挨拶が終わった所で、時間も時間だし。

「新年と言えば神社ですよ。準備して行きませんか?」

「御参りね。私は賛成よ」

「うんっ! 私も行きたい!」

? 満場一致。

? こうして俺、あづみさん、リゲルさんで神社に行く事となった。

? 平和で楽しい時間が、始まりを告げる。

… 波乱になる予感が当たりませんように。

――

番外編： 元日（中編）

? そんなこんなで神社へ御参りをしに行く事となった俺達三人。

? 此れからの一年が、平和で幸せであるように。

? 彼女達が笑顔でいられる世界であるように。

? たった二つの願いだが、かけがえのない、全ての願いの中で一番の想いだ。

? 祈願位は、しておかないとな。

「二人共歩くの速いよう」

「これでもあづみのペースに合わせている積りなんだけど…」

「普段着じゃなく、着物だからじゃ無いですか?」

? 気付くと、あづみさんが一步遅れた所でいそいそと小走りしていた。

? 可愛らしい桜柄の着物の所為で、至極動き辛そうだ。

? リゲルさんは着物であるにも関わらず何時も通り、自分のペースを崩さずに歩いている。

? 雪で白く覆われたこの世界の中、彼女の綺麗な赤い着物に目を奪われてしまいそうだ。

? 何とも美しい。

∴ そう、今日は二人共着物、然も明るい色を身に付けている。

? というのも、着物の色選びは俺がしたからな。

? リゲルさんは相変わらぬ赤。

? 彼女の金髪に合わせる為、水色や黒なんかも候補に上がった。

? 然し今は冬真つ盛り。

? 水色も黒も落ち着いた色だ。

? 何方かと言えば夏祭りなんかに浴衣の色として選び、着せてあげたい。

? あづみさんに関しては、彼女の普段着が水色や青、白なんかが主体となって作られている為。

? 今日は明るい、それも華やかな色で決めようという事になった。

∴ なった? いや違う、俺がそう言う事にしたんだ。

?とまあ、だからあづみさんは普段着ない色、ピンク（桜色）にした訳だが。

?柄が桜しか無かった。

?なので、必然的に春っぽい着物になってしまった。

?冬なのにな。

?だが、これであづみさんが桜色も似合うという事が分かった。

?これから彼女に着せる衣服のカラーの一つとして、覚えておこう。

「ちよつと…疲れちゃった…」

?なんて考えていると、あづみさんが少し程息を切らしながら俺の目の前で前屈みになっていた。

?失敗した。

?彼女の体に負担を掛けてはいけない筈なのに、気遣ってあげるのを忘れてしまっていた。

?まだまだ労わりの精神が足りないな。

?こうなったら。

「あづみさん、少しばかり膝を曲げてくれるかな」

「え?う、うん」

?俺の唐突な要望に一瞬動揺するも、直ぐに膝を曲げて待つてくれるあづみさん。

?そんな彼女の膝の後ろに左腕を当て、肩を抱くように右腕を回し、左腕から一気に持ち上げる。

「きやつ大祐くん!」

「こうすれば疲れない。…ごめんね、無理させちゃって」

「わ、私は…大丈夫、だよ?」

「嫌だったりしない?」

「ううん…寧ろ、嬉しい…／＼／＼」

?人前でお姫様抱っこは恥ずかしかったのか、目を瞑りながら俺の胸元に縮こまるあづみさん。

?最近彼女の顔が真っ赤になる所ばかり見ている気がする。

?なら今回から違う箇所が目配りしてみるのも良さそうだ。

? 例えば…心臓の鼓動が速く、彼女の体に更なる負担を掛けている。

? 足や肩が小刻みに震えていたり。

? 少しでも太腿に触れるとビクンツと反応を示す。

? だが、抵抗のの字すら無く、彼女は何だか俺の為すがままにされている事を望んでいるのかと錯覚してしまう。

? そして一瞬でも膝の後ろ、定位置へと腕を戻すと…あづみさんは目を開けて物足りなさそうな瞳で見つめてきた。

? 一体何が目的なのか、何をされたいのか、言ってくれば今直ぐにでも行動に移すというのに。

? 彼女の可愛く真っ赤に染まった頬、俺を求めるかの様な瞳に焦らされて仕方がない。

? 然し、何も言つて来ないという事は。

? きつと人前では話し辛い内容なのだろうと察する。

? 彼女から言えないなら此方から攻めるまで。

? 俺はあづみさんの耳元に顔を近付ける。

? それに気付いた彼女の息が段々と荒くなっていくのが一瞬で分かった。

? 丸で何かを期待している感じだ。

? その望みを叶えてあげようと、いざ口を開けて喋り始めようとしたその時。

「こら、二人共。家の中でならまだしも、人前でいちやいちやするのは感心しないわよ。…それに、もう着いたわ」

? まさかのリゲルさんからストップを喰らってしまった。

「…申し訳無いですね。さあ、あづみさん。着いたよ」

「う、うん！ありがとね、大祐くん」

「続きは帰ってからののお楽しみみて事で」

「ふええ／＼／＼」

? 全く、何時も可愛い反応をしてくれるな。

? これを求めて言ってみたものの、成功するとは。

? だが、言った事は達成せねばなるまい。

? 帰ったら存分にあづみさんを可愛がってやらねば。
…うん、自分で言っただけでいい。

? 帰ってから何かしてあげるのには変わりないが。

「……………」

? ふと、リゲルさんの方にチラッと視線を向ける。

? すると彼女は、気持ち寂しそうに此方を見つめていた。

? あまり態度を示さないリゲルさんが、寂しそうに？

? 俺の視線に気付いた彼女はパツと目を逸らす。

…薄々察した。

? 俺は最近、あづみさんとか話したり、一緒に何かしたり、彼女との時間を楽しんでた。

? だが、リゲルさんとは深い交流をしていない。

? 今更ながら深刻な問題だという事を理解し始めた。

――

リゲル視点

――

? 失敗した。

? あづみと大祐がいちゃいちゃしているのを見て、思わず止めてしまった。

? その私の愚行の所為であづみのしゅんとした顔を見る事になってしまふなんて…。

? 私が二人にストップを掛ければこうなるのは分かっていたのに。

? 考えるよりも先に口に出してしまうのは何故なのだろう。

? どうして、あづみと大祐の関係が羨ましく思えるのだろう。

…私も大祐と色んな事、話したいのに。

? 彼は何時もあづみと仲良く喋っていて。

? 私と話す内容なんか、殆どが戦闘関連。

? 付き合っているという事を利用して、一回拗ねてみようかなんてのも頭の隅に置いていた。

？でも、いざ大祐の目の前で素っ気無い態度を取るのには勇気が必要で。

？もう逸そ、感情其の物を態度に表さないと頭では決めていた。

？けど、駄目だった。

？彼と話したり、彼に触れられたりすると、自分でも気付かない内に感情を制御出来なくなつて。

？そんな私を大祐は「可愛い」なんて言ってくれて。

…素っ気無い態度等、見せれる筈もない。

？けど、最近彼はあづみとしか交流を深めていない。

？大祐と話し合う機会も減ってきた。

？私という存在は…どうでも良くなつてー

「…さん…リゲルさん？」

「はっ…大祐…？」

「どうしました？ぼうつとして」

「な、何でも無いわ」

「そうですね。…人が多いので、あづみさんと手を握つて離れない様にして歩いて下さいね」

？大祐は恐らく、あづみが心配で私を傍に置いておけば大丈夫だろうとでも考えているのだろう。

？彼にとつて私は…どういう存在なの？

「逸れると危険だもんね」

「あづみさんの言う通り。特にリゲルさんが心配だからね」

「えっ…」

？私が…心配？

？どうして？

「そのグラマラスな体を目的に襲ってくる男共がいるやもしれません。…まあ、俺のリゲルさんを渡す気は更々無いですがね」

「だ、大祐の…わわ、私!」

「無論、その可愛らしいお顔目当てであづみさんが攫われる可能性もあるけど。させないよ、そんな事」

「リゲル、やっぱり大祐くんが居てくれると心強いよね」

? 大祐自身からそんな事を言われたら…心では分かっているけど彼を拒否出来ない。

? 自分が求めている人から、求めている嬉しい一言。

? たったそれだけで先程まで抱いていた感情は崩れ去っていく。

? 此れこそが人の脆さを語っている。

? でも、不思議と悪い気がしない。

? 自分自身の欲する物を与えられたのだから。

? 然し乍ら、これだけで満足してしまう私の感情が恨めしい。

? 決めた事を一つすら、自分の納得行く様に出来ていない。

? 唯、今日一日、大祐の前から居なくなりただけなのに。

? 昔の私なら出来た、そんな他愛も無い事を実行するだけなのに。

…どうしてこんなにも、怖いのだろう。

? それでも、自分が納得行く為にはやらざるを得ない。

? 丁度今日は沢山の人集りの中。

? 態と彼から離れて、見付ける、見付けられない状況を作ってしまった

えば良いだけの事。

? 私の欲求不満に大好きなあづみを巻き込みたくなんか無いのだ

けれど…。

? 御免なさい、あづみ。

? 後でしっかりと謝らなきゃ。

「さて、何処から見て行きますかね」

「…私は遠慮するわ。二人で一緒に見てきて。その間、自由にさせて

貰うわね」

「リゲル…?」

? 一瞬、本当に一瞬…あづみから疑わしき眼差しを向けられた。

? だけど、私は知っている。

? この眼差しは、私を心配してくれる彼女の想いだという事を。

? そんな彼女の想いを無駄にしまで…私は自己満足を得ようとして

しているの?。

? 側から見れば下らない事なのは知っている。

? でも、今の私の気持ちは誰にも分からない。

?自分の好きな人同士が仲睦まじく話しているのを見て嬉しくなってる。

?その二人が私を好きだと言ってくれていて。

…段々と二人だけが仲良くなってるのを見て。

?嫉妬と言えども当たりなのかもしれない。

?けど、私はこの感情を嫉妬だとは思えない。

?もったいなく、別の何か。

「リゲル！何処に行くの…？」

「…御免なさい、あづみ。今日は一人にさせて」

?私は彼女にそう告げて、その場を離れて行った。

?去り際…チラツと後ろを振り向くと、悲し気な表情を浮かべて此方を見つめているあづみが居た。

?心が居た堪れなかった。

?心臓を握られる様な痛みに襲われもした。

?でも、ほんの僅かな時間だけでも、離れなければ。

?再度振り返ると、二人の姿は見えなくなっていた。

――

?人混みを掻き分けて、屋台や御参りやらで賑わいを見せている場所から抜け出せた。

?普段ならあづみも一緒に居て…危ないからと互いに手を繋ぎ合っていただろう。

?私は自分の手を見つめながら、グーとパーを繰り返す。

?然し、そんな感覚今は無い。

?当然だ、私は今一人で居るのだから。

「…はあ、私…何してるのかしら」

?自分で行った行為の筈が、後々後悔に繋がる。

?そんな話は良く聞く。

? 事実、今の私がそうなのだから。

「…ちよつと疲れたわね。何処か休める場所はー」

「リゲルー、何処に行っちゃったのー?」

「あづみ!」

? 後悔ばかりをしてしまう中、群衆から可愛らしい一人の少女の声
が私を呼んでいた。

? 私は少女の姿を見て直ぐに駆け寄ろうとした。

? だが、それでは二人から離れた意味が無くなってしまう。

? 一体何の為に距離を置いたのか、しっかり自分で把握しなければ。
ば。

「リゲルー?」

…あづみの私を呼ぶ声が、私の心をズキズキと痛める。

? 本当ならこの1分1秒が勿体無い。

? 今直ぐにでも彼女の元へ走って行きたい。

? でも、駄目…。

? 駄目な事位…自分でも分かっているのだけれど。

? これが、葛藤という感情なのね。

? それでも、自分の気持ち以上にあづみが心配で。

? 暫くあづみを観察…じゃなくて、見守っていようと彼女に目を配
ると。

? あづみに近付く不届き者を発見した。

「リゲル…見付からないなあ」

「あれ、あづみちゃんやないか! 久しぶりやな!」

「あ、飛鳥さん…」

「あれは…」

? 天王寺飛鳥。

? 一度あづみを助けてくれた男だ。

? だが、私には関係無い。

? 大祐以外の男共があづみに近付くなんて、絶対に許されない。

? そんな不埒な輩は私が成敗してくれる。

? これから天王寺飛鳥の排除行動にー

「いやー、奇遇やね。一人かいな？こんな人混みの中で一人は危険やて。良かったら僕達と…」

「えつと…私は一人じゃない。大祐くんもリゲルも一緒に居る。だから放って置いて…」

「ちよつ、せめて大祐くん達に会えるまではー」

「失礼します」

? あづみが走って天王寺飛鳥から離れて行く。

…ふふ、大祐以外には本当に人見知りね。

? 大祐と話す時なんか、必死になって素の自分をだして攻めているのに。

? 相も変わらず…私のあづみは可愛いわね。

? さて、あづみの事が心配だわ。

? あんな男置いといて、早くあづみを追い掛けなきや。

? 天王寺飛鳥…残念だったわね。

ー

? 勢いで走ったあづみは、何処か分からない場所へ来てしまった。

? 周りは樹木ばかりで少し薄暗い。

? 一応木陰から彼女を覗いている訳だけど。

…何やらあづみの体に異変が起きている。

? リソース症候群では無く、況してや息切れでも無い。

? それなのに胸元を押さえて苦しそうな表情で。

? 自分のプライドなんか、目的なんか捨ててあづみに駆け寄りた
い。

? もう二度と、あづみが苦んでいる姿なんて見たく無い。

…よし、待っててあづみ、今行くわね。

(最終的にこうなるのなら、最初っからやらなければ良かった)

「あづー」

「きゃっ！」

? いざ彼女の元へ近付こうとしたその時。

? 一瞬、瞬きをした一瞬の内に、あづみは見知らぬ男にお姫様抱っこをされていた。

…いえ、見知らなくはないわね。

「また一人、この美しい私の餌食となる美女を見つけてしまった…」

? あのナルシストっぷり。

? 黒い仮面を顔に付けている事から、ディアボロスだという事が直ぐ察した。

? 加えてマント。

? その姿を見た私は直ぐにバトルドレスを装着した。

「いやっ、離して…」

「おや、美女では無く美少女だったのか。…まあ良い、美しい事に変わりは無い」

? あづみは美しいよりも可愛いの方が似合っている気がするのだけれど…そんな事はどうだつて良いわ。

「私がゆつくりと食べてあげようではないか…」

「いやあっ」

? この距離なら狙える!

? 私は大きなビームスナイパーライフルを左手に持ち、狙いを定める。

? 正確に、一ミリの狂いも無く。

? ディアボロスの口があづみの首へ触れ掛けたその一瞬。

「…そこっ！」

? 力を入れて引き金を引くと、バシユンという音と共に青いレーザーが放たれる。

? だが。

「おっと危ない」

「なっ!?!」

? 相手のディアボロス『サエウム』はクイツと頭を後ろに下げ、私の放った一撃をスルリと躲す。

?そしてそのまま、あづみを抱えて此方に接近。
?慌ててサーベルを構えたものの。

「これでどうかな?」
?サエウムはあづみを盾として前に突き出す。

「くっ……!」
?このまま避けてしまうとあづみが地面に叩きつけられてしまう。
?かと言って受け止めれば、間違い無く私もあづみもナルシストに捕まってしまう。

?一体どうすればー

「…リゲル、避けて」

……!

?あづみは自分の体を投げ出されているにも関わらず、私に避けろと指示して…。

?その瞬間、私に残された選択肢は一つだった。

「……………」

?私は真正面からあづみを受け止め、地面へと足を着く。

「リゲル!」

「何と美しき友情か!…だが、私のこの美しさに敵う筈も無い」

「…それはどうかしらね」

?何の躊躇も無く突っ込んでくるナルシストディアボロス。

?本当、力量を測り損ねた愚か者ね。

「私があんたみたいに変態に負けるとでも?」

「へんたっ…!?!」

?私も、最初から迷う必要なんて無かった。

?最近はおづみや大祐の事で精神的に不安定な場面もあったりしたけど。

?今は今。

?こんな雑魚程度、あづみを抱えてでも倒せる。

「あづみ、準備は良い?」

「うんっ!」

?元気良く返事をくれるあづみ。

…けど、何だか息が荒い。

？私はそんなあづみを両腕で支えながら体を前屈みにさせ、その場でくるっと一回転。

？するとナルシストは、何も無い場所に寂しく抱き着く。

？今の一瞬で背後に回った私は、その隙だらけの背中に思いつきり蹴りを入れる。

「反応出来ないでも？」

？だが、ナルシストは即座に振り返り、両腕をクロスさせながら私の蹴りをガードする。

？とは言え私の力一杯の蹴りを喰らったナルシストは、一步二歩後退りを見せた。

…此奴、反応速度だけは良いわね。

「極力傷付けたく無かったのだが…致し方あるまい。抵抗するならそれまでだ」

？そう言うとなルシストは何処から出したのか、ナイフの様な小刀を手に持つ。

？あんな武器があつたなんてね。

？ディアボロスの情報はルクスリアから殆ど聞き出したのだけだ。ど。

？彼女にも把握し切れない情報があるのね。

？その情報の取り引きとして大祐を使ったのは後々気が引けたけど。

？さて、そんな話は後で幾らでも出来るわ。

？今はナルシストとの戦闘に集中しないと。

？せめてあづみだけでも安全な場所にー

「やっど追いついた…って、何で此処にZ/Xがおるんや!？」
「チツ…男は目障りだ」

？天王寺飛鳥…しようがない、タイミング的にはバツチリね。

「其処に居る貴様!」

「僕、まだ本名で呼ばれへんの!？」

「そんな事どうだって良いわ!あづみを守って頂戴!」

「ええっ!!」

? 私はあづみを腕から下ろし、天王寺飛鳥の元へ走らせる。

? その間はナルシストを引き付ける為にビームサーベルで斬りに掛かる。

? 然し相手も中々やる。

? 少々苦しいな表情を浮かべながらも私の攻撃を捌いていた。

「フイエリテはん! 援護を頼むで!」

「勿論です」

「あづみちゃん! 此方や!」

「はあっ…はあ…」

? 二人のやり取りを聞いているだけで、後少し、あづみが天王寺飛鳥の元へ辿り着くのが分かった。

? 私の方もこの勢いで押し切ってしまったえば、誰も傷付かずに此奴を排除出来る。

? やっぱり、始めからやれると思えばやれるものね。

? あづみの安全が確保されてからリソース供給を頼もう。

…うん、改めて認識したけど、大祐が居ると居ないではエネルギー量が桁違いね。

? 何よりあづみが疲労しなくて済むかどうかに繋がる。

「チイッ!」

? なんて余裕で考えていると、ナルシストが意味も無く武器を振り始める。

? 遂に力の差を思い知った様子だ。

? このままとどめを刺すでしょう。

? 此方に目を向けてアイコンタクトを取るあづみ。

? 良かった、無事に着いたのね。

? 天王寺飛鳥があづみの肩に触れているのが気に食わないけど。

? まあ…それは後で注意するから良いわ。

? 私はあづみのアイコンタクトに対して頭を一回下に下げ、頷きを示す。

? たったこれだけで、私と彼女の意思疎通は終わり。

? 全く…どれだけ私があづみを愛していると思っっているの?
? なんて言っつてしまいたくなる。

「さあ…そろそろ終幕と行きましようか」

? 私のあづみ自慢。

? は、後程一杯紹介しよう。

……困ったわね、この戦いが終わったら話したい事が有り過ぎて
何処から話せば良いのやら。

? 別に誰かを対象にして喋る訳でも無いから、好きな様に話せば良
いだけなんだけど。

? そんな戦闘とは全くもって関係無い事を考えながら、私はビーム
サーベルを前に構える。

? その場で目を瞑り、あづみからのリソースをしつかり受け取る。

「…これは、逃げた者勝ちかね」

? 流星に状況を理解したナルシスト。

? 彼奴の動きは素早いから、予め避けられる体勢を整えられると当
たらない可能性が高い。

? 今からでもスナイパーライフルに変えるべきかしら…?

? いや、もう既にナルシストは此方に背を向けて逃げている。

? これではスナイパーだろうが間に合わない。

? 十分な距離を稼がれ、躲かれて終了だろう。

? 何だかあづみから受け取るリソースが弱々しい事も含めて。

? ここは素直に逃すべきなの?

? と、思った矢先。

「…にがさない」

? 背後から幼い少女の声、蜂の羽ばたく音が耳に入り、振り返る。

? 其処には百目鬼きさらと数匹の蜂、そして。

「二人に何してくれているんだ…!」

? ナルシスト側から本気で怒っている大祐の声が聞こえてきた。

? 慌てて其方に体を向けると、其処にはナルシストを捕まえて離さ

ない大祐と二、三匹の蜂が。

「離せ! 男も虫も、美しく無い物は嫌いだ!!」

「誰が離すかよ。これから美しい女性に一斬りされるんだから喜べ」

? そう言つて大祐は、準備万端といった表情で此方を見つめる。

? やはり大祐が居てくれると違うわね。

? 私は現状溜められるだけのリソースをこの剣に宿し、構え、そして地面を蹴る。

? そのまま一気にナルシストへと接近。

? 私との距離が近付いて来たところで、大祐と蜂達はナルシストから離れていく。

? このディアボロス、本来なら今からでも逃げられた筈だろう。

? 何にも縛られていないのだから。

? 然し、大祐が何やら細工を施したのだろうか。

? ナルシストは体が動かせないまま、私の攻撃を待つしか無かつた。

「たあああああ!!!」

? そして、一閃。

? 当たる確率が低い代わりに威力高い一撃が、ナルシストを切り裂いた。

? 漸く、排除完了。

? これで心置きなく今日を楽しめるわね。

——

番外編： 元日（後編） ☆

？一つ仕事を終えた九条大祐達は、木で作られた椅子とテーブルの上で屋台で買い上げた飲食物を口にしていた。

？天王寺飛鳥、そしてもう一人をメンバーに加えて。

「…へえ、まだそんなZ/Xいたんだ」

「へつきーも気を付けなよ？エレシユキガルさんが奪われないようにさ」

「それ、そつくりそのまま返してやるよ」

？九条は親友の森山碧を揶揄った積りでそう言い放ったが、ブーメランで返されてしまった。

？更に追撃を喰らうかの如く、森山碧の後ろから現れたエレシユキガルに。

「私が碧を嫌う事は先ず無いわ。…貴方こそ、この程度で止まってる積りなら何時か後悔する」

「忠告どうも。そうならないように頑張るからさ」

「…話の分からない奴だ」

？エレシユキガルからの言葉すらスルーする九条。

？そんな彼を内心心配している森山碧。

？長年友達付き合いを続けている彼には察していた。

？九条が心の何処かで焦っているという事を。

？それを態度に表さない為、少々反抗的な意を示している事を。

？このままじゃ駄目だ。

？何かきっかけを作らないと、九条の心の中はそればかりだった。

？森山碧は考える。

？どうすればこの臆病者を動かせるか。

？女性からのアピールが無い限り自ら動こうとしない此奴を、どうしてくれようかと。

…だが、女性からアピールが無い限り、というのは只の逃げだ。

？九条大祐という男は、好意を抱いている人に嫌われるのが怖くて逃げているだけだ。

?それに気付いた森山碧は、複数の作戦を閃く。

「リゲ…ル…」

「あづみ、まだ休んでて」

「うん…」

「…ところで、へつきーはあづみさんのこの症状とか分かる?」

「あ? ああ」

?当たり前だろ風な発言をする森山碧に、九条大祐はがつついた。

「今直ぐ教えて頂戴」

「…つたく、こういう時は積極的なのに、もったいねー人間だよな」

「俺の話は良いから」

?各務原あづみは元々病弱な体。

?そんな彼女の身に何かが起こると我先に解決しようとするのが九条だ。

?然しその積極性が恋愛に活かせないのが彼の残念な部分。

「まあまあそう急くなって。割りかしタイミングが重要なんだからよ」

「はあ…?」

?半ギレと疑いが5割5割でどうすれば良いか分からなくなった九条は、教えてくれそうに無い森山碧から離れ、各務原あづみの傍らへ寄る。

?だが、森山碧に腕を掴まれて引き戻されてしまった。

「…へつきー、良い加減何がしたい訳?」

「取り敢えずお前は此処に居ろ。少しの間で良い、あづみとやりに近付くな」

?九条は態と、森山碧の言葉を聞き逃そうとするが、もう何年も経つ親友関係の人間の言う事だけは素直に聞き入れた。

?苦しんでいる各務原あづみを、遠くからしか見れない。

?その苛々は段々と彼の心に積もっていく。

(作戦通り、後は…)

「天王寺氏、其処で横たわっている女の子を看病してやって」

「はあ!?!僕が!?!」

「……………」

? 森山碧の提案に、九条は只管無言に各務原あづみを見つめていた。

? 自分が近付く事すら許されないのでなら、他の誰かに看病して欲しい。

? 自分以外の誰かが彼女に触れるのなんて死にたくなる位に嫌だが、それで彼女が楽になれるのなら…。

? というのが九条大祐、現状の心境だ。

? 天王寺飛鳥はそんな九条に申し訳無さそうにして、各務原あづみへと手を差し伸ばさず。

? だが。

「…何? あづみに何の用?」

? 丸で鬼の形相の様な表情を浮かべているリゲルが、天王寺飛鳥を更に睨み付ける。

「…やつぱり、大祐君じゃないと駄目らしいで。はよ此方にきいや」

? こうなる事は最初から薄々気付いていた天王寺飛鳥は、若干呆れながらも九条へ声を掛けた。

? そんな、優しさが滲み出している彼の言葉に九条は顔を下に向ける。

? 応答も一切無し。

? 只下を見ているだけ。

? 自分への落胆を隠し切れていない。

「…ふう、着物ってこんなに暑かったかしら…?」

「だいすけ、おまいい、しにいく!」

「……………きさくらちゃん」

? 俯いて動かない九条の目の前で、百目鬼きさらは両手を広げて自分をアピールする。

? 流石の彼も、目と鼻の先でそんな事をされたら気付く。

? ニコニコと笑顔を見せる百目鬼きさら。

? そこはかたなく心配の眼差しを含めたその瞳。

? 九条は自分を元氣付けてくれようとする百目鬼きさらをじつと

見つめ。

? 頭の上に手を置いて撫でてやる。

? すると、彼女は至極嬉しそうに九条の膝下へ駆け寄る。

? そして必死になりながら膝の上へよじ登る。

? その光景を見兼ねた九条は、百目鬼きさらの両脇を抱えて自身の膝の上にちよこんと乗せた。

「あいがとっ」

? 彼女はそう言って、足をばたつかせる。

? 九条はこうして、何度も百目鬼きさらに癒されて来た。

? 見ているだけで心が静まり、浄化されていくというのは正にこの事。

? 然しそれは百目鬼きさらに限った話では無い。

? 今更ながら彼は各務原あづみ、リゲルという存在其の物に癒されている事に気付かされた。

? 本当に今更ながら…いや、忘れていたと言った方が正しいだろう。

? ずっと一緒に居て、もう二度と離れ離れになる事は無い、そんな過信が九条の心の何処かに芽生え。

? 二人の存在、大切さを隅に追いやって。

? 事を進めるのは何時でも遅くは無いと錯覚。

? 結果、中途半端な愛情、熱意を注いでした。

? 其処に気が付いた九条大祐は、ハッと我に返る。

(…案外、気付くの早かったな。きさらちゃんに感謝しろよ、大祐)

「…此方こそ有り難う、きさらちゃん」

「うゆ?」
? 九条はそう言うと、百目鬼きさらの腹部の前に腕を置き、ぎゅつと抱き締める。

? 出来るだけ苦くさせないように、優しく。

? 彼の卒然たる行為に一瞬たりともビクつかない百目鬼きさら。

? 寧ろ、九条の腕を自身の腹部に押し付け「もつと強く」と言わんばかりにアピールする。

?その要望を了承した九条は百目鬼きさらの体を、自分の体に密着させた。

「うゆゆ〜♪」

「ふふっ、そんなに嬉しいの?」

「うえしいっ!」

(先ずはきさらちゃんへの積極性を示したか。だが、問題は…)

?丸で兄妹の様に親しく、仲良く会話をしている二人を見て森山碧は安心と不安を感じていた。

?誰かを愛すると誰かが犠牲になる可能性も生まれる。

?それはその人自身が幾人もの人達に愛されているのならば、以ての外。

?独り孤独に生きている人種には分からない話だ。

?事実、九条大祐自身が百目鬼きさらを構ってあげる度に、彼を想う人達は少なからず傷が付く。

?現在進行形で、各務原あづみとリゲルの二人がその対象になっていた。

?彼女達は羨ましいという感情が込もった眼差しを九条へと向けている。

?だが、各務原あづみは直ぐに視線を逸らし、座っているリゲルへ目を移す。

「…リゲ…ル…何だか…体が暑い…よう」

「あづみ!?顔が真っ赤!」

「後ね…大祐くんの…事…ずっと見てると…ね、胸が…」

「これって…まさか…!」

?味わった事の無い感覚に襲われ、自身の病状を必死にリゲルへ伝える彼女。

?然しリゲルには思い当たる節があつた。

?この症状は、自分も患った事があると。

?いや、大前提として病気では無いと。

?苦しそうに胸へ手を当てる彼女。

?流石に我慢の効かなくなった九条が、堪らず各務原あづみへ近付

く。

? 勿論、百目きさらには一度離れて貰って。

? 一瞬止めに入ろうとする森山碧だったが、彼は寧ろその場から一歩二歩後ろへ下がる。

? 状況を理解する為に頑張って頭を回転させている天王寺飛鳥を連れて。

? 各務原あづみは、九条大祐が側に居る事に気が付くと、直ぐ様其方を向いて手を伸ばす。

? 段々と差し伸べられる彼女の手を、九条はぎゅつと握る。

? そして横になっている各務原あづみの体を、力強く抱き締めた。

「…大祐…くん…?」

? 毎度の事乍ら、行動が卒然過ぎる九条。

? 然し彼女はそんな九条を全身で受け入れて…。

「…違うね…大祐くんが、私を受け入れてくれてるんだよね…」

「…何時も何時も、ごめん。俺がこんなんだから…変なプライドなんか持つているから…」

「大祐くん、急にどうしたの?」

? 丸で互いを愛し合うかの様に抱き合う二人を見て、リゲルは何かを言い放とうとした。

? 然し、口にする前にぐつと抑える。

? そして二人に気付かれない様、静かにその場を立ち去ろうとした。

? だが、九条が咄嗟にリゲルの手を掴む。

? 彼の手の感触を直に感じたリゲルは、体をビクリとさせ、ゆつくりと後ろへ振り向いた。

「…私はこの場に不用でしょうか?」

「いえ、リゲルさんにも話したい事が有ります。だから此処に居て下さい」

「…正直に言わせて貰うわ。見てる此方が辛い」

「…」

? 一行にリゲルの手を離そうとしない九条。

? 何時もと様子が違う彼を疑問に思ったりリゲルは、しようがなくその場に残る事に。

? 其処から10秒程。

? 各務原あづみと九条はお互いに手を離れた。

? だが、未だにリゲルの手は離さない。

? その間、リゲルはずっと外方を向いて九条と目を合わせない様にしていた。

「それで、話って?」

? 若干呆れ口調で尋ねるリゲル。

? すると九条、今度は彼女の体を抱き締める。

「だっ、大祐!」

? 一体全体、何がどうなったのか状況を把握仕切れないリゲル。

? そんな彼女に対して九条は、自身の手を彼女の後頭部へ当て、自分の胸元へ押し付ける。

? ゼロ距離で伝わって来る彼の鼓動に、リゲルはどうして良いのかわからず仕舞い。

? 只顔を真っ赤にさせて九条の好きな様にさせて。

? リゲルのその反応に、九条は自分の腕を彼女の背中に回し。

? 最早離す気等更々無いと言わんばかりに抱き締め続ける。

? リゲル：彼女自身、ずっと望んでいた事を彼がしてくれたという満足感に浸っていた。

? ぽーっと気が抜けた風な表情を見せているリゲル。

? 九条はそんな彼女から一度手を離し、彼女の顔と自身の顔を目と鼻の先で見合わせる。

? そして彼は、頬を赤く染め何かを期待しているリゲルの額と、自分の額をびったりとくっ付けた。

「……」

? 既に目と鼻の先の距離すらを通り越したゼロ距離。

? 流石にリゲルも目が覚め、慌てて後ろへ下がろうとする。

? 然し乍ら九条は、予め彼女の背中へ回していた腕を引き寄せてリゲルの体を離さない。

？

「ほ、ほんとにつ、どうしちゃったの、大祐／＼」

？彼女は至極恥ずかしそうにそう言いながらも、抵抗の意思は示さない。

？要するに、このままが良いという事だ。

？それを察した九条は、互いの額を一旦離す。

「…ずっと、こんな事したかったんですよ」

「えっ？」

「リゲルさん、もうちよつと此方に来れます？あづみさんを膝の上で休ませたいので」

「え…ええ」

？もうどうすれば良いのか分からなくなって来たりゲルは、素直に彼の指示に従う。

？九条は横になっている各務原あづみの近くまで寄り、彼女の頭を膝の上に乗せてやる。

？すると各務原あづみは更に彼を求めるかの如く九条の太腿へ顔を擦り付けた。

？それを見ていたリゲルは九条の肩と自身の肩をピッタリと合わせ、頭を彼の肩へコテンと置く。

？あのリゲルさんが珍しい…等と思いながらも、九条はリゲルの腰へ手を回す。

？そして引き寄せる。

(ラブラブじゃん、後は彼奴次第だな…)

？三人以外誰も入れないであろう空間を見つめながら、森山碧は少しばかり笑みを零す。

(碧が笑ってる…写真に残したいなあ)

？エレシユキガルが、ある意味人間の作りし物に興味を示した瞬間だった。

？天王寺飛鳥、フィエリテの二人もそんな三人を見て微笑んでい

る。
「いやー、やっぱりモテる男は違うなあ」

「…飛鳥もその一人である事に、何時気付いてくれるのでしょうか」
「フィエリテはん？何か言うた？」

「言つてません！」

？ 妙に機嫌の悪いフィエリテに困り果てる天王寺飛鳥。

？ 彼も、何時になつたら自分がモテ男と気付けるのか。

？ それには時間が掛かりそうだと呆れるフィエリテ。

？ はあく…と大きく溜息を吐く彼女を氣遣うべく、天王寺飛鳥は屋台へと誘い出した。

？ 賑わいを見せる屋台へ歩いて行く二人を見て、エレシユキガルは人差し指を自分の唇に当てて行きたいアピールを示す。

「ん？ああ、良いよ。氣を付けてな」

「ありがと、碧」

？ エレシユキガルは森山碧にお礼として抱き付く。

？ 只単にこうしたかった、というのは彼に内緒で。

？ 10秒程度すると手を離し、エレシユキガルは屋台の方へと歩いて行く。

？ 完全に彼女が視界から消えたその時、森山碧は胸を抑えて悶え始めた。

（くっそ…可愛過ぎだろ、ていうか後ろから大きな二つの物体を押し付けられたんじゃあ、危うく襲う所だったぞ…！）

？ 完全にエレシユキガルラブな森山碧だった。

「はっ…い・大祐達は？」

？ 可愛さ、そして積極性。

？ 二つの魅力を持つエレシユキガルに苦しんでいると、森山碧は、はっと我に帰る。

？ まあな、エレシユキガルは可愛い、よりも美しいだよな。

？ なんて未だに彼女の事を考えながら。

？ 森山碧は再度、九条大祐等に視線を向ける。

？ 三人は仲良くお喋りタイムの様だ。

？ 相も変わらず各務原あづみの頬は赤いが、ニコニコと笑いながら二人と話している。

? リゲルは各務原あづみを見て微笑んで…。
? 何にせよ、三人共距離感が凄いい近い。

(このままキスまで持つてけよ…今誰も居ないんだから)

? ふと、ん?と頭にクエスチョンマークを浮かべる森山碧。

? あ、俺が居るか、と一人でボケる。

? 彼は一回咳込みをして三人の監視を続けた。

「あづみ、汗が凄いわね。本当に大丈夫なの?」

「う、うん。私にも何が起こっているのか分からないけど、多分大丈夫」

「とは言え心配だ。汗で風邪を引くかも知れないから、リゲルさん、これであづみさんの体を拭いて貰えますか?」

「勿論! 任せて」

? 何故だか機嫌の良い彼女。

? 恐らく九条大祐と久しぶりの会話、各務原あづみとの幸せな時間を過ごしているからだろう。

? 九条はデータボックス(ブラックボックス)から少し大きめのタオルを二枚取り出し、リゲルへ手渡す。

? それをしつかりと受け取り、上機嫌で各務原あづみへ近付く。

「あら、そう言えば着物だったわね。あづみ、ちよつと脱いでくれる?」

「えっえつと、大祐くんの目の前で…?」

「ああ、俺は彼方向いてるんで安心して下さい」

? そう言つて九条は、先程まで向いていた逆方向へ体を向ける。

? 本当は屋台の方へと足を運んでこの場から居なくなろうと考えた彼だが、先の事を踏まえて女性二人だけでは危ないと。

? そう思つて此処に残る事を決めた。

? 然し、この判断が九条を苦しめる事となる。

? 因みに森山碧は自重し、一旦その場から離れていた。

? 周りに誰も居ない事を確認したりゲルは、徐々に徐々に、着物の帯を解いていく。

? その際に着物や帯同士が擦れる「シユルシユルツ」という音に、ピ

クツと反応する九条。

？リゲルは着物の上部分だけを脱がし、各務原あづみの肩を露出させる。

？だが、今の季節は冬。

？そんな中での肩露出は寒くて凍えてしまうだろう。

？その為のタオル二枚なのだ。

？先ずリゲルは、一枚目をタオルを手にとって各務原あづみの肩にふわっと乗せる。

？そして2枚目を使って彼女の背中を拭いて行く。

「あづみ、寒いでしょう？」

「うーん…でも今ね、すっごく体が暖かいの。…ちよつと、触ってみて」

「あ、あづみの体に!？」

「そうすれば、何れだけ私の体が暖かいか分かるよ?」

「そ、それじゃあ、お言葉に甘えさせて貰うわね」

？リゲルは恐る恐る、各務原あづみの背中へと手を伸ばす。

？何方かと言えば冷たい彼女の手が、ヒタアつと触れた時。

「んっ…」

？一瞬体をビクツとさせ、甘い声を出す各務原あづみ。

？そんな彼女にリゲル、後ろを向いている九条は爆発してしまいそのような精神を必死に持ち堪えていた。

「ほ、ほんとだ、あつつい…」

「えへへ…でも、大丈夫だよ。偶に大祐くんとリゲルを…凄く求めたくなるけど」

「…!」

？笑顔で衝撃の一言を言い放つ。

？直ぐ後ろでは一人の男が悶えに悶え苦しんでいた。

？一方でリゲルは、咄嗟に各務原あづみを抱き締める。

「り、リゲル…?」

「…私は、何時もあづみが恋しい」

？衝撃発言に衝撃を重ねて行くリゲル。

? 背後で美人美少女という、自身の恋人二人が抱き合っていると想像するだけで脳内制御が効かなくなる九条。

? 同時に、彼女達が愛し合っていた事は承知済みだったからか、嬉しいという感情も湧き上がる。

? 二人が仲良しの領域を超えて、付き合い始めたりしたら…等と彼は考えてしまう。

? 百合の類には一切の興味を持ち得ない九条だが、二人のそれには興味無いと言えない。

? 自分が居なければ、間違い無く百合ルートで完結したであろう。
? それはそれで良かったんじゃないかと思いつかべてしまう。

? 九条は笑みを浮かべ、ゆつくりと後ろを振り向く。
?

「…ちよつくら買い出しに行つてきますんで、二人の時間をー」
? 引つ込み思案な九条はやはり遠慮してしまう。

? 各務原あづみとリゲル、二人が楽しんでいる時間を邪魔したくないから屋台へ赴こうと思つた彼は、それを伝えようとした。

? だが、二人の方を振り向いた瞬間、気付かされる。
? 各務原あづみの体を拭き終わる前だった為、彼女は未だに肩付近にタオルを掛けている。

…筈だった。

? 彼女はタオル其の物を取り、肩を露出していた。
? 此方に向いて、恥ずかしそうに頬を赤く染め、けれど目は何かを

求める様な瞳をしていた。
? それは各務原あづみの隣にいるリゲルも同じで、彼女も又、帯は

緩めて無いものの態と着物をはだけさせていた。
「…え、つとつ二人共どうしました?」

? 彼女達に何が起きたのか察せない九条。
? 只管に動揺するしか無く。

? そんな九条の、各務原あづみが右手を、リゲルが左手を握る。
「あ、あの、あづみさん? リゲルさん?」

? 何も喋らない二人。

? こうなる確固たる思い当たりが無い九条は、不意に彼女達の手を握り返す。

「…大祐くん、お願いだよ…」

「お願い…?」

「何時もそうやって、私達の為に何処か行こうとしないで…」

「あづみ…さん…?」

? 彼女は半泣きになりながらも、自分の想いをきっちり伝える。

? 丸で先とは逆の立場になりつつある。

? 各務原あづみの卒然な言葉に、どうすれば良いかと戸惑う九条。

「お、俺は何処にも…」

「いえ、大祐。貴方は何かあると直ぐに何処かへ行こうとするわ。私達を引き止めたり、無理矢理でも輪に入ろうともしないで」

「だって…!」

「もし、…有り得ないけど、私達が他の男共に目移りしたら、大祐はどうするの?」

「…どうするも何も」

? 九条は悔し気に顔を下げる。

「貴方は恐らく、私達を手放すでしょ? 引き止めたりなんかしない」
「…!!」

「大祐くん…大祐くんは、私達をどう思ってくれてるの?」

? リゲル、各務原あづみの言葉に返答出来ない九条。

? それは自分にはどうする事も出来ないと思えているからだ。

「…人とは、独占欲の強い生き物です」

「…?」

「若し二人と恋人関係を築いたのが俺じゃなかったら、意地でも二人を離そうとしないでしょう。例え二人が離れたいと言っても」

「…私達には分からないわ。けれど、それが普通の考えなのね?」

「無論、美人美少女である二人を手放す等、一般的には有り得ないでしょう。それは俺も同じです」

? すると九条は、二人の手を強く握り締める。

? そして顔を上げ、二人の瞳をしっかりと見つめながら話を続ける。

「けど、俺は違います」

「…どうして？」

「二人を手放したくない。自分の独占欲という下らない理由で二人を縛るのと同じです。そんな自分勝手な…」

「私とリゲルは…大祐くんになら、縛られてもー」

「俺に二人を縛る権利なんて無いよ。況してやそれは以前の青の世界だ。解放した鳥を又捕まえて、鳥籠の中で飼う。何て外道なのかってね」

？段々と自分を取り戻して来た九条は、冷静に、坦々と話し続ける。

…そう、これが九条大祐の思考だ。

？だからこそ、各務原あづみやリゲルに対して容易に手を出そうとしなかった。

「それに、若し二人が俺から離れたと思った時。次、好きになったその人にこそ二人を絶対に幸せにして貰いたくて。あづみさん、リゲルさんが純潔なままで送り出してあげたくて…。俺は所詮こんなんで、それでも其々色々な魅力を持った女性から好意を抱いて貰って…好き、なんて言われたら断れなくて。側から見れば女誑しとかハーレムだと思われるよね。…でも俺はそんな考えを持った事は無いよ。好意を寄せてくれたならその想いに答えてあげなきゃ、なんて使命感が働いてね。例え相手のその女性が、大人の恋愛をする為の道でも構わない。好きと言ってくれたからには、その間だけでも幸せな時間を過ごして欲しくて。…何時か絶対に、二人からは見限られるなんて心の隅で思っていた。そしたら俺は一人に…なんて、見えない恐怖に怯えて。それなら逸そ…二人に俺という存在を嫌でも覚えさせようとも考えたけど、やっぱり俺にはそんな事する度胸も無くて。じゃあ、二人が俺から離れて行く時位は笑顔で見送ってあげたいと思って、極度な触れ合いは出来るだけ避けていたんだ」

「……………」

(大祐…その気持ちは流石に察せなかった)

？草陰に隠れながら聞き入ってしまった森山碧。

？親友の彼でさえ、九条大祐という男の本心を察する事は出来ない

かった。

(だが、それは大祐の見当違いだな)

「…それで、大祐くんは幸せなの?」

「ええ!二人が幸せなら…俺は…それで、満足です…」

「大祐…じゃあどうして目を逸らすの…?」

? 九条大祐はその言葉を聞いて、二人から手を離そうとする。

? だが然し、二人は彼の手を離すまいと、ぎゅっと握る。

「…使命感で好きになられても、全然嬉しく無いよ…」

「……………」

「私やあづみ…いえ、大祐を好きだと想っている人達は、貴方から離れる気なんて更々無いのよ。寧ろ一つになりたいと望んでいる。それを大祐は、使命感で好きになつていたて言うの!?!」

「…違う…」

? リゲルは感情がそのまま口に出てしまい、声を荒げる。

? 各務原あづみはリゲルの隣で、九条大祐の瞳を見つめる。

? 九条大祐は否定と肯定が混ざり合い、どう答えれば葛藤していた。

「大祐(くん)は私達を使命感なんかでー」

「違う!!!」

? 先程のリゲルの声よりも大きく、響く声で、九条大祐は怒鳴る。

「俺は本心から二人を愛しているんだ!…二人だけじゃない、こんな俺に好意を寄せてくれている女性全員を…使命感なんかじゃない、本心から、本当に愛しているんだ」

「…大祐、貴方のその言葉が聞きたかったの。貴方がそう想い続ける限り、私達が離れて行く事は無いわ」

「私やリゲルも、大祐くんを…その…愛、してるよ。だからね、大祐くんと同じ。貴方の幸せが私達の幸せ」

「あづみさん…リゲルさん…」

? 貴方が愛してくれている、私達も貴方を愛している。

? 二人の口からそんな事を言われた九条は、体から力が抜けて行く感覚に襲われた。

？

「まあ：何て言うのかしら、大祐が離れても、私達は追い続けるわ」

「うんっ！大切な大祐くんを、簡単には渡さないからね…！」

「…二人がそう言ってくれるなら、俺は何処にも行かないよ。二人の事が好きなのこの気持ちに嘘は無いから。逆にガンガン攻めて行くかも知れないな」

「か、覚悟の上よっ」

「えへへ…わ、私は何時でも良い…よ？」

？物凄く恥ずかしそうに、頬を紅潮させ、もじもじと体を動かす各務原あづみ。

？そんな彼女を見て、九条大祐とリゲルは又もや爆発しそうになる精神を保つ。

？然しながら今回は我慢仕切れ無くなった九条。

？未だに露出している各務原あづみの肩に、直に触れる。

？リゲルは既に露出していた肩を隠していた。

「…もー我慢ならないよ。そうやって誘って、あづみさんったらーって、ごめん！あづみさんの肌に軽々しく触ってしまった…」

「もうっ、大祐くん、何時迄も気にしてちゃ駄目だよ」

「そうね、ならお姫様抱っこは如何なのって話」

「それはあくまあ…ね」

？ふっと目を逸らす九条大祐。

？そんな彼を見て各務原あづみ、リゲルは笑顔を見せる。

？二人の笑顔を見て、九条大祐も笑い始めた。

？最早連鎖的になっている。

「そう言えば、如何して二人共肩なんか出して誘惑して来たんですか？」

「え、ええと…何で分からないけど、大祐を振り向かせる為にはああしないといけないか…」

「随分と珍しかったですね」

「えーとね、大祐くんを見てたら、急に胸が苦しくなって、体があつくなつてね、大祐くんの事しか考えられなくなつて…」

「それって…媚やー」

? 九条大祐がとある性欲活性化薬の名前を口にしようとした瞬間、彼は膝の皿部分に違和感を感じた。

? 小さい手らしき何かを当てられている様な、そんな違和感。

? 彼はテーブルの下に隠れている自分の足元を覗くと。

「き、きさらちゃん!」

「きいも、だいすけとおしやえりすゆ!」

「きさらちゃんも大祐くんの事、好きだもんね」

「うい!あづも、しいき!」

「あら、あづみの事は私と大祐が一番好きだと自負してるわ」

? 手を額に当て、今までの空気は何処に行ったのだろうかという疑問に感じる九条大祐。

? それは遠くから見ている森山碧も一緒だった。

? 何時になったらキスという目標を達成出来るのか。

? 自分が気になっても仕方がない事なのは分かっているが、どうしても手助けをしたくなる森山碧。

? はあく…と、小さな溜息を吐きながら九条大祐の元へ近付こうとしたその時。

「碧」

? 何時の間にか後ろに居たエレシユキガルに呼ばれて、ビクリと驚く。

「ほあっ!?!…エレシユキガル…頼むから、前か横に出て来て…心臓に悪い…」

「屋台のクオリティが低かったから、前に碧が言った「コンビニ」に行って来た」

「スルー…ていうか…、コンビニに負ける屋台のクオリティって…、で、何買ってきたの?」

「えーとね…飲み物、主食になる食べ物、後は菓子…これ、ポッキーっていうのかしら?」

? 森山碧はその場で無言の勝利を確信、片腕を天を貫くかの如く思いつき上げた。

?彼の唐突な行動にびっくりしながらも、エレシユキガルは考える。

?何故ガッツポーズなんかしているのか。

?そんなに嬉しくなる出来事でもあったのか。

?彼女は頭に?を浮かべながら森山碧を見つめる。

「エレシユキガル、そのポツキー1、2本貰って良い!？」

「う、うん。良いけど…」

?彼女の許可を得た森山碧はポツキーの箱を持って、勢い良く九条大祐等の元へ走って行った。

?エレシユキガルは走り出した森山碧の後ろを、焦りながらもついて行く。

「大祐!ゲームしようぜ!」

「うわあ、びっくりした…。ていうか何時から其処に居たの…」
「ずっと」

「はあ!?ずっと!?恥っず!」

?九条大祐は草陰から出て来た森山碧に驚き、彼の返答に対して、両手で自分の顔を隠す。

?余程恥ずかしかったのか、森山碧と顔を合わせようとしなない。

?だが、各務原あづみ、リゲル、百目鬼きさらは彼の登場に至極微妙な表情を見せていた。

?その表情に地味な傷を心に負った森山碧だった。

「…まあ、俺の事は良いんだ」

「誰もへっきーの話はしてないよ」

「うう…悲しいーって、ほっとけ。大祐、お前は何時キスする迄に至るんだよ!見てる此方が焦らされている気分だわ!」

「関係無いでしょ。ていうか知らんわ、此方には此方のタイミングがあるの」

?急かす森山、反論する九条。

?二人の言い争いを何気無く聞く女性陣。

?唯一人、各務原あづみという少女を抜いて。

?彼女は薬の効果が切れたにも関わらず頬を紅潮させている。

? 「キ、キス…大祐くんと…／／」と繰り返し口にしながら。

「…でだ、お前が其処までに発展しないからさ、これを使ってゲームしようと思っただけな」

「…ポッキーそれな、ゲームって言わないからな!？」

「?ポッキーを使って、どんなゲームするの?」

? 各務原あづみの無知能力が発動、九条は思わず襲い掛かりそうになる。

「名前はまんま、ポッキーゲーム! 勿論、参加するのはあづみ様と九条様だよ〜!」

「はあ!？」

「大祐くんと…ポッキーゲーム?」

? ルールを知らない、というかルール其の物が存在しないポッキーゲームに動揺するしか無い各務原あづみ。

? リゲルも何が何だか分からずにいた。

? データベース↓ゲーム関連↓で開いても出てこないポッキーゲーム。

「まあ、あづみと大祐のペアなら安心ね。やってみれば良いじゃ無い!」

? 軽々と了承してしまうリゲル。

? 彼女の中で九条大祐という存在は、最早既に各務原あづみの安定剤になっていた。

「まあ、リゲル殿も含めて、だけどな」

「私も!？」

「きさらちゃんは俺と仲良く遊んでー」

「いあっ!」

? 百目鬼きさらは咄嗟に九条大祐のコートをぎゅっと握る。

? 森山碧は悔しくて後ろを振り向くと、エレシユキガルに抱き締められた。

? 丸で子供をあやすかの様な手付きで頭を撫でてやり、胸元に森山碧の顔を押し付ける。

? 孤独から解放された嬉しき、締め付けられる苦しき。

？両方相まってどの選択肢を取れば良いのか分からなくなる森山碧だった。

「…大祐って、ああいうのどう思う？」

「どうもこうも…まあ、少し羨ましいなあ的な？」

？エレシユキガルの行っている行為について、リゲルが九条大祐に意見を求める。

？彼からすれば、一応興味はあるらしい。

？今迄女性をお姫様抱っこし、女性に甘えた事の無い九条にとってあれがどういう感覚なのか掴めずにいた。

？ルクスリアから頻繁に抱き付かれるのに慣れた御蔭なのか、ルクスリア以外の女性にやられた事が無いからなのか。

？何方にせよルクスリアという女性が絡んでいる事に変わりは無い。

？という事は必然的に慣れた、という事になってしまっしそうな気がしそうだ。

？九条があこの行為に羨ましいと感情を持つ事が分かったリゲルは、何か決めたのか、意を決した風の表情で彼を見つめる。

？一方で九条はポツキーゲームをどうしようか、とばかり考えていた。

「と、取り敢えずこのポツキーをあづみ嬢とリゲル嬢で口に啜えて」

「は、はいっ」

「貴様の指示に従うのはあまり気に乗らないけど…」

？各務原あづみは恐る恐る、リゲルは嫌々、渡されたポツキーを口に啜える。

「…で、どうすれば良いのかしら」

「大祐が、反対側からポツキーを食べる。食べ切れば成功！」

？そんな森山碧のルール説明に、リゲルは一瞬吹き掛ける。

？未だに状況を理解しつけない各務原あづみは、ゆっくりと九条大祐へ近付いて行き。

？彼の目の前で一言。

「…大祐くん、ぽつきーげーむ、しよ？」

? 九条大祐は急に肺呼吸が出来なくなる感覚に陥った。

? 各務原あづみの可愛さ、そして態となのか短いポツキー。

? そんな彼女のあざとさに屈した九条は、段々と口を近づけて行く。

? そしていざ、各務原あづみの啜えているポツキーを、九条が啜えようとした時。

「あー! いたー!」

? 少し遠い場所から少女らしき声が周囲に響き渡る。

「な、ナナヤ…」

「良いところで邪魔しやがって…本当、大祐も大変だな」

「もう、ずっと探してたんだからねっ。大祐くんが何処にも居ないから…でも、見付けた! 今からでも私と遊びにー」

「待って、頼むから待ってー!」

? 空気を読まずに九条を後ろから羽交い締めにするナナヤ。

「きいとあそぶのっ」

? 負けじと足元にくっつく百目鬼きさら。

「そんな簡単に大祐くんは」

「渡さないわ!」

? そう言いながら九条大祐の両腕をがっしり掴む各務原あづみ、リゲル。

「んじや、俺はエレシユキガルと屋台回って来ようかな…」

「屋台、全部回ったけど…」

「うそん!」

? 地味に空回っている森山碧、エレシユキガル。

? 今は何処で何をしているのであろう天王寺飛鳥。

「ちよつと、順番、お願い! 頼むから!」

? やはり側から見ればハーレム男な九条大祐。

? 既に正月等関係無くなっている彼等の日常は、常に幸せな日々に包まれていた。

――

「さあ、屋台を制覇するのじゃ！」

「何であんさん此処におるんや！」

「卑弥呼さん：太っちゃうよ？」

「食べれば何時かは：ソリトウス、お主みたいな胸に――」

「こら飛鳥！お金の使い過ぎですよ！」

「何でこないなつてしもうたんやあああああ！」

――

「ふむ：最後は展開を早めてしまったかな？だが、これが彼等の日常だ。未来の姿だ」

「パパ、お茶が入ったデース！」

「有難う、七尾。：まさかあのナナヤくんが九条君に付くとは、予想外だったが」

？男は手に持っている手帳を机の上に置く。

「ふう：良い物が書けたな：ん？」

「ふふ：残念、私だよ」

――

カール・ワイバーンの手記

――

バレンタイン（前編）

? 朝日が昇り、今日も今日という日が訪れる。

? 外からは小鳥の囀りが、部屋の中にまで響き渡る。

? 九条大祐はゆつくりと体を起こそうと、後ろへ手を着いた。

? そのまま起き上がろうとしたその時。

? 腹部から下にかけて若干の重みを感じた九条。

? 彼はそれが気になり、布団の上を確認する。

? 然し其処には誰も、何も無い。

? だが、違和感は直ぐ其処にあった。

? 明らかにもそもそと動いている布団。

? 自身の腹部辺りで感じる何か。

? 九条は苦笑いをしながら掛け布団を剥ぐ。

「…うみゆ…」

? すると何故か、可愛らしい女の子が自分の体に乗って寝ているでは無いか。

? 然し少しばかり開いている瞳を逃さない九条。

? これは完璧に寝た振りだ。

? そう確信した彼は、その少女の脇に手を通し、ゆつくりと持ち上げる。

? 次に自分の体を起き上がらせ、持ち上げた少女を自身の胸元に寄り掛からせる様にして膝の上に乗せる。

? すると少女は至極嬉しそうに九条の胸元へと擦り寄って行った。

「…きささらちゃん、起きてるでしょ」

「…! (ビクッ)」

? 九条大祐の朝は相変わらず、百目鬼きささらのアップールから始まる事となった。

「…で、来ているのでしたら教えてくれてもいいと思うのですが」
？百目鬼きさらを膝の上に、九条大祐はヴェスパローゼと対談をしていた。

「あら、朝起きたら可愛い幼女が自分の上に…。そんな演出はお嫌いかしら？」

？くすくすつと笑い、丸で揶揄う様な口調のヴェスパローゼ。

？そんな彼女の趣味を若干疑う九条大祐。

？やはりS側の性格なのだと、彼は改めてそう実感していた。

？二人の会話を聞きながらとうとうと、頭を予測不能な方向に倒し続ける百目鬼きさらを見て、ヴェスパローゼは笑みを絶やさない。

？言わずもがな、百目鬼きさらにとつて九条大祐の膝の上というのは彼女の定位置と化している。

？後ろから九条が支えているから良いものの、それが無ければ直ぐに、床へ頭をぶつけているだろう。

「…きさらつたら、本当に其処が好きなのね」

「ヴェスパローゼさんも乗ってみます？なんて」

「ふふっ…じゃあ、お言葉に甘えて夜にお邪魔しちやおうかしら」

「キツイ諧謔ですね」

？冗談を言う九条に半々冗談、半々本気のヴェスパローゼ。

？二人のやり取りは何時もこんな感じだ。

？互いが互いに理解し合える部分があるのか、見ているだけでヒ首が合っているのだと思えてくる。

？嘘や騙し合いという可能性を二人共捨てているからこそ、気楽に話し合えるのだろう。

？ヴェスパローゼは座っていたソファから立ち上がり、九条の隣へ腰掛ける。

？一方で九条は、驚きや何の抵抗も無く、百目鬼きさらの頭を撫で撫でと摩る。

「あ、そうだ。二人が今日此処に来た理由をー」

？と、聞き出そうとした瞬間。

? コンコン

? 扉をノックする音が部屋中に響き渡った。

? 対談中、加えて百目鬼きさらを膝の上に乗せているという状況でどうするか悩む九条大祐。

? するとヴェスパローゼは百目鬼きさらを抱え、扉の方へと手を差し伸ばした。

? 私達を気にする必要は無い、お好きにどうぞ。

? 彼女は言葉を口にしなくても伝わる程に優しい笑顔を向けながら、百目鬼きさらを膝の上に乗せて面倒を見始める。

? そんなヴェスパローゼの気持ちを無駄にしない為にも、九条は扉を開けに行く。

? 誰が来たのかなんて三択だが、早朝から用事を伝えに来る人物を特定する事は出来ない。

? 各務原あづみやも知れない、リゲルという可能性もある、話だけならベガという存在も出てくる。

? 三人の中から一人だけ、若しくは三人全員、何方かを特定するのは流石の九条でも難しい。

? そう考える時間があるのであれば取り敢えず出よう、と九条は扉を開ける。

? キイと音を立てながら開く扉の前に居たのは。

「大祐、今少し宜しいですか?」

「ベガさん! どうかありませんでしたか?」

? 綺麗な水色の長い髪の毛を、ポニーテールに結んだ美女: ベガが其処に立って居た。

「兎に角、中へどうぞ」

「有難う」

? 例え薄い内容の話だろうと、廊下で口を開き合うのは好まない九条はベガを部屋へ招き入れる。

? 中では、幸せそうに寝息を立てている百目鬼きさらを、実の母親の様に見つめるヴェスパローゼの姿があった。

? 以前のヴェスパローゼとは見違える様な光景にベガは思わず。

「ヴェスパローゼ：貴女、変わりましたね」

「あら、貴女が言える事かしら、ベガ」

？そう言い合う二人の口元には、笑みが浮かんでいた。

？扉をしつかりと閉め、後からその場に來た九条は何も知らずにソファへ座る。

？今度はヴェスパローゼの対面へ。

？彼女達を変えた張本人：九条は寝ている百目鬼きさらの顔を見てほっこりとしていた。

？百目鬼きさらの寝顔は、九条の口元が不意に緩んでしまう程に癒される代物だ。

？ヴェスパローゼやベガ、彼女達二人も幼い少女の寝顔を見て無言になる。

？ふと、九条はずつと立っているベガに対して自身の隣へと手を差し伸ばす。

？それに気付いたベガは頬を少しばかり赤くさせながら彼の横へ座った。

？好きな人物の隣というのは、誰にとっても特別な物。

？それはZ/Xだろうが関係無いようだ。

？照れるベガを見て、ヴェスパローゼはクスツと笑う。

「：何ですか、ヴェスパローゼ」

？自分の意外であろう一面を見られて恥ずかしかったのか、将又笑われた事に不満を抱いたのか、ベガはヴェスパローゼへほんの僅かな苛立ちを見せる。

「いいえ？貴女も大祐には弱いんだと思っただけよ」

「：！」

「ああ～：ベガさんが俺に弱いとか分からんですが、俺に優しくしてくれて助かってますよ」

「大祐、話が逸れるわ」

「あれ？そういう話じゃ無いんですか？」

？相も変わらず女心を理解するのに時間が掛かる九条だった。

？そんな彼を、横からじつと見つめるベガ。

? 九条が振り向く度に顔を逸らし、彼の意識が違う方へと向いた時に又見つめ始める。

? ヴェスパローゼは内心こう思いながら再度クスリと微笑む。

(恋する乙女は大変ね)

? 自分に対しても言える事なのは彼女自身も分かっているが、ヴェスパローゼだけはこの距離感が凄くしつくり来っていた。

? 九条とは楽しく話し合うだけの関係。

? 然しそう思うと、彼女の心はチクツと、何かに刺される様な痛みに襲われていた。

? 此処からは少しヴェスパローゼの話になる。

? しつくり来ているのに、何故痛むの?

? ヴェスパローゼは九条と出会い、変わると、そんな難題に悩まされていた。

? 自分自身はもつと親密になりたくある…でも、この距離感を保ちたくもある。

? 彼女がそう思ってしまうのには理由があった。

? これ以上に深い関係を持ちたいと攻めれば、嫌われる可能性があるから。

? 人間とは明らかに違う自身の体を気にしたりと。

? 要するに、ヴェスパローゼ自身も悩める乙女だという事だ。

? 彼女が変わったのは、恋という存在に自分自身を変えさせられたからなのかも知れない。

? だからこそ、自分を変えてくれた九条と離れる事も、近づく事も無いこの距離感で満足してしまっているのだろう。

「…ろーぜ、つらそお」

「ヴェスパローゼさん、何処か体調でも悪いんですか? らしく無い顔をしていますよ」

「んく…ふふっ、心配は無用よ。ところできさら、貴女寝てなかったの?」

「うゆ?」

? 丸で自分は最初から起きていた、とでも言わんばかりの表情を示

す百目鬼きさら。

? 事実、彼女は最初こそ寝てはいたが、ベガが入室した際に鳴った扉の閉め音に反応してしまった様だ。

? 結果、三人の話は全て聞いていた。

? という事は必然的に最初から起きていたも同然となる。

「…取り敢えず、二人共何か用事があって来たんですよね?」

「勿論(です)よ」

? 九条の問いに声を揃えて答えるヴェスパローゼにベガ。

? 互いに息がピッタリ合って顔を見合う二人だが、直ぐに九条へ向き直る。

? その際、又もや互いの行動が重なり、二人の美人からの視線を浴びせられた九条は一步後退りしてしまった。

(やたら破壊力あるよな…二人共…)

? 心の声が喉を通り、現実へと放ちそうになる九条だった。

「…ま、まあ、大祐が宜しいのであれば…その…用事の有無関係無く、お邪魔したくもあるのですよ…?」

? 徐々に声が小さくなっていくベガ。

? 最終的に聞き取るのが困難になる程にボソボソと喋ってしまい、九条へ自身の気持ちは伝わらなかったのだが。

「えーと、いや…来てくれるのであれば何時でも歓迎しますよ? 俺なんかで良ければ、ですが」

「…!」

? 彼は何と無く、あまり深く考えずにそう返した。

? 然しそれがベガにとって何れ程嬉しかったことか。

? 事実、彼女は九条から顔を背けつつも笑みが止まずにいた。

? 何故かヴェスパローゼも。

? 唯一、百目鬼きさらだけが頭に?マークを浮かべている。

? そんな純粹無垢で無知な彼女を見て、九条は自分自身から百目鬼きさらを手招きした。

? 既に彼という一人の人間も、彼女の幼い魅力に取り憑かれてしまっているのが目に見える。

?だが、九条から手招きするのは結構珍しい事。

?そんな滅多に無い出来事に驚きながらも、百目鬼きさらはいそいそとヴェスパローゼの膝から下り、とてとて可愛らしく九条の元へ走り。

?最後に彼の膝の上によじ登って完了。

?誘ったのは自分だがここまでテキパキと動く百目鬼きさらを見て若干驚愕する九条。

?更に、最後のよじ登り。

?本来なら九条が百目鬼きさらの両脇を抱えて膝の上へと乗せる筈だった。

?それが百目鬼きさら、彼女自身によって覆されたのだ。

?何れだけ九条大祐の膝の上が好きなさか。

「:幼いって、偶に羨ましいと思うのですが」

「あら、奇遇ね。私も現在進行形でそう思っているわ」

「幼さは凶暴な武器になりますからね〜:」

「♪♪♪」

?ベガとヴェスパローゼ。

?彼女達二人は羨まし気に、百目鬼きさらを見つめる。

?然しまだ7歳の彼女は自分の可愛さという凶悪な武器の存在に気付きもしない。

?百目鬼きさらは九条大祐の膝の上で鼻歌を歌い始めていた。

「:はあ、相変わらず癒されるな〜:」

「良いじゃない、きさらを嫁にすれば何時でもその鼻歌が聴けるわよ?」

「きい、だいすけのおよえさん?:::に、なゆっ!」

「ん〜:〜:ん!」

?まだ7歳の少女:いや、幼女から衝撃の一言。

?然し誰しもが思うであろう。

?百目鬼きさらが口にしたこの言葉は、よく「幼い少女が父親に対して言ってしまう」一時的な物だと。

?だが、百目鬼きさらは違かった。

? 至って本気で九条を見つめ、獲物を狙うかの如く視線を外さない。

? 年齢的にも彼は父親というより兄に近い存在だ。

? その事もあり、将来的には結婚出来なくもない年齢差。

? 果たして百目鬼きさらがそれを分かった上で言っているのかは謎だが。

「と、取り敢えずその話は後で…ね? 今は二人の用事を先に聞かなくちゃだから」

「むう…」

「珍しいわね、きさらが不貞腐れるなんて」

「あづみが不貞腐れるのは良く見ますよ。…あの子ってば、大祐が居ないと直ぐに寂しがつて…可愛い領域を遥かに超えています」

――

「くしゅんっ」

「あづみ? もしかして寒いかしら? 部屋は温かいのだけれど…」

「うう…大丈夫。心配してくれてありがとう、リゲル」

「パートナーへの気遣いは心配の内に入らないわ。…それにさっきの噂…もしかしたら、誰かがあづみの噂でもしてるのかも」

「ええ…私、噂される程の存在じゃないよう…」

「ふふっ、それはどうかしらね?」

――

(今一瞬、あづみさんの声が聞こえた様な…気の所為か)

? 別の部屋に居る各務原あづみの声すらも拾う九条大祐だった。

「…あ、で。何の話なんです?」

? ヴェスパローゼとベガが部屋に来てから少しの時間が経過していた。

? 流石にそろそろ本題に移らねばと、九条は二人の顔を順番に見ながらそう質問する。

? 二人も時間を忘れて話に夢中になっていた事に今気づき、一度

「コホン」と咳払いをしてから本題を切り出そうとする。

? 唯一、百目鬼きさらだけがまったりしていた。

「…先に伝えておくわ。私とベガは大祐に同じ内容の話をしに来たの」

「同じ内容の?」

「はい。…えっとですね…」

? ここからいざ、本題に入ろうとするベガ。

? だったが、何故かモジモジとして一向に口を開く気配が無い。

? 誰が見ても絶世の美女と言うであろう彼女。

? そんな美女が隣でモジモジとする所為で、九条はそれが至極気になつて仕方が無い。

? すかさず見兼ねたヴェスパローゼがフオローに入る。

「まあ…そうね。大祐は今日の特別行事って知ってるかしら?」

「特別行事…特別行事ーあ! バレンタインでしたね!」

「当たり前よ」

? 何時もなら鈍感で「何でしたっけ?」と言つてしまうであろう九条も、バレンタインに関しては覚えていられるらしい。

? 彼の鈍感レベルは相手を焦らす位には高い。

? それが本日バレンタインという特別な日には低い様だ。

? 唯、九条が覚えていただけという気がしなくも無い。

? 然し其処は置いて。

? 彼が即座にバレンタインと気付いた御蔭で、早く話が進められると安心するヴェスパローゼ。

? 態々回りくどく言うのも、彼女は疲れてきた様だ。

? そんなヴェスパローゼに対して、日々優しい言葉の一つや二つ、投げ掛けてやる九条。

? 幾ら疲れてきたとはいえ、そういう理由含めで彼を嫌う事は出来ないらしい。

「それで、バレンタインがどうしました?」

? 話がガラリと変わるが、此処に来て九条の察しの悪さが目立つ。

「バレンタイン…それは、女性にとって、男性にとつても大事な日で

しょう?」

「チョコを渡す為に勇気を振り絞る女性に、そのチョコを貰う為に戦争を起こす男性。…ん? 一体男性のメリットって何だ…?」

「チョコを貰えるチャンスがあるから…かしら?」

「そんな下らない理由で戦争なんか起こすのか…」

「実際は起こさないでしょう」

? あ、そうか、的な表情で片手で掌をポンと叩く九条。

? 如何やら彼は、本気でそう思っていた様だ。

? そんな九条に微量な苦笑いを浮かべるヴェスパローゼ。

? 九条にとって、バレンタインというのは本当に如何でも良い日らしい。

「…ま、本音を言ってしまったえばバレンタインに限らず誕生日とかなんかも興味無いんですよ」

「では、大祐はあづみの誕生日は祝ってくれないのですか…?」

「ああいや、自分の誕生日の話です。あづみさんやきさちちゃん、勿論御二方にその他の方々の誕生日は、絶対に、何が何でも祝福すべき日なんですよ」

「大祐は…自分を過小評価し過ぎです」

? ベガの放ったその小さな呟きに、九条は無関心という感情…いや、感情其の物が湧かなかった。

? 自分は一番最底辺に位置する人間と確信してしまっている彼は、自分を過小評価…それも、全ての人の中でも生きている価値すら無い人間だと思ってしまうている。

? だからこそ、自身を対象にした話には興味を持たないのだ。

? 生きている価値すら無いこんな人間の誕生日等、祝う必要すら無いと。

? 正に自画自賛の逆、自暴自棄の成りの果てだ。

? 遂には自分自身に興味のきの字すら持たない。

? だが然し彼が問題なのは、それを未だに、九条を愛してくれている彼女達に伝えた事が一度たりとも無い事だ。

? 優しくして力強く、そんな美しさを持ち得ている彼女達に話せば、

反論される事は分かっている。

? 知っているからこそ、九条は話したく無いのだ。

? 「自分」の中で決めつけている「自分」という存在を否定されるのが嫌だからなのだろう。

? 例えそれが、良い意味でも悪い意味であつても。

? 彼は誰にどう否定されようが「自分が最底辺」というのは譲りたく無い様だ。

? 側から聞けば何を言っているのか良く分からないだろう。

? 何人もの美人美少女から愛されて、充実した生活を送っていて、そんな自分が最底辺なんて。

…だが、九条は其処に観点等置いてはいない。

? これは彼本人にしか分からない事だ。

? とまあ、九条の話は此れ位にしておこう。

? 大分話が逸れてしまった為、強引にでも路線を戻そう。

「取り敢えず、一旦誕生日の話は置いときましょう?」

「…それでも、大祐の誕生日は絶対に皆で祝いますよ。例え貴方が拒否しても」

「人からの好意は素直に受け取る積りです。こんな俺を祝ってくれる…有難うと感謝の音しか上がりませんよ」

「…本題に移って良いかしら?」

? ヴェスパローゼはそう、少し遠慮気味に告げる。

? 彼女からすればベガと九条大祐の話の輪に入り辛いらしい。

? やはり、心の何処かで自分を諦めている彼女。

? その点からすれば九条と似たり寄つたりな性格である事が分かる。

? そんな、僅かに気力が消えているヴェスパローゼを見つめる百目鬼きさら。

? 勘の優れている彼女はヴェスパローゼの心境を何と無く想像し、察する。

? すると百目鬼きさらは九条の膝から下り、彼をヴェスパローゼの隣へ誘導し始めた。

? 九条は素直に彼女へ付いて行き、ヴェスパローゼの隣へ座る。
? それを確認した百目鬼きさらは、再度九条の膝の上へ乗る。

「…? どうしたの、きさらちゃん?」

「こっちのほおが、ききやすい」

「成る程。確かに、隣同士の方が聞き易いね。ヴェスパローゼさん、続きをお願いします」

「え、ええ」

? 少しばかり戸惑うヴェスパローゼだが、此方を向いている百目鬼きさらは気付き、優しい微笑みを返す。

? 百目鬼きさらは至極嬉しそうに足をパタパタしていた。

「…それでね、バレンタインだし、折角だからイベントでも如何かしらと思つて」

「イベント? どんなですか?」

「鬼ごっこ」

「…はい?」

? ヴェスパローゼの口から放たれたその言葉に、九条は首を傾げた。

「詳しくは違うのだけれど…もう準備は万端なの。後は大祐の許可だけ」

「俺の許可、ですか? 別に構いませんけど」

「本当?…ふふっ、有難う」

? 九条直々の許可が下りた事により、満足気に笑みを浮かべるヴェスパローゼ。

? 一体全体何のイベントが行われるのか知る由も無い彼は、何故彼女が笑っているのかが分からない。

「そうね…じゃあ、午後1時頃、隣の敷地に集まってくれるかしら?」

「例えの出て来ないあんな広大な場所で…イベント参加者は何人居るのやら」

「来てからのお楽しみって事よ」

「ろーぜときいは、ぜったいいゆ」

? 其れだけでも行く気の湧く九条大祐。

? 相手方は既に準備万端という事で、遅れない様にと準備を始める。

「…それじゃ、お邪魔して悪かったわね。私達はもう行ってるわ」

「恐らくあづみやリゲルも来ます。あの子達の為にも来て貰えるとー」

「あ、いや、もう行く気満々ですので。後で合流しましょう」

「…流石です」

? 九条に見えない様に、小さく微笑むベガ。

? 自分の目的の為でもあっただろうが、あづみとリゲル、二人の名前を出して即座に反応を示した彼に、二人への愛を感じていた。

? 其処から1分も経たない内に彼女達は部屋を出て行った。

? 取り残された九条は黙々と準備を進める。

? 一体何の支度をしているのか。

? 彼は薄々嫌な予感を感じていた。

? 然しヴェスパローゼやベガ、百目鬼きさらに各務原あづみ、リゲルの名前を出されたら行くしか無いと。

? 彼の中での使命感が、彼自身を駆り立てていた。

――

バレンタイン（前編2）

？かくかくしかじか、そんなこんなで九条大祐は隣の敷地に足を運んでいた。

？範囲的には：いや、例える物が浮かばない程の大きさだ。

？本来なら其処に家を建てたり、庭を作ったり、将又身内全員で自由に遊べる空間を作ったりと悩んでいた筈だったが。

？何時の間にかヴェスパローゼとベガが企だてたイベントの会場となっていた。

？果たして其処では何が待ち受けているのか。

？九条は目的地へと足を踏み入れると、人集りの出来ている中心部へと向かう。

？然し彼が気になったのはそれでは無い。

？如何にも無造作に散らばらせたのであろうかなり大きな岩、生え方の可笑しい樹木、更にはトラバサミに似せて作られた何か。

？その光景を見て九条は思った。

？嫌な予感的中したな、と。

？これはやらかしたな、と。

？そんな彼の背後から近付く一つの影。

「よつ、大祐！すげー嫌そうな顔してんな」

「…へっきー」

？如何やら森山碧まで招待されていた様だ。

「何だ此処？作りには甘いよな…」

「どうかこの敷地が使われる日が来るなんて…思いもしなかった」

「取り敢えず全員彼処に居るんだろ？んじゃ、行こうぜ」

「…りよーかい」

？親友の乗りにすら付いて行けない位に嫌々な九条だが、来てしまった以上は仕方が無い。

？森山碧の後に続く様に、重い足を一步又一步と進めて行く。

？だが、九条のそんな気分は一瞬にして晴らされた。

？その人集りに見える、二つの影。

? 聴てそれは彼の目の前にまで接近する。

「大祐くんっ来てくれたんだ!」

? ボーツとする意識を声の主へ集中させる。

「あづみ…その言い方だとバレてしまうわ」

「あつ…そうだ…だ、大祐くんも此処に招待されたの?」

「……………!?!」

? そして漸く、目の前に居るのが各務原あづみ、リゲルだと分かった瞬間。

「ああ…天国や…」

? 思わず昇天し掛ける九条大祐。

「大祐くん…?えと、大丈夫?」

「…はっ!」

? 各務原あづみは彼を心配して手をぎゅつと握る。

? その感触に気付いた九条は、明後日の方向へと飛んで行く意識を無理矢理戻した。

? すると目の前には自身の大好きで大好きで仕様が無い少女が、自分の手を握りながら此方を見つめてー

「精神的ダイレクトアタックは駄目だろお…!」

「リゲル、大祐くんが何を言ってるのか分からないよう」

「あづみも其処まで悲しむ事あるかしら…?」

「だって…その…大祐くんの事は何でも知っておきたいから…」

? 両方の人差し指をツンツンとさせながら、上目遣いで男という存在を殺しに掛かる天才少女各務原あづみ。

…とは言ったものの、彼女は企み等一切頭に無く、素でこの様な事をする。

? どうすれば可愛く見えるだろうか、どうやったら相手にして貰えるだろうか、といった考えは存在しない。

? 彼女の考えは唯一、どうすれば九条大祐を満足させてあげられるか、という献身的な物だ。

? だからこそ、九条大祐に頼まれた事は無理をしても実行する。

? その考えが彼を心配させている事に気付いて無いのは置いてお

こう。

(大祐くん…偶には命令みたいな事、言つて欲しいなあ…)

? 然し彼女も苦勞をしているものだ。

? 歳の近い男性に「何でも言う事を聞く」なんて度胸があつても言えない事を口にして。

? 彼女がそんな事を言っているのにも関わらず、九条は絶対に手出ししない。

? その所為か、各務原あづみは心の何処かで物足りなさを感じていた。

? 本人は九条大祐という男に少し過激な事をして欲しいのに。

? 別に各務原あづみは其方系が好きなのは無い。

? 寧ろ彼女は嫌う、女性を傷付ける男性を、自分の勝手な理由で男性を弄ぶ女性を。

? 話が少し変わるが、前者は完全に九条を好きになった理由だ。

? 彼は第一に女性を考える。

? 彼女はそれ以外にも、ぐつと来た部分が色々とおあるらしいが。

? 口にしてしまえば止まらないらしい。

? 話を戻し、加えて、後者の様な女性に九条大祐が取られる可能性があるから…だから自分も負けじとそう言った大胆発言をしてしまった。

? 各務原あづみという少女からは有り得ない言葉が出て来たのは、こう言った理由が挙がる。

? まあ…好きで仕方無くなり、想いをぶつけたというのもあるというのは本人は隠しているが。

? 完璧な惚気話だ。

「全く、あづみは可愛過ぎね」

「凄いですよね、何時見ても可愛いなんて。リゲルさんに関してには美しさに凛々しさを兼ね合わせ…まあ要するに、二人共何時見ても俺の目の保養になるって話ですね」

「…じ、じゃあ、もつとグイグイ来ても…良いんだよ…!」

? 九条の言葉をチャンスと捉えたのか、各務原あづみは期待の込

もった眼差しを彼に向ける。

？だが然し。

「いや：まだ14歳の少女に手を出すなんて：」

「大祐くんも15歳だよ？」

「：それにほら、リゲルさんも了承しないだろうしー」

「はあ：大祐、逆という事に気付いて。私もあづみも：その：大祐に襲って欲しかったり：て、言わせないで！恥ずかしくて死んじゃうわ！」

「ええっ!？」

？美しくて凛々しい女性から、まさかまさかの一言。

？自分が思っていた返しと全くもって真逆な答えを返され、驚愕の音を上げる九条大祐。

？其処に集まっていた全員が彼に視線を集中させた。

「お、なんや。ラブラブ話かいな！」

「：興味無いわ」

「綾瀬もそんな事言わんで、何時か自分も体験するかもせえへんで」

「ばっ：！天王寺飛鳥！貴方って人は：！」

「うわあ、綾瀬が怒ってもうた！」

？Z/Xのカードデバイス所持者に、そのパートナー達が集う場所で。

？一人小学生じみた低脳を見せ付けていく男が居た。

？その名は天王寺飛鳥。

？九条大祐：程では無いがハーレムな野郎。

？九条とは共感し合える所が多いのか、親友の中になりつつある。

？ハーレム同士、鈍感部隊結成の兆しか？

？ああ、丸で要らない情報だった。

「おいおい、女を怒らせると怖い事位分かんないのかよー」

「飛鳥に：何か言ったか？」

？そんな天王寺飛鳥を揶揄うかのような発言をする剣淵相馬だったが、自分の命を危険に晒す行為だという事に今更ながら思い出す。

？勿論、カードデバイス所持者全員という事は天王寺飛鳥の兄、天

王寺大和もその場に居るとい事だ。

？ 誰しもが認める弟好きな天王寺大和の前で、天王寺飛鳥を揶揄え
ばどうなるか。

？ それを今、劍淵相馬が証明してくれた。

？ 現在彼は、顎の下に拳銃を突きつけられている。

？ 引き金が引かれれば即死間違い無い距離だ。

？ 況してや天王寺大和：彼の銃を扱うスキルは折り紙付きだ。

？ その才能を軍隊と引き換えにしてもお釣りが来る程に素晴らし
い技術。

？ 少し煽て過ぎと思われるかも知れないが、それが彼、天王寺大和
だ。

？ そんな、黒いコートに葉巻といったイケメンな組み合わせが頗る
似合う男だが、大の弟好きという謎の要素があり、女性からも男性か
らも近づき難い存在。

… とうか天王寺飛鳥を守る為ならば、女性だろうが容赦無く撃つ
男だ。

？ 近づき難い、では無く、近付けないが正解かも知れない。

「す、すんませんでした…」

？ 劍淵相馬は苦笑いでそう告げる。

？ 対しては天王寺大和は、蛙を睨み付ける蛇の如く鋭い目線を当て
まくる。

「まあまあ、相馬きゅんも悪気があった訳じゃないだろうし… 此処は
手を引いて、ね？」

「… ふんっ、次は無いと思え」

？ 二人の緊迫した空間にルクスリアが乱入し、何とか事態を穏便に
済ませる。

？ 劍淵相馬も、何かと言ってルクスリアという女性の存在に助けら
れているのが良く分かる一面だった。

「… 助かった、ルクスリア」

「んふふ、もっと褒めても良いのよ♪」

「いや遠慮しとくわ」

(…ていうか、相馬さん、あれ絶対悪気あったよね)

? 九条大祐の要らぬ突っ込み。

? 彼もそれを口にするはずかと思っただのか、喉で出掛かっていた言葉を素直引っ込めた。

「大和は本当にあの弟が好きなのね」

「クレプスには関係無い」

「ふふっ…そうかも知れないわ」

「む…」

? 仲睦まじく喋る二人の珍しい光景に、一人ヤキモチを妬く少女。

? 上柚木綾瀬の妹、上柚木八千代だ。

? 可愛らしく頬をふくらませて、パートナーZ/Xであるアルモタヘルの後ろに隠れながら二人をじーっと見つめ続けている。

「八千代? どうしたの?…八千代?」

「えっ? あっ…アルモタヘルには関係…無い…」

「そうなの?…なんだー…八千代の役に立てるなら良かったのに」

? アルモタヘルは彼女の役に立てない事に不満を覚えたのか、至極詰まらなさそうな態度を取る。

「…八千代、頑張れっ」

? 状況を理解しているのかしていないのか、上柚木八千代の双子兼妹である上柚木さくらは、影から彼女を応援していた。

? 大好きなお姉さん二人の片方が全力で恋愛中、妹としては応援したい気持ちが湧くのも当たり前か。

? 然し上柚木八千代はそんなさくらを嫌う。

? 言い方が悪いが、彼女自身、妹のさくらの下位互換と思っ込んでしまっているからだ。

? 様々な面で劣り続ければそう思ってしまうのも無理は無いだらう。

? だが、天然な上柚木さくらはその事実を知らないのだ。

? 無自覚な物程恐ろしい物は無い。

? どうすれば良いのやら…と、上柚木綾瀬とさくらのパートナーZ/Xであるフォスフラムは悩み続けた。

? 小さい頃から割と険悪な空気を漂わせる八千代に、それでも大好きなお姉さんに近付きたいさくら。

? そこそこの確率で喧嘩をした事が無きにしも非ず。

? だが、それは過去の話となり、二人の関係は変わった。

? 其処に無理矢理九条大祐、天王寺飛鳥、森山碧の三人が割り込んだからだ。

? 事の初めは、姉の八千代と決別し、悲しむ上柚木さくらに話し掛けた九条大祐という存在だ。

? 更に天王寺飛鳥、森山碧が加わり、八千代を探し回って説得。

? 最終的には二人を対面で話し合わせ、偶に三人が口出し、それで対話の成立が完了。

? 上柚木八千代と上柚木さくらは仲の良い二人姉妹と変わったのだ。

(さくらがずっと此方を見てる…)

「応援してくれてるんだね、きつと」

「…うん。ありがと、さくら」

「…で? 何の応援してるんだろ?」

「もうっ、アルモタヘルは静かにしてて」

「え〜…」

? 丸で子供の様な反応を返すアルモタヘルに、上柚木八千代の表情には笑みが生まれた。

「あつ、八千代が此方に手を振ってくれたよ!」

「ふふっ…良かったですね、さくら。でも、さくらもお姉さんを応援している場合じゃありませんよ?」

「う、うんと…そうだね」

? 八千代から初めて手を振って貰い、嬉しくなって舞い上がるさくら。

? 然し、フォスフラムも言う通り、彼女も人の応援ばかりしている訳にはいかない。

? そう、上柚木さくらという少女もまた、恋する乙女の仲間なのだ。

? 相手が誰か等、フォスフラム以外には口外していない。

? 謎だ。

「良いじゃん、戦闘君は雷鳥君に渡せば?」

「ぶっ」

「ちよつ大祐さん!? 可笑しな事言わないで!」

「: 男から男にチョコとか、頭ヤバいんじゃないのか?:」

「ホモかよ」

「碧さんまで!」

? 今度は女性陣を置き去りに、男性陣の会話が始まった。

? 内容は同性愛に関して。

: 然し彼等は深く考えずに、明らかに同性愛を嫌っている。

? 世の中にはそういう類の人種が居るのも考えず。

? その会話を耳にしたクレプスは天王寺大和を見つめる。

「: クレプス、何だその目は」

「いや、思い当たる人物が居ただけよ」

「兄ちゃん同性愛だったんか!」

「違う飛鳥! 俺は断じて、飛鳥以外に興味は無い!」

「断じちゃ駄目だろ!」

? 三人の会話の中に、森山碧の突っ込みが炸裂する。

? 誰がどう聞いても同性愛(ブラザーコンプレックス)な天王寺大

和は、段々と立場が危うくなってきた。

? 本人があんな事を断言してしまったのだ。

? 誰しもが確信するとは思わないが、殆どの人は確実に天王寺大和

を危険視するだろう。

? 戦闘力的な面も、趣味的な面も。

「何やら楽しそうな事してるデース! 私も交せてくだサーイ!」

「ボクも一緒に交ざるニャー!」

? そして明らかに場違いな二人も乱入。

? 場が混沌とする前に其処から離脱する九条と森山碧。

「後は宜しく」

「ちよつ大祐さん!」

「彼奴つ...!」

「…俺は撤退するでしょう」

「私もそうするわ」

? 逃げる二人に続いて背中を向ける天王寺大和にクレプス。

? 最後にその場から聞こえたのは「クレプスさん!」という少年の声だった。

「…それで、イベントは何時始まるのでしょうか?」

「ふむ、分からんな」

? どうすれば良いのか分からないまま動揺する弓弦羽ミサキに、腕を組んでその時を待つガルマータ。

? 更に隣には彼をチラ見するケイツウー。

? 偶に弓弦羽ミサキとケイツウーの視線が合わさるが、お互いにつこり笑顔で違う方へと目を逸らす。

? その度に気まずく、漂う空気に耐えられなくなるガルマータだった。

「ふん、誰がこんな企画を考えたんだ…」

「良いじゃねえか! ちよことやは俺が全部ぶん取ってやる!」

「…さいてー!!」

「…神門、前言撤回だ」

「俺は何も言っていないぞ…」

? 多数の女性から殺意の視線と批判を喰らい、滅多に前言を撤回しないアレキサンダーが引つ込む。

? どうやら本気で殺されると思ったらしい。

? 然し同時に、彼の中の闘志が湧いたのも事実。

? 何れだけ戦闘狂なのかと、脳筋なのかと頭を抱える黒崎神門。

? そんな彼の足元には彼の妹、黒崎春日がベツタリとくっ付いていた。

「みか兄様、イベントというのが楽しみです!」

「そうか…春日が楽しみというのなら、相当面白い事に違いない」

? 兄妹ながらも互いを愛し合う二人。

? 九条大祐の居た前世からすれば、ネジの飛び方が可笑しいと思われるだろう。

「なんでもっと上手くそのネジを飛ばせなかつたんだ…」

？九条の心の声が口に出てしまう。

「全く…ブラコンが居て兄妹で愛し合ってたてホモが居て父親好きが居て…やはり頭のネジがー」

「ホモじゃないですってえ！」

「…気のせいかな、少年の声が聞こえた様な気がしたが」

「気のせいだろう」

？九条大祐の悪ふざけに態と乗っていく森山碧。

？確かに、この場に居る人物達は一癖も二癖もある者ばかりだ。

？それは誰も否定出来ないだろう。

？だからこそ意見の食い違いが生まれ、お互いを認め合うという事が出来ない。

？それも…昔の話となってしまったが。

「あら、ハーレムはその仲間じゃないのかしら？」

？ふと、騒ぎ立てる全員の前一人の女性が現れる。

？九条大祐に刺さる言葉を口にしながら。

「…ヴェスパローゼさんに言われたらどうしようも無いじゃないですか」

「だいですけっ！」

「おつと…きさらちゃん、相変わらず元気だね」

「ういー！」

？百目鬼きさらは九条大祐を視界に入れた途端、走り出し、彼の胸元へとダイブする。

？そしてその後ろに居るのは紛れも無い、このイベントを企て準備を進めていた張本人、ヴェスパローゼ。

「大祐、来てくれたんですね」

「お母さんっ」

「…まさか、ヴェスパローゼだけじゃなくベガも一緒だったなんて」

「？リゲルさんはこのイベントの事、知ってたんですか？」

？九条は然りげ無く、リゲルの核心を突く言葉を投げ掛ける。

「い、いいえ？私にはさっぱり…何の事か分からないわね」

「リゲルさん、目が泳いでますよ」

「…なあ、それは良いからよ。主催者が来たんだからさっさと始めようぜ」

？ 割り込む様に、催促する様に森山碧が話し掛ける。

？ 何時から居たのか分からない、背後にエレシユキガルを連れて。

「ええ、そろそろ始める積もりよ。それと今此処に居ない人達は別件で忙しいと思つて頂戴。一応、倉敷世羅って子は連れて来たわ」

「私も居ますの！」

「あほのめ五月蠅い…」

？ ヴェスパローゼの隣から倉敷世羅がピョコツと姿を見せる。

？ 更はその隣で蝶ヶ崎ほのめが大きな声で自分をアピールし、彼女から一步置いた距離感で迦陵頻迦が耳を塞いでいた。

？ 彼女等は仲が良いのか悪いのか。

「取り敢えず、これで全員ね。じゃあ始めましょうか」

「…世羅、もしかして道に迷った？」

「ううん…違うの。にいの為に…」

？ 倉敷世羅はあまり照れる事の無い活発少女。

？ モジモジとしながら手に持っている何かを必死に隠すという見慣れない光景に、九条大祐と戦闘冷亜は疑問を覚えた。

？ 特に戦闘冷亜。

？ 彼は倉敷世羅の幼馴染であるからこそ、近くで彼女を見てきた。

？ 何時もの彼女らしく無い所を至極怪しんでいる。

？ バレンタインというイベントで、そんな事気にしてられないと、直ぐに何処かへ視線を変えるが。

「さあ、兎に角話を聞いて頂戴。この場に居る全員が参加者なんだから」

「…鬼ごつこの、ですか？」

「そうよ。唯、今回の鬼ごつこは普通の鬼ごつこじゃないわ。ルールは簡単、女性は鬼、男性は逃げる者達、捕まれば女性は10分以内に好きな事を一つだけ男性に命令出来るわ」

「うんうん…うんうん？」

? 相槌を打った積もりの森山碧、疑問に感じる事があるようだ。
「あの…きーせん、それって男性陣のメリットが無くないすか?」

? そんな彼の質問に、ヴェスパローゼは九条大祐を見ながら舌で自身の唇を舐める。

? 彼は背筋に寒気を感じた。

「まあ…この鬼ごっこも時間制限有りなのよ。そして、見事逃げ切った男性には素敵な素敵なメリットがあるわ」

「素敵なメリット? なんやそれ」

「指名した女性からチョコを貰えて、且つ好きな命令を一つ下せるわ」
「ちよつと僕、やる気出てきたわ」

? ヴェスパローゼの言葉に珍しくやる気を見せる天王寺飛鳥。

? この時誰もがこう思った。

? お前はやる気を出さなくても、チョコを貰えるだろと。

「…ふふ、私もヤル気が出て来ちゃった、相馬きゅん♪」

「ルクスリア、お前のやる気は字が違うから止めろ!」

「…それで、何時からスタートなんだ? 武器使用の有無も聞きたい」

? ルクスリア、剣淵相馬が言い合う中、天王寺大和は至って冷静にヴェスパローゼへ質問を投げ付ける。

「そうね…武器の使用は全面的に禁止するわ。そしてスタートの時間よね。此れなら男性の全員は驚くわよ?」

「驚く?」

「だって、武器も何も無いのよ? 体格差があるもの。女性側に有利が付かないと」

? 現在進行形で男性陣の脳裏に嫌な予感が通り過ぎた。

「今から私がスタートと言うわ。そしたら男性陣のスタート。それから30秒経過したら、女性陣のスタートよ♪」

「ヴェスパローゼさんまでもがやる気スイッチ入ってる!」

「それじゃあ…スタートよ!」

「……………え?」

「もうスタートしたんか!?!…ちよつ、大祐君! 固まってないで逃げるで!」

「飛鳥、安心しろ。俺が付いてる」

？：そう言いながら徐に弟をお姫様抱っこしてその場を離れる天王寺大和。

「何で雷鳥まで此方に来るんだよ！」

「五月蠅い…お前が離れろ」

？：始まって直ぐに唾み合いを起こす戦闘冷亜に雷鳥超。

？：相変わらず仲が悪い。

「ふん…俺は此処から動かんぞ」

「じゃあ、みか兄様は春日が頂きます♪」

「ああ、好きにしてくれ。春日」

？：最早一種の変態と化した黒崎神門。

？：近くで見ていた女性陣は全員がドン引きしていた。

「ヤバイぞ…ルクスリアに、男として殺される…て、おい！九条、お前が一番狙われる確率が高いんだぞ！さっさと逃げるぞ！」

「…えっ、あっはい…ガルマータさんは？」

「冷や汗全開でもう遠くまで逃げてる！」

「ええっ!？」

？：ルクスリアという女性から逃げるべく必死になる剣淵相馬に、多数の女性から視線を一気に向けられ、既に戦意喪失の九条大祐。

？：彼は剣淵相馬に連れられる様にその場から逃げ始める。

？：ガルマータは…とある女性二人から兎に角距離を取るべく、スタートダッシュで全力を出していた。

「…ふふっ、誰も逃がさない」

…：戦慄の、リアル鬼ごっこ（バレンタイン）の始まりだ。

…

バレンタイン（中編）

『さーて、遂に、遂に始まってしまいました！恐怖のバレンタインデー鬼ごっこ！男性陣は既に遠方まで逃げています！』

「…はっ!?へっきー!?其処で何してんの!」

『何って…解説兼実況だよ、ハーレム君』

「その呼び名を止めろお!」

? 敷地内に一つだけ立っており、至極目立つ解説席。

? 森山碧、彼の姿は其処にあった。

「何か騒がしいのが居ないと思ったら…!」

『おいおい、軽く俺をデイスるの止めてくれよ。大祐の現在地を公開しちゃうぞ〜?』

「全てはへっきーの手中って事かよ…!」

? 早くも息切れを見せる九条大祐。

『おつと?もう疲れてきたのか、九条大祐!女性陣、彼奴を襲うなら今しか無いぞ〜?意外に持つからな、大祐は』

『碧、彼方の方が面白い事になってる』

『おお、ありがとうエレシユキガル。後でお礼しなければだな!』

『楽しみ…♪』

『さあて、彼方では何やら波乱な状況が巻き起こっている様子だあ!逸早く逃げたガルマータが二人の女性に囲まれている!』

? 森山碧の実況通り、ガルマータはケイツウーと弓弦羽ミサキに挟まれていた。

? じわじわと間隔が無くなっていく恐怖。

? ガルマータはそんなものを感じていた。

「…ミサキ、ケイツウー、一回其処で止まー!」

「嫌です☆」

「幾らガルマータ様の命令とはいえど、今回ばかりは聞けません!」
「ふ、二人共、待て!話し合えばー!」

『あーつと!此処でガルマータ脱落か!?先に彼に触れたのはー!』

? 其処で森山碧の解説が止まる。

？ガルマータの体に触れていたのは、紛れもなく弓弦羽ミサキとケイツウー。

？然し余りにも同タイミング過ぎた所為か、解説の森山碧が困る事態となつてしまった。

『…うん、そうだな…ビデオ判定と行きましよう！』

？自分では判断出来ないと思つたのか、早くも最終手段のビデオ判定を利用する。

「…て、一体何処に監視カメラが付いてんだか…」

？こんな状況だからかも知れないが、些細な事に気が行つてしまう九条大祐。

？彼は設置されているトラバサミの簡易的な物を回避し、逃げつつも突つ込みの精神だけは忘れない。

？一体何時からそんなキャラになつてしまったのか。

『…はい！判定が出ました！これはもう同時にタッチしたとしか言えないレベルですので、ガルマータさん！二人の美女と…素敵な1日を！……………滅びれば良いのに』

「おいへつきー！最後の何だ！」

「…お、俺は…どうすれば」

「ガル君は、私と一緒に何処かお出掛けに行きましよう！」

「いえ！ガルマータ様は…私と…その…うう…」

？ケイツウー…彼女はガルマータと何がしたいのか、言えないという事はそういう意味だろう。

？対して弓弦羽ミサキは、一般的に考えて優しい命令を下す。

？最早命令というか唯のお誘いだ。

？これでは、捕まったガルマータが間違い無く弓弦羽ミサキ側へ付くのは目に見えている。

？然し、恐らく誘い出してからが始まりなのだろう。

？弓弦羽ミサキとしては、先ずケイツウーからガルマータを離す事からがスタートだ。

？其処から一気に畳み掛けて…と、見た目の割には際どい線を辿る彼女。

？ 純粋なアイドルでは無かったのか？

「…ガルマータ様、では、弓弦羽ミサキとの交流が終わり次第、その…私と…で、で…で…で…となど如何でしょう…？」

「……………う、うむ…ガーディアンとして、ルールは絶対だからな…。二人の要望に応えられる様、頑張らせて貰おう」

『やだ、ガルマータ君イケメン』

「へっきーキャラ崩壊してんぞ」

『うるせ』

？ 九条大祐と森山碧の会話が既に日常の物となっている。

…こうしてガルマータと弓弦羽ミサキは何処か知らぬ場所へと姿を消した。

？ ケイツウーはガルマータの帰りを待つべく、ずっとこの場に居座る様だ。

？ 譲り合い、等と言って良いのか分からないが、弓弦羽ミサキを優先した優しさは彼女の一つの取り柄だろう。

？ この時、ガルマータの中でのケイツウーという女性の株が少し上がっていた。

『というか女怖ええ…乙女とか嘘だろ…見てる此方がはらはらするな』

「やつてる奴等の方がもつとはらはらしてるからな」

『だろうな、まあ頑張れよ。…さて、彼方は天王寺大和の逃げる道をクレプスが遮断している！ 弟を抱き抱えた大和兄ちゃん、此処からどうする!?!』

？ 森山碧の、解説+日常会話を使い熟す辺り、九条大祐は至って普通に上手いなと感じていた。

？ だが、余裕を持って逃げていた彼にも危機が迫っていた。

？ 背後から忍び寄る気配。

「…！」

？ 九条は無言で横にサッと避ける。

？ すると、彼が先程まで居た場所を羽交い締めにしようとする女性が一人。

「あらら、逃げられちゃった♪」

? その女性は九条を見て、にっこりと笑顔を向ける。

? 彼女の笑顔は九条の背筋を凍らせた。

「ルクスリアさん、貴女：相馬さんが目的じゃー」

「私が何時、相馬きゅんを好きだと言ったかしら？」

? ルクスリアの意外な答えに驚愕を隠し切れない九条大祐。

? 彼の中ではてつきり、自分は遊びで劍淵相馬が本命と思っていた為、口から言葉が出なくなってしまった。

「そんな冗談：通じませんよ」

「ふふっ、どうかしらね。現に私は：貴方を狙い仕留めようとしている」

「ルクスリアさん一人位なら逃げ切れる自信、有りますけど？」

「そうね。だから、応援を呼ばせて貰ったわ」

? 九条はこれ以上話している時間は無いと、その場から即座に離れようと走り始める。

? 然し時既に遅し。

? 彼の周りには、彼を囲うかの様に円を描いて逃がそうとしない女性陣。

? 状況的には先程のガルマータと同じ事になっている。

「さあ、大祐。大人しく捕まって頂戴」

「：そういう悪役染みた話し方、久しぶりですね、ヴェスパローゼさん」

「言うて此方も人数自体は少ないわ。逃げようと思えば、貴方なら逃げられるんじゃないかしら？」

「貴女は何時も：無理難題を仰る」

? 口では強気な九条も、顔には苦笑いを浮かべていた。

? ヴェスパローゼの言う通り、周りの女性はベガ、リゲル、各務原あづみ、百目鬼きさら、ヴェスパローゼ、ルクスリアの6人。

? バトルドレスが起動出来るのであれば、九条は余裕で振り切れるだろう。

? そう、バトルドレスを起動出来れば、だが。

? 武器の使用を全般禁止したのにはこういう理由も含めていたの
であろう。

? 九条はバトルドレス装着を試みるも、何故かバチツと弾かれてし
まう。

? ヴェスパローゼ: いや、この場合はベガが何か仕掛けたに違いな
い。

? どうすればこの窮地を脱せるか、この短い時間で九条は試行錯誤
を繰り返す。

「: 大祐、どうして逃げる必要があるのですか? 捕まってしまえば、貴
方の大好きなあづみとリゲルと: 貴方は繋がる事が出来るのですよ
?」

「残念ながらこういうイベントは、面白さを取る人間でしてね。縛ら
れた空間の中で多数VS自分一人というのは、スリル満点で楽しい
じゃないですか」

「: 私は大祐くんに、本当は普通に渡したかったなあ:」

? 各務原あづみの本音が口から漏れ出す。

(しつかし: この場を乗り切るにはルクスリアさんとヴェスパローゼ
さんが厄介だな。さてどうするか:)

? 九条大祐としてはこの状況を楽しみたくもあるが、失敗すれば反
動が自分に返って来る事を悩んでいた。

? それがルクスリア、ヴェスパローゼという女性二人を攻略出来れ
ば話は別らしい。

? 要するに、先ずは二人をどうにかしなければ逃げようにも逃げら
れないという事だ。

? そんな、一触即発という言葉が相応しい状況で、天は彼を見捨て
はしなかった。

「大祐くん、掴まって!」

? 何処からか、自分の名前を呼ぶ声が周囲に響き渡る。

? 九条大祐を「大祐くん」と呼ぶ人物は各務原あづみ。

? だが、彼女は九条を追い詰める側の立場に居た。

? そんな「私が触れないなら相手から触って貰えば良いじゃない」

みたいな発言をする人物では無いと、九条大祐自身が一番分かっている。

「?ならこの声の主は誰なのか。」

「?その場に居る全員がそう思った瞬間、九条の背後から少女らしき影が現れる。」

「ナナヤ!有難いタイミングだ、助かる!」

「?彼はそう言っつて、後ろから伸ばされる彼女の手を握る。」

「:...此方こそ、ありがと:...♪」

「はい?」

「?九条は一瞬、腑抜けた声を出した。」

「?然し直ぐに気付く。」

「?これは、危険な選択肢だったという事に。」

「ぎ、ちよつと遠くに:...二人でデートしに行くこつ♪」

「まつ待って!:...大祐くんを何処に連れて行くの」

「うくん:...そうだね、この敷地内には居るから、見つけれたら私は大祐くんから手を引くよ?けど:...見つけれなかったら、んふふく大祐くんをどうしよつかかな♪」

「ちよつ、ナナヤ、頬擦りは止せ」

「?九条大祐の正真正銘、お互いの了承の元、付き合いをしている各務原あづみの前で彼女に見せ付けるかの様な言動をするナナヤ。」

「?彼は私の物だと言いつ張りたいからなのか、将又自分の方が彼に相応しいと言いつ張りたいからなのか。」

「?何方にせよ考えている事が卑劣で幼稚なナナヤだった。」

「?然し、自分の一番好きで大切な存在にそんな事をされて黙つている程、各務原あづみは大人では無い。」

「?いや:...大人でも黙る筈がない。」

「?現にリゲル、ベガ、ヴェスパローゼ、百目鬼きさらもナナヤに対して険悪な雰囲気醸し出していた。」

「?唯一人、ルクスリアを抜いて。」

「?さあ、私と大祐くんを見つけてみてよ。出来るなら、ね♪」

「?ナナヤの方がよつぽど悪役染みてるじゃないか!」

「ほらほら大祐くん、行くよー」

「へ？行くって何処にー」

？彼の言葉を最後に、ナナヤと九条大祐はその場から消え去った。

？唐突なイレギュラーの登場に、沈黙する各務原あづみ達。

？然しその沈黙は直ぐに打ち破られた。

「…大祐くんを、見つけに行かなきゃっ」

？そう言っつて、各務原あづみは何処に居るかも分からない二人を探しに走り出す。

「私も、あづみの意見に賛成するわ」

？彼女に続いて、リゲルも走り出す。

「当てがないのは困ったものですが…」

「途中出場であんな自由勝手な事されたんじや、流石の私達も黙っては無いわよ。きさら、スカウトシーク達を呼んで」

「ういー…きいも、だいすけさがすっ」

『おっと…俺が天王寺大和とクレプスの戦いに集中している間に、大祐サイドが訳分からん事になってるな。解説が追いつかん』

？そんな森山碧の解説も耳に入っているのか分からないが、彼女達は一人の男性を探しに足を動かした。

『…あれ？このゲームの趣旨、意味無くね』

『碧の言う通り。全員が全員自由過ぎるわ。…特にナナヤ。あんなハーレム男に味方する訳じゃ無いけど、今回ばかりは大変そうね』

『まあ、彼奴に同情は要らねえよ。ハーレム路線を進む奴に碌な人間は居ないからな。…頑張っつて乗り越えて欲しいもんだ』

――

「…ナナヤ、あれは一体どういう事だ」

「んー？愛の確かめ？」

「はあ…」

? 九条大祐には、ナナヤが何を言っているのかが分からず終いでいた。

「一体何の話をー」

「だって、大祐くんの事が本当に好きな子達なら、必死になって私達を探すでしょ? これは…あの子達が大祐くんを好きかどうか、確かめるためにやってるの」

「…他に目的は?」

「大祐くんはバトルドレスが起動出来ない。私からは逃げられない。という事は、大祐くんと二人つきりになるチャンスだと思ったただけだもん」

? 少しの幼さを見せ、九条大祐を魅了するナナヤ。

? 彼が「幼い」という言葉に弱い事を知っていて態とやっているのか、中々に悪巧みが上手い彼女。

? 完全にナナヤの思い通りにされていると、弄ばれている自分が悲しくなる九条だった。

「…にしても、こんな手作り感満載な木で作られた小屋に連れて来て、何するの? 如何にもヴェスパローゼさんかベガさんが、男性陣の逃げ場所として作ってくれた場所っぽいと…」

? 頭に? マークを浮かべ、周囲をキョロキョロと見渡す九条大祐。

? そんな彼を見つめるナナヤは、口元をニヤリと歪ませる。

「ふーん…これ、此処に逃げたら絶対に捕まーちよっ…ナナヤ!」
「あ、バレちゃった?」

? 九条大祐の反応に、ナナヤはキャピツと笑顔を見せる。

? 一体彼に何があったのか。

? 外見は至って普通の、何時も通りの九条大祐だ。

? 然し彼の身には何かが起こっていた。

? そう、体が動かないのだ。

? 両手は後ろに縛られた様に、両足はロープで固定されたかの様に。

? 九条大祐の体は動きに制限を掛けられていた。

「…ナナヤ、これを解除しろ」

「いやっ。だって、私はちゃんと言ったんだもん。あの子達が太祐くんを見つけれなければどうなるかって」

？ナナヤはそのまま、身動きの取れない九条太祐に近付き、彼の身をゆつくりと地面に倒して行く。

「だから、太祐くんをゲットした私は、貴方を好きな様にしていいの：♪」

？そして彼の腹部の上へ、徐に股がった。

「ナナヤ、本当に止せ。何をする積りだ」

「悪いのは太祐くんなんだよ？私に構ってくれないから。：それに、これからする事なんて太祐くんも分かってる筈だよ」

「：正気か？神様と人なんだぞ？」

「だからこそ。神様と人間の間に産まれるのって、何方なんだろうね：♪凄いい気になっちゃおう」

？ナナヤはずっと彼を見つめ、笑みを浮かべ、九条の頬から首へと撫でる様な手付きで触り始める。

「私は知ってるよ。太祐くんが、誰ともした事無いの」

「当たり前だ、まだ15歳なんだからな。：：というか、神様にはプライバシーを尊重するって概念が無いのか？」

「それは置いといて。：：という事は太祐くん、穢れて物を知らないんだよね」

「だから？」

「そんな太祐くんを見てたらね：：んふっ♪」

？するとナナヤは、自らの唇を九条太祐の唇へ近付けて行く。

「壊したくなっちゃった：♪」

「：：！」

？そう言ってナナヤは九条太祐へと、徐々に徐々に唇の距離を短くして行く。

？そして互いの唇同士が触れ合いそうになった瞬間。

？ほんの一瞬だが、眩い光が二人を包んだ。

？あまりの眩しさ故にナナヤは目を閉じ、直ぐにパチッと開く。

？すると先程まで股がっていた彼が目の前で立っていた。

「…本気で、危なかった」

「あー逃げちや駄目なんだよっ」

？駄々をこねるナナヤ、対して九条大祐は冷や汗を額から流していた。

？そんな彼の体にはバトルドレスが装着ささっている。

？恐らくベガが、武器の使用禁止を解除したのだろう。

？理由？多分、女の勘というやつだ。

？それに伴い九条のバトルドレスも解放、間一髪でナナヤの力を振り切つて逃げたという訳だ。

「んもうー…酷いよ、大祐くんっ」

「フアーストキスを易々と奪われてたまるか」

「全く…私をその気にさせたのは大祐くんなんだから。責任取つてよねっ」

「んな無茶な…」

？頭に手を当て、やれやれと左右に動かす。

？九条大祐は本心から呆れていた。

？然しそれと同時に、ナナヤは本気で自分を狙いに来ているとも感じた。

？このままでは何時しか…それとも今この場で、又襲われ兼ねない。

？先程部屋を見渡し、この小屋の何処に扉があるのかは把握している。

？後が出るだけなのだが。

「ナナヤ、どうせこの扉…オンボロそうに見えて開かないんだろ」

「大祐くんはさっすがだね。そうだよ、外部からの力は受け付けるけど内部からのそれは拒否する様に改造しといたのっ。どう？凄いでしょ？」

「その頭をもっと違う事に活かしてくれないか…」

？再度額に手を当てる九条大祐。

？因みにナナヤは、先程の行為は幼さを利用した言動をして彼に襲い掛かった。

?だが、彼女は普通にしているても精神的に幼い所が多々見受けられる。

?今のこの扉の仕掛け、実はかなりの時間を費やして思い付いた物なのだ。

?常人であれば直ぐに思い付きそうな発想だが。

?どうしても九条大祐と自身を二人っきりの空間に閉じ込めたいと、悩んだ末にこの仕掛け。

?寧ろ悩む必要があったのかと突っ込みたくなる程だ。

?それに、ナナヤの言動は誰がどう見ても、どう聞いても少女其の物だ。

?見た目が少女であるが故に言動までもが少女化しているのか。

?神様の実態というのは熟分らない事だらけだ。

?と、考えながら九条大祐はナナヤを見つめる。

「…でも、その好意は素直に嬉しいよ。有難う」

「えっ…と…そ、そんな急に態度変えられても、私が困っちゃう…:ていうか…なんていうか…」

「取り敢えず、今迄通り背中にくっつくのは気にしないから。極度な触れ合いは遠慮願うけど」

「むう…:どうせあの各務原あづみって子とりゲルってグラマラスな子に攻められたら、最後まで到達しちゃうんでしょ?」

「二人がそれを望めば、だけどね。…後、来客が一人来ている様だから入れてあげて」

?九条のその言葉に反応するかの如く、扉がガタツと音を立てる。

?最早誰かが居る事等明白だ。

?それはナナヤも分かっている、だからこそ嫌な表情を浮かべている。

?本来は二人っきりの予定がこんなにも早く誰かに見つかったから、という理由もあるのだろう。

?彼女は渋々「開いてるよ」と一言。

?すると、ボロボロの扉がギイという音を鳴らしながら開く。

?其処に居たのは――

「…にいい、お、おじやまします」

「世羅！良く此処が分かったね！」

「何で大祐くんは嬉しそうな…」

「には世羅が来て、嬉しいの？」

「うん」

「…そう言ってくれと、世羅の方が嬉しくなる／＼／」

？幼い少女はモジモジと両手を合わせ、顔を下に向けながら照れていた。

？然し九条大祐としては、何時もの彼女らしく無い事が気に掛かっている。

？倉敷世羅の取り柄である活発さがあまり目立たないというのは、彼の中に違和感を齎した。

「…えーと、で。世羅はどうして此処に？戦闘君は探さなくて良いの？」

「戦闘くんは近くに居るきこくしじよむねにくに夢中だから、嫌いつ。男の子は皆、なんで胸の大きい女性が好きなの？」

「厳密に言えば誰も彼もが胸が好きなのは訳じゃないんだよ。実際、俺自身も胸の大きさを気にする男じゃないしね」

「大祐くんは確かにそうだよね…」

「それに、好きになってしまえば胸の大きさをなんてどうでも良くなるんだよ。相手の内面含めて愛しているわけだから」

？九条大祐の諭すような口調に何かを気付かされた倉敷世羅。

？そして彼の「胸の大きさを気にする男じゃない」という言葉を聞き、又もや恥ずかしがっている。

？何故か調子の狂う九条大祐だった。

「…じ、じゃあ…には、胸の小さな女性も受け入れるって事…？」

「相手が俺に好意を持って接して来てくれるのであれば、その好意には最大限応える積りだよ」

「それが…世羅でも…？」

？そう言いながら倉敷世羅は、ずっと後ろに隠していたハート型の何かを九条大祐の前へ出す。

? 流石の九条も状況を理解したのか、あたふたと慌てふためく。
「い、いや…世羅。君は俺なんかよりずっと素晴らしい人と絶対巡り会えるって。世羅は凄く可愛いんだから。勿論、内面もね」

? 彼は倉敷世羅にそう告げると、彼女の頭を撫でてやる。

「…世羅じゃ、だめ…?」

「駄目じゃないよ。でも…世羅にはもつと良い人が見つかるから。何と無くそんな気がする」

「大祐くん、せめて確証を得てから話そうよ」

? ナナヤに痛い所を突かれ九条は「うぐつ…」と声を出す。

? 確かに、彼自身が確証を得ないと動かないタイプの人間なのに、人に対してその中途半端っぷりはなんだと。

? この時「やっぱり勘で話しちや駄目だな」と内心後悔する九条大祐だった。

「せ、世羅は…にいが良いのっ」

「ほらー、世羅ちゃんは自分の気持ちをちゃんと伝えてるよー? 大祐くんも応えてあげなきゃ」

「…そうだよな」

? 何故ナナヤにリードされているのか、抑リード出来る立場に居るのか? 等、色々と余計な事を考え始める。

? そんな事を言ってしまうえば自分もそうだと言われてしまうが為に口にはしないが。

? 然し乍ら彼は真剣に倉敷世羅の将来を考えていた。

? 自分なんか彼女の相手が良いのか、だが、相手からの好意は素直に受け取って応えると言ってしまった。

? 倉敷世羅に好意を寄せられた以上、現状九条大祐は彼女を受け入れる他無い。

「…うん。世羅が良いなら、俺は構わないよ」

「ほんとっ!?!」

「でも、これだけは覚えておいて欲しい。もし他に好きな人が出来たら、俺よりも其方を優先して欲しいんだ。其れだけは絶対」

「む…:にいの他に好きな人なんて出来ない…:て、思うのに」

「万が一だよ。…それに、神門はどうなの？」

「みかにはお兄ちゃんって感じなの。凄く優しいお兄ちゃん」

「戦斗君」

「彼奴は…許さない」

「世羅ちゃんこわーい。あははっ♪」

?丸で揶揄うかの様に笑って見せるナナヤ。

?やはり神様にデリカシーという概念は存在しないらしい。

?笑顔は凄く可愛い、が然し言っている事が微妙な気持ちになる事

から、九条大祐はナナヤに苦笑いを浮かべる。

?それは倉敷世羅も同じらしく、彼女は苦笑い…では無く頬を膨らませて怒りを表していた。

…怒りを表している筈なのに可愛いとは、等と思ってしまう九条。

?やはり可愛さは正義という事なのか。

?cute||justice、正にその通りだ。

「…あ、そうだ。世羅に見つかったんだから、戻っても良いよね」

「えー…もうちよつと二人だけで居たかったのに…」

「あづみお姉ちゃんと隣に居るむねにく、にいの事必死に探してたよ？」

「マジか！じゃあ帰る!!」

「大祐くんの基準って何なのかなあ…?」

?二人の事になると考える間も無く行動に移す。

?それが九条大祐という男だ。

?だが、ナナヤは彼が何故そうなのかとずっと悩み続けている。

?何故二人を対象に取った時だけあんなにも俊敏なのか。

?答えはまだ見つかっていない様子だ。

「ナナヤ、マジで此処から出してくれないか？」

「うーんとね…その必要、無いかもしれないよ」

「自力で開けろって事か…」

?…一時的に封じ込められたバトルドレスを解放した今、九条は破ろうと思えばナナヤの謎結界を簡単に解く事が出来るだろう。

?だが、ナナヤはそういう意味合いで「必要無い」と言った訳では

無い。

? いやあどうい理由で必要無いと口にしたのか。

? それは直ぐに分かった。

? 九条は自分の思い込んだ通り、扉を強引に開けようとドアノブに手を掛ける。

? 然しその瞬間。

「大祐くん!!」

「おあっ!?!」

? 急に勢い良く開いた扉に押し出され、九条は地面へ尻餅を着いてしまう。

「大祐くん…見つけーきゃっ」

? 更に扉を開けた張本人、各務原あづみが足を滑らせて九条の胸元へとダイブ。

? 然も彼女の後ろに居た女性陣までもがバランスを崩し、九条の上へ覆い被さる様に倒れ込む。

? どうしてそうなってしまったのか。

? 実はナナヤは嘘を吐いていたのだ。

? 彼女は「内側からは開けられないが、外側からは開けらる」と九条に伝えた。

? 然し、これが嘘だった。

? 正しくは「内側からも外側からも開けられない」が正解だ。

? では何故、倉敷世羅は入れたのか。

? あの時ナナヤは「開いてるよ」と一言言い放った。

? 只其れだけで扉の絡繰は一時的に解除されたのだ。

? だが、九条大祐が倉敷世羅との会話を真剣にしている間に再度絡繰を掛け直した、という。

? 何をしてしても開かない扉を前に、各務原あづみ達は強引に突破しようと考えた。

? リゲルやベガがバトルドレスを起動させ、攻撃。

? ヴェスパローゼと百目鬼きさらが蜂に攻撃を指示。

? 然しそれでビクともしない扉。

? 結果、全員で押した方が早いという事になり、押してみたところ。
? 九条大祐が同タイミングで扉のドアノブに触れ、ナナヤの結界を
打ち破った。

? 偶然に偶然が重なり、見事こんな状況になったという訳だ。

「いてて…あれ、あづみさんにリゲルさん…ベガさん達まで」

「ありや? 可笑しいなあ…どうして解除されたんだろ…」

? 自身の力が打ち破られ、本気で悩み始めるナナヤ。

? 完全にナナヤ潰しと化している九条大祐。

? だが、彼女の結界が破られた理由は彼だけでは無かった。

「ナナヤ…貴女は好い加減大人しくしなさい」

「おいおい大祐、折角助けに来てやったのに。リア充生活全開を俺に

見せ付けているのか?」

? そう、同じ神であるエレシユキガルに、神である彼女の恩恵を一

番得ている森山碧が加わり、ナナヤの謎結界を潰したのだ。

「結構強い聖域を生成したのね」

「それが大祐くんに一瞬で破られた…」

「あら、神の力が人間に敵わなくて、悲観しているのかしら?」

「…ふふっ…やっぱり、大祐くんは流石だねっ!」

「…ナナヤが壊されたわ」

? エレシユキガルは鳩が豆鉄砲を食らったかのような表情で、ナナヤ

を見つめる。

? 以前の彼女なら従わない者、自分よりも上の力を持つ者が居れば

即座に排除しに掛かっていた。

? だが、今の彼女は違う。

? 純粹に九条大祐の能力を評価している。

? 見た事も聞いた事も無いナナヤの言動に、少しばかり戸惑うエレ

シユキガル。

「神様って、案外変わり易いのか?」

「…その考え方は間違い。私は碧の御蔭で変わったのは認めるけど…

ナナヤがあんな風になるなんて」

? 驚きを隠し切れないエレシユキガル、対して森山碧は興味を示し

ていなかった。

？興味其の物が無いからだ。

？ナナヤに無関心なのだから当たり前だろう。

「あつ、だ、大祐くん、大丈夫…？怪我してない？」

「大丈夫…あづみさんやリゲルさん達が無事なら俺は良いんですよ」

「武器縛りを解除して正解でしたね。立てますか？大祐」

「有難う、ベガさん」

「私も手伝うわ」

？尻餅を着いた時の振動が頭に来たのか、フラフラと安定した行動が取れない九条。

？そんな彼を、リゲルとベガで両脇で支える。

「俺、今凄く幸せです」

「ふふつ、大祐もそんな事を思うのね」

「に、私が前を歩いてとらばさみって危ないの、どけとくつ」

「きいもてつだう！」

「じゃあ、私は後ろを付いて歩いてようかしら。万が一倒れたりしたら危ないわ」

「という事は、後ろに倒ればヴェスパローゼさんの膝枕でも待つてるんですか？」

「いいえ？体勢的にそれはキツイわ。だから、この胸で大祐をキャッチしてあげる」

？そう言いながらクスクスと笑うヴェスパローゼ。

？そんな後ろからの笑い声に、苦笑いを見せる九条大祐。

？二人で仲良く話していると目の前に各務原あづみがぴよんと現れる。

「え、えつと、私は大祐くんの話し相手が良いかな…？」

「それなら私も」

「あづみさんも有難うね。でも…ナナヤ、本当に反省しているのか？」

「してるもんつ。本来ならこうなる予定じゃなかったんだよ？」

？彼は、ああ、そりゃそうだと心の中で突っ込む。

？ナナヤの目的は完全に九条其の物であつて、話したいから愛を

確かめたいから〜といった事は建前にしか過ぎない。

？あのままナナヤの思い通りに事が進んでいたら、間違い無く九条大祐は彼女の物となっていただろう。

「だから何時も言ってるんだろ。事は早めに済ませろってさ」

「そういうへつきーは、エレシユキガルさんとどうなの？」

「ん？ああ…まあ、な」

「えっ…まさか…済ましー」

「てませーん！…あ、これマジな」

？森山碧のフェイントに思わず殴り掛かりそうになる九条大祐。

？だが、リゲルとベガに挟まれ、支えられている今はぐつと我慢を貫く。

？目の前には各務原あづみも居て、後ろにはヴェスパローゼが居て、背中付近にはナナヤが居て。

？因みに彼を支えているベガは、隣で好きな人がこんな話を話している為、顔を真っ赤にさせていた。

「…何だろう、凄く苛々するわー」

「へつきー、それは個人の見解でしょ。…それはそうと、バレンタインイベントはどうなったの？」

「一応続いているぜい。まあ、殆ど終わったけどな。結果は後で報告するわ。お前、疲れてるだろ」

？森山碧は丸で見通したかの様に、鋭い視線を九条へ浴びせる。

「…何故分かった」

「そりゃあ分かるわよ。だって大祐、顔が寝れているわよ？一体ナナヤに何されたの…」

「てへっ☆」

「全く…ナナヤは…」

「それは兎も角、今は大祐を自宅で休ませるのが先です。私達はこのまま帰りますので、後は森山碧…貴方が仕切って下さい」

「俺!? イベント主催者が居なくなったらやる意味ないじゃないですか！」

「私は大祐の心身の方が心配です。だから其方を優先させて頂きま

す。イベントを企画した者として、思わぬ危害が加わってしまった者の看病は見るべきだと考えているので」

？すらすらと自分の意見を述べるベガの言葉を聞いて、森山碧は微妙な表情を見せた。

？彼女は只、親友の側に居たいだけなんじゃないかと思ってしまうたからだ。

？然しそれは口に出さない森山碧。

？たった一言「了解した」と言っつて、エレシユキガルと一緒にその場を立ち去る。

？彼の背中を見ながら、九条大祐は親友である森山碧に申し訳無い気持ちで一杯だった。

？何時もこういう面倒事を引き受けてくれるのは彼だ。

？直接「有難う」という気持ちを伝えるのはキャラじゃないと、九条は思っているが。

？本心から森山碧という存在に感謝をしている事に嘘も間違いも無い。

「大祐、もう少しで着くから。頑張つて」

「…極度のストレスつて、やっぱり厳しいなあ」

「ひつどーい、大祐くん…其処まで言わなくても良いじゃん…」

？割と本気で沈み込むナナヤ。

「違う違う。ナナヤだけの所為じゃないよ。最近悩み事が多くてね…此れからの事とかさ」

「大祐くん…あのね、もうちよつと私達を頼つてくれても良いんだよ…」

「あづみさん達に迷惑を掛ける位なら自分一人で抱え込んだ方がずつとマシだよ」

？そう、ニコツと無理矢理作つた笑顔で彼女達を安心させようとする。

？然し彼女達はそんな事は望んでいない。

「大祐…貴方が倒れただけで何れだけの人が心配するのかわ、しつかりと認識した方が良いわ。私やきさらだつてその一人なの」

「だいすけ…たおれちゃ、いあつ…」

? 百目鬼きさらは悲し気な声で、九条の足元にくっ付く。

? いつの間にか倉敷世羅まで彼を抱き締めていた。

「いいには…ずっと元気でいて欲しい…」

「ふふっ…大丈夫だよ。二人共有難う」

「…大祐くんは私達にとって大切な人…だから、辛い事とか…えと…なんていうか、そういう事が起きて欲しくないの」

「あづみさんまで…」

? 彼女達の九条を心配する心に偽りは無い。

? その気持ちが必要にも、嫌という程伝わった。

? 各務原あづみは百目鬼きさら、倉敷世羅の手を握って、再度歩き始める。

「…それでも、俺には分からない」

? 九条大祐は最後にそう呟いて、自分も再度歩き始める。

? 其処からあまり間も無く自宅に着き、自室のベッドの上でゆっくりと休息を取る。

? 彼が次に目を覚ましたのは夜遅くの事だった。

――

バレンタイン（中編2）

？カチャカチャと音が聞こえ、ふと目を覚ます九条大祐。

？窓から見える外の景色はすっかり暗闇に包まれていた。

？自室に帰って来てから殆ど記憶が残っていない彼は、取り敢えず辺りを見渡す。

？其処には何時もの、自室の光景のみが目に映っていた。

？寝起きで未だにぼーっとする頭を背伸びして起こし、一旦布団から出る。

？すると次の瞬間、隣の広い部屋からガチャンツという音が鳴り響いた。

？一体何事だと、九条大祐は自室の扉を少しだけ開いてクリアリング染みた行為を行う。

？すると彼の目には驚くべき光景が飛び込んできた。

「あづみ！怪我は無い!？」

「リゲル、ちよつと大袈裟だよう…きさらちゃんがお皿を落としちゃっただけだから」

「飛び散った破片で傷付く事もあるから気を付けなさい。…それより、大祐が起きてないと良いのですが」

「お母さんは色んな人を心配して大変だね。私は全然平気だよっ」

――

「きさら、今度は私も一緒に持って行くわ。充分に気を付けた方が良いわよ」

「きい…がんばゆっ!」

「きさらちゃん、世羅お姉ちゃんも手伝うよ!」

「せあ、あいがと」

――

「ますたの為に作ったこれ…どうやって持って行きましようか」

「type, Vなら、バランス感覚的に良いんじゃないかしら?」

「それならtype, II、貴女も優れている筈です」

「…でも、一人や二人じゃ持てないわね。あつ、オリジナルXIII全

員で持つて行けば良いじゃない」

「その方が効率的に最適な判断ですね」

「私も手伝いますわ!」

「いえ、ほのめ様加わってしまうと、これを落としてしまう確率が90%まで跳ね上がります。よって、大人しくして貰えば有り難いです」

「ううー…酷い言われ様ですの」

――

「大祐くん、早く起きないかなあ…♪」

「バンシーちゃん、今大祐くんが起きてきちゃったら全部台無しになっちゃうわよ?」

「あつそうだった…でも、早く起きてこないとあれ、グラちゃんに食べられちゃう」

「大人のレディがそんな事する筈…無いじゃない。自分でもそれが心配で先にディナーを済ませて来たのよ?」

「準備万端だね」

「当然よ!」

――

「…ばれんたいん…とは、どんな行事なんだ?」

「あれ、ウエルキエル知らないの?」

「好きな人にチョコという、甘いお菓子をプレゼントする行事ですよ」

「ウエルキエルは大祐くんの事好き?」

「わ、私が…彼に対して抱く感情は…好意とかではない。共に認め合う戦友の様に感じている」

「うわー…」

「何だその反応は。そう言うムリエルはどう思っ―」

「ん?好きだよ?」

「ぶっ」

「二人の会話、聞いているだけで飽きませんよね」

――

「やっぱり、こうして見ると大祐は一夫多妻…いえ、一夫大多妻という言葉が似合います」

「和修吉…貴女もその一人なのよ？それに大祐は未だに誰を妻にするとかは言っていないわ」

「私を選んでくれれば、彼が満足するような生活を送らせてあげます。ヴェスパローゼにはそれが出来ますか？」

「あら、心外ね。出来るに決まってるじゃない。きさらと共同すれば完璧よ」

「うゆ？」

「…やはり、貴女は悪どいですね」

「――」

？九条大祐は口を押さえ、思わず漏れてしまいそうな声を押し殺す。

？何故自分の部屋にあんな大勢の女性が居るのか。

？頭の中が混乱する九条大祐。

？というかこのタイミングで起きてしまってた良かったのか。

？もう何をどうすれば良いのか分からなくなって頭を抱えてしま
う。

「あ、そうだ！大祐くん起きてるか見てくるね」

？ビクつく九条。

「私も一緒に行くわ。最近大祐の寝顔、見れてなかったし」

「リゲルにとってはそれが日課みたいになってるのね」

「ふふつ、私…知ってるわよ？ベガが偶に、大祐の部屋に忍び込んで寝顔を見に行ってるの」

「リゲル…その秘密、絶対に口外禁止ですよ」

？照れながらもリゲルに圧力を掛けるベガ。

？然しリゲルはニコニコと笑いながら「どうかしらねー？」と言い、逆に優勢な立場に躍り出る。

？そんな二人のやり取りを見て、各務原あづみも自然と笑顔を浮かべていた。

「じゃあ、取り敢えず大祐を見てくるわね」

「あづみも、お願い」

「うんっ」

？という事で、各務原あづみとリゲルの二人が九条の寝室に向かう訳だが。

？肝心の九条は兎に角一度布団に戻らねばと、焦りに焦ってベッドの足に小指をぶつける。

「~~~~!!」

？声にならない痛みが彼を襲った。

？然し、こんな馬鹿な事をしていて暇は無い。

？九条は急いで掛け布団の中に潜り込み、寝た振りをする。

？余りの謎事案が発生しているからか、彼の心臓は大きな鼓動を鳴らしていた。

？そして遂に、二人が寝室へと入って来る。

？扉はきつちりと閉めておいた為、起きた事がバレるといのは先

ず無いだろう。

？後は彼自身が下手な演技を見せなければ良いだけ。

？ガチャツと、二人が扉を開ける音に若干反応を示してしまう九条。

「ふふっ…大祐くん、まだ寝てる」

「あら、本当ね。相当疲れたのかしら」

(バレてない…という事は、セーフ…)

？自分が起きていた事がバレずに安堵する。

？だが、問題はここからだった。

？各務原あづみとリゲルは、寝ている(寝た振り)九条の両サイドに座り、彼の寝顔(演義)を微笑ましく見つめる。

「…大祐、今日は災難だったわね」

「でも、あのナナヤつて女の子も悪気があってやった訳じゃ無いんでしょ？唯、大祐くんが好きだったから、自分からアピールしに行っただけで…」

「その結果がこれ。…少し冷たい言い方になるけど、もう少し遠慮して欲しいわね。大祐は…あの子だけの存在じゃないの」

「うん…。だけど、私達が大祐くんに積極的じゃないのも…原因だよね…」

「…否定のしようが無いわ」

? リゲルの言葉で二人共静まり返る。

? 自宅へ帰る間際、加えて寝て起きてから、九条は彼女達の何処かしんみりとした場面しか見ていない。

? 現在も二人はしよぼくれていた。

? そんな各務原あづみとリゲルの会話を耳にして、九条は自分に情け無さを感じていた。

? 彼女達は何も悪く無い、悪いのは俺自身だと。

? 相手からアピールが来るまで自ら動こうとしない自分が、積極的に接して来てくれたナナヤに対して偉そうな口を叩いて。

? 各務原あづみやリゲルとお互いに好きだという気持ちを伝え合って、尚手を出さない。

? ベガやヴェスパローゼには優しくされて。

? 百目鬼きさらや倉敷世羅は、まだあんなにも幼いのに自分を好きだと言ってくれて。

? 自身が気付いて無いだけで、こんなに好意を向けられているのに関わらず。

? 九条大祐は彼女達に手出し等しなかった。

? 今でも変わらずに、彼女達を汚したく無いと思っっているからだろう。

? 然しそれでは何時か、自分では無い誰かに汚されてしまう。

? それが彼女達の望みなら九条は何も気にしないだろう。

? だが、彼に想いを馳せている女性達は、全員が彼と深い関わりを持ちたいと心に秘めている。

? その気持ちに気付かない時点で情けないどうこうの問題では無いが。

「…でも、大祐くん本人の前でそれを言うのは…ちよつと…恥ずかしい、よね…」

「なら今が絶好のチャンスじゃない。大祐、寝ているから」

「そんな…寝てるからって駄目だよ…」

「…まあ、かく言う私も、口にする度胸は無いけど」

「もうちよつと積極的にならないと駄目かなあ…例えば朝、いきなり、だっ抱き付くとか…」

「そういう積極性…?」

? 九条は二人の会話を聞いていて思った。

? うん、もう無理だ。

? すると彼は、何の躊躇も無く体を起き上がらせる。

「…別に二人が悩む必要は無いよ。悪いのは俺だから」

「大祐くん!」

「…もしかして、全部聞いてたのかしら?」

? 九条は無言で頷いた。

? 彼の反応に、二人共顔を真っ赤にさせ、両手で覆い隠す。

「ごめん…俺がこんなだから、二人の望みを叶えてあげてない」

「そんな事無いっ、私達は大祐くんと一緒に居れるだけで満足だから。望みとか関係ないよっ」

「あづみの言う通り。…だけど、私からすれば…その…一つだけ、大祐ともっと親密になりたい…なんて」

? しんみりとした空間の中、リゲルが一人でボソツと呟く。

? だが、九条はそれを聞き逃さなかった。

? 何時もは聞き逃してしまいそうな彼女の小声、呟きを。

? 故に彼まで少し顔を赤くさせ、それが二人にバレない様に片腕で頬を隠す。

? 部屋全体が暗い御蔭もあり、二人は何も気付かず話を続けていた。

「…あの…えつと…大祐くんは…」

「?」

? と、先程まで流暢に話続けていた各務原あづみが、急にオドオドし始める。

? 彼女は彼に何を聞きたいのか。

? 取り敢えず各務原あづみの質問を耳に入れてから、と待つ九条。

?すると、右側に居た彼女は九条大祐の右手をぎゅつと握ると、彼女の口から凄まじい言葉が放たれた。

「…大祐くんは、私達をどうしたいの…?」

「…!」

?頬を真っ赤に染め、上目遣いで、完全に九条大祐という男を殺しに行く各務原あづみ。

?更にこんな台詞を吐いてまでアピールするという事は、相当言葉に悩んだのか、将又切羽詰まったか。

?前者に関しては有り得る可能性だが、後者に関しては一体何をそんなに切羽詰まったのか理由が分からない。

?此処で九条の意識を自分やりゲルに向けなければ、とかなんとか思わなければ後者の可能性は皆無に等しい。

?悩みに悩んだ末、言葉がこれしか思い付かなかったからというのが正解だろう。

「あづみさん…急にどうしたの…?」

「…えっ?あつ、いや、何でも無いよ?…だ、だから、あまり気にしなくてもー」

?やはり前者が正しい様子だ。

「…あづみさんもリゲルさんも、本当はやっぱり何か望んでいる筈です。俺に対して。…でも、その何かは俺には分かりません」

「…………た、例えば」

「例えば?」

?そう言つて、途中で止まってしまふ。

?どうしてもこの先を口に出せない彼女は、只管に心の中で悔やんでいた。

?心では幾ら思つても口に出せない葛藤。

?リゲルはそんな感情を味わっていた。

?すると彼女の頭の中に誰かの声が響き渡る。

(そんなんだから大祐くんが違う女に取られ兼ねるんだよ。私みたいにもっとガツガツ行かなきゃ!)

(…まさか、ナナヤ…?)

？この場面では救済の神であろうナナヤが、彼女に助言を与えた。
？確かに助言というよりは「もつと攻めろ」的な内容だが。

？然しそれがリゲルにとって、何れだけ心強い言葉だった事か。

？内心、神様の指示等受け入れたくも無いと思つた彼女だが、此処は素直に聞き入れる。

？それでナナヤは成功の直前まで言つたのだから信憑性は高いと、効率で誤魔化した。

「…ええ、例えば…キ…キス…とか…！」

「…俺とですか!？」

「も、もちろん…よ。他に誰が居るっていうの…！」

「もしかしてリゲルさん、へっきーに何か唆されたんじやー」

「ほつ本心よ！」

？彼女の最後の言葉に、何処か気圧された九条大祐。

？そしてリゲルの本心を初めて聞き、動揺する他無くなつてしまつている。

「…私もリゲルと同じ」

「あづみさんまで…!？」

「でも、私がしたいのはキスだけじゃ無いの…もつと、色んな初めてのを、大祐くんと体験したいなあ…」

「凄く意味深な発言だね…」

「えつと…どういう意味？」

？九条大祐は胸を押さえ付け、苦しそうに悶え始めた。

？理由としては最早一つしか挙がらないだろう。

？各務原あづみ…彼女の無知スキルが彼の心を驚掴みにする。

？それをその張本人は首を傾げながら見つめる。

？だが、胸を押さえ付けていたのは九条大祐だけでは無かつた。

？彼の左側…とある美人な女性迄もが苦しそうに悶えている。

？各務原あづみの可愛さ、恐るべき破壊力。

「…はあ、二人に…ここまで言つて貰つて、俺は幸せ者ですね」

「えへへ／＼／＼」

「当たり前じゃない。あづみから一番に好かれている、これ程幸せな

事は無いわ」

「リゲル、それはリゲルだけじゃー」

「全くの同意見です」

「ええっ…!?!」

?リゲルの放つ各務原あづみ大好きアピールに何の違和感も無く乗っっていく九条。

?やはり、二人の共通点は各務原あづみという少女の存在だろう。

?彼女が居なければ二人は恐らく、繋がりを持っていなかったのだから。

?だが、共通点があるのは九条大祐と各務原あづみも同じ。

?この二人の共通点は、本人が無自覚であっても周囲から好かれる事だ。

?何か特別な力がある訳でも無いのに…側から聞けば羨ましいと感じる人達も多いだろう。

?だが、好かれる対象迄もが二人共偏っている。

?その対象とは、間違い無く女性だ。

?九条大祐も各務原あづみも、女性からの好意が凄まじい。

?前者に限っては、逆に男性からあまり良い印象を受けていない。

?つまり天王寺飛鳥や森山碧は珍しい人種だという事になる。

?彼の親友二人の話は又今度にするとして、ならば後者はどうなんだろうと。

?各務原あづみは確かに女性に好かれる。

?だが、彼女も男性から好印象は受けていない。

?先ず第一前提として、各務原あづみ自身が男性を得意としない+九条大祐然り、二人共極度の人見知り。

?更に各務原あづみの周りには、彼女を何としても守り抜こうとする女性が複数。

?取り敢えず近付けない。

?それを問答無用で近付いたのが九条大祐だが。

?兎に角、二人共女性には好かれるという事だ。

?「なんで?どうして?」と聞かれても、そういう星の下に生まれ

たからとしか返せない。

?理由は具体的に説明がつけられないからだ。

?この話は強制的に終了にしよう。

「…ん、そうだ。皆さん俺の部屋で何してるんですか?」

?それよりも、九条大祐は自分の部屋に大勢の女性が押し寄せている事が気掛かりで仕方が無かった。

?彼の疑問にハッと何かを思い出す各務原あづみとリゲル。

?二人はいそいそと慌てながら、九条の寝室の扉をしつかりと閉める。

「…あのね、大祐くんが寝た後の話なんだけどね…?」

「う、うん」

?今度はリゲルが何故、扉をガードしているのかが気掛かりで仕方無い九条。

?先程の行動からするに恐らく隠し事をしているのだろうと憶測する。

?試しにジト目をリゲルに送る。

?すると彼女は九条から目を逸らし、作り笑いで「あ、あはは」等と口にし始めた。

?何時も近くで見ていた彼には分かる。

?明らかに怪しいと。

「リゲルさん、扉と俺、どっちが好きですか?」

「えっ…ええ!?…そんなの、大祐に決まってるー」

「じゃあ、此方に来てちゃんと話して下さい。今の部屋内部の現状を」
「うっ…：…やっぱり、大祐に隠し事なんて出来ないわね…。私達専用の嘘発見機みたいだもの」

「誰が嘘発見機ですか…：ていうか、軽く俺の事ディスりましたよね?」

「それだけは無いわっ、それ位大祐が私達を分かってくれてるっっていう…えっと…褒め言葉?」

?リゲルは恥ずかし過ぎて、自分で何を言っているのか分からなくなる。
なる。

?もじもじと照れるそんなリゲルを見て、九条は正直どうでも良く

なった。

？彼女の口から「九条大祐は私達の事をしつかり把握している」という、信頼の言葉を貰えたからだろうか。

？各務原あづみの方へ視線を向けると、彼女も恥ずかしそうに頷いた。

？最近顔は赤くさせている二人しか見ていないなど、少し嬉しくなる九条大祐。

？各務原あづみは人見知りだが故に信頼が置ける人物にしか恥ずかしがらない、リゲルは抑限られた人物にしか恥じらいを持たないと。

？条件が中々に厳しい二人が、自分の前ではこんなにも照れを見せている。

？然し彼は、優越感等微塵も感じていなかった。

？二人が自分に好意を抱いて近寄って来てくれる。二人が自分を愛してくれている限りはずっと側で、三人で楽しく幸せに暮らせる。

？そういう嬉しさだけが彼を包んでいた。

？加えて二人は「貴方が離れるなら私達はずっと追い続ける」という大胆発言をかましている。

？要するに、三人がバラバラになる事は無いという意味だ。

？その事実があるだけで九条は優越感等どうでも良くなっていた。

？況してや命を賭けてまで二人の幸せ、自由を掴んだ男だ。

？他人よりも優れている、そんな感情は湧きもしないのだろう。

「…あづみさん、続きをお願いします」

「うんっ。それでね…大祐くんが寝た後、沢山の女性の人達がこの部屋に来たの」

「全員大祐に用事があると言って、その用事が全員同じだったから共同作業中。そろそろ終わる寸前で、大祐が起きたっていうのが現状かしら」

「用事？共同作業？」

？九条大祐には思い当たる節が無かった。

？あんなに大勢で、女性のみが自室に押し寄せてくる等。

？一つあるとすれば今迄自分が何かしら絡んで来た面子だという

事。

? 然し関わった理由は其々が別。

? 関連性が丸で見つからない。

? 頭を抱え、何とか思い出そうと頑張る九条。

「: 駄目だ。全員一致の用事、内容が掴めん」

「気付かれていないのなら好都合よ。此方はサプライズとして企画している訳だし」

「そうだね。もう少しで終わるから、大祐くんはちよつと待ってー」

? 各務原あづみとリゲルはそう言って寝室から出ようとしたその時。

「あづみ、リゲル: 大祐は寝てますか: ?」

? 寝室の扉が開き、そろりとベガが入室する。

「お、お母さん: !?」

「あれ、ベガさん。お早う御座います」

「起きていたのですね、大祐。: タイミングバツチリです。では、少し急ですが此方の部屋に来て貰いましょう」

「準備はどうするの?」

「恐らく二人は大祐と仲良くお話していたのでしよう? その間に、済ませるべき事は済ませました」

「やつぱり: お母さんは凄いなあ:」

? 手際の良さというべきか。

? 各務原あづみとリゲルが九条の寝室で仲良く話をしている間に、ベガは彼に用事がある女性達に指示を出し、サプライズの準備を終わらせていた。

? 流石、青の世界を指揮していたアドミニストレーターの一人。

? そんなベガを見ながら、各務原あづみは尊敬の眼差しを送りまくる。

? ベガも娘に良い所を見せたからなのか、少し誇らし気に寝室から隣の部屋へと移動して行った。

「ほら、大祐も一緒に行くわよ?」

「えっ、あ、はい」

「大祐くん、えつと…一応、目隠しして貰っても大丈夫…？」
「了解」

？それに続く様に目隠し状態にの九条を連れ、各務原あづみとリゲルも移動する。

？丸で拘束されていたかの如く目隠しされた九条が寢室から現れた瞬間、初見で見た女性達に僅かな衝撃が走った。

？然しハツと思い返す。

？これはサプライズなのだ。

？というか、九条は何時から起きていたのかと。

「大祐くん、もうちょつと此方に…」

「こちら辺ですか？」

「うん、完璧っ」

「…それじゃあ、目隠しを取って貰おうかしら」

？リゲルの合図を受け、九条は目隠しを外す。

？すると彼の目の前に広がった光景は――

「「ハッピーバレンタイン!!」」

「うえあっ!?!」

？目の前にはどデカイチョコレートケーキ、更には先程彼の部屋に居た女性達全員が、九条を囲う様に円になって一斉にそう言い放つ。
？そんなサプライズに驚き、体勢を崩して思わず後ろに倒れそうになる。

？だが、倒れた矢先に何やら柔らかい物体で支えられた九条。

？恐る恐る後ろを振り向く。

「…大祐なら、絶対こうなると分かっていました。後ろで構えていて正解でしたね」

「べ、ベガさん…申し訳無いです…」

？彼は苦笑いをかましつつ起き上がろうとした。

？するとベガは後ろから九条を抱き締め、頭を撫で始める。

「へっ…!?!」

？彼女の珍しい行動にどうすれば良いのか分からなくなり、そのま

まの状態の様子を伺う。

? 少しして、ベガは口を開いた。

「…大祐、貴方にはもうちよつと体を休める事を勧めます。勝手に部屋に上がり込んで言える事では無いのですが…」

「ベガさん…」

「大祐の体調が優れないと聞き、駆け付けました。バレンタインの案件も含めて、ですけど…」

「和修吉さんにまで心配掛けていたとは…」

? だが、彼を心配していたのは二人だけでは無い。

? この場に居る全員が、九条に気遣い、そして心配していた。

? 彼には圧倒的な存在力という言葉が当て嵌まる。

? それは女性達から見たもの限定では無い、男性からしてもだ。

? 終わりの見えない唾み合いを続ける5つの世界を、一つに纏めた男なのだ。

? 確かに、仲間を支えられていたからこそ成し遂げられたのは事実。

? 然し周りからすれば、彼が1番変革という名の行動を起こしていたと。

? その御蔭で変わったという人物は大勢居る。

? 一体九条大祐が何をしでかして此処までの人間になれたのかは、

また別の話。

? 今は置いておこう。

? 兎に角彼は、自分が思っているよりも大きな人物という事だ。

? 九条が自分自身を過小評価する理由等、彼以外には理解出来ないだろう。

「大祐くん…もう、大丈夫…なの…?」

? 一人彼女達の優しさを実感していると、其処に、フリフリの付いた可愛らしいゴシック系衣服を身に付けたバンシーが近付いて行った。

? 何時も着ている衣服よりも何と無く豪華さが増し、バンシー自身の衣服というよりは…

「ありがとね、バンシーちゃん。俺は全然平気だよ」

「えへへ…それなら…良かった」

「…それよりもバンシーちゃん。君の着てる服…まさか」

「えっと…似合ってる、かな？ヴェスパローゼさんが選んでくれたんだ…♪」

(やつぱりか…)

? 何処かヴェスパローゼの仕業だと確信していた九条。

? それがこれ、案の定の結果だった。

? バンシーは普段、似た様な黒いゴシック系の服を着ている。

? そんな彼女に対して九条は「今日は何故だろう…何処と無くヴェスパローゼさんの服に似ているな」と、バンシーを視界に入れてからずっと思っていたらしい。

? 薄々気付いていたとでも言うべきか。

「…うん。とても似合ってるよ、バンシーちゃん」

「…あ、ありがと…／＼／＼」

「ふふつ、バンシーちゃんが照れてる」

「もー…グラちゃん、あまり揶揄わないでよう」

? 黒の世界出身である二人の掛け合いに、思わず笑みを零す九条大祐。

? 彼はバンシー、グラの頭の上に手を置き、摩る様に撫で始める。

? するとバンシーは目を瞑り、ニコニコとしながら九条のそれを受け入れる。

? だが、片方は不満気に彼を見つめる。

「…あ、グラ嬢…嫌だったかな」

「嫌…じゃ無いの。でも、大人のレディである私は…その…子供っぽく扱われるのが嫌いな」

「ああ、成る程。以後、気を付けるよ」

? そう言つて九条はグラから手を離し、今度は近くに居たムリエルの頭を撫で始める。

? まあ…ムリエルが近くに居た理由が「彼に撫でて欲しい」という訳で偶然を装っていたのだが。

「えへへ〜…大祐くんのこれ、気持ち良い♪」

「ね〜♪」

「……………」

？バンシーとムリエル、二人共満面の笑みを浮かべながら九条に擦り寄っている。

？その光景を側で見つめるグラ。

？先程自分で「子供扱いは嫌い」と言ったものの、彼に撫でられるのはまた別らしい。

？二人が撫でられているのを見て、遂に羨ましいという感情が爆発したグラは。

「…だ、大祐、やっぱり私にもしなさい！」

「えつと…り、了解。じゃあ少し待っててくれるかな」

「レディをあまり待たせないでねっ」

「無論、承知しているよ」

？やはり女性からは大人気。

？然し、現状だけを見ると幼気な女性にしか好かれている様に見える。ない。

？側から見れば唯のロリコ…と見られてしまうのも仕方がないの
だろう。

？だが、彼自身がロリコンで無ければ好かれる相手も少女と呼べる
女性達だけではない。

？ヴェスパローゼやベガ、リゲル等、大人の女性からも好意を向け
られている…のだが。

？九条はずっと悩み、分からずにいた。

？何故、こんな自分を好いてくれるのか。

？この疑問の解答は彼女達にしか分からない。

？十分に女心を理解出来れば、九条も気付ける日がくるのだろう。

…多分、恐らく、きつと。

「だいすけ、こおこ、すわゆー！」

「……………」

「うい」

？三人を順番に撫で撫でしていると、百目鬼きさらがとある場所を指差して座れと命ずる。

？いや、実際には命令というよりも要望と言った方が正しいが。

？九条は素直に彼女に従い、大きなチョコレートケーキが視界一杯に広がるテーブルの前に座る。

？すると百目鬼きさらは九条大祐の膝の上に乗る片手にフォークを持ちながら、らんらんと足をバタつかせる。

？それを見た周りの女性達も、テーブルを囲う様に椅子に座る。

？こんな人数がいるのにも関わらず空きのできるテーブル。

？そんなテーブルを埋め尽くすかの如く置かれているチョコレートケーキ。

？九条大祐の頭の中は「どうしよう」と動揺するばかりで、他に何も考えられなくなっていた。

「……、これは…皆さんで作ってくれたんですか…？」

「ええ。全員が同じ目的で共同作業していたっていうのは、この事なの。…その、大祐への…バレンタインの気持ち…としてね」

「あづみさん、このチョコレートケーキへの感想は？」

「え、えつと…凄くおっきい…ね？」

「ああ…ですよね」

（俺からすれば、食べ切られるのか？って感想しか出て来ないよ…）

？そう思いながら頭を抱える。

？然し、下に顔を俯けた瞬間に百目鬼きさらも同タイミングで上を向き、互いに目が合った。

？一瞬の出来事に驚いた九条は、思わず仰け反りをするギリギリで持ち堪える。

？一方で百目鬼きさらは照れ照れと、顔を赤くして、それでも敢えて九条大祐の体にくっ付き。

？他の女性達からの視線を回避する様に、自身の顔を彼の胸元へと埋めた。

「あー、きさらちゃんだけ良いなあ…」

「にい、世羅にもしてっ」

「あれは大祐くんがやってるんじゃないと思うよ？」

「良いじゃない、あづみもすれば？ タイミングを計って大祐と目を合わせて…多分大祐はイチコロね！」

「ええっ!?…そんな、私には出来ないよう…恥ずかしいし…」

(なんかバレンタインから話が逸れ過ぎじゃ…ないか?)

?ふと、そう思った九条だった。

?このままでは話が進まないと気付いたのか、強引に路線を引き戻す。

?何故自分なんかをバレンタインチョコの相手に選んだのか、と。

?だが、その疑問は直ぐに打ち晴らされた。

?彼の言葉に対し、一拍置いてマルキダエルがこう答えたのだ。

「…だって、好きですから〜」

?それに続いて他の女性達も「勿論私も」と、順番に口にしていく。

?中には言えずに恥ずかしがる者、ツンツンしてるが完全に照れている者、真っ直ぐに自分の気持ちを伝える者と、其々が其々、自分の「本当」という姿を彼に晒す。

?唯一、ウエルキエルだけが途中で部屋を出て行ってしまったが、最後に九条へこう言い残していった。

「此れからも…末長い付き合いを、宜しくお願いします」

?それが戦友としてなのか、将又異性としてなのか、九条にははっきり分からなかった。

?だが、ウエルキエルは態とそうしたのだ。

?戦友としても異性としても、曖昧な関係で居たいと。

?彼女自身、気持ちの整理が出来ていないからだろう。

?そんなウエルキエルを気遣い、彼女の分までチョコレートケーキを口に運ぶ九条大祐。

?吐きかける手前まで追い詰められていた。

「ちよっ、大祐くんっ…私達も食べるから無理しないでっ」

「…ウエルキエルさんの、分まで…うっ」

「ほら、大祐のその体じゃ流石に二人分は食べきれないわよ…ウエルキエルも、無理して食べて貰う為に作ってなんかないわ」

「そう言えば、ウエルキエルがなんか言ってたなー…。確か「…美味しく出来てると良いな…」だったかな？大祐くんは美味しく食べて貰いたいのはこの場の全員なのにね。ウエルキエルも面白い事言うんだって初めて知ったよ」

「…大祐、反省は？」

「存分に反省してます。ええ…存分に後悔しています」

「え、どうして？」

？全く意味の分かっていないムリエル。

？ようやくと乙女心に気付く九条大祐。

？二人共違う意味で察しが悪い。

？周囲の女性達は若干の笑みを浮かべながら、どう反応すれば良いのか困っていた。

「…はあ、大祐くんはあんまりですの。こんなにも魅力のある女性達がアピールしてるのに、全く気付かないですよ」

「にい、どんかん」

「…否定しないし出来ないな」

？そして蝶ヶ崎ほのめ&倉敷世羅からのダブルアタック。

？九条は言い返す言葉も無く、顔を下に俯かせる。

？改めて、自分の情けなさを実感した様だ。

？だが、蝶ヶ崎ほのめの言葉を耳にした九条は、自らの想いを彼女達へと伝える事を心で決めた。

？座っていた椅子から立ち上がり、深呼吸をする。

？すると楽し気にお喋りをしながら、チョコレートケーキを口へと運ぶ彼女達の視線を一気に集めた。

？九条は全員が此方に向いているのを確認し、口を開いて自らの意思を言葉にする。

「…皆さん…俺から、伝えたい事があります」

「むぐむぐ…んくっ…大祐くん？どうしたの？」

？チョコレートケーキを幸せそうに頬張り、咀嚼して飲み込んだ後、各務原あづみは頭に？を浮かべながら九条へ話し掛ける。

？リゲルやベガも同じ様に、チョコレートケーキを食べながら九条

の方へと体の向きを変えた。

？唯一グラだけが未だに手を止めずにチョコレートケーキを頬張り続けている。

「先ず最初に言わせて下さい。…皆さん、こんな俺を好きになっれて、本当に有難う」

「…急に改まり始めて、何かあったのかしら？」

？手に持っていたフォークをテーブルに置き、リゲルを始めとしたその場全員が九条に対して疑問を抱く。

？何時も自分からこんな事を言わない彼が、「感謝」と呼ぶに相応しい想いを自らの口から言い放って。

？疑わない方が可笑しい。

？

「…確かにほのめ嬢の言う通り、こんなにも魅力的で言葉では表せない程の存在と言える貴女達に好かれて、俺は幸せ者…いや、それ以上の立場というのをこの身で味わせて貰ってます」

「ですの！漸く気付きましたわ！」

「…ですが、だからこそ言いたい事があります」

？九条大祐はもう一度、先程よりも深く深呼吸をする。

？そして座っている各務原あづみとリゲルの後ろに立ち、二人の肩に手を置いた。

？二人共少し動揺している。

？然し何も言わずに、只九条の瞳を見つめ続けていた。

？そんな二人に「有難う」という想いを込めた笑顔を送り、再度全員へと視線を変える。

「率直に申し上げます。俺はあづみさんとリゲルさんが大好きです」

「ぶっ！だ、大祐!?!」

「ですが、二人に対する「好き」と同じ位…俺は皆さんが好きです」

「あら、嬉しいわね」

？彼の言葉に、思わず本音を漏らすヴェスパローゼ。

「確かに…私達からすれば途轍も無く嬉しいですね」

？それに合わせるかの如く、和修吉も乗っていく。

?だが「嬉しい」という感情が湧いたのは彼女達だけでは無い。
?三人を抜いたその場全員の心の中に、例えような無い感情が芽生える。

?然し、各務原あづみとりゲルだけが、微妙な心境でいた。

?彼女達からすれば九条大祐という男の存在は、一番付き合いの長く、深い関わりを持った人物だから。

?後々彼と関わりを持ち、彼を好きになった女性達と同じ愛情を注がれるというのは色々と思うところがあるのだろう。

?要は九条大祐の一番になりたいという事だ。

?それが今、彼自身の発言で、叶わぬ夢となってしまうた。

?空気の読めない、情けない等といった言葉では済まされない。

?只の最低クズ野郎だ。

「…えっと、結論からすれば、大祐くんは何が言いたいんですの?」

「俺の中では全員を平等に愛したいんです」

「…………大祐くんがそうしたいなら、私は…大歓迎だよ…?」

「…あづみの言う通り、ね。誰かを一番と言って特別扱いするのは…良くない…もの」

?迷い無く即座に答えを出す九条に、落胆を隠し切れない二人。

?それは周りの女性達も気付いていた。

?無論、九条大祐自身もだ。

?だが、彼は二人の顔を一切見ず、二人以外の女性達を見つめる。

?その行為に流石のベガもカチンと来たのか、彼女は席を立って九条大祐へ近付く。

「…大祐。その言葉は確かに嬉しいです。でも、今回ばかりは我慢が効きません。貴方がこの世界に来てから…一番側に居たのは誰だと思っっているんですか!？」

「ベガさん…話が終わっていません。余りこう言いたく無いのですが、最後まで聞いて貰えませんか?寧ろ此処からが本題ですから」

「…?」

「お母さん…大祐くんの話、聞こ…?」

「…っ!」

? 隠そうと思っけていても、表情には出してしまうものだ。

? ベガは…自分の娘が此れ迄に無い位悲し気な表情を浮かべている事に気が付き、怒りという感情を湧かせながらも、自らのそれを押し殺して席に座る。

? 勿論、リゲルも自分自身の感情を押し殺していた。

「大祐くん、続き…どうぞ…?」

? 今にも消えそうな小さい声で、各務原あづみはそう告げる。

? 然し顔は下に向けて、彼と瞳を見合わせない様に。

「…有難う、あづみさん。そして…御免なさい」

? 初めて味わう、複雑な気持ち。

? 九条大祐の最後の言葉に、彼女の綺麗な赤い瞳からは大きな雫が零れようとしていた。

……だが、その涙が地へ落ちる事は無かった。

? 九条大祐は地面へ膝を着き、各務原あづみと自分の顔が向き合う丁度の高さに調整。

? すると九条は各務原あづみの顎の下へと手を伸ばし。

「あづみさん」

「……?」

? 彼は彼女の名を呼ぶ。

? 各務原あづみは九条大祐の声に惹かれ、彼の方へと顔を向けた。

? その…一瞬の出来事だった。

「んっ…!」

「だ、大祐!」

「…ふっ、あらあら」

「わあ、見せ付けてくれるねー。ウエルキエルなら顔真っ赤にしてるよ」

「えっ、えっと、これって見てて良いの…!」

「バンシーちゃんは動揺し過ぎよ。大人のレディなら…此れくらい…」

「そうやって顔を赤くさせているのは誰ですか?」

「う、うるさいわねっ」

「世羅ちゃんやきさらちゃんには、少し刺激が強いです〜！」

「えっ？にいい、なにしてるの？」

「きいも見たいっ」

「小さい子供には早いのですの。こういうのは大人になってから〜はわわ…何時までしてる積もりですの…!？」

？周りが騒がしい。

？と、九条はそんな事に気を取られずに、今している行為に集中していた。

…だが然し、流石に長いかと感じた九条大祐はその行為を直ぐに終わらせる。

「んっ…ぶあっ…」

？すると先程まで悲し気な表情を見せていた各務原あづみの顔は、とろんとした表情に変貌していた。

「大丈夫ですか？あづみさん」

「…ふえ…んと…なに…が…？」

「ありやりや、もしかして刺激が強過ぎたかな？」

「…えと…ね…わたし、だいすけくんと…なに、を…？」

「軽くファーストキスを捧げ、ファーストキスを頂きました」

「~~~~／／!!!」

？そう、各務原あづみが九条大祐の方へ顔を向けたその瞬間、彼は自分自身の唇と彼女の唇を重ねたのだ。

？確かに互いの唇を重ねるだけのキスだった、が。

？二人にとってはそれが何れだけ大切な瞬間だった事か。

？にここにこと余裕を見せる九条に、顔を真っ赤に染める各務原あづみ。

？二人共、かなり対照的だ。

「え…えつと…でも、大祐くん…キ、キスするの…初めてだったでしょ…？」

「ん、勿論だよ？あづみさんもでしょ？」

「そ、そうだけど…！大祐くんの…その、ファーストキスの相手が私なんかで…ほんとに良かった〜」

? 照れ、動揺、嬉しき、疑い、様々な想いが各務原あづみの中で交錯する。

? もうどうすれば良いのか分からなくなった彼女は、愚問を彼に投げ付けた。

? だが、愚問はやはり愚問。

? その「問」は直ぐに「答え」として彼女の元へ投げ返された。

? 九条大祐はおどおどと落ち着かない各務原あづみの体を、ゆつくりと自らの両腕で包み込む。

? すると不思議な事に、不安と疑問で埋め尽くされていた彼女の心の中は徐々に徐々にと晴らされていった。

? それでも、先程の行為をした後に抱かれてしまった各務原あづみの心臓の鼓動は遅まる事を知らない。

? ドキドキと早い鼓動を繰り返し、彼に対して異常なまでに反応してしまっている。

? そんな中、九条大祐は各務原あづみの耳元に顔を寄せ、一言呟いた。

「…俺は始めから、あづみさんの唇を狙っていたんだよ?」

「~~~~!!!!／／／」

? 大好きな人からこんな事を耳元で囁かれて耐えられる者は居ない。

? 現に、各務原あづみは九条大祐の胸元で爆発寸前となっていた。

? 然し彼女がこういう反応を示してくれているから良いものの、彼が一番恥ずかしく爆発一步手前まで到達している。

? 深い関係を築けた各務原あづみにだからこそこの様な事を言うが、リゲルを抜いた他の人達には口にすらできないのだろう。

? 「最初から貴女の唇を狙っていた」等、互いに理解、もとい愛し合っている仲でなければヤバイ奴だと認知され兼ねない。

? それこそ一種のストーカー行為に似た様な物だ。

? だが、其処に純粋な「愛」という単語が混じってしまえば丸で別物。

? 各務原あづみ、九条大祐、お互いにそういう関係になつて暫く

経った今だからこそ言えたのだろう。

？今までは彼の踏ん切りの悪さが目立ってばかりいたが、今回は覚悟を決めたようだ。

「でも…どうして、「御免なさい」って謝ったの…？」

「ああ、あれかい？あの謝罪はあづみさんに対してじゃ無いよ」

「えっ…じゃあ」

「うん。この場に居る、『あづみさんとリゲルさんを抜いた』全員に対して謝罪させて貰ったの」

「私とあづみを抜いた…全員…？あづみは分かるけど、どうして私まで」

？彼の言葉に疑問を抱き、質問するリゲル。

？すると九条大祐は彼女の前まで移動し、座っているリゲルの顎の下へと手を伸ばす。

？そして自分と向き合わせる為に、クイツとその手を上に動かした。

――

バレンタイン（後編）

「…だって、俺が一番大好きなのは二人なんですから」
「!!??」

? 九条大祐は又もや、全員の前で大胆発言をかます。

? そうした後、リゲルを自身の胸元へ「そつと」優しく押し付けた。

? この言動が一体先の謝罪と何の関連があるのか。

…いや、関連しか無いのだ。

? 彼はそのままリゲルを抱き締め、先程の話を再開し始める。

? 前に。

「リゲルさん、苦しく無いですか?」

「はわっ…わ、私、は…ええ、大丈夫よ!」

? 自分自身の卒然とした行為に、彼女が付いて行けているか心配する九条大祐。

? そんな彼に向かって途切れ途切れの言葉を必死に繋げるリゲル。

? 明らかに無理していると察していた九条だが、彼は敢えてそのまま、自らの意思を全員へ伝える為に口を開く。

「…そう、俺は全員大好きです。こんな俺を好きと言ってくれた貴女達全員が」

「でも…きゃっきゃ」

「…はい。リゲルさんの言う通り。先程俺は『あづみさんとリゲルさんが一番好き』とこの口から言い放ちました。この言葉を、俺は嘘とも冗談とも言いません。況してや撤回なんて以ての外。本気でそう思っていますから」

「…という事は、私達は盛大にフラれたという訳…で良いのかしら…?」

? 何時も余裕がある口調で喋るヴェスパローゼも、今回ばかりは気落ちしているのが目に見えて分かる。

? それは他の女性達も同じで、皆が皆、総じて「しゅん」としていった。

? 唯一、ベガを抜いて。

「？彼女だけはにこにここと、九条大祐、各務原あづみに笑顔に向けていた。」

「…私はそれで良いと思います。自分の娘が、娘の一番好きな人から「大好き」と言って貰えたのですから。その言葉を聞けただけでも満足です…」

「？と、如何にも無理矢理作ったであろうその笑顔を彼に向け、直ぐに視線を逸らした。」

「？出来る限り自分に集中して欲しくなかったのだろう。」

「？然し彼女の演技はバレバレだった。」

「？九条大祐は無表情で、今度はベガの目の前まで歩いて行く。」

「ベガさん、忘れて貰っては困ります。俺は確かに二人が大好きと言いましたが…何も貴女を『嫌いになった』とは言っていない。それに、これはベガさんに限った話ではありませんよ。この場に居る全員に対してです。俺は先程話した通り、彼女達やベガさんに向かって『二人と同じ位大好き』と言ったんですから」

「…どういう意味、ですか…？」

「俺は全員を平等に愛したい。この想いは誰に口出しされても変える気は無い。でも…その中で、あづみさんとリゲルさんを優先してしまう事が多々出てきてしまうと思います。その時点で皆平等、というのは可笑しい話なんです。…だからこうして、今の俺は二人が一番好きと言わせて頂きました」

「…成る程ですの。要するに大祐くんは『私達誰かを最優先するのは嫌で、然も全員が大好きだけど、あづみちゃんとりゲルさんを優先してしまう場合がある』という事で宜しいのですの？」

「？九条大祐の話した内容を一括りに纏め、聴き易くする蝶ヶ崎ほのめ。」

「？彼の難しい心境をすらすらと述べる彼女に、九条は無言の頷きを返した。」

「…そして、これが兎に角大事で重要な話です」

「？そう言つて、彼は深い深呼吸を吐いた。」

「？その行動に彼女達は思わず身構える。」

?だが、内容は至ってシンプルで難題な問題だった。

「…出来る限り、俺を一番と考えない方が良い。こんな優柔不断ではつきりと決められない男が貴女達の中で一番になってしまえば、貴女達を不幸にしてしまう可能性がある」

「それで?」

「加えて、俺は二人を優先する場合がありますと言いました。本当は誰かだけを優先も何もしたくない。誰か『だけ』を見たくも無い。俺は一人一人、全員を見たい。貴女達其々の魅力を語れる位には、全員を知りたい。でも…二人を優先してしまう。こんな自分勝手な都合を押し付ける俺を、あまり深くは好きにー」

「…少し良いかしら。今度は私達を話させて?」

?九条大祐の話を断ち切る様にヴェスパローゼが口を挟む。

?だが、彼はそれをすんなりと許した。

?先程までずっと、自分の話ばかりで彼女達の意見を聞いていなかったからだろう。

?元の席に戻って話を耳に入れようとした時、後ろからコートの裾を誰かに掴まれた九条。

?こういう事をするのは大抵が百目鬼きさらなのだが、今回ばかりは違った。

?至って真剣な表情で彼を見つめるベガ。

?丸で自分の側から離れるなど言わんばかりだ。

?その眼差しに込もった意味に、九条大祐は素直に従う。

「…はあ…大祐、貴方なら絶対になんか言おうと思っていたわ。自分が私達を差無く愛せないから離れる…ね。それは確かに自分勝手過ぎるわよ」

「そうだよ大祐くん。私達はそんなの関係無いもん」

「ムリエルさんの言う通りです…誰に何と言われても、その…一度好きになってしまっからは、後戻りも何も無いんです…!」

「大祐くんはもう少し『女』という物を理解した方が良いと思うわ。でないと、レディに嫌われちゃうわよ♪」

「グラちゃん…女の子は、物じゃないよ?」

「…はっ、そ、そうね！」

？しみりとしたこの空間を、九条大祐の言葉を打ち砕くかの如く、彼女達は全員が彼に各々の想いをぶつける。

「でも、グラちゃんの言うことは最も…だよ。それに、大祐くんは私達一人一人をしつかり見てくれてる…」

「…どうして、そう思うの」

「今迄貴方と過ごして来た時間の中で…その…不思議とそう思えたんだよ…？」

「バンシーちゃん…」

「この場に居る事自体お忘れになられてると思うのですが、マスター…私達も同意見です」

「忘れてなんかいないよ。…ずっと席に座って俺の話を聞いてくれた君達を忘れろって方が無理な話だね」

？彼女達一人一人の想いを真摯に受け取める九条の頭の中では、様々な考えが交錯していた。

？どうして其処まで自分に付いてきてくれるのか。

？どうしてこんなに自己中心的で情け無い自分を好きになつてくれたのか。

？彼にとつては分からず仕舞いで考えるのも諦めなくなる程に難しい問題だった。

？こればかりは彼女達本人にしか分からない、回答があるかもあやふやな話だ。

？もしかしたら、分からなくて当然と言えるやもしれない。

？だが、一度気になれば最後まで明かしたくなるのが人間という生き物。

？九条大祐はこの難問を、頭を抱えながら必死に考えていた。

「…大祐くん、そんなに悩む必要無いですの」

「ええ。蝶ヶ崎ほのめのこの言葉が、最大のヒントです」

「ほの姉もうあーすきも、何言ってるのか…世羅には分からないよ…」

「単純な話ですよ。世羅ちゃんにはまだ分からないかもだけど」

？と、如何にも『元からこの場に居座っていた』かの様な雰囲気醸し出しながら、上柚木さくらが部屋の扉を開けて彼の目の前まで歩いて行く。

？そして彼女達の見ているその場で。

「…突然ですみません。あの、遅くなっちゃったけど…これ、受け取って貰えますか…？」

？両手で後ろに隠していたとある物を、彼の前に差し出す。

「…えーと、これは…チョコで合ってるかな」

「は、はい」

「さくらちゃんはずっきの俺の話、聞いてたりした？」

「…え、あ、はい…全部」

「それを踏まえて尚、俺にこんな素晴らしい物をプレゼントしてくれるの？」

「…飛鳥さんや森山碧さんにも、渡して来ました。私と八千代の問題を一緒に悩み、そして解決してくれたお礼として」

？そう言う上柚木さくらは一拍置いて、深い深呼吸を吐く。

？絶対に何か大切な話だと流石の九条も察する。

？すると彼女は、チョコを受け取った彼の手を自分の両手でぎゅっと握り締めた。

？そして顔を上げお互いに目と目を合わせ、じつと見つめ合って。

？上柚木さくらは頬を赤く染めながら話の続きを彼へ伝え始める。

「…勿論、九条さんに渡したこのチョコにはそういう感謝の意も込めました。でも、このチョコに込めた本当の私の気持ちは違います」

「さくらちゃん…けど」

「…例え貴方の一番になれなくても良い。ずっと側に…居させて下さいっ」

「…!!!」

？九条大祐へ、心の奥に秘めた自分の想いを告白として伝える上柚木さくら。

？彼女は大胆な事に、その場で彼に抱き着いた。

？普通なら周りに居る『九条に好意を寄せている』女性達はあまり

良い気分にはならず、寧ろ止めに入るだろう。

…だが、彼女達は違う。

? 優しい微笑みを浮かべ、その告白を祝福するかの様に見守る。

? 九条も何かに気付かされたのか、若干泣きそうになっている上柚木さくらをそっと抱き込む。

「…有難う、さくらちゃん。こんな俺の側で良ければ幾らでも好きに居て。絶対に不幸になんかささせないから」

「…九条…さん」

? そう、彼はこう言ったのだ。

? 絶対に不幸にさせない、と。

? よくよく考えれば一番好きな人の一番になれない時点で、不幸等そういうレベルでは無い。

? では何故、九条はそんな発言をしたのか。

? 彼自身、まだ気の迷いがある証拠だ。

? 全員を一番として見たい彼は、今日一日で何回もの葛藤を繰り返して来た。

? だが、それも上柚木さくらの言葉に打ち砕かれた。

? 自分が第一として考えられなくても良い、だから側に居させてくれと。

? それは九条大祐が一として嫌う言葉だった。

? 然し彼にはそれを否定する勇気が無かった。

? じゃあ何故否定出来ないのか。

? 自分では嫌だと思いつつも、各務原あづみとリゲルを第一に考え、想っているからだろう。

? 抑、嫌と思っているかどうかも彼自身が分からなくなっている。

? 二人の事は確かに一番好きで、けど全員平等に愛したくて。

? 人間、実際にこうなってしまうえば決断其の物が下せなくなる。

? 様々な問題にぶち当たり、困難を乗り越えて来た彼にも、恋愛という精神的直に来る問題には足を躓かせていた。

「…何やら色々悩んでいるらしいわね」

「そりゃあ…俺の中で主張し合う感情が矛盾しているので…」

「大祐、この問題はそんなに難しく考える物じゃありません。私達全員が企みそうな解決法…それが答えです」

「企み…うーん…」

？べがの話した内容に、兎に角食らい付こうと脳内をフル回転させて思い付く事全てを口にする。

…と、しようとした九条大祐は、何も思い浮かばずに意気消沈していた。

？そんな彼を見て最初に口を開いたのはヴェスパローゼ。

？では無かった。

「…うゆ…みいな、なにいつてうの？」

？上柚木さくらから手を離し、唯突っ立っている九条大祐の足元には可愛らしい少女が首を傾げていた。

「きさちちゃんは…どう思うっ？」

？すると九条は、まだ7歳という幼い少女に先程の複雑な話の答えを求めてみる。

？試しに…みたいな軽い気持ちで聞いた九条。

「…きい、いま、だいすけのいちいじゃない…？」

「…えーと」

？これが面白い展開を生み出すとは、この場に居た誰もが思わなかった。

？全員が恋愛という、難しく、答えの見えない問題を必死に解く中で。

？たった一人の少女だけが只管真っ直ぐでいた。

？百目鬼きさらは九条大祐の足にくっ付き、思いつきり抱き締める。

？そして直ぐにこう言い放った。

「じゃあ、だいすけのいちいに、きいがなゆっ！」

「…へ？」

「あづにも、りげゆにもまけない。きい、だいすけにふさあしいおとあのじよせいになるっ！」

「きさち…ふっ…あの子ってば」

「そして下さいすけの…うゆ…およめさんに…なゆ」

? 顔を真っ赤に、照れ照れと体を揺らす百目鬼きさら。

? 彼女のこの言葉が全員に答えという光を見出させた。

? 一人、動揺を隠し切れていない男を抜いて。

「…そう…大祐、私達の企みとは、其々が貴方の一番になる事なので
す」

「…何、で…」

「あはは、何もそこまで驚かなくても良いんじゃないかな。相変わら
ず大祐くんは面白いよね。…むぐむぐ」

? ベガ自身から明かされた、企み。

? 九条はあまりに的外れな事を言われた所為か、一瞬間を置いてか
ら静かに驚愕の音を上げた。

? そんな彼の反応に、ムリエルが笑いながらチョコレートケーキを
口に運ぶ。

? 横ではマルキダエルが、ムリエルの頬に付いたチョコレートを布
巾で拭ってあげていた。

? 一方で倉敷世羅が我もと言わんばかりに九条の足へくっつく。

? すると百目鬼きさら、彼女と目を合わせる羽目になってしまい。

「にいの一番…うむ…じゃあ、せらが一番になるっ」

「きい、せあにまけない」

「せらだって、きさらちゃんには負けないもん」

「え?あの…二人共?」

? 現在進行形で九条大祐の足元では、二人の幼い少女が睨み合っ
ていた。

? お互いに目から眼光を放ち、バチバチと火花を散らしていそうな
絵面となっている。

? 只管に九条大祐が困っているのにも気付かずに。

? 唯睨み合っつて。

? 彼の足を抱き締め。

? 若干苦しそうに苦笑いをする九条大祐。

? それは空氣的にも、足元的な意味でも。

「これはもう何かしら、締め付けちゃってるわね」

「ヴェスパローゼさん…見てないで止めて頂けると助かります」

「ふふっ、分かったわ」

？少女達の争いから助け船を求める如く、九条はヴェスパローゼに二人の睨み合いを止める様に促す。

？すると彼女は笑顔で了承した。

？そして動けない彼の後ろに回り、両腕を背後から伸ばしてー

「…つて、何してるんです!？」

「何つて…大祐争奪戦に参加してるだけよ?」

？そう言つて後ろから抱き付いたヴェスパローゼは、故意に自分の胸を九条の背中へ押し付けていた。

？更に彼の耳元で「絶対に逃さない…♪」等と囁き、抱き締める力を強くする。

？流石の九条も三人の女性から一気に攻められては太刀打ち出来ない…どころか、身動き取れずに好き勝手されている。

？ふと、見兼ねたリゲルが割つて入る。

？九条大祐から離されたヴェスパローゼは、にこにここと笑いながらリゲルの背中をトンと押した。

「きやつ」

？可愛らしい声が辺りに響き、リゲルは咄嗟に九条大祐の背中へと寄り掛かった。

「…あの…リゲルさん、大丈夫ですか?」

？恥ずかしながらも先ず彼女を心配する九条大祐。

？然し、最も恥ずかしがっていたのはリゲル自身だった。

？彼女は目を逸らしながらも、そのまま彼の背中に寄り掛かってい
る。

？するとヴェスパローゼが一言。

「あら? やっぱり貴女も大祐争奪戦に参加したいんじゃない」

「ち、ちがつ…! 抑貴女が押したからー」

「じゃあ、大祐は私達が貰っちゃっても良いのね。なら遠慮はしないわ、だって好きだもの」

「…リゲルさん、あまり無理しなくてもー」

「う〜…！ええ、私だって誰にも負けない位に大祐が好き…だから！
そんな簡単に渡さないわ！」

？皆のしている目の前で大きな声を出し、大胆発言をかますリゲル。

？一拍置いて、彼女は他の女性達がにやにやと笑みを浮かべながら自分を見ている事にハッと気付く。

？すると九条大祐の背中に顔を押し付け、表情を悟られない様に顔を隠した。

？然し、恥ずかしいのはリゲルだけでは無い。

？足元に少女二人、背後に美女、横にも美女と、嬉しくとも恥ずかしく、心の中で湧き上がる感情を堪える九条。

？だが、彼が気にしていたのはそれだけでは無い。

？リゲルが自分に向けられている視線から耐える為に、九条大祐のコートをぎゅつと握っていた。

？その力が強まる度に、彼自身の心が締め付けられていく。

？何故？答えは単純だ。

？彼女はあまりスキンシップというものを好まない女性だ。

？初見の人物には勿論の事、例え彼女の心に深く入り込んでいようが触る事を許可しないだろう。

？そう、これが九条大祐の内心の答えだ。

？彼はリゲルが心配なのもあるのだろうが、そんな彼女が自ら自分の背中にくっ付いて来ている。

？という「リゲルさんは俺だけに…」みたいな独占欲を感じない様に心の中で踏ん張っていた。

？リゲルという存在に悪戦苦闘を強いられているのだろう。

？偶に吹き掛かる彼女の吐息に、理性が明後日の方向へぶつ飛びそうな九条。

？今は足元で睨み合いを続けている少女二人を見て理性を保っているが、二人だけの空間だったらどうなっていた事やら。

？九条大祐が手を出してそのまま大人の階段をーと考えられな

くも無いのだが、彼にはその勇気が無い。

？ 加えて九条大祐の中で彼女達の存在というのは、汚れなき純粋な乙女と認知されている。

？ それを自分の色に染めるのは気が引けるらしく。

？ 寧ろ彼の色に染めて欲しいと願う彼女達の想いは其方退けで…。

？ 側から聞いてれば「これは酷い」という言葉しか出てこないであろう。

？ だが、リゲルが九条大祐へ、こうも抵抗無く自分から触れに行くのにはこれが関わっている。

？ 単に彼が好きだというのもあるのだろう。

？ 然し彼女達を一番と考える九条が、自分の都合で手を出したりはしない。

？ 完全にそう信頼しているからこそ、こうして自ら攻めているのだ。

？ それに加えて、九条大祐はリゲルを身体目的として見ている気が一切無い。

？ もう「いや、好きだから」の一点張りだ。

？ 確かにリゲルからぐいぐい来られれば、流石に彼も反応を示してしまう。

？ それでもそれは「男」として当たり前の反応だ。

？ 然し九条の中では「そんな本能的な物に従って堪るか」という謎の反抗心がある。

？ 要するに、彼は人間の本能という概念に囚われたくない人種な訳だ。

？ 相手から来てるなら此方からも攻めてやろう…では無く、相手から来てくれたのであれば相手が満足するまで付き合っただけという、完全に受け身の精神。

？ リゲルはこれに甘えているだけなのだ。

？ 本題の結論に戻るが、リゲルの中では「九条大祐は私に手出しをして来ない絶対の自信」というものがある為、自分から彼へ触れに行っている。

？九条本人もそれを承知の上なのか、リゲルに限らず彼女達を一人として自分の好きにしていけない。

？つい先程、各務原あづみへの愛を見せるべくキスをしていたが。？然し、それは以前までの話だ。

？結局リゲルは「相手のタイミングにきっちり合わせてくれる」九条大祐を信頼して、自分と彼で二人だけの時間を過ごせる隙を、それこそタイミングというのを伺っていた。

？それが最近では、九条自身から来て欲しいという欲求が芽生えてきただけであつて。

？「自分からは行動に移さない」九条大祐と「彼から求められたい」リゲルが噛み合っていないのだ。

？中々遠回しな言い方になってしまったが、結論は至ってシンプル。

？待てど待てど全然言動に移さない彼に焦らされている気分を味合わされ、だからリゲルは積極的に九条に触れる様になったと。

？だがまあ：彼がリゲルの想いを察しているとは思えないのだが。

？これでは何時迄経つても進展無しで終わる事だろう。

？？どうなる事やら。

「大祐くんの一位…かあ…私にもなれるのかな…」

「バンシーちゃん可愛いからね。大好きアピールすれば、大祐くんもイチコロじゃないのかな？」

「ふえ…えつと、ありがと…。でも、ムリエルちゃんも可愛いから…チャンスはいっぱいあると思う」

「私、もう二位以下は嫌ですの〜！」

「…ふふつ、皆さん…そうこう言っている間に真夜中になってしまいましたよ？早く御暇しましょう。大祐に迷惑が掛かってしまいます」

？九条大祐という堅い強固な城を落とそうと、どさくさに紛れて攻め込むバンシー、ムリエル、蝶ヶ崎ほのめ。

？相変わらず攻め手を緩めない二人の少女、二人の美女。

？そんな彼女達を見つめながら微笑んでいる各務原あづみにオリジナルXIII。

? 一方でマルキダエルや上柚木さくら、和修吉は優雅に紅茶を啜っていた。

? 美女美少女に囲まれて何か心の中で聳り立つ九条大祐。

? 必死に端っこへ逃げようとするが、直ぐに捕まり定位置に戻されてしまう。

? そんな、苦笑いを浮かべながら彼女達の対応に手を焼いている彼の前に、一人の美女がおどおどとしながら現れた。

? そう、先程から九条を見つめ、とある一つの質問をしたくて仕方が無い：綺麗な水色の髪の毛の持ち主。

? ベガだ。

? 彼女が何だか何時もと違う事に気づき、九条大祐は動きを止める。

? 「彼が動かない」最大の間」という思考が働いたヴェスパローゼ。

? その隙を逃すまいと九条大祐を後ろから羽交い締めにしようとしたが、リゲルに然りげ無く頭をポンと叩かれ、止められた。

? 実の母親がもしもじとしている事が気になったのか、各務原あづみはベガの隣へ寄り添う。

? 更にもう片方にはA—Zが、心配そうに彼女を見つめていた。

? ベガはそんな二人に勇気を貰い、いざ一つの疑問を九条大祐にぶつける。

「…今更で凄く聞き難いのですが…大祐、ええと…貴方は…その…」

「どう…しました?」

「わ、私達全員を、その…愛してくれているという認識で…間違い無いでしょうか…?」

「ええ、勿論ですよ?それがどうかしました?」

「…えっあっ…いや」

「…ふふっ、愚問だったらしいわね。態々聞く必要無かったんじゃないかしら?ベガ」

? 思いの外即答され、少しキョドってしまったベガ。

? ヴェスパローゼはそんな彼女を見て、微笑みながらそう言う。

? その意見にはリゲルも同意しているらしく「恋する乙女は心配し

過ぎる傾向があるわね」等と、少しばかりベガを揶揄って見せた。

「もう…皆さん私を「恋する乙女」と呼び過ぎです。そんな可愛らしい渾名を付ける程、私は可愛く等一」

「うーん…ベガさんは可愛いというか、美しいの部類に入る外見をしてらっしゃるんですよ。それでいて、心は恋愛に初々しくて可愛いらしい乙女。そのギャップが何れ程素晴らしい事か…！まあ要するに、美しさと可愛さを兼ね備えた美女という事です」

「…ふえっ!?!」

「ほらね。ベガの魅力をこんなスラスラと言い放てるのよ？心配する必要があるかしら？」

「…いや、まだ話足りないんですが。ベガさんの魅力はまだまだ沢山有りますからね」

？これが九条大祐や天王寺飛鳥等のハーレム男の最大の武器。

？相手の魅力を吃る事無く伝え、相手に有無を言わせる前に攻め立てるといふ、言葉を利用した落とし方。

？だが、彼等は自覚等無い。

？自分の思っている事を素直に伝えるからこそ、相手の胸に届くというものだ。

？全くもって恐ろしい。

「…後は気遣いしてくれるところとか。疲れている時に優しく「もう休みなさい、明日もあるんですよ？」なんて言われたら…そりゃ休むしか無いでしょ」

「や、大祐、私との会話を思い出さないでっ」

「珍しく敬語じゃ無い。…よっぽど焦っているのね、ベガ」

「お母さんと大祐くん、本当の夫婦みたいだね。羨ましいな…私もそうなりたい…な？」

「大祐と…夫婦…!?!」

「あづみさん、貴女さえ良ければ何時でも準備は出来ております」

「えへへ…子供は、何人が良いかな…?」

「「ぶっ!!」」

…やはり、先程の九条大祐や天王寺飛鳥の話といい、無知や無自覚

というのはなんて恐ろしいものなのか。

?特に各務原あづみや百目鬼きさら。

?彼女達は其方関連の事を知らない。

?だが、知らないのにも関わらず九条大祐には爆弾発言をかます。

?そんな二人の発見は、此れ迄幾度と無く彼の胸を締め付けてきた。

?あまりにも辛過ぎる九条大祐は、一回森山碧に相談を持ち掛けた程だ。

?森山碧から返って来た答え。

『：ハーレムロリコンめ：後ろから刺されてしまえーん?ああ、適当にあしらつとけばいんじゃない?』

『へっきーの答えが適当過ぎるわ!ていうか全部丸聞こえだったからな!』

『ああ、悪い☆』

『絶対反省してないだろ!』

『：バレた?』

(九条大祐がバトルドレス「ストライクフリーダム」を装着し、目の前でロングレンジライフルを放つ音)

：なんてぐだぐだなやり取りをしている二人なのだろう。

?話が逸れてしまった。

?少しばかり強引に路線を戻そう。

「いや：子供って：」

「あづみ、意味を分かっているのですか?」

「えつと：確か、コウノトリさんが運んで来てくれるってお母さんが：」

「：ベガさん?」

「：もし、大祐と本気で夫婦になりたいなら、その時教えましょう」

?各務原あづみという少女が無知な理由、母親であるベガが嘘を教えているから。

?然し、実の娘に性行為の話など出来たものか。

?答えはNO、ノーだ。

? 加えてベガは、今迄各務原あづみを誰にも渡そうとして来なかった。

? 抑母親にその気が無いのであれば話は始まらないし変わらない。

? だが、九条大祐と出会い、実の娘と相思相愛の仲である事を目の前で証明され。

? ベガも認めざるを得ない、というか認めざる他選択肢が無かった。

? つい先程もお互いのファーストキスを捧げ、軽いキスを済ませたばかり。

? そろそろ其方関係の話を各務原あづみへ聞かせようとした際に起こった出来事だった。

? だから余計にベガは話辛くなってしまい、まさかこの場で話す訳にもいかず。

? バレンタインパーティーが終わっても、恐らく話さない積もりなのだろう。

? 彼女の「本気で夫婦になりたいなら」という発言が証拠だ。

? だが然し、各務原あづみは。

「…わっ私、大祐さんと本気で夫婦になりたいですっ…だから、お…教えて下さいっ!」

「あづみさん…」

「…後は大祐次第って事ね。勿論答えは決まってる筈よ?」

? 各務原あづみの後押しをするが如く、確定付いた答えをリゲルは九条へ催促する。

? 無論、彼の口にする言葉も決まっているようなものだ。

? 一言「俺もです」といった言葉を放てばいいだけ。

? 難しい事等何も無い。

? だが、九条大祐が口にした言葉は。

「…俺は、まだこの関係で良いと思います」

「大祐!?!」

「大祐くん…」

? 予想外の答えが返って来た所為か、各務原あづみとリゲルの二人

は思わず彼の名前を口にす。

？各務原あづみの夫婦になりたい告白を断った理由、それは九条大祐なりにしつかり考えていた。

「あづみさんは子供を持つ以前に、どうすれば子供が出来るかを知らないですし…もし知っていても俺には一つだけ心配な事があるんです」

「心配な、事…？」

「うん。あづみさんの体の事が兎に角心配なんだ」

「どうして？私は全然平気だよ。前よりも丈夫になったよ？」

？九条を納得させたいが為に、必死に問い掛ける各務原あづみ。

？すると彼は、彼女の体を優しく抱き締め、話を続けた。

「…あのね、あづみさん。子供を持つ為にする行為ってというのは、今迄の比にならない位にぐったりするんだ。この言い方だと全くそう思えないだろうけど、実際にそういう事をした時…あづみさんの体に何かあってからじゃ遅いんだ。ベガさんなら、分かってくれますよね？」

「…ええ、勿論です」

「でも、大祐くんとなら…！」

？九条が説得しようとも、怯まず押し強さを見せる各務原あづみ。

？然し。

「こればかりは…譲らない」

「…！」

？彼女の耳元で静かに呟き、自らの意思をしつかり示す九条大祐。
？そんな彼の言葉に各務原あづみは、見るからに気落ちしてしまっていた。

？リゲルは九条大祐の答えに納得がいけないのか、一步前に出て反論しようとする。

？だが、後ろにいるベガから肩を掴まれて止められた。

「…ここからは大事な話をします。申し訳無いですが、あづみさんとリゲルさん、ベガさん以外はー」

「分かっていますよ、大祐。ヴェスパローゼ、皆を違う部屋に連れて行く誘導を手伝って下さい」

「言われなくても既に終わっているわ。部屋に残っているのは私達だけよ」

？事情を理解し、気を利かせて全員を退場させようと試みた和修吉。

？然し、彼女よりも早く察したヴェスパローゼが、九条大祐達に気付かれない様に全員を違う部屋へ移動させていた。

？ヴェスパローゼの行動力の高さに、九条は頭を下げて感謝の意を示す。

？すると彼女は何も言わず、唯にこにことしながら片手を振って部屋から退室した。

？それに付いて行く形で、和修吉も退室する。

？彼女はその際「愛していますよ、大祐」と言い残していった。

？一体どういう意味でそう言ったのか。

？九条大祐は「好きだから」という単純な意味だけには感じられ無かった。

？何か別の意味が込められている様で。

？だが、それは今考えるべき事では無いと、一度頭の隅にへと追いやった。

？そして再度、各務原あづみの方へ体を向ける。

「…あづみさん、俺の本心を言っても良いかな」

「…うん」

？二人共、一拍置いて会話を続ける。

「…俺はね、いや…俺もかな。あづみさんとは今迄以上の関係を築きたい」

「…！」

「でも、それでも…あづみさん自身の体が一番だから。何かあったんじゃない、関係も何も無いから。それだけは分かって欲しい」

「…ううん、私…分かってたんだ。自分の体がまだ弱くて丈夫じゃない事。でも、前よりは少しでも強くなったって自分で信じたくて、大

祐くんにもそう認めて欲しくて……ごめんね、自分勝手に……」

？今にも泣きそうな程に、震えている声。

？そんな彼女の本音を耳にした九条は、この判断が本当に正しいのか疑心暗鬼になっていた。

「…けど、あづみさんは…それでも俺を求めてくれた。受け入れてくれた。だから本来俺に拒否権なんて無い」

「違うよっ、大祐くんは私を心配してくれただけ…無理強えをしたのは私だから」

？互いに自分の非を悔いては相手を悪く無いと言い張る。

？自分が一番最低辺だと思ひ込み、そんな自分に尽くしても意味は無い…だからその分他人に尽くそうとする少年。

？相手にとことん献身的で、争い事を好まない優しい性格の少女。

？献身という二文字を持ち得る二人は、相手を認めても自らを認めようとはしない。

？何方かが悪いでは無く、何方も悪くないで事済む話であるにも関わらず。

「大祐が優しくリードしてあげれば良いだけの話なんじゃないかしら？」

「リゲル、子供を作る為に必要な行為というものを知っているのですか？」

「勿論知ってるわ。キス以上の事をするだけでしょ？」

「…駄目ですね」

「何が!？」

？至って真面目に話をしている九条大祐、各務原あづみの後ろでは愉快的会話をしているリゲルにベガ。

？正に对象的だ。

「…リゲルさん、幾ら俺が優しくリードしたって、あづみさんの体は耐えられるか怪しいですよ」

「それにあづみはまだ14歳です。大祐だって15歳という若さで…子供を作るには早過ぎる。私は時を待つ、という大祐の意見に賛成です。その間に子供を作る為に必要な知識を、あづみに教えれば良いの

ですから」

「お母さん…」

「大祐やベガの見解がよっぽど正しいって思い知らされるわね…」

？少し考えるだけで別の選択肢が見えてくる。

？目先の事に囚われていては、新しい道など生まれはしない。

？大袈裟な例えではあるが該当に当て嵌まる例えではある。

？然し誰もが視野の広い人間では無い。

？だからこそ、頭で考えるという行為が何れ程大切な事か。

？九条大祐も、先程から悩んでいる問題に視野を奪われ過ぎている。

？彼もまだ大人では無い証拠だ。

「でも…なれるなら…今直ぐにでもあづみさんともっと深い関係をー」

「大祐ちゃんと繋がりたい…なあ…」

「…ベガ、あづみって結構重症よね」

「…私や貴女も否定出来ませんよ」

「わっ、私はちゃんと弁えているわ！大祐と大人の恋をするにはもう少し待たなきゃって…そう…何時迄、待たなきゃいけないのかしらね…」

「あ、そうでした」

？各務原あづみの爆弾発言を受け流す九条大祐。

？それでもしなければ生き長らえる事すらままならないからだろう。

？そして彼はリゲルの言葉に、とある事を思い出す。

「あづみさんにはお互いにファーストキスという初めてを体験しました。では、リゲルさんはどうしましょうか」

「ええっ!?そんな…急に言われても…／／／」

「わあ、リゲル、凄い顔真っ赤だよ」

「照れてる証です。あづみも大祐に対しては何時もあんな感じですよ？」

？？そう言われた各務原あづみは、自分で気付かない内に顔を真っ赤

に染めていた。

「ベガに微笑ましく「ふふっ」と言われ、気付き、両手で顔を隠す。……そうなんだよね。私、大祐くんときっキス……したんだよね／＼」
「うっ、あづみさんに言われるとなんか恥ずい……。思い出したくー
無い訳でも無いな。寧ろ一生忘れたくない思い出の一つだ」

「や、思い出さないでえ……いやあ……うう／＼／＼」
「か、かわええ……」

「彼女とのファーストキスを思い出し、口元がにやけ……はせずに恥ずかしがる九条大祐。」

「そんな彼を見て更に恥という感情が湧き上がって来たのか、各務原あづみは九条大祐と目を合わせる事が出来なかった。」

「可愛らしい彼女の照れというものを目の当たりにし、九条は少し揶揄い気味に「いや〜嬉しかったな」等とほざいて見せる。」

「然し、その言葉が各務原あづみに火を付けた。」

「彼女は膝を着いている九条大祐を見事押し倒し、彼の腹部辺りに馬乗りになる。」

「そして唾然としている九条の顔の近くにグツと接近し。」

「だ、大祐くん……これ以上は我慢出来ないよっ」

「あづみ、口封じにキスしようとしてるわ」

「良いのでは無いですか？あの子があんなに積極的なのは、見えて新鮮です」

「ちよと！のほほんとするもんじゃ無いですからね!?あづみさんも、謝るから落ち着いて！」

「む……」

「不貞腐れた様に頬を膨らませ、怒っているのだと表情で九条に伝える。」

「流石にそこまでされれば気付かずにはいられないだろう。」

「九条大祐は苦笑いを浮かべながら、「どうどう」と各務原あづみを落ち着かせようと試みる。」

「だが、其処で思い掛けない出来事が起こってしまった。」

「あづみさん、本当にごめんー」

「えーいっ」

「ふむっ…!?!」

? 彼が謝ろうとしたその瞬間。

? 何処からか聞き覚えのある声が聞こえたかと思うと、各務原あづみはいつの間にか九条大祐の唇に自分の唇を重ねていた。

「んっ!?!」

? 唐突な出来事に驚く事しかできない九条。

? まさか彼女がこんなにも積極的だとは、彼でも知らなかったと。

? だが、近くで見えていたリゲル、ベガは至極機嫌の悪そうな表情を見せていた。

? その理由とは一体。

「…ぷあっ」

「不可抗力過ぎだろ…ナナヤ、あづみさんに謝って」

「えく、だってあんな面白そうなチャンス、逃す方がどうかしてるよ」

「ナナヤちゃん…んと…」

「ほら、あづみさんだって困ってるから」

? ナナヤに、自分のした事を謝罪するように催促する。

? 言うべき時には言っておかなければ、今後ナナヤはまた好き勝手にやってしまうからだろう。

? 何時もとは違う、威厳をしつかり持って彼女に注意を促す。

? 然し又もや、各務原あづみに驚かされる事となった。

「ち、違うの。大祐くん…あのね、ナナヤちゃん。えと…ありがとう」

「…へっ?」

「でしよでしよ♪あづみちゃんが心の中で「もう一回…したいな…」みたいに思ってたから、手伝ってあげただよ♪」

「な、ナナヤちゃん、言っちゃだめっ」

? あまりに衝撃的な出来事が起こり過ぎた所為か、九条大祐は言葉を発するという力を失った。

? それはリゲル、ベガも同じ。

? まさか各務原あづみとナナヤが結託していは。

? 何より三人が思ったのは、何時からお互いに仲良かったのか…と

いう疑問だった。

?にこにこと笑うナナヤに、恥じらう各務原あづみ。

?そんな二人を見て、三人共自然に笑みを浮かべていた。

?内二人はナナヤに良い印象を持っていないが。

「さてさてくお次はそこの貴女だよっ」

?又何かやらかす積もりなのかと、頭を抱える九条大祐。

?そんな彼を無視し、ナナヤはとある人物を指差す。

?さあそれは誰なのか。

「…えっ、私?」

?無論、リゲルだろう。

?だが、本人は指差された方向に驚いていた。

?あのナナヤが仕掛けて来る事だ：身構えた方が良いだろう。

?彼女はそう思い、ナナヤに対して身を低くして構えた。

?送り付ける視線もキツイ眼光にして。

?そこまでされると、流石のナナヤも少し遠慮しようかと一考した。

?然し彼女はニヤリと笑い、リゲルに笑顔を向ける。

「安心してよ。直接私が出す訳じゃないからさっ♪」

バレンタイン（後編2）

「…？どういう意味ー」

？ナナヤの言葉に翻弄されるリゲル。

？それでも警戒を解かない彼女は、一步又一步と後退り、ナナヤ距離を取る。

？だが然し、ある程度距離を離れた瞬間…リゲルの体は誰かに持ち上げられた。

「…！は、離しなさい！」

？ナナヤに気を取られ過ぎた。

？見事彼女の罠に引っ掛かってしまった、と、リゲルは後悔していた。

？兎に角、自分の体をお姫様抱っこしている奴から解放されようと必死にもがく。

？すると、彼女の一番親しみのある声が入ってきた。

「…り、リゲルさん。落ち着いて。俺ですから」

「大祐!？」

「ほーらねっ」

？声の主が九条大祐だと分かった瞬間、リゲルは平常心を取り戻し。

？同時に申し訳無さと恥ずかしさという感情が芽生えていた。

？それは彼女の表情に表れており、どうにかして九条大祐から顔を逸らそうとしている。

「いや…急に御免なさい。俺の勝手で驚かせてしまって…」

「…ナナヤに操られてる可能性は？」

「無いですよ。だから、安心して下さい」

？そう、彼は優しく言い放った。

？リゲルはその言葉を素直に信じ九条の胸元に寄り添う。

？そんな光景を、まじまじと見つめる三人。

？中でも、ベガだけが母親の様な微笑みを浮かべていた。

「…それで、えーとですね…」

「？」

「もう少しの間、リゲルさんの事を好きにさせて貰っても良いですか
…？」

「!!!」

？恐る恐る尋ねる九条大祐。

「…ええ、その…任せるわ」

？最早既に、彼に身を委ねるリゲル。

「有難う御座います。それじゃ、ちよいと寝室に移動しますよ」

「…？どうして？」

「直ぐに分かります。そして、直ぐに戻って来ますから。ちよつと
待っててくれますか？」

「うん、行ってらっしゃい」

「どうぞ楽しんで来てねっ」

「ふふっ…リゲル、覚悟した方が良いですよ」

「…へっ!!?大祐、今から何するの…!?!」

「お楽しみですかね？」

？ニコツと、爽やかな笑顔を向ける九条大祐。

？その表情にリゲルは胸を押さえ、身を縮こませる。

？先程はああ言ったものの、いざとなると怯みを隠せない。

？九条大祐とリゲルは、そのまま寝室へと入っていった。

――

10分後

――

「あ、リゲルと大祐くんが出て来たよ」

「…ありやりや…これは」

「リゲル、完全に墮とされましたね」

？寝室から姿を出した二人を見て、三人は直ぐにこう思った。

?リゲルが凄くぽけーつとしている。

?何をされたんだと。

?そんな彼女を見て、心配そうに抱き締める九条大祐。

?相も変わらずお姫様抱っこでリゲルを運び、ソファアの上に寝かせる。

「:リゲルが、ショートしてる」

「まさかとは思いますが:大祐、リゲルと最後までしてしまったのですか?」

「大祐くんの初めては:watashiが貰いたかったのに」

「何言ってるんですか!?!してませんよ!てか、ナナヤはまだ狙ってたのか:」

「当たり前だよっ♪」

?これではおちおち寝てもいられないと、九条大祐は若干萎え始めていた。

?何時か気付かない間にナナヤのお腹が大きくなって、それを祝う為に拍手を送ったら自分の子供と気付かされる。

?何て悲惨な未来なのだろうか。

?そんな事を想像した彼は、顔を真っ青にして後悔していた。

「でも、まだしてないんだよね?じゃあ、何れ私の物になる日が:ふっ♪」

「怖いからナナヤ!不敵な笑みで此方を見るな!」

「そうです。大祐の初めてはあづみと決まっていますから」

「ええっ!?!」

?ベガの言葉に、九条大祐と各務原あづみが同時に驚く。

「:母親公認か:いや、でも:まだ早いよな。うん。まだ:まだ早い、じゃあ何歳まで待てば良いんだろうか」

「大祐くん:私は、何時でもオツケー:だよ?」

「あづみ、先程の話を忘れてはいけません」

「そうだそうだと、大祐くんは私の物なんだからっ」

「俺は、物じゃ、ないから!」

?実の親から許可が下り、一瞬だが心が揺らいだ九条大祐。

? 然しそれでは本能に従ってしまう事となる。

? 本能≡彼の中では一番嫌っているものだ。

? 加えて此処を本能で動いてしまうと、自分の言葉に責任を持たない「責任放棄野郎」という最低な人間になってしまう。

? それは、それだけは嫌だと。

? 九条大祐は各務原あづみの誘惑に押され掛けたものの、頭をぶんと振って理性を取り戻す。

? と、四人で話している内に。

「…う、うん…と。私は一体何をー」

「あつ、リゲルおはよっ」

「あづみ…有難う。やっぱり何時見ても癒されるわね」

「大丈夫ですか? 急にパタツと意識を切らしたのでびっくりしましたよ」

「ええ…何があつたのか、ちよつと思ひ出せなー」

? ふと、リゲルは九条大祐の顔を見て頬を真っ赤に染めた。

? そう、彼としたある一つの事。

? 九条の顔を目に入れた瞬間、それを思い出してしまったリゲル。

? 彼女はハツとし、後退り、そして腕を滑らせて頭をぶつけてしま
いそうになった。

「きやつ」

? その時、瞬時に体を動かしてリゲルの肩に手を回し、支える九条。

「…ちよつと、落ち着きましょ? 何だか凄く慌ててますから」

「あつ…いや、その…だつて…」

? 自分の慌てている理由を説明しようとしたリゲルだが、喉で引つ掛かって出て来ないままでいる。

? 何故つて?

? 彼女にとつて、九条大祐とした行為は口にする事の出来ないものだと認識しているからだ。

? それは彼も一緒だということに気付いていないのも事実だが。

「…二人は一体、何をしていたんですか」

「わ、私も気になる…!」

「俺とりゲルさんが何してたかって…言っちゃえばキスですよ」

「だ、だい…すけ…恥ずかしから言わないで…」

「協力した事、ちよつと後悔してる…」

？ベガやナナヤより、まさか各務原あづみの興味津々の方が勝っていた。

？一人は何故かしよんぼりとし、頬を膨らませてりゲルを威嚇している。

？それに対してりゲルは、普段しない様な勝ち誇った表情をしながらドヤ顔染みた顔を見せ付けていた。

？ナナヤはそれが気に入らなかつたのか、咄嗟に九条大祐へ抱き付いて彼を困らせた

「ねーねー大祐くん、やっぱり…二人とした事よりもっと激しい事、しよ？」

「やだ」

「即答!？」

「…それよりも、リゲルにとってキスは初めてです。が…大祐にとってはそうでもありません。何が貴方の初めてだったんですか？」

？彼とナナヤが茶番の様な会話を繰り返していると、ベガが素朴な疑問をぶつける。

？自分の体に引付くナナヤを剥がそうと必死になっていた九条大祐だが、ベガの質問に答えるべくちらつとりゲルの方に視線を送った。

？すると彼女は照れているのか目を逸らしたが、コクンと頷いて了承を示す。

？そんなりゲルの側には、各務原あづみが彼女の手を握って心配そうに見つめていた。

「…まあ、確かにキスは初めてじゃありません。ついさつきあづみさんに捧げたばかりですからね」

「私との初めては何が良い？何でも良いよっ」

「ナナヤちゃん、ほんとに大祐くんが好きなんだね」

「うんっ！だからね、あづみちゃん達には負けないよっ」

? 九条大祐の話を遮断するかの如く、割って入るナナヤ。

? 然し各務原あづみとは互いに笑顔で話し合っているのが伺えた。

? 意外に仲が良いんだと九条大祐は思いながら、話を続ける。

「話を戻して、まあ結論を言おうとリゲルさんとは大人のキスをした訳ですよ」

「く／＼／」

「大人の…キス?」

「多分、ディープじゃないかな?」

「当たり前。…そうしたらリゲルさんが俺の理性を吹き飛ばしそうな声を出して、いつの間にかショートしていた。どうやって起こそうか考えていたら遅くなったと、そういう話です」

「リゲル…どうでした? 大人のキスは」

「でいーぷキス、だよな?」

「や、やめてっ。感想とか言ったらまた倒れる自信しかないから!」

? そう言っつてリゲルは、近くにあったクッションに顔を埋める。

? 自分の真っ赤な顔を見られたくないからだろう。

? そんな、恋乙女真っ盛りのリゲルを見てベガや各務原あづみは不意に「可愛い」と思ってしまった。

? すると九条大祐はリゲルの側まで寄り、彼女の上に被さる様にしてから顔のクッションを退ける。

「…それじゃありゲルさんの可愛らしいお顔が見えませんか?」

「や、見られたくないから隠してるのっ」

「大祐が急に肉食系になりましたね」

「いや、一回こういう事を言ってみたかったんですよ」

? 物は試しに、みたいな感覚で普通は出来ない事をちゃっかり仕出かす九条大祐。

? やはり無自覚というのは恐ろしいものだ。

? 彼はそのままソファに座り、ゆったりと寛ぐ。

? 隣では息を切らしたりリゲルが然りげ無く九条の肩に寄り掛かり。

? その逆隣には各務原あづみが座り。

? 向かい側にベガ、ナナヤと、必然的に座る席が決まっていた。

?と、五人で楽し気に話していると部屋の扉がガチャツと開き、誰かが勢い良く入ってくる影が彼の瞳に一瞬映る。

?すると九条大祐の元へ走って行く少女が一人。

?直後、彼の胸元に向かってダイブした。

「うおっ…と、きさらちゃん…走ると危ないよ。それに飛び込んで来るなんて、急にどうしたの?」

?そう、走っていた影は彼女…百目鬼きさらのものだった。

?九条は自身の胸元に抱き付いている百目鬼きさらを、あやす様に頭を撫でてやる。

?だが何故か、彼女の瞳からは雫が零れ落ちていた。

?流石に九条大祐も理由が分からない。

?どうして百目鬼きさらは泣いているのか。

?周りの四人も心配そうに彼女を見つめていると、そこへ一人の美女が歩み寄ってくる。

?無論、ヴェスパローゼだ。

「…きさらちゃん?どした?」

「ヴェスパローゼ、またあの少女に何か吹き込みましたね」

「人聞きが悪いわよベガ。私は事実をきさらに教えただけ」

「へえ…じゃあ、相当キツイ事を言ったんだ」

?ベガはヴェスパローゼの核心を突く様な言葉をぶつけるも、彼女から返って来たのは否定だった。

?それに乗じて珍しくヴェスパローゼへ話し掛けるナナヤ。

?然し、当の本人はそれを完全無視。

?困り果てる九条大祐と、その彼の胸元で泣いている百目鬼きさらをじっと見つめていた。

「あの…きさらちゃんに何を言ったんですか…?」

?更には各務原あづみまでもがヴェスパローゼへ問い掛けていた。

?恐る恐る話し掛けてくる彼女に対してヴェスパローゼは、ふっと笑みを浮かべる。

?そしてこう答えた。

「…大祐ときさらって、お似合いじゃないかしら」

「随分と突拍子も無いわね」

？彼女の返答があまりに唐突過ぎる内容の所為か、思わずリゲルが突っ込む。

「いや、飽くまで私個人の意見よ？」

「そう…それで？」

「気付いていないのかしら？私は二人がお似合いだと思う。だから大祐にはきさらを貰って欲しいの」

「…一体、何の関係があるのかしら」

？それが幼い少女の泣いている理由と、何の関連性があるのか。

？リゲルだけでは無く、各務原あづみやナナヤも疑問を抱いた。

？二人…九条大祐とベガを抜いて。

「…成る程。ヴェスパローゼさんがどう伝えたのかは分かりませんが何と無く察しましたよ」

「ですね。恐らく「このままだと大祐の一番にはなれない」とでも言っただけでしょう。大祐自身があづみとリゲルを一番に見ているのも事実ですから」

？すると百目鬼きさらは、彼の胸元で無言の頷きを見せた。

？そんな、少し寂し気な表情で自分を見つめてくる彼女の頭を撫で続け、九条大祐は微妙な気持ちを抱く。

？どうしてやれば良いのだろう、と。

？九条が百目鬼きさらを子供の様に見ていようとも、彼女からすればたった一人の好きな人…という認識なのだ。

？とはいえまだ7歳の幼い少女を恋愛対象として見ろというのは難がある。

？だからと言って彼女の気持ちを蔑ろには出来ない。

？それが今の、九条大祐の心境だった。

？葛藤、正にその通りだ。

？するとヴェスパローゼが彼の近くに寄り、耳を貸してと一言。

？九条大祐は素直に従い、ヴェスパローゼへ耳を傾ける。

「…流石に今直ぐとは言わないわ。でも、きさらがもうちよつと大人になったら…あの子を一人の女として見て欲しいの。子供でも妹で

も無い、恋愛対象として」

「…ですが」

「お願い。これは私からの勝手な申し出でもあるけれど、きさら自身の想いでもあるの」

？自分が良い印象を受ける為の嘘か真か。

？ヴェスパローゼの言葉が本当がどうか確かめるべく、九条は百目鬼きさらと顔を見合わせた。

？綺麗なその瞳と視線を合わせると、彼女は照れながら下を向いて頷く。

？これには九条も押し負けた。

？もう、ここまで自分を好きだと思ってくれている百目鬼きさらをこのまま放っておく訳にはいかないと。

「…ありがとね、きさらちゃん」

「いい…の。きい、だいすけがすき…だから」

「ふふっ、ちゃんと自分の気持ちを言えたわね」

？ヴェスパローゼがそう言うのと、百目鬼きさらは照れ隠しをする様に九条の胸元に顔を押し付けた。

「ま、私も大祐を諦めた訳じゃ無いわ。今度からは『攻め』という立場を得て…存分にアピールさせて貰うわね？」

「具体的には何を」

「そうね…朝に起きたら隣で寝てたり、昼は食事に誘ってそのままデートしたり、夜は…言わずもがな？」

「何故疑問系…」

「大祐なら察してくれるだろうと思って…ね？」

？彼からすれば、察しが良かろうが悪かろうが何れにせよ想像したくは無いだらうという気持ちだった。

？15歳という思春期真っ盛りの年齢だろうが、九条はそういう事を頭で考えるのに抵抗を抱いている。

？その理由は。

？苦手意識が高いから…だけでは無かった。

？例えどの選択肢を選んだとしても最初に傷付くのは女性だ。

?それを踏まえて初めて、彼女達と一つになると。

?どんな痛みだろうと関係無い。

?彼女達が痛がる姿を想像する事になる時点で、心が拒否して止まない。

?唯想像するだけでも、無理な物は無理だと。

?彼の中では頑なにそれを貫き通していた。

「ちよつと待つのですのーヴェスパローゼさんだけ抜け駆けとは卑怯ですわ!私も大祐君という男性を諦めた覚えはありませんの:私だつて色んな事をしてみたいのですのっ」

?すると盗み聞きをしていたのか何なのか、蝶ヶ崎ほのめが扉を力強く開けて割り込みに入る。

「:え、色んなつて何をですか!?!」

「わ:私は、もう18歳ですわ。結婚出来る年齢には到達してますの。子供だつて身籠れる位には体も出来上がつてると思いますのよ。だから:その、あれですわ?」

「:ほのめ嬢もヴェスパローゼさんと似た感じですね!?!その察せよみたいな疑問系。それに俺はまだ結婚出来る年齢ではありませんし:何だかすみません」

「謝る必要は無いのですの!大祐君がその時になったら:お、美味しくいただきますのっ:」

「意味分かってます?」

「ヴェスパローゼさんの真似してみたのですわ」

「下手な真似はよした方が身の為ですよ:特にヴェスパローゼさんの真似は」

「あら失礼」

?二人の会話を聴きながら、ヴェスパローゼはにこにここと笑っていた。

?そんな彼女に見向きもせず蝶ヶ崎ほのめは九条大祐の近くへと寄って行く。

?彼の胸元では幼い少女がゆっくりと呼吸しながらリラックスし、誰にも譲らないと言わんばかりに彼を抱き締めていた。

? 九条大祐は蝶ヶ崎ほのめを気にしながらも百目鬼きさらの背中を優しく叩いてやっていた。

? その光景を羨ましそうに見つめる蝶ヶ崎ほのめ。

? すると百目鬼きさらは一瞬だけ振り向いて彼女と目を合わせるが、直ぐにふいつと視線を逸らす。

「ぐぬぬ…幼い事がこんなに恨めしく感じたのは初めてですの。私にも是非して欲しいですわ…」

? そう言つて、悲しそうな表情を浮かべる。

? 然し目の前でそんな事をされたんじゃあ、九条大祐も黙っちゃいない。

? 両隣りに座っている大好きな二人とアイコンタクトを取り、蝶ヶ崎ほのめを手招きする。

? 彼女は九条の指示通り側まで近付いた。

? そして彼は、百目鬼きさらを右腕で抱き、蝶ヶ崎ほのめを左の腕で抱き締める。

「…は、はわっ…急に何ですの!?!」

? 慌てる彼女の耳元に、九条大祐は顔を寄せてこう言った。

「…すみません。ほのめ嬢が2番以下は1番嫌いなものを知っているながらもあんな事を口にして。でも俺は、皆を二人と同じ位好きですし愛してます。無論ほのめ嬢もその対象ですからね。もしこんな男は嫌と言うのであれば、何時でも離れて貰って構いません。貴女を縛りたくはありませんから」

「大祐君は…卑怯ですよ」

「ふふっ、その照れてる顔といい。ほのめ嬢は可愛らしくて…普段から芯の強い美しい女性ですよね」

? 彼の言葉に顔が真っ赤に染まる蝶ヶ崎ほのめ。

? 九条大祐は彼女の顎の下に手を置き、クイツと上に上げて自分と目が合うようにする。

? 俗に言う本日三回目「顎クイ」だ。

? そんな、周りの女性達が見ている中での大胆行動。

? 九条大祐は躊躇等せず、次は大胆発言をかました。

「…思わず落としたくなっちゃうな」

「ふえ…ええっ!?!」

「珍しく大祐が攻めてる」

? 不敵な笑みを見せながら蝶ヶ崎ほのめという女性の心を完全に驚掴みしに行く九条。

「だ、大祐くん…私にもしてっ…」

「うーん…あづみさんにはもうちょっと恥ずかしい事、言ってみようかな」

「大祐は本当に恥ずかしがってるのかしら」

「はい、死にたくなる程恥ずかしいですね」

「私が一番恥ずかしいのですのっ!…で、でも、嬉しいですよ」

? 蝶ヶ崎ほのめは素直に思った事を口にする。

? それに対して九条大祐は「好かれている」事の大切さ、有難さを実感していた。

? 無論、忘れて欲しくないのは彼を嫌う人物もいる事だ。

? 男性は以ての外だが、女性からも勿論嫌われる。

? 九条が極端な所為か彼の周りに集まる人物も、1か100という極端さを持っていた。

? 彼を好む者はとことん好きになり、彼を嫌う者は何が何でも関係其の物を持ちたくない、九条の存在自体を洩る。

? だが、当の本人は全く気になどしていなかった。

? 自分が嫌われる人種である事は重々承知済みだからだ。

? だからこそ、こんなにも自分を好きになってくれる人達がいてくれる事に疑いを持っていた。

? それも今日という日で消え失せた訳だが。

「…はあ」

? 様々な想いが混ざり合い、思わず溜め息を吐いてしまう九条大祐。

「…こんなんだから女だったら思って思われるのかなあ。やっぱり否定って事も覚えなきゃならんのか」

「どうかしらね。相手の全部を理解して受け止めてくれる大祐だから

こそ、好かれるのかもしれないわよ？それは女性だけに限った話じゃあ無い訳だし…」

「否定する位なら肯定してやれってタイプだからな…相手を拒否する理由が分からんのですよ」

「でも、駄目な事は駄目って言うからね。じゃなかったら今頃は私の物になってたのに…」

？ナナヤは詰まらなそうに頬を膨らませ、九条の背後から両腕で抱き付く。

？もしかすれば各務原あづみとリゲルを抜いた中で彼が一番好きなのは、百目鬼きさらとナナヤの二人やもしれない。

？だが九条大祐自身が順番付けというのを嫌うからか、彼女達からかしても「誰が一番九条が好きか」という概念は無いのかも分からない。

？何れにせよ彼を我が物にするという目的は潰えないようだ。

「…それで、私達を騙してまで大祐を奪おうとしたのですか？ヴェスパローゼ」

？そんな会話を繰り返していると、怒り気味な表情の和修吉が何時の間にか扉の前に立っていた。

？周りには先程部屋を出て行った物達全員もあり、全員が全員不満そうな表情を見せている。

「私は騙した覚えは無いわよ？只一言「大祐の邪魔になるといけないから」って部屋を変えただけ」

「問題はその後です。貴女と百目鬼きさらは「外で空気を吸ってくる」と嘘を吐き、大祐の部屋にお邪魔していた。何時までも戻って来ないから嫌な予感はしてましたが…まさか本当に騙していたとは」

「…あれ？じゃあ、ほのめ嬢は？」

「私は怪しい二人の後を追っている内に道に迷ったのですわ。探している内に大祐君の部屋の前を横切る事になり、話し声を聞いて乱入致しましたの」

？あれは確かに乱入だった、それ以前に和修吉さん達はそんな単純な手に引っかけたのか…と九条は意外さを感じていた。

？これは後々役立つだろうと頭の隅で何やら企む九条だが、彼の周りには何時しか女性陣全員が集まっていた。

？少しばかり窮屈そうにしている各務原あづみとリゲルを自分の方に寄せ、ちよつとは楽になるかなと期待する。

？結果は丸で逆さまの様になってしまったが。

？九条の近くに寄せられた事により、嬉しき、恥ずかしき、照れがごちゃ混ぜになり上手く感情をコントロール出来ない二人。

？そしてそれを実行した本人は全然気付いていない。

「…まあ、でももう12時過ぎましたよ。皆さん寝た方が宜しいような気がしてならないんですが」

「私達はまだ話し足りないよ…ねえマルキダエル、今日位夜更かしして大祐くんといっぱいお喋りしようよっ」

「九条さんが宜しいのであれば、是非お願いしたいです」

「わ、私もっ…言いたい事とか…沢山ある、から…」

「あら、バンシーちゃんが珍しく自分を出してる。大祐君、勿論レディファーストって言葉…知ってるわよね？」

「……え？これ、夜通しパターン…？」

？先程から話していた面子とは別の、騙されてしまった側の女性達「もっとお喋りしようよ」と熱烈な意思を示す。

「にい、せんたくしは二つに一つだけだよ」

「世羅怖いよ!？」

「ますた、私達はどうすれば良いのでしょうか？」

「…好きにしてくれ、としか言えないよ…」

？最早逃げるといふ選択が潰されている。

？そんな中、唯一上柚木さくらだけが「強要は良くないです」と九条に味方していた。

？更に彼女は、全員の核心を突く言葉を口にする。

「それに、九条さんが体調を崩したりすれば後悔するのは私達です。あの時無理させなければ、と」

「…さくらちゃん…」

？上柚木さくらは純粹に、九条大祐の体を心配していた。

? つい先まで寝込んでいた彼の事を。

? だからこうして、真つ直ぐな瞳と言葉を彼女達にぶつけている。

? すると各務原あづみまで九条の顔を、心配する様に見つめていた。

? それはリゲルや百目鬼きさら、蝶ヶ崎ほのめも一緒であり。

? 九条大祐のゼロ距離にいる彼女達は今の今まで、彼に甘えてきた。

? 無論ナナヤも含めだ。

「…ふう」

? そんな表情を向けられ、思わず溜め息を吐く。

? 何時も通り…何かあれば溜め息を吐く癖を止めたいと思いつつも、九条大祐は深呼吸をする。

「ありがとう、さくらちゃん。…でも、そうだね。今日位は夜更かし夜通しのお喋りデーでも良いのかもしれない」

「…大祐、貴方は疲れている身です。しっかりと休息を取らなければー」

「ベガさんの言う事も正しいと思ったりしてます。ですが、彼女達は俺に対して精一杯尽くしてくれているのに…俺はしてあげていない。最低だとは思いませんか。幸せにしてあげたい、幸せにすると云ったのに相手だけが俺に尽くすなんて。それが嫌で嫌で仕方無いんですよ。特にあづみさんとリゲルさん…ナナヤときさらちゃん。四人は俺にこれでもかと献身的で…一人は違う感じがしなくも無いですが」

「…それ、絶対私に言ってるよね」

「けど俺に尽くそうとしてる事に変わりは?」

「ん、大祐くんが望めば何でもするよ?」

「ね。俺の言う事を何でも聞いてくれる。そう言ってくれただけで献身的ーというか自分がその人の物になる覚悟が出来ている訳だ。

………話が逸れたけど、何も俺に献身的な人は四人だけじゃない。この場で俺が好きだと言ってくれた全員だ」

「…それが尽くす尽くし返すのと、大祐が無理する事と何が関係ある

のですか？」

「…行動を起こさなければ当たり前前の様に『何も起きない』。でも俺は何もしなかった。俺自身が貴女達が好きであろうと。理由なんて前に言った通りのつまらないものです。それに嫌われる事、拒否される事は怖いでしょう？…でも、貴女達はリスクを伴ってまで俺にこうして想いを伝えてくれて、実際に行動に移してくれて。こんな…俺に…でも、俺からは何もしてあげられてない。見返りも何も無い。そう思う度にやっぱ俺って情け無い臆病者だって思い知らされるんです。だから今日ばかりは…いや、此れからは…俺が返す番なんです」

？九条大祐は彼女達の顔が見れなかった。

？顔を下に向ければ百目鬼きさらと蝶ヶ崎ほのめが、両隣には各務原あづみとりゲルが、後ろにはナナヤ、正面にはベガやヴェスパローゼ、更には和修吉やバンシー達が。

？だから九条大祐は目を瞑った。

？瞑って彼女達を視界から消した。

「…見境無く、貴女達の望んだ事をしてあげれば良かったんですかね」

？限度等無い。

？『何でも』言われた事を実行すれば、正しかったのか。

？九条大祐はそう思いながら苦し気な苦笑いを浮かべた。

？どうせは自分を守る為だけの言葉という壁を作っていただけなんじゃないか。

？建て前だけの碌でもなしだ、と。

？嫌われるリスクを恐れて何もして来なかった後悔が、今になって反動として彼を襲った。

…いや、本当は九条もずっと返してあげたい気持ちで一杯だったの
だろう。

？然しそれをずるずると引き摺り、こんなにまで時が過ぎてしまっ
たと。

？彼女達に尽くしてあげたい、けど過剰な事をすれば嫌われてしま
うだろう。

？でも彼女達が望む事はそのラインギリギリを越すか越さないか位の願いだ。

？確かに全員が全員そう望んでいる訳では無いが、例としてナナヤや各務原あづみ。

？前者は自分を捧げる気満々でグイグイ攻め、後者も然りげ無くそういつたアピールをチラチラ見せている。

？百目鬼きさらは既に九条の嫁になる前提であり、リゲルだって彼が許してくれるのであれば一緒に大人の階段を登りたいと願っている。

？その願いを叶えさせてあげたくても勇気が無くて踏み出せない自分の行動力の無さが、自分を苦しめた訳だが。

「…違うよ、大祐くん」

「そうね。あづみの言う通り…それは違うわ」

「どうして…ですか？」

？各務原あづみとリゲルの二人は、先の九条大祐が放った言葉を否定した。

？理由が一切分からなくて直接聞いてしまう九条。

？すると二人は真剣な表情で彼を見つめた。

「…大祐くん、勘違いしてるもん。私達は見返りが欲しくて大祐くんに自分を見せてる訳じゃ無いよ…？」

「ええ。私達は大祐に振り向いて欲しくて、自分を見て欲しくて勝手にしてるだけ。勇気を出して動いているのは私達だから代償を払え

…なんて自分勝手な事、言ったかしら？」

「でも俺は…！」

「否定したいなら私達の『全部』を受け入れる事になるの。私達の望んだ事をしなきゃいけないの」

「……………」

？リゲルの口から放たれた彼女自身の本心に、九条は悔やんだ。

「…叶えてあげたい、貴女達の願いを！でも…俺が手を出すなんて身の丈以上の事をしてはいけな—」

「その思い込みを何とかしなさいっ…私達が何時、大祐が下の存在だ

と口にしたかしら…？」

「リゲルさん…」

？感情を露わにしたリゲルは、口で強く言いながらも涙目になっていた。

？好きな相手が何時迄も「自分は底辺に位置する人間だから」と言い続けていれば、辛くなるのも仕方無い事だ。

？何故？

？好きになった人を底辺と思う者は居ない。

？だからその考えを否定したがるのは当然だ。

？然し本人が自らを下の存在と認知し変える気がないのであれば、嫌になるのも当たり前。

「大祐くんは私達の、大好きで大切な人。だからもう…自分に酷い事を言つて虐めないでよう…」

「あ、あづみさんまでーで、全員…しんみりしなくても…」

「…きい、は…どんなだいすけも、しゅき」

「きさらの意見は最もよ。けど…逐一「底辺」や「下」という言葉を耳にする此方の身にもなつて欲しいわ。時には自分を否定するだけじゃなく、認めてあげる事も大事なの」

？ヴェスパローゼはそう言つて百目鬼きさらを抱き上げる。

？して、何故か九条大祐の目の前に立った。

？その行動に何の意味があるのか、今度は蝶ヶ崎ほのめが立ち上がつてヴェスパローゼの隣に並ぶ。

？更にベガや和修吉、バンシーやグラ、倉敷世羅にムリエル、マルキダエルに続いて上柚木さくらにオリジナルXIIIまで九条大祐の目の前に立ち、全員が全員彼を真つ直ぐな瞳で見つめていた。

？唯一、各務原あづみとリゲルだけが九条の両隣りに座ったまま。

？然し二人も九条の方を向いて。

？急に何だと混乱する九条。

？そして最初に口を開いたのはー

「…例えば大祐くんが自分を認めなくても」

「私達は大祐を認めてる。それに貴方の全てを受け入れる。自分を肯

定する貴方も、否定する貴方も」

？各務原あづみに被せる様に、リゲルは九条に好意を寄せている女性全員の想いを彼に伝える。

「だからこれからは…大祐の全部を理解して、貴方という存在を受け止める積もりよ」

「それじゃあ貴女達が疲れてー」

「ううん、大丈夫だよ。私達は全員で大祐くんを受け止めるから」

「……どうして、そこまでしてくれるんですか」

？彼女達の想いを聞いても尚、愚問をぶつける九条。

？未だに自分を否定している証拠だ。

？だが、そんな下らない思い込みを吹き飛ばす様に彼女達は其々の想いをぶつけ返す。

「あら？全部受け止めるって言ったじゃない」

「きいも、ろーぜといっしょ！」

「大祐が否定する分、私達は認めましょう」

「ふふつ、貴方が自分を肯定出来る日が来るのを信じてますよ？大祐」

「大祐くんは…一人じゃ、ないっ」

「女の子を待たせるのは厳禁よ？」

「あ、珍しくレディって言わない。グラちゃんも本気だね」

「そう言うムリエルさんも本気です」

「もっちろん！あんな状況から助けてくれた恩人だもんっ。今度は私達から返さなきゃっ」

「にいい、せらに何でも言っつて！にいの願いはせらが叶えるからっ」

「…そうですの。私達は其々、一度大祐君に助けて貰っていますの。本来は此方側が返すのが正解ですわ」

「九条さんへの恩返し、ですね」

「ますた、ご命令を。何でも熟して見せます」

…九条大祐にはまだ何も見えていなかった。

？彼女達がこんなに優しくしてくれる理由、答えが。

？そんな彼の気持ちを探した各務原あづみとリゲルが口を開く。

「…ね？皆同じ。大祐の事を信じてるの」

「実はね…私達も大祐くんに対してここまで尽くしたいって気持ちがある理由が、見付かって無いの。只好きだから…ってだけじゃない。何か違う…もしかしたら理由なんて無いのかもしれないけど…」

「…俺も、貴女方がどうしてもこんなに尽くしてくれるのが分からない」「い」

「だからね。一緒に探したいんだ…大祐くんが自分を嫌う理由、私達が大祐くんに尽くしたい理由、お互いにお互いの事を知る為に」

「…あづみさん」

？九条大祐は彼女の名前を口にし、各務原あづみの胸元に項垂れた。

「…俺なんかよりも、よっぽど大人ですね。やっぱり俺なんかには勿体無い存在ーっ」

？言われた側から学ばない。

？だが、九条の言葉は物理的に押さえ付けられた。

？そう…各務原あづみが自身の胸に彼の顔を押し付けていたからだ。

？両手で九条の頭をぎゅーっとなぎ締め離さない。

「それ以上は言わせないもんっ。せめて今日だけは、自分を認めてあげてよう…」

「ーっ!!」

「大祐が何か言ってる。…全然分からないわ」

「ふっ、あづみ、ナイスアタックです」

「こ、攻撃じゃないもん」

？喋ろうにも物理的な口封じを食らっている所為で言葉を発する事すらままならない九条大祐。

？彼の頬は真っ赤に染まり、熱でもあるんじゃないかと思われる程になつていた。

？と、百目鬼きさらがヴェスパローゼの腕から下り、とてととと九条に近付いて行く。

？それに気付いた各務原あづみは「どうしたの？」と一言。

？すると百目鬼きさらは「きいも、したい」と返答。

? 耳まで塞がれている為、九条には丸で聞こえていない。
? そんな中、倉敷世羅迄もが負けじと寄って行く。

「きさらちゃんには負けないもんっ」

「きいもーせあにはまけない」

? 二人のやり取りを聞いて、各務原あづみはにこにこしながら彼から手を離す。

? 彼女の拘束から解除された九条は思いつきり息を吸う。

? 余程苦しかったのだろう。

? だが、その瞬間に又がっちりと掴まれてしまった。

「ぷはぁーんー!!」

「だいですけ、にがさない」

「にい捕まえたっ」

「私も参加するっ」

? 右から倉敷世羅、左から百目鬼きさら、どさくさに紛れて背後から再度登場ナナヤ。

? そんな三人からぎゅつと抱き締められ、又もや身動きが取れなくなる九条。

? 彼の正面からは「いいぞーもつとやれー!」というはしゃいだ声が部屋を騒ぎ立てていた。

? 九条大祐はもごもごと何か言っているが、全く以って聞こえない。

? 加えて、これは中々宜しくない絵面と化していた。

? 二人の少女の胸元に顔を押し付けられ。

? いや、ナナヤも見た目は少女…という事は三人の少女に攻められ。

? 今ロリ〇ンと言われても否定の仕様が無い状況となっている。

「ーちよつ、待って…! 息を、吸わせて…!」

「大祐くんが苦しみなから欲求してくる姿…良いかも…♪」

「外道か!」

? ナナヤのふとした言葉に全力で突っ込みを入れる。

? 然し彼にそんな暇等無い。

？百目鬼きさら、倉敷世羅の二人が二度目のアタックを仕掛けようとしていたからだ。

？それに気付いた九条は二人の肩を掴み、自身の胸元に抱き締め、一旦落ち着かせる。

「うゆ…♪」

「にいい、凄くあつついよ？」

「気にしたら負けだよ」

「ナナヤが言うな」

？逐一突っ込む九条に、ナナヤは「むうく…」と頬を膨らませて不機嫌そうな表情を浮かべた。

？自業自得だと一瞬思った彼だったが、何かを察して危機感を覚える。

？そう、何時の間にかヴェスパローゼや和修吉、上柚木さくら達に囲まれていた。

「それじゃあ、次は私達の番ね？」

「…え、あの…もう深夜ー」

「此れからですのっ」

「夜更かしはあまり良くないけど…今日は良いよね…」

？こんな真夜中から何をしようと言うのか疑問が湧いた九条だが、嫌な予感がした為に黙る。

？聞けば微笑みを返され、そのまま朝まで部屋から出してくれなさそうだからだ。

？彼に休みを与えずに攻め続けるヴェスパローゼ達。

？それに乗じて、他の女性達も一緒になつて九条大祐の側へと近寄って行く。

「わ、私を本当の『大人のレディ』にしてくれるのよね…？」

「グラ嬢…随分と意味深だね」

「さあ、夜は長いですよ。大祐…覚悟は良いですね？」

「ベガさんまで乗り気…ええ、見事今日を乗り越えて見せますよ！」

? その日、全員九条大祐の部屋で寝たと。

? 態々他の部屋からベッドと布団を運び、朝の片付けの事等考えもせず。

? 流石に寝室には収まり切らず、何時も使っている部屋で眠る事に。

「…ん、う…だいです…け…くん」

「…あづみ…だい…すけ…ずつと…」

「…誰が寝れるって言うんだよ」

? 彼女達が満足するまで付き合った九条。

? 本来ならば疲労で睡魔に襲われる筈だが、状況が状況な為に唯一彼だけが眠れずにいた。

? 目を擦ったり欠伸をしたりと脳は寝ろと指示するが、その脳と目がギンギンに覚めていては寝れないのも当たり前だろう。

「…ああ、きさちちゃん。乗って寝るのは構わないけど登って来ちゃだめだよ。…あ、両腕使えないんだったなーこら、ナナヤ。俺が動けないからって顔を近付けない。…だからって下に行っちゃ駄目…ってか起きてるよね?!絶対!」

? 彼女達が周りで寝ているからと小声で喋っていた九条だが、ナナヤの行動に痺れを切らして少しばかり声を上げる。

? するとナナヤは明らかに笑っていた。

? 此奴…!と思いなながらも、彼は疲労の溜まった体を動かす気にはならなかった。

? ふと、各務原あづみとリゲルが起きた事に気付く。

? 恐らく先の声で目を覚ましてしまったのだろう。

? 九条大祐は小さな声で、且つ全力で謝っていた。

「…大丈夫、だよ…う…ふあ…」

「大祐は…寝れてる?」

「いや、全然ですよ。眠たくはあるんですがね…」

「そうなの…？じゃあ、ちよつと此方に寄つてくれるかしら…」

？九条は何かと思いなながらも、リゲルの側に寄つて行く。

？各務原あづみもリゲルも寝惚けているのか、前者は既に又夢の世界へ、後者は意識が明らかにはつきりしていないであろう状態で話している。

？そしてリゲルに近寄ろうにも一苦勞な九条。

？左腕は各務原あづみにぎゅつと抱き締められ、百目鬼きさらに乗られ、ちやつかりナナヤがおり。

？然も太腿の上という微妙な位置に。

？こんな身動きが取り辛い状況でも、何とかリゲルの側へ近寄る。

？何かあつたのかな、そんな気持ちで彼女に近寄つた彼だがー

「リゲルきーっ!?」

？九条の頭は一瞬にして彼女の胸に包まれる事となつた。

「これで…寝れる…かしら?」

「んー…んー!!んんー!」

？身動きどころか口まで封じられた彼は、兎に角声を出してリゲルを起こそうと考える。

？だが、彼女は気持ち良さそうに「くー…すー…」と寝息を立てながら眠っていた。

「んー……んんー…」

？九条大祐は抗う事を諦めた。

？朝起きたら解放されている事を願い、素直に寝ようとする。

？周りには美人美少女が何人も寝ていて…自分は美女の胸に押し付けられー

「……んんん!!!」(だから眠れないって!!)」

？相変わらず波乱万丈な九条大祐の日常だった。

ー

各務原あづみ happy birthday!

《リゲル》「あづみ、誕生日おめでとうっ！」

《ソリトウス》「あづみちゃん…お誕生日、おめでとう…」

【2人からの拍手】

《あづみ》「えへへ…ありがと、リゲル、ソリトウスさん」

《リゲル》「あづみの誕生日だからっ、祝わない方が可笑しいわ？」

《ソリトウス》「強要は…良く無い。けど、あづみちゃんみたい…健康で…可愛くて…思わず守ってあげたくなる様なお嫁さんにおいて…旦那さんは何処に…？」

《あづみ》「だっ…旦那さん…？」

《ソリトウス》「あれ…大祐くんって、あづみちゃんの旦那さんじゃ…？」

《あづみ》「…っ！ち、違いますっ…大祐くんは旦那さんじゃー」

《ソリトウス》「少し…意外。てつきり、大祐くんとそういう関係になりたい…って、思っているのかなって…。寧ろ、もうなっていたり…」

《あづみ》「ううく…／＼／返答、辛い…」

《ソリトウス》「本音は…？」

《あづみ》「……大祐くんが望むなら、私は…えっと…その…」

《ソリトウス》「もつと深く…親密な関係に…？」

《あづみ》「……／＼／／／」

《リゲル》「あづみがショートしたわ…」

《ソリトウス》「じゃあじゃあ…大祐くん関係無しで、あづみちゃんは…どう思ってるの…？大祐くんと…そういう仲に…？」

《あづみ》「……ふえっ…／＼／」

《リゲル》「…こりや駄目ね。あづみの言語回路が可笑しくなってきたるもの」

《ソリトウス》「…恋する乙女は…大変」

《あづみ》「もうっ…リゲルもソリトウスさんも、絶対擲擻ってる…」

《リゲル》「…私!？」

《あづみ》「だっ、止めてくれないだもんっ」

《リゲル》「その責任を私に押し付けられても……それに、照れてるあづみが可愛くて仕方無くて……映像と音声を永久保存したいわね」

《あづみ》「りくぐる〜!」

《ソリトウス》「……あ……大祐くん……」

《あづみ》《リゲル》「えっ!?!」

《あづみ》《リゲル》《ソリトウス》「……………」

《ソリトウス》「……嘘」

《あづみ》「……大祐くん」

《リゲル》「あづみが目に見える位にしよんぼりしてる……」

《ソリトウス》「ご、ごめんね……?そういうつもりで言ったんじゃ……」

《リゲル》「そう言えば、大祐からは何も聞いてないわね」

《あづみ》「うん……大祐くん、用事があるんだって」

《リゲル》「あづみの誕生日よりも自分の用事が優先、ね……流石の私もぷっちゃんしそう」

《ソリトウス》「可愛く言ってるけど怖い……けど、大祐くんに限って、あづみちゃんを放っておくとは考え難い……」

《リゲル》「……まさか、誕生日プレゼント!?!」

《あづみ》「えへへ……そうだったら、嬉しいなあ……」

《ソリトウス》「……じゃあ、大祐くんが来るまで、あづみちゃんに関するのトーク、する?」

《あづみ》「もう夜中、ですけどね……」

《リゲル》「良いじゃない? あづみの誕生日は夜通し明日まで、よ」

《あづみ》「ふえっ……!?!」

《ソリトウス》「それ……名案。私も……深夜のテンション高い方だから……!」

《あづみ》「ソリトウスさん……やる気に満ち溢れてる」

《リゲル》「取り敢えず、大祐が来るまでの辛抱ね。三人で楽しみましょっ……」

《ソリトウス》「賛成……」

《あづみ》（大祐くん……来てくれると良いな……）

|
|
|

各務原あづみ happy birthday! No.

2

――凡そ1時間が経過――

《あづみ》「でねでね、大祐くん…私のプレゼントした赤いマフラー、外出する時は絶対に着けてくれて…」

《ソリトウス》「流石…女性キラー…然り気に大胆…」

《リゲル》「大祐が侮辱されてる気がするのは、私だけかしら？」

《ソリトウス》「そういう意味で…言った訳じゃ無い…と、思う」

《あづみ》「でも、大祐くんがそう呼ばれちゃうのも…仕方無いよね」

《リゲル》「まあ…わからなくも無いわ。 ……あ、でも。

最近はおづみだけを見ているらしいわよ？」

《あづみ》「…ほえっ?!」

《リゲル》「実際に大祐が言ってたの。『最近あづみさんだけが目に映って仕方が無い』って。勿論、大祐は相変わらず私達全員を見てくれているけれど…」

《ソリトウス》「一途…良いんじゃないかな…？」

《リゲル》「本来なら、ね…でも、大祐は悩みに悩んでいるって」

《ソリトウス》「ハーレム故の…悩み…大変そう」

《あづみ》「大祐くんが…私だけ、を…う、ううん…大祐くんが…えと…
…
…」

《リゲル》「私としては、あづみが嬉しいなら何よりだわ？誕生日って事も有って、大祐も気付かない内に意識してー」

《ソリトウス》「…トウス…ス…リゲル…」

《あづみ》「…ど、どうかしたの…？」

《リゲル》「ああいえ…大祐があづみを意識してるなんて、何時もの事、って思っ…」

《ソリトウス》「同感…あづみちゃん、大祐くんの心を独り占めにするなら…今しか無いよ…!!」

《あづみ》「わ、私はそんな…私一人だけの大祐くんじゃ無い…から……」

《リゲル》「ふふつ、本当は、一度で良いから独り占めしたいんじや無いの?」

《あづみ》「ち、違うもんっ」

《ソリトウス》「…あづみちゃん、我慢は…いけないよ…? 駄目、絶対…」

《あづみ》「……………」

《リゲル》「一年に一度の誕生日なんだから…ね?」

《あづみ》「……………」

《ソリトウス》「…あづみちゃんがその気になったら…で、良いんじや無いかな…? 無理する必要も…無い…」

《あづみ》「…ありがと、リゲル。ソリトウスさん…」

《リゲル》《あづみ》《ソリトウス》「……………」

《リゲル》「ほらほら、この微妙な空気、さつさと飛ばしてしまいましょ? ソリトウス、違う話題って何か有るかしら?」

《ソリトウス》「…呼び捨て…!! 嬉しい…」

《リゲル》「あ…ソトウ子…さん?」

《ソリトウス》「呼び捨てで…! お願い……。それに、ソトウ子って名前、もう使って無い…」

《あづみ》「勿体無い気がする…ソトウ子さん、良い名前だと思う」

《ソリトウス》「誰も…呼んでくれない。…大抵、ソリトウス…」

《あづみ》「……………」

《ソリトウス》「……………」

《ソリトウス》「…あ、で…えつと、元気になる話題…? だよね…。ちよつと色々探してみる…」

《リゲル》「お、お願いするわ」

《あづみ》「ソリトウスさんの密かな悩み…聞いちゃったね」

《リゲル》「…ええ」

《ソリトウス》「えつとね…沢山、つて程じゃないけど…あづみちゃんに聞きたい事は、色々有った…。例えば…」

《あづみ》「例えば…？」

《ソリトウス》「日常生活での、他人との関わり…：サイクル…趣味…将来の夢…とか…？」

《リゲル》「どれも答えやすい物ばかり。あづみとしては助かるんじゃないかしら」

《あづみ》「うんっ」

《ソリトウス》「…後は…深夜、大祐くんと何してる…？とか、子供の予定…は禁止…だよ。うん、自重自重…」

《あづみ》「ソリトウスさんが小声で何か言ってるよ…？」

《リゲル》「うーんと…夜は、大祐と何してるのかって」

《ソリトウス》「聞かれてたっ…！」

《あづみ》「え、えつと…夜は大祐くん、と？殆ど一緒に居ないです…。何時もリゲルと一緒にの部屋で、一緒にのベッドで寝てます」

《リゲル》「そうね」

《ソリトウス》「お、おお…その間、大祐くんは…他の女性といちゃいちゃしてたり…」

《あづみ》「うんと…大祐くん、自分が眠る時は誰も部屋に入れないし、誰の部屋にも入らないって言っていました。確か…プライバシーがどうとか…？」

《リゲル》「理性がどうか、とも言っていたわね。大祐…『貴女達に手を出す様な真似はしたくない』とか。…只の諧謔かとも思ったのだけれど、冗談で無いのだけは察したわ」

《ソリトウス》「相変わらず…引っ込み思案。あづみちゃんや、リゲルさんみたいなの可愛くて…美人な女性…早く自分の物にしちやえば良いのに…」

《リゲル》「両思いだから余計そう感じるわ…大祐、自分からは絶対に

来ないもの」

《あづみ》「えつとね…私個人の話だけど…大祐くんには、もう少しぐいぐい来て欲しいなあ…」

《リゲル》「激しく同感だわ。こう…強行突破して来る感じで…」

《ソリトウス》「強行突破…何を突破するんだろ…」

《リゲル》「さあ…?」

《ソリトウス》「ピンクな話、かな…」

《あづみ》「ピンク…?…はーと?」

《リゲル》「はーと…心臓…成る程!心の壁、って話ね?」

《ソリトウス》「ううん…二人共、間違ってる。…あづみちゃんもリゲルさんも、純粹過ぎる…眩しい…」

《あづみ》「ち、違うんだって、リゲル…なんだろね」

《ソリトウス》「あづみちゃんもリゲルさんも…大祐くんと通る道なんだから…覚えとかないと…」

《??》「そういう事ならお任せあれっ♪」

《ソリトウス》「こ、この声はっ…!」

《??》「呼ばれて飛び出てじゃんじゃくん♪」

《ルクスリア》「ルクスリア、参上♪」

《ソリトウス》「…場が混沌と化す…そんな未来しか見えない…」

《ルクスリア》「どんどんカオスにしていくわっ」

《あづみ》《リゲル》「…??!」

――

各務原あづみ happy birthday! No.

3

《あづみ》「大祐くんと……いけない、こと……？」

《ルクスリア》「そそ♪あづみんはどう思っているのかなって。やっぱり、したいよね。だってだって、両思いで、片方は自分の命を投げ打ってでもあづみんを守ろうとする様な……あれ……大祐くんって、一歩でも道を踏み外すと……実は危ない……？」

《あづみ》「えつと、そ、その前に……いけないことって……なに……？」
《ルクスリア》「……え……？」

《ソリトウス》「……あづみちゃん……純粋無垢な女の子。幾らルクスリアでも……穢すのは躊躇うと、信じたいな……」

《ルクスリア》「……待って、あづみんって14歳だよね？」

《あづみ》「は、はい」

《ルクスリア》「……成る程」

《リゲル》「……何を企んでるかは何と無く察するわ。けど、あづみを穢す様な真似をしたら、只じゃ済まされないとー」

《ルクスリア》「あづみんは、無知……大祐くんはそれに興奮してあづみんを襲う……!!ベタだけど確かに確かな方法ね♪」

《あづみ》「か、確実……？」

《リゲル》「呆れるわね……あづみに変な事を吹き込まないで。抑、先ず持って、大祐が、無知なあづみを襲う事自体無いと思うわ」

《ルクスリア》「え……じゃあ、私が今此処で教えてあげればー」

《リゲル》「その口を閉じなさい」

《ルクスリア》「む……つれないなあ……だから他の女の子に、大祐くんを危うく奪われるんだよ……？」

《リゲル》「何か言ったかしら？」

《ソリトウス》「……二人共、落ち着いて……」

《ルクスリア》「この際だから言わせて貰うわ。ナナヤって娘ー神様の方がまだ、素直で、率直で、大祐くんは何回もアタックして……寧ろ

大祐くんにはナナヤちゃんの方がお似合いじゃないのかな〜?」

《あづみ》「……………」

《ソリトウス》「あづみちゃん…………ルクスリアの話を真面に聞いちゃ…………だめ」

《リゲル》「…七大罪「色欲」の魔人、ルクスリア。良い加減にしないと、私の全力の1発をお見舞いするわよ」

《ソリトウス》「また…………壁、無くなっちゃうのかな…………?」

《リゲル》「というか、それ以前の問題よ。私もあづみも、易々と大祐を渡したりしないわ。特にナナヤ、それに貴女になんて」

《ルクスリア》「私は別に…でも、うーん…気が無いって言えば嘘になるかな♪相馬きゅんがもうちよつと構ってくれるなら、其方に行くけどっ」

《リゲル》「私の話を聞いてるの…?」

《ルクスリア》「大丈夫、ちゃんと聞いてるから♪それに、私は事実を伝えたまで。もたもたしていれば、何れ後悔する。志しだけの建前なんて、何時かは崩れる」

《リゲル》「なっ…」

《ソリトウス》「ルクスリア…今日は、あづみちゃんの誕生日…………だから、控えて…………」

《ルクスリア》「へえ…誕生日…………ん…………」

《リゲル》「何を悩んでいるの?早いところ退場して貰えないかしら」

《ルクスリア》「…………そっかあ…誕生日、なんだ…ふふっ…ねねっ、あづみちゃん」

《あづみ》「な、なに…?」

《ルクスリア》「最後に、一つだけアドバイス。…偶には自分の欲に従ってみるのも楽しいよ?…重く考えちゃダメ、軽い気持ちで良いの。多分だけど、何時も我慢してるでしょ…?」

《あづみ》「わ、私っ…我慢なんて、してない…」

《ルクスリア》「それは嘘。我慢してないのなら、そうして『大祐くんから来て欲しい』なんて言わない。自分から過度に攻める事が出来ないから、相手から近付いて来て欲しいと、心の中で思ってるでしょ」

《あづみ》「…!!」

《ルクスリア》「でも、それはあづみだけじゃ無い。大祐くんにもリゲルにも言える事。三人共好きな人には、よっぽど嫌われたく無いんだね」

《リゲル》「あ、当たり前…じゃない。誰だって、好意を向けている人から嫌われたいなんて思わないわよ…」

《ルクスリア》「でも、『嫌われる覚悟』を持って関係を築けないなら、正直関係どうこう以前の問題」

《リゲル》「一度、大祐に嫌われる…って…?」

《ルクスリア》「そんな威圧的な目で見なくても、ね。良く考えてみて。あづみんとリゲルが、例えばどんな事をしようとも、大祐くんが嫌うと思う?」

《ソリトウス》「大祐くんの…あづみちゃんトリゲルさんに対する愛は…:…:深海の様に深く、宇宙の様に広い…:…」

《ルクスリア》「正にその通りだよね♪羨ましいいったらありやしないっ」

《ソリトウス》「…:…:流石に…:…:行き過ぎた行為は、大祐くんでもあれだと思うけど…:…:…」

《リゲル》「その行き過ぎた行為って、例えば…」

《ルクスリア》「あまりに大祐くんを愛し過ぎて、大祐くんの血肉を求めるとかあ…:…:後は、両手両足を切り取って、自分だけの物にするとか?あ、けどね…:…:大祐くんの血なら欲しいかな♪」

《リゲル》「知った事では無いわ。…:…:それに、そんな殺人紛いな事しないわよ」

《ソリトウス》「でも逆に…:…:いや、それでも…:…:そんな事をされても…:…:大祐くんは、二人を好きでいると思うよ…:…:?」

《ルクスリア》「大祐くんの愛が深過ぎるわね」

《あづみ》「…:…:大祐、くん…」

《リゲル》「そう考えると、私達から大祐に攻めるのって…:…:…」

《ルクスリア》「可愛いものね。大祐くんにとってはご褒美、幸せ其の物なんじゃないかな」

《あづみ》「大祐くんの、幸せ……って」

『ソリトウス』「……二人が側に居てくれるだけで……幸せなんじゃ、ないかな……？」

《あづみ》「もしそうだったら、嬉しいなー」

《ルクスリア》「『そうだったら』じゃなくて、『そう』なの。大祐くんの口から飽きる位聞いてるでしょ？『俺が犠牲になっても二人だけは何としても守る』とか……『二人の幸せが俺の幸せ』が代表例」

《あづみ》《リゲル》「……／＼／＼」

《ソリトウス》「二人共……顔、真っ赤……」

《ルクスリア》「あらあら、可愛いっ♪」

《リゲル》「……こうして聞くと、そんな恥ずかしい台詞を……」

《あづみ》「大祐くんは、どうして平然と……言えるんだろ……？」

《ソリトウス》「……それも、二人に対する愛……ほんと、大祐くんは……」

《ルクスリア》「見ている側の胃が靠れる勢いで、甘々な展開を繰り広げるよね。それ位二人が好きなんだと、大好きで仕方無いんだと、周りは認めてる」

《ソリトウス》「だからもう……見ていて微笑ましい……けど、確かに……早く夜の営みに……発展しないのかなって、これ以上関係を……深めないのかなって。疑問には思うかな……」

《ルクスリア》「まあ……かと言って、大祐くんが消極的なのも認めざるを得ないよね。あの人、中々自分からは攻めないもの。女性を傷付けたく無い想いが強いのは嫌でも分かるわ……でも、その鉄の鎖が、大祐くんに思い馳せる女性達を苦しめているとも気付いて欲しいわね」

《ソリトウス》「それが……大祐くんの……欠点」

《リゲル》「……七大罪、侮れないわね」

《ルクスリア》「ん？私の事かな♪」

《リゲル》「貴女以外に誰が居るのよ……」

《あづみ》「……はあ……」

《ルクスリア》「あづみんが大祐くんに発情してるわ？」

《あづみ》「ふえっ…!?は、発情なんてしてないっ…」
《ソリトウス》「溜息がそう聞こえるルクスリアは……末期……」
《リゲル》「違う意味で侮れないわね」
《あづみ》「うん」
《ルクスリア》「完全に侮辱されてるわよね、私」
《ソリトウス》「侮辱リア」
《ルクスリア》「扱いが雑！それに、ネーミングセンスの欠けらも感じられない…」

――

《ルクスリア》「結局長居しちゃったなあ…大祐くんは一向に来ないし」
《あづみ》「何してるのかな…」
《リゲル》「気長に待ちましょ？」
《あづみ》「うん…」
『ソリトウス』「一応、報告……大祐くん、未だに睡眠無し……丸一日以上…寝てない」
《ルクスリア》「他の女性達と24時間、フルタイムを楽しんでいるのかしら」
《リゲル》「またそんな事を……大祐の印象って、どんな風に思われてー」
《ルクスリア》《ソリトウス》「ハーレム」
《リゲル》「……………」
《あづみ》「え、ええと…」
《ルクスリア》「……………まあ、それは置いといて♪」
《リゲル》「置いとくべき話でも無いわよね」
《ルクスリア》「まあまあ♪……………うん、私はそろそろ御暇するわ。最後に、って言うてから、相当時間経っちゃったし」

《ソリトウス》「……もし、又来る事があつたら……飛鳥くん現状報告を……」

《ルクスリア》「はいはい♪」

《あづみ》「仲良し…だね」

《リゲル》「私とあづみ程では無いと、自負するわ?」

《あづみ》「えっ…?」

《リゲル》「えっ?…えっ!」

《あづみ》「えへへ…嘘。私も、自負出来るもんっ」

《リゲル》「…ふふっ、ありがとう、あづみ」

《ルクスリア》「あ、そうだあづみちゃん、あづみちゃん」

《あづみ》「は、はいっ」

《ルクスリア》「…大祐くん、来てくれると良いねっ♪」

《あづみ》「…うん／＼」

《ルクスリア》「可愛いっ」

《リゲル》「ほら、行った行った」

《ルクスリア》「私の扱いがあづみちゃん以外、雑!良いもんっ、相馬きゅんに慰めて貰うからっ」

《ソリトウス》「……え、寝込みを襲う気、満々……だよね」

《リゲル》「……」

《あづみ》「……」

《ソリトウス》「標的が大祐くんじゃなくて……良かった、ね……」

――

各務原あづみ happy birthday! No.

4

《あづみ》 《リゲル》 《ソリトウス》

【時計の針が時刻を刻む音】

《ソリトウス》「…静かな空間……ルクスリアが帰って……テンションと…話題を、全部持っていかれた……」

《リゲル》「七大罪を相手にすると、こんなにも疲労するのね…碌な事無いわ……」

《あづみ》「やっぱり、大祐くんは凄いなあ……」

《ソリトウス》「……ルクスリアに…何時もあんな感じで、襲われてるんだよね…?メンタルヤバそう……」

《リゲル》「実はそうでも無いって、本人が言っていたわよ。あのルクスリアを…簡単にいなせてしまうのよね、大祐……」

《あづみ》「他の人達とも沢山関わって…大祐くん、大丈夫かな……」

《ソリトウス》「疲労困憊……何時もは、何してるの……?」

《あづみ》「大祐くん、ですか……?」

《ソリトウス》「うん……」

《リゲル》「大祐は…部屋に籠りつきり。偶に外に出てきて、又直ぐ戻って。そんな事が日常茶飯事ね。世界の治安維持を目的に、私達にとっては訳の分からない書類とか片付けたり……」

《あづみ》「でも、特別な日には絶対、皆と一緒に過ごしてくれるよね」

《リゲル》「何も無い、至って普通の日常の中でも、必ず私達に会いに来てくれて」

《ソリトウス》「……あづみちゃんやリゲルさんからは……会いに行かないの……?」

《あづみ》「私は……その……」

《リゲル》「あづみは毎朝、大祐の顔を見てるわよ?」

《ソリトウス》「何で…あづみちゃんだけ……?」

《あづみ》「えつ…と、毎日、大祐くんが朝起きてるか…私が確かめに行くんです。大祐くん、殆ど起きてますけど…」

《リゲル》「毎朝毎朝、起きるとあづみが部屋の中に…なんて、夢の様な一時…」

《ソリトウス》「…あれ…？じゃあ…起きてない時は…」

《あづみ》「私が…えつと…起こして、ます…／＼／＼」

《リゲル》「あづみ、どうしてか凄く照れてるわね。毎朝大祐と何してるのか、気になって仕方が無いのは私だけかしら」

《ソリトウス》「私も…気になー朝の営み…はっ…！だから…夜は体力維持の為に…しっかり休んでる…！」

《あづみ》「そ、そんな…やましいことなんてしてないよう…」

《リゲル》「ほんとかしら？…実はこっそり、大祐に聞いたりしてるのよ？」

《あづみ》「え…ふえつ…!？」

《リゲル》「あづみとの朝を過ごしている時間、その時の事を思い出した大祐の顔したら…頬を赤くして、目を横に逸らしたのよ？恥ずかしそうに片手で口の辺りを隠しながら。…表情は至極幸せそうだったわ」

《ソリトウス》「…それ…絶対、口元にやけてる…」

《リゲル》「いいえ？本当に恥ずかしがってたわ…あづみ、一体何をー」

《あづみ》「な、何もしてないもんっ。大祐くんと…いい、いちやいちや、だなんて…」

《ソリトウス》「…あづみ…ちゃん…」

《リゲル》「…私達…いちやいちやだなんて、一言も言っていないわよ…？」

《あづみ》「…！はうっ…」

《ソリトウス》「あづみちゃん…墓穴を掘る…」

《あづみ》「あううう／＼／＼」

《リゲル》「ほらほら、白状しなさい…？じゃないと、こしよこしよの刑にー」

《あづみ》「は、話すよう…」

《リゲル》「……くっ…惜しい」

《ソリトウス》「リゲルさんの煩惱も……見え見え…の、透け透け……」

《リゲル》「これは煩惱では無いわ…願い、望みよっ！」

《ソリトウス》「…それも…どうかと…」

《あづみ》「り、リゲルは…何時も通り、だね…？」

《ソリトウス》「あづみちゃん…然りげ無く話題を変えちゃ、ダメ……」

《あづみ》「……！」

《リゲル》「凶星ね」

《ソリトウス》「…此れから、あづみちゃんの口から…どんな言葉が放たれるのか……楽しみ」

《あづみ》「は、恥ずかしいよお…」

《ソリトウス》「…毎朝、大祐くん…どんなプレ…どんな事をしてるのかな…？」

《あづみ》「し、してないっ…大祐くんは、何時も起きてて、私は大祐くんと…お話ししたり……」

《ソリトウス》「じゃあ…大祐くんが、まだ寝てる時は…？」

《あづみ》「……／＼／＼」

《ソリトウス》「…黙り込んじゃった…けど、顔は真っ赤…んふふ…これ、ちよつと楽しいかも……」

《あづみ》「だ、大祐くんは、何時も…私の為に、飲み物とか、食べ物とか…用意、してくれて…」

《ソリトウス》「話が…違う方向へ、逸れた……」

《リゲル》「それで良いの。…ま、あづみに無理させたって仕方無いわ。後は本人に直接聞けば良いだけ、でしょ？」

《あづみ》「えっ…り、リゲル…？」

《ソリトウス》「すかさず…助け舟…」

《リゲル》「あづみに無理矢理聞く位なら、大祐に無理矢理聞いた方が得策よ。明らかにね」

《あづみ》「……リゲル、ありがとう」

《リゲル》「それに、あづみが半泣きしているのを見逃すなんて、到底理解出来ないわ。…私達も、少しやり過ぎたわね…ごめんなさい、あづみ」

《あづみ》「リゲルは何も悪く無いよっ、えっと…私に質問してきたのは…」

《ソリトウス》「……ご、ごめんなさい…悪気は無くて……その…調子に乗り過ぎて……」

《リゲル》「ソリトウスは何処か、人のプライバシーに土足で踏み込む節が有るわね」

《ソリトウス》「はっきりと言われた…!」

《リゲル》「何か…間違ってたかしら…?」

《ソリトウス》「あ、あづみちゃん…リゲルさんが、怖い……」

《あづみ》「リゲル、ストップだよ?ソリトウスさんが震えてる…」

《リゲル》「あづみをもふもふして良いのなら、許す」

《あづみ》「えっ…なんで私…!」

《リゲル》「…あ、そうよね。『私の』あづみなんだから、別に許可を得る必要は無かったわ」

《あづみ》「そ、そういう話じゃなくてっ」

《ソリトウス》「私のって…断言した……」

《あづみ》「わ、私は…リゲルもだけど…大祐くんの…もの…」

《ソリトウス》「…其方も断言……!」

《リゲル》「ふふっ、流石あづみね。大祐の事は何時何処でも忘れない」

《あづみ》「…忘れるって方が、有り得ない…かな」

《ソリトウス》「大祐くんって…影響力、高いもんね……その分、周りの人達も…癖が強い……」

《リゲル》「森山碧、が代表例じゃないかしら」

《あづみ》「大祐くんの…親友さん、だっけ」

《??》「呼んだか?」

――

各務原あづみ happy birthday! No.

5

《ソリトウス》「…………あれ…?今、誰か喋った…………?」

《??》「呼ばれた気がしたからな。颯爽登場ー」

《リゲル》「呼んだ覚えは無いわ」

《??》「そうか、じゃまた」

《リゲル》「……………」

《あづみ》「……リゲル?」

《リゲル》「…あ、いえ…ああいう輩とは口を利かないのが得策なの」

《あづみ》(誰か居たのかな…?)

《ソリトウス》「…完全なる無視…………得策…………そうなんだ…勉強になる…」

《リゲル》「飽くまで、私個人の意見だけけどね」

《森山碧》「おいおいおい待て待て待て」

《リゲル》「取り敢えず、話の続きでもしましよ。…えーと…………確か、ルクスリアの話から繋げて…………」

《森山碧》「此処までスルーされるとは思わなかったわあ…!!」

《ソリトウス》「わっ…………びつくりした…………」

《リゲル》「…………あ、それでね、あづみ。話が急に変わるのだけれど…大祐が昨日、衣服をプレゼントしてくれたの。なんだっけ……………そう、ハロウインに向けて、って言ってたわ」

《あづみ》「あつ、それなら私も貰ったよ!てつきり私…………あれが誕生日プレゼントなのかなって…えへへ」

《森山碧》「お、確かにそろそろハロウインだな。今回は仮装してみたい気分満々だぜっ」

《ソリトウス》「…碧くん、かそうって、あの火葬…?」

《森山碧》「そうそう!遺体を埋葬する為に、先ずは火で遺体をーって、其方の火葬ちゃうから」

《ソリトウス》「ナイス…………乗り突っ込み…………」

《あづみ》「私にくれたのは…えっと……、今回も猫さん、かな？まだ見てないから、楽しみなのっ♪」

《リゲル》「私もまだ…でも確か……、私が猫嫌いだから、猫では無いって言っていた気がしなくも無いわ。…あれ、けど…あづみと私、二人が猫の仮装して戯れ合う姿を見たい…とか、何とか？」

《あづみ》「そ、それなら…二人で猫さんになって、大祐くんと戯れ合っ
て…なんて…／＼／＼」

《リゲル》「その発想は斜め上だったわ……ね。だ、大祐が喜んでくれるなら…う、ううん…あづみがしたいなら、私はそれに付き合うだけ。別に大祐と戯れ合いたい訳じゃ…無い…から」

《あづみ》「私は…大祐くんと、ら、ラブラブ…したいな…」

《リゲル》「ラブラブ…！」

《ソリトウス》「…リア充は、火で葬る…？」

《森山碧》「そう！正に言葉の通り『火葬』さ！ははっ」

《ソリトウス》「そういう碧くんも……今となっては…その一人……」

《森山碧》「……………」

《ソリトウス》「……………だよね…？」

《森山碧》「ああ…その事実が存在するだけで、嬉しい気持ちが溢れて止まらない！」

《ソリトウス》「良いな……私の王子様……迎えに来てくれないかな…。やっぱり、私から行かないと駄目かな……？」

《あづみ》「大祐くん…来てくれるかな」

《リゲル》「大丈夫、言い方が少しあれだけど…何れその心配は無駄になると思うわ。大祐があづみの事大好きなの、あづみ自身が一番理解しているんじゃないかしら？」

《あづみ》「う、うん…／＼／＼」

《リゲル》「例え遅れたとしても、絶対に来る。不思議と確信出来るのよね。だからあづみも…信じて待つてあげて？いざ御対面すれば、あづみはがちがちに固まるだろうから…心構えも大事よ」

《あづみ》「も、もしそうだったら…リゲルに頼っちゃうかも…」
《リゲル》「ええ！幾らでも頼って欲しいわ？」
《あづみ》「リゲルは相変わらず…優しいな…」
《リゲル》「あづみは相変わらず、恋する乙女ね」
《あづみ》「そ、それはリゲルもだよっ」
《リゲル》「ま、まあ…否定はしない…けど、乙女では無いか…」
《森山碧》「んな事は無いと思うぞ。って、大祐なら言うだろうな」
《リゲル》「く／＼／」
《ソリトウス》「…：空気に紛れるのが…：上手な碧くん…」
《森山碧》「流石だろう？俺クオリティだからな」
《あづみ》「…：…：ひゃっ…！?!い、何時から此処に…：…？」
《森山碧》「…ん!?!今更!?!最初の方で会話してたよね…：其処の金髪さんと」
《リゲル》「あら…：態と無視していたのに」
《森山碧》「いやいや酷いな。親友の嫁さんが、誕生日迎えたから祝いに来たのに…：仕打ちがこれとは」
《あづみ》「お嫁…：さん…：／／」
《リゲル》「…：別に、今に始まった事では無いわ」
《森山碧》「ほんとだぜ。何時も俺にツンケンしてるよなく、金髪さん」
《ソリトウス》「…：…：?どうして…：名前で呼ばないの…：?」
《リゲル》「私が許可してないから」
《森山碧》「…：だ、そうだ」
《ソリトウス》「そ、そうなんだ…：…：でも、あづみちゃんのお祝いに来たなら…：…：お誕生日、おめでどうってー」
《森山碧》「俺は言わねえよー」
《ソリトウス》「えっ…：ど、どうして…：…：?」
《リゲル》「森山碧…：まさか貴様、あづみの生まれた日がめでたく無いとでも…」
《森山碧》「充分めでたい話だろ」
《リゲル》「じゃあ何故ー」
《あづみ》「…：り、リゲル…：待って。…：…：その…：あ、ありがとう…：ご

ございます…」

《リゲル》「あづみ…?」

《ソリトウス》「あづみちゃん…」

《森山碧》「おうおう、察しが良くて助かるわあ。ま、恋愛においては論外、だがな」

《リゲル》「どういう意味…? 何故あづみが、礼を言わなければならぬいの?」

《ソリトウス》「……………あ、そつか…………」

《森山碧》「察しが悪いのは金髪さんだけか」

《リゲル》「カチンと来るわねっ…」

《ソリトウス》「まあまあ……………」

《森山碧》「祝いの言葉なんて、一番最初は自分の好きな人に言われたいだらう? それが自分の誕生日なら、尚更」

《あづみ》「……………」

《森山碧》「この子はまだ、異性からその言葉を受け取っていない…よな? この説明だけで足りる筈だ。皆まで言う必要は無いだろ」

《ソリトウス》「……………だって……………リゲルさん……………」

《リゲル》「……………悔しいけど、納得」

《あづみ》「だ、だから…お礼したの」

《リゲル》「…成る程」

《ソリトウス》「…このタイミングで……………違う男性が、一番最初にお祝いの言葉を口にしたら……………最悪」

《森山碧》「それフラグや」

《ソリトウス》「ふら……………はっ……………しまった…」

《あづみ》「ふらぐ?」

《リゲル》「表に何を表すのかしら」

《ソリトウス》「…其方じゃ、無い……………」

《あづみ》《リゲル》「…?」

《森山碧》「要は誰かが「こうなると」良いな、悪いな、って口走り、それが現実に起こり得るのが『フラグ』。そう言った瞬間に、それが実際に起こってしまう事が『フラグ達成』とか『フラグ回収』。…だったか

「深い経緯は知らん」

《あづみ》「えつと…少し、難しい…」

《ソリトウス》「例えばこの場合だと……大祐くん、碧くんを除いた異性に……お祝いの言葉を言われちゃう」

《リゲル》「?けれど、その『フラグ回収』とか何とかが起こらなければ…問題はー」

《ソリトウス》「フラグは……恐ろしい……」

《あづみ》「で、でもっ、ソリトウスさんの部屋には、この4人しかー」

《???》「おー、おったおった!まだ4人しか集まってないんか?折角の誕生日なのに、薄情な方々ばっかやな」

《リゲル》「ちっ……この声はっ……」

《ソリトウス》「は、はわわ……どうしよう……まだ、心の準備が……」

《あづみ》「……飛鳥」

ーーー

各務原あづみ happy birthday! No.

6

《天王寺飛鳥》「なんや、元気無いなあ。大祐君も来ておらへんし……ま、兎に角。あづみ、誕生日おめでとうー」

《森山碧》「おうおうおう、待てや兄ちゃん。ちつとは空気読もうや」

《天王寺飛鳥》「なっ……へっきーはん、顔が怖いで。もっとなっこり、笑顔が大切……」

《森山碧》「(ニタア……)」

《天王寺飛鳥》「だから怖いで!？」

《森山碧》「今に始まった事じゃないだろ」

《天王寺飛鳥》「そ、そうやったか?へっきーはん、昔からその顔……なんか」

《森山碧》「スツとデイスるのやめい!」

《天王寺飛鳥》「そんなつもりで言うたんやないで!？」

《森山碧》「ははっ。……ま、取り敢えずだ。天王寺の兄ちゃんは彼方でソリトウスさんとも楽しんでな。少しばかりのご指名だ」

《ソリトウス》「……ふえっ!?!わ、私……そんな事、一言も言っただけ……」

《森山碧》「ほら、ソリトウスさん待つてるぞ?女性を待たせて良いのか?」

《天王寺飛鳥》「ま、マジなんか?ソリトウスはん、固まっとるで?彼女の緊張が解けるまで、あづみの誕生日を皆でワイワイ楽しんで、祝なあかんちやうかー」

《リゲル》「さっさと行きなさい」

《あづみ》「呼び捨て……やっ……」

《天王寺飛鳥》「なんでや!?!訳分からん……」

《森山碧》「完全に嫌われ者と化してるな。これ以上嫌われたくないなら、早いところ退散しないと……」

《リゲル》「これ以上と無い位に嫌ってるから、安心して」

《あづみ》「飛鳥ーううん…天王寺飛鳥、あっち」

《森山碧》「おっほほ、見てて楽しいな、これ」

《天王寺飛鳥》「なんも楽しくなんかあらへんで!?…うう…僕だって傷付くんやからな。あづみみたいな可愛い子ー」

《あづみ》「……………」

《天王寺飛鳥》「…あづみちゃんみたいな可愛い子に、リゲル…さんみたいなのっぴんはんに嫌われるとか…」

《リゲル》「名前で呼ばなくて結構よ。寧ろ呼ばないで」

《あづみ》「わ、私も…」

《天王寺飛鳥》「なんかあたりかたが強くない!?!」

《あづみ》「…全然、まだ柔らかい方」

《リゲル》「ええ、是迄に無く優しい接し方を選んでいる事に、何が不満なのかしら?」

《天王寺飛鳥》「是迄に無い位厳しいで…丸で初めて会った時みたいな態度やんか」

《あづみ》「……………大祐……………くん……………」

《森山碧》「……………」

《天王寺飛鳥》「なんや…?大祐君が来ないから、僕に八つ当たりしたんか…?幾らあづみと言えど、それは御門違いー」

《森山碧》「やめとけ、というか…そつとしてやれよ。恋する女の子は色々複雑なんだ。幾ら鈍感な天王寺でも、察してやれ」

《リゲル》「察しが悪い…同類みたいで頗る嫌ね」

《天王寺飛鳥》「…はあ、ま、2人に嫌という程嫌われてるつちゆうのは身に染みたわ。でも心配あらへんやろ。大祐君は必ず来る、それは俺でも確信してる。理由なんて無いに等しいけど…」

《ソリトウス》「…あ、飛鳥くん、飲み物でも…如何…?」

《天王寺飛鳥》「お、ほんま助かる。やっぱソリトウスさんは優しいなあ〜」

《ソリトウス》「えへへ…/」

《森山碧》「他人の誕生日にいちやいちゃするなく。当の本人はまだ出来てないんだから。主に男側に問題有り。あつづみくんは何も悪く

ない」

《あづみ》「…？それ、愛称…みたいなのですか…？」

《森山碧》「ん、ああ…まあ」

《リゲル》「良くあづみを愛称で呼べたわね。死ぬ覚悟が出来てるって事かしら」

《森山碧》「更々ねえよ」

《あづみ》「愛称…そう言えば大祐くん、私の事…何時もさん付けばかり。それを大祐くんに言ったら、必死に悩んでくれたけど…【あづみ姫】が一番しつくり来るって…」

《森山碧》「其れ位大切なんだろな。彼奴にとって、各務原あづみという存在は」

《リゲル》「あづみ姫…という事は必然的に、あづみは大祐のお姫様って事よね」

《あづみ》「…！わ、私が…大祐くんの…お、お姫様…／／」

《森山碧》「さっさと王子様が迎えに来れば良いんだがな。タラタラし過ぎなんだよ、大祐は」

《天王寺飛鳥》「気ままに待つっちゆうても、かなりの時間経ってるんやろ？へっきーはん、親友なんやから…なんかこう、伝言みたいなのは預かってないんか？」

《ソリトウス》「…あ、リゲルさん、あづみちゃん…飲み物のおかわり、いる…？」

《リゲル》「有り難く頂くわ」

《あづみ》「お、お願いします」

《森山碧》「で、えつと？伝言か？伝言……確か……あ」

《リゲル》「ん…ソリトウス。別でお水、頂けるかしら？」

《ソリトウス》「…？分かった……用意して来る…」

《リゲル》「悪いわね、感謝するわ」

《ソリトウス》「お客様には……最善を尽くすのが、当たり前…」

《天王寺飛鳥》「…それで？へっきーはん、どないしたんや。なんか思い当たりでもー」

《森山碧》「ああ、すっかり忘れてたわ。俺が此処に来た理由。…大祐

が、其処の少女に手紙を渡してくれって、頼まれたんだったわ」

《あづみ》「わ、私に……大祐くんが……？」

《森山碧》「内容は軽いものらしいぞ。今渡す」

《天王寺飛鳥》「手紙……気になるなあ。ロマンティックがー」

《森山碧》「ロマンティックが止まらねえぜ!!」

《天王寺飛鳥》「わいのネタが奪われた!？」

《あづみ》「大祐くんからの……手紙……なんだろう……」

――

《リゲル》「手紙…大祐から？」

《あづみ》「うん、真っ白な手紙…」

《ソリトウス》「内容は…もう、確かめた…？」

《あづみ》「まだ…です。でも…少し怖いな…」

《ソリトウス》「どうして…？」

《あづみ》「……………」

《リゲル》「…大祐が来れない、みたいな内容を想像したのね」

《あづみ》「う、うん…」

《森山碧》「まあ、そうでは無いと思うぞ。俺に手渡した時、すげー必死そうだったからな」

《天王寺飛鳥》「必死？大祐くん、何か忙しいんか」

《森山碧》「彼奴は何時も忙しいだろ」

《天王寺飛鳥》「そ、そうなんか」

《森山碧》「呑気にしていられないだろ。書類片付けに彼女さん達との親交深め。その他諸々。こうして口に出してみると前者より後者の方が、絶対疲れるわ」

《リゲル》「好き放題言ってくれるわね」

《あづみ》「…でも、大祐くんが疲れてるのは事実だよ…？やっぱり、私達がお荷物に……………」

《リゲル》「それは…」

《森山碧》「おうおう、待てい。彼奴は一度たりともそうは思った事ないだろうよ。それは俺でも分かる」

《天王寺飛鳥》「僕にも分かるで！大祐君がそういう男じゃないって事。あんだだけ愛されてるのに、二人はまだそんな事を思うんか？」

《ソリトウス》「…………うん。大祐くんは、絶対にそんな事…：思ったりしない…。だから二人も…存分に甘えた方が…：良い」

《天王寺飛鳥》「せやな」

《あづみ》「そうなの…かな…。そうだと良いな…」

《ソリトウス》「…あづみちゃん、違うよ？…ルクスリアも言っていた通り、そうだと良いな…じゃなくて、そうなんだよ…？」

《あづみ》「えっと…は、はいっ」

《天王寺飛鳥》「それはそうと、手紙…確かめなくて良いんか？」

《あづみ》「…あつ…そうだった」

《リゲル》「ふふっ…相変わらず、ね」

《森山碧》「なにがだ？」

《リゲル》「あづみの話よ。大事な事を見落としてしまうのは、何時もと同じなのね、と思つて」

《天王寺飛鳥》「可愛いやん。こう…天然みたいな感じで」

《ソリトウス》「…飛鳥くんは、天然が好み…」

《あづみ》「私、天然じゃないもんっ。飛鳥はいい加減な事、直ぐ言う…」

《天王寺飛鳥》「そ、それは何ちゆうか…ごめんな？許してくれると嬉しいんやけど…」

《リゲル》「本当…適当に物を言うのはやめて欲しいわ」

《森山碧》「んあ？別に適当とかいい加減じゃなくないか？十分当たつてると想うぞ」

《リゲル》「森山碧…貴様もー」

《ソリトウス》「え、えっと…あづみちゃんが天然なのは…私もそう想う…」

《あづみ》「ふえっ…!？」

《リゲル》「三人共口を揃えて…」

《ソリトウス》「だって…大事な事を見落とすしちゃう…然も、それが素なら…天然としか…」

《リゲル》「う…それは…」

《森山碧》「どうか、さっきの会話…天王寺氏とあづみんが付き合つてそこそこの彼氏彼女みたいだったな。ははっ」

《天王寺飛鳥》「そ、そうだったんか？いや…それを言われると、僕も嬉しいというか…」

《あづみ》「……………」

《リゲル》「随分と酷い冗談ね」

《森山碧》「おう！……ってなあ…天王寺氏、あんた…絶対あづみにその気があるよな」

《ソリトウス》「へっ…!?」

《天王寺飛鳥》「ち、違うて！ただ、あづみみたいな可愛い子の彼氏とか言われたら、誰だって嬉しくなるやん!?へっきーはんやて、そうやろ?」

《森山碧》「否定はしない、が、肯定もしない。要はその程度だ。確かにあづみんは可愛いが」

《ソリトウス》「そ…そんな………飛鳥くん…」

《リゲル》「…これ以上の話を続けると、二人の額を撃ち抜くわよ。流石の私も我慢ならないわ」

《天王寺飛鳥》「わわっ、待て待て！冗談やて、冗談！調子に乗り過ぎただけなんや!!」

《森山碧》「…あ?ああ…ま、無理だろうけどな」

《リゲル》「良い度胸ね、森山碧。幾ら大祐の親友と言えど、容赦はしない…何時か貴様の体を蜂の巣にしてやるわ」

《ソリトウス》「わ、わあ………お星様が見える…」

《天王寺飛鳥》「ちよ、ソリトウスさんの意識が遥か遠くに飛んでる事に、誰も突っ込まないんか!?誰がこんな…」

《リゲル》《森山碧》「貴様（お前）の所為よ（だ）」

《天王寺飛鳥》「僕!?!」

《ソリトウス》「あ、あはは………もう私………駄目、かも…」

《天王寺飛鳥》「ま、待つんやソリトウスさん！戻って来るんや!!」

《あづみ》「……………」

《リゲル》「…あづみ?」

《森山碧》「ほらー、皆五月蠅い所為で、あづみんー水色髪少女が黙りしちゃったじゃんかー」

《リゲル》「…チッ、外したか…」

《森山碧》「人が話してる時に横槍入れるのやめい」

《あづみ》「……………私……………」

《ソリトウス》「……………はっ……………此処は何処……………？私は……………ルクスリー……………ソリトウス……………、私は……………ソリトウス……………。……………ルクスリアだなんて……………ううん、ネタでも言いたくない……………」

《天王寺飛鳥》「お、おお……………ソリトウスさんが無事に帰って来た……………良かったわ……………」

《ソリトウス》「……………あ、あ……………あす……………あすか……………くん……………!?ちよつと……………近い……………!」

《天王寺飛鳥》「なんやどしたんや?顔が真っ赤やで?」

《ソリトウス》「そ……………そんな……………わ、私は……………至って普通……………飛鳥くんが、幻覚を見てるだけ……………」

《森山碧》「無理な押し通しを……………」

《天王寺飛鳥》「そうなんか!?!」

《森山碧》「違うわ!気付け!!」

《リゲル》「……………はあ……………本当、騒がしいわね。こういう時に、全員を一纏めにしてくれる人材が居れば良いのだけれど……………ね、あづみもそう思わない?」

《あづみ》「……………?えっ……………う、うん……………そう……………だね」

《リゲル》「……………あづみ?どうしたの……………?何だか元気無い様子だけれど……………」

《あづみ》「えっと……………大丈夫だよ。ありがと、リゲル」

《リゲル》「……………もしかして、天王寺飛鳥との関係、その話?」

《あづみ》「……………」

《リゲル》「大祐より、実は天王寺飛鳥の方が好き……………とか、かしら……………」

《あづみ》「違うもんっ!」

……………

各務原あづみ happy birthday! No.

8

《森山碧》「おわっ…ビビった」

《天王寺飛鳥》「な、どないしたんや、あづみ」

《ソリトウス》「あづみちゃん…？」

《リゲル》「…凄く強い拒否、ね。余程嫌だったのかしら」

《あづみ》「……………あっ…ご、ごめんなさい…」

《森山碧》「おうおう、只ならぬ気迫を感じたな。気になる気になるう
〜」

《あづみ》「そ、その……………」

《リゲル》「…段々、貴様が無遠慮で、土足で、私達に話し掛けて来る
事が増えて来てるわね。後で覚えておきなさい」

《森山碧》「雑談が過ぎるぞ。今はあづみんの話の話を聞こうぜ〜」

《リゲル》「此奴っ…！」

《ソリトウス》「お、落ち着いて……………リゲルさん…今はその時じゃない
よ……………？」

《天王寺飛鳥》「タイミングとかあるんかいな…」

《森山碧》「…んで？」

《リゲル》「森山碧、貴様は少し口を閉じなさい。私が、あづみに聞く
のだから」

《森山碧》「へいへ〜い」

《ソリトウス》「…碧くん、その余裕は何処から……………」

《天王寺飛鳥》「あの人から睨まれても怯まないとか…化けもんか…
？」

《ソリトウス》「或いは…M」

《森山碧》「ちやうわ！少し静かにー」

《ソリトウス》「…ブーメラン」

《森山碧》「ごはあ！」

《リゲル》「……………あんな奴等は放っておいて、あづみ…何かあったの

？急に大きな声出して…珍しいったらありやしないわ」

《あづみ》「…うん…私も、自分でびつくりする位…大きな声出しちゃったなって…」

《リゲル》「滅多に無いからこそ、心配…良かったら、話してくれないかしら」

《あづみ》「…大祐くん…」

《リゲル》「…？」

《あづみ》「私…大祐くんが、リゲルと同じ位…1番大好き。だから…大祐くんと違う、他の男性の人とそういう関係だつて言われるのが…嫌っ…」

《リゲル》「…ふふっ…ブレないわね、あづみは」

《あづみ》「だ、だつて…！…大祐くんの事が、大好きなんだもん…／＼／＼」

《リゲル》「まあ…所謂一種の独占欲ね。何方かと言えば、独占されたいと願う欲なのだけれど…」

《あづみ》「独占…さりたい…」

《リゲル》「そ、誰にも渡したく無い、奪われたくないって思う…若しくは相手からそう思われたい」

《あづみ》「はうっ…」

《リゲル》「あづみ…その反応からして、独占って言葉は嫌いな様ね。大祐との関係以外限定で」

《森山碧》「しようがないだろ。大祐が自分の欲を、あづみんにぶつけない訳だからな」

《リゲル》「…森山碧、盗み聞きとあづみへの愛称、何方も此れから禁ずるわ」

《森山碧》「禁じられる気はねえよ。俺は俺のしたい事をするだけだからな」

《リゲル》「…熟、危険な男ね」

《あづみ》「あ、あのっ…」

《森山碧》「お、あづみんから質問とは、これも又珍しいな…どした？」

《あづみ》「えつと…その、だ、大祐くんの…欲つて…？」

《森山碧》「良い質問…とは言わないが、悪く無い。ぶっちゃけた話、あづみんが思っている事を大祐も思っている」

《あづみ》「私の…?」

《森山碧》「彼奴…引つ込み思案が平常運転でな。本当はあづみんを独占したくて仕方が無いとか何とか」

《あづみ》「えっ…ふえっ…!」

《森山碧》「その反応好きな」

《リゲル》「親友だからこそ、聞いたのかしら…?」

《森山碧》「ま、そんなとこだ。だけどな…独占されたいとは言って無かった。何だか訳分からんわ」

《あづみ》「こ、こうして聞くと…独占…って、凄い…言葉…//」

《森山碧》「今更か」

《リゲル》「…それは良いとして、要は大祐…女性からの攻めは受け付けないって話よね」

《森山碧》「ん?ん…ああ、あれだ。女性の手を煩わせたく無いって奴。簡単に説明すると、告白は男から、仕掛けるのは男から」

《リゲル》「…?言っている意味が理解出来ないわ?」

《森山碧》「要は、告白する時には勇気が必要だろ?」

《リゲル》「え、ええ…確かに」

《あづみ》「…あつ、私、分かった…」

《森山碧》「お、察しが良い…のかは分からんが、相変わらず鈍い金髪さんだ」

《リゲル》「何か…言ったかしら…?」

《あづみ》「り、リゲルが怒ってる…」

《森山碧》「それはさて置きだ」

《リゲル》「そんなナチュラルにスルーさせないわよ」

《森山碧》「話が脱線するから、一度は置かせろ」

《リゲル》「くっ…」

《あづみ》「リゲルが…怯んでる…」

《森山碧》「…でだ、話を戻すと、その勇気を振り絞るのは男の役目だと。それで振られて傷付くのも男の役目だと。女性は傷付く必

要は無い…とかいう、紳士気取りの馬鹿だ」

《あづみ》「…何としても、女性に傷付いて欲しく無い…」

《森山碧》「ああ…だが、その思考の所為で女性側を縛っている事に、何時になっただら気がつくんだか」

《リゲル》「女性からは手を出させたく無い。万が一にも傷を付けさせたく無い。それじゃあ、女性からは意見の一つも切り出せない…」

《森山碧》「そして彼奴からも手を出さない。そりゃあ、何時迄経っても関係が進まない訳だ」

《あづみ》「大祐くん…」

《森山碧》「……………ま、大丈夫だろ。そろそろ大祐自身も攻めに出るだろうからな」

《あづみ》「…??」

《森山碧》「あ、因みに、金髪さんの事も独占したいだよ。…甘い…甘過ぎる！話が甘過ぎる！胃が凭れる位にな!!」

《リゲル》「…大祐と私達を侮辱するの、やめてくれるかしら。……………でも…大祐が、私を独占……………うう…考えただけでも爆発してしまいそう…／＼／＼」

《あづみ》「リゲル、顔真つ赤だね」

《森山碧》「…あ、そうだ。天王寺氏とソリトウスが見当たらないが。それに手紙は読んだのか？」

《リゲル》「あづみに対しての口調が軽過ぎるわ。もっと敬意を払いなさい」

《森山碧》「めんどくさー…大祐、良く落としたな。この金髪さんの事」

《リゲル》「落とす？何の話？」

《森山碧》「……墮とすの方が正しいかもな」

《リゲル》「…？訳が分からないわ」

《あづみ》「はーとはすないぱーされたよね」

《リゲル》「…あづみ、可愛く言っているけれど、至極恥ずかしいわ。……………最もなのは確かだけど」

《森山碧》「狙撃の上手い奴が狙撃されるとは、思いもよらないわな」

《天王寺飛鳥》「…お、何時の間にか話が終わってる雰囲気やな」
《ソリトウス》「あづみちゃん…結局、手紙の自身は…見た…?」
《あづみ》「は、はい。皆、言い争ってる間に…」
《リゲル》「言い争う…あつ、あの時ね」
《森山碧》「皆して五月蠅かった時だろ。あづー」
【森山碧の顔面に思い切り水の掛かる音】
《森山碧》「……………んあ?」
《ソリトウス》「お水…?」
《リゲル》「用意周到、備えあれば憂いなし、言ったでしょ?容赦はしないって」
《ソリトウス》「凄い…あ、碧くん…今タオル持ってくるね…!」
《森山碧》「…やってくれるわ、完全に油断してた」
《リゲル》「あづみに軽口を叩いた罰よ」
《天王寺飛鳥》「うっわ…相変わらず厳しいなあ?」
《リゲル》「天王寺飛鳥、貴様も標的の一人だって事を忘れて貰っては困るわ。あづみに手でも出したら、命は無い物と思いなさい」
《天王寺飛鳥》「き、肝に命ずるから、せめて情けを…」
《あづみ》「もう、リゲルったら…」
《リゲル》「因みに、下手をしなくても大祐と一緒に殺しに行くわ」
《天王寺飛鳥》「恐ろしっ!!あづみちゃんー少女は絶対防壁に守られるから、触れも出来へんなく、あはっ…ははは…」
《あづみ》「…リゲル、銃を下ろしてあげて…?」
《リゲル》「あづみがそう言うなら」
《天王寺飛鳥》「…作り笑いって、意味ないな」
《リゲル》「全く…森山碧然り、天王寺飛鳥然り、あづみが居なければ死んでいたのよ。あづみに感謝しなーひゃいっ!?!」
《あづみ》《天王寺飛鳥》「!?!」

――

《ソリトウス》「…何か、凄く可愛らしい声が聞こえたけど……………」
《リゲル》「……………」

《森山碧》「丸で鬼の形相だな」

《リゲル》「……………私に触って良いのは…あづみや大祐だけよっ!!」

「リゲルが力の限りビームサーベルを一閃する音」

《森山碧》「おっと、危ねえ危ねえ」

《天王寺飛鳥》「……………まさか、信じられへんな……………リゲル…金髪美女の背後を取り、肩に手を置くなんて…」

《あづみ》「…リゲルもあんな声、出すんだ」

《リゲル》「くっ……………」

《森山碧》「おろ、そんな屈辱的な表情を浮かべんでも良いだろ」

《ソリトウス》「……………碧くんのターン」

《森山碧》「俺は一応、注意を促す為にしたんだからよ」

《リゲル》「注意…? 何故貴様に注意されなくてはー」

《森山碧》「金髪さんよ。自分自身が相当美人だという事を、ちゃんと意識した方が良いぞ。其処の少女を守るだけじゃなく、自分の事もしっかり守れ」

《リゲル》「……………だから何」

《森山碧》「…気付いて無い様だな。ま、碎いて簡潔に述べるわ。『自分が他の男に手を出されない様にしろ』って話」

《リゲル》「どうしてこのタイミングでー」

《森山碧》「貴女は其処の少女を守る事に専念し過ぎだ。無論、それが悪いとは言わない。だが…金髪さん、貴女を付け狙う奴等はゴロゴロ居るだろうよ。其処ら辺気を付けとか無いと、何時かは金髪さん自身が襲われる」

《天王寺飛鳥》「で、でも…金髪美女ーはもう言い辛いわ! リゲルがそんな簡単に襲われるなんてあるんかいな…」

《森山碧》「今やって見せた通りだ」
《ソリトウス》「……………説得力の塊」
《あづみ》「でも…その人の言う通りだよ、リゲル。私を守ってくれるのは嬉しいけど……………リゲル自身も、注意しなきゃ」
《リゲル》「あづみ……………」
《あづみ》「もし……………方が一、リゲルが襲われたら…私も大祐くんも……………」
《リゲル》「……………」
《ソリトウス》「…あづみちゃんも……………リゲルさんの事、大好きだもんね……………」
《森山碧》「…ま、頭の隅に置いとく程度でも良いだろ。驚かせてすまなかつた。水を掛けられた腹いせも含め、おあいこだろ」
《天王寺飛鳥》「寧ろ其方が本命ちやうんか」
《森山碧》「あ、バレた？」
《リゲル》「森山碧……………絶対に蜂の巣にしてやるわ」
《森山碧》「おわっ、怖っ！けど大祐にはすっげー優しいもんな？ははっ」
《リゲル》「そ、それはっ…大祐…だから…／＼／＼」
《ソリトウス》「リゲルさんが…照れた。……………こうしてみると分かるけど……………大祐くんって、凄いやね……………」
《天王寺飛鳥》「ほんま、そう思うわ」
《あづみ》「リゲルの心、鷲掴みにしちやうなんて…最初は私も驚いたなあ…」
《??》「あら、それはあづみもそうでしょう？」
《あづみ》「…！」
《リゲル》「…まあ、来て当然よね」
《天王寺飛鳥》「誰や？」
《ソリトウス》「一人じゃない…3名様、ご来店」
《森山碧》「もつと癖の強い面子が来たな。何れにせよ、大祐の物という」
《ヴェスパローゼ》「その言い方…嫌いじゃないわよ？」

《森山碧》「マジかよ…少し位否定しようぜ」

《きさら》「へあ、ごちやごちや」

《ソリトウス》「…ほんとかだ。私が来るまでに…色々有ったんだね…片付けなきや…」

《天王寺飛鳥》「僕も手伝うで。責任は僕らにあるからな」

《ソリトウス》「…飛鳥くん…えへへ…ありがと…」

《あづみ》「わ、私もお手伝いー」

《ベガ》「駄目ですよ、あづみ。今日は貴女が主役なのですから。じつとしていれば、それで良いのです」

《あづみ》「でも…お母さん…」

《リゲル》「…漸く、場を一つに纏められるのが来たわね」

《ベガ》「リゲル、貴女はもっとカリスマ性を高める事です」

《ヴェスパローゼ》「ふふつ、何処か幼くて良いじゃない。大祐の好物よ」

《リゲル》「大好物…つて、言い方を変えなさい。…嬉しいけれど」

《きさら》「りげゆ、てえてる？」

《リゲル》「いえ…照れてなんか、無いわ…」

《きさら》「うゆ…？」

《あづみ》「わあ、きさらちゃん…一緒に、遊ぼ？」

《きさら》「あづ！あそぶっ」

《あづみ》「えへへ…きさらちゃん、可愛いなあ」

《ヴェスパローゼ》「…意外な関係発覚ね。丸できさらのお姉さんみたい」

《ベガ》「私も、びっくりです」

《森山碧》「…やべえ、付いていけねえ」

《天王寺飛鳥》「当たり前前つちやあ、当たり前やな。だって…この場に居る男性は僕達二人だけやで？他は全員、高嶺の花たる美女や美少女…」

《森山碧》「確かにな」

《ベガ》「…貴方方、居たのですね。てつきり大祐だけが居るもの

かと」

《リゲル》「それが…寧ろ大祐はまだ来てないの」

《ベガ》「早く来て欲しいものですね。何処か待ち侘びてる自分が居ます」

《森山碧》「ま、その内来るだろ。雑談でもして待つてようぜ」

《天王寺飛鳥》「雑談…あー、最近フィエリテはんにキレられた話とかどや」

《ソリトウス》「少し…気になる……」

《森山碧》「何時もの事だろうな、面白そうだから聞くけど」

《リゲル》「どうせ、女性関連の話でしょ。全く…女癖の悪い男ね」

《天王寺飛鳥》「…僕!？」

《きさら》「てあたり、しだい?」

《あづみ》「きさらちゃん、その言い方はちよつと…当たってるかも……」

《天王寺飛鳥》「いやいやいや、可笑しいやろ!？」

《森山碧》「じゃあ、どんな話なんだ」

《ソリトウス》「……フィエリテさんが怒る位……やっぱり……?」

《天王寺飛鳥》「ちやうて!綾瀬を出掛けに誘った位や」

《森山碧》《ソリトウス》「……ですよね……」

《天王寺飛鳥》「なんその微妙な反応は……」

《ヴェスパローゼ》「ふふっ、其処の女誑しな男の話は置いて、ソリトウスさん…よね? 私達も飲み物、頂けるかしら」

《ソリトウス》「はっ…! そうだった……い、今直ぐ用意して来ます……!」

《ヴェスパローゼ》「焦ると危ないわよ? ゆっくりで構わないわ」

《ベガ》「…ヴェスパローゼ、貴方が他人を気遣うなんて。この部屋に居るだけで人格が変わる、そんな作用でも含まれているのでしょうか?」

《ヴェスパローゼ》「随分と疑り深いわね、ベガ」

《森山碧》「やべえな…この部屋って、んな効力が有ったのか」

《ヴェスパローゼ》「無いに決まってるじゃない」

《天王寺飛鳥》「…こ、こうして2人が並ぶと…大物感がヤバイな…」
《ベガ》「貴方は…天王寺…」
《天王寺飛鳥》「は、はいっ!」
《ベガ》「…大和?」
《天王寺飛鳥》「其方は兄ちゃんや!」
《ベガ》「意外とノリが良いんですね。最も…全て大祐の下位互換としか感じませんが」
《天王寺飛鳥》「…ん!?!」
《森山碧》「おっほ、キツツイ一言」
《ソリトウス》「…ううん、そんな事…無いと思う…:…はい、ヴェスパローゼさん…お待たせしました」
《ヴェスパローゼ》「あら、有難う」
《リゲル》「…ん…?」
《きさら》「りげゆ、りげゆ」
《あづみ》「きさらちゃん、リゲルのバトルドレスに興味津々だね」
《きさら》「りげゆ、ろーぜ、こえ、なあに?」
《リゲル》《ヴェスパローゼ》「大量虐殺兵器」
《きさら》「たいよう…:…うゆ…?」
《ヴェスパローゼ》「ふふっ、冗談よ」
《リゲル》「強ち間違いでは無いけれど」
《ベガ》「こら、リゲル。幼い少女に、良い加減な事を教えてはいけませんよ」
《あづみ》「そうだよリゲル、きさらちゃんが困っちゃったよ?」
《きさら》「ぎあく…:…さ?」
《森山碧》「簡単に言えば、大祐が戦う時に使ってる奴と一緒にだ」
《天王寺飛鳥》「凄い簡略化してるな」
《ソリトウス》「それも強ち…:…間違いじゃない…:…」
《きさら》「だいすけ…:…だいすけ!」
《ヴェスパローゼ》「変な覚え方をしてしまいそうね」
《ベガ》「森山碧…:…余計な事を」

各務原あづみ happy birthday! No.

10

《リゲル》「余計な事…今更ね」

《森山碧》「…お、俺は何もしてませんって、だから許して下さいよ」

《ソリトウス》「…オタクみたい」

《天王寺飛鳥》「確かに、オタクの末期みたいやな」

《森山碧》「うるせ」

《きさら》「おたくっ」

《森山碧》「きさらちゃんの？」

《きさら》「やつ！」

《天王寺飛鳥》「ぶっ、速攻拒否られてるやんか、面白いなあ！」

《ヴェスパローゼ》「きさら然り、大祐以外には抵抗心強めよ？」

《森山碧》「お兄さん傷付くわー…」

《ソリトウス》「オタク…傷付いてるー…」

《森山碧》「やめなさいって」

《リゲル》「仕返しに丁度良いわね。森山碧…今日から貴様の名前は、オタクよ」

《森山碧》「こらあ!! おあいこだっただろ！」

《リゲル》「あら? 何の話かしら」

《天王寺飛鳥》「流石、しらばつくれるのがお上手やな！」

《きさら》「りげゆ、かお、こあい」

《天王寺飛鳥》「…は、ははっ…冗談やて…ま、全く、冗談が通用しないな…リゲー金髪さんは」

《ソリトウス》「切り替えの早さは…異常…」

《天王寺飛鳥》「然りげ無くdisられたわ…」

《ソリトウス》「…!? ち、ちがっ…」

《森山碧》「良いぞ、もつとやれ！」

《リゲル》「オタク」

《森山碧》「だからやめいって!!な!!」

《リゲル》「ふんっ、いい気味だわ?」

《ヴェスパローゼ》「…少し騒がしくて疲れるわね。きさら、彼方でゆっくり、大祐を待ちましょ?」

《きさら》「うい!ろーぜ、はあくいこっ」

《ヴェスパローゼ》「ふふっ…ええ、分かったわ」

《リゲル》「…私達も、少しこの輩と離れましょ」

《森山碧》「おうおうおう、此方から離れたるわ」

《リゲル》「二度と近付かないで」

《森山碧》「…………俺だって傷付くからな!?!ま、別に良いけどさ」

《天王寺飛鳥》「相変わらずツンケンしとるなあ。大祐君が来た時の変わり様を、この目で見てみたいわ」

《ソリトウス》「…きつと、丸で別人……………」

《リゲル》「はいはい、私の事はいいから。全く…行きましょ、あづみ。

……………あづみ?」

《ソリトウス》「…………あれ…?ベガさんも居ない……………」

《リゲル》「あづみ!ベガ!何処へ行ったのかしら…?」

《森山碧》「ま、少なくとも部屋の中には居るだろうな」

《天王寺飛鳥》「部屋つちゆうたつて、屋敷並みに広いんやで?素直に戻って来るのを待つのが吉やろ」

《リゲル》「あづみ……………」

――

《ベガ》「大祐との関係…の、深め方ですか?」

《あづみ》「え、えっと…はい…」

《ベガ》「以前お話しした様に、男女としての関係性を深く築くのは、まだ早いかと思えます」

《あづみ》「で…でもっ」

《ベガ》「……………ですが、確かに。知識の有無、それだけであづみ自身にも関わって来ます。大祐と此れからを過ごしていく中で、必ず必要となってくる知識。…もし、私からの話を聞かずに大祐と夜を楽しんでしまっても、世の中には『避妊』アイテムという謎の物体が有りますからね。大祐なら弁えてくれーいえ…二人共、理解してでも作ってしまいそうです。そういう問題では無いのですが」

《あづみ》「ひ、ひにん…?」

《ベガ》「ええ。あづみはその辺りの知識が無知、と言って良い程に皆無です。親としては心配でなりません」

《あづみ》「うう…」

《ベガ》「…まあ、覚えておいて損は無いです。もう認識を得ていても可笑しくない年齢です…折角ですから、ソリトウスさんに部屋をお借りして、私とあづみ…リゲルは…ええ、リゲルもですね。三人で少しばかり話をしましょう」

《あづみ》「お話…?お母さんの…」

《ベガ》「はい。もしあづみやリゲルが、大祐と繋がる時を迎えた場合…しっかりと学んでおかねばならないでしょう?」

《あづみ》「は、はいっ」

《ベガ》「最悪、大祐が教えてくれるでしょうけど…大祐も恥ずかしいと思います。況してや、それが初恋で大好きな女性だとしたら。彼ばかりに頼ってもいられませんし」

《あづみ》「うん…大祐くんだけに頼ってちや、だめ…自分で学ばなきゃ」

《ベガ》「……………ですが、其処を優しくフォローしてくれるのが大祐です。あづみやリゲルにも分かりやすく、砕いて説明しますけど…もしそれでも理解が難しい場合。大祐に頼らせて貰いましょう」

《あづみ》「お母さんと、リゲルと一緒に…」

《ベガ》「心配は無用です。万が一の場合、ルクスリアやヴェスパローゼが居ますからね」

《あづみ》「あ、そっか…心強いなあ…」

《ベガ》「こういった事に関して、という、限定的な心強さですけど」

ね」

《あづみ》「勿論、お母さんが居てくれるだけでも…私は、凄く心強い
です」

《ベガ》「…有難う御座います、あづみ。ですが…敬語は禁止ですよ。
私は貴女の『お母さん』なのですから」

《あづみ》「じゃあ…お母さんも、私に敬語はだめっ。私はお母さんの
『娘』…だから」

《ベガ》「一拍置いた時点で、不安がバレてますよ。…ふふっ、あづみ、
確かに貴女は私の『娘』です。この事実は何ら変わりはありません。
だから安心して…私を『母親』として、存分に甘えて来て下さい」

《あづみ》「お母さんっ…!」

《ベガ》「…敬語は…私の中で、誰に対してもという意識が高く…あづ
みだけには、徐々に『母親』として話せるよう、段々と慣れて行けれ
ば…」

《あづみ》「え、えっと…お母さん、無理だけは…」

《ベガ》「ふふっ…一つ、私の中で目標が出来てしまいましたね」

《あづみ》「わ、私もっ」

《ベガ》「?」

《あづみ》「…私も…お母さんと一緒に、沢山話したいから…一生懸命
頑張るっ」

《ベガ》「あづみ、無理だけは駄目ですよ?」

《あづみ》「えへへ」

《ベガ》「…大祐は、この天使の様な笑顔を何時も見ているのですね…
羨ましいです」

《あづみ》「お母さん…?」

《ベガ》「…いえ、何でも有りませんよ。ええ…さて、リゲルの所に戻
りましょうか」

《あづみ》「うんっ」

《ベガ》「…!」

《あづみ》「あっ…えと…だめ、かな…」

《ベガ》「そんな、駄目だなんて…寧ろ嬉しいです。あづみから手を

握ってくれるだなんて」

《あづみ》「えへへ…お母さんの手、暖かい」

《ベガ》「私の手が…？珍しいですね…何時も冷えているというのに」

《あづみ》「お母さんが、優しいからかな？」

《ベガ》「あづみの方が思いやりが有って、優しいですよ。…偶に天然でドジっ娘な所も有りますけど…それも全部、可愛らしいと思えるのが不思議です」

《あづみ》「私、ドジっ娘じゃないもんっ」

《ベガ》「天然は否定しないのですね」

《あづみ》「あっ…」

《ベガ》「やっぱり、可愛らしいです」

《あづみ》「むう…」

《ベガ》「…ふふっ」

《あづみ》「えへへ…」

――

各務原あづみ happy birthday! No.

11

《リゲル》「ん…やっど帰って来たわね」

《ベガ》「やっどと言えど、まだ10分程しか経ってませんよ」

《リゲル》「あづみが私の側に居ない時点で、1秒も10分も同じようなものよ」

《あづみ》「リゲルは相変わらず、心配性なんだから…」

《ベガ》「何時かあづみも独り立ちをする日が来るのですよ？その時が訪れたら、どうするつもりですか」

《リゲル》「私と大祐が居る、絶対…あづみを独りにはさせない」

《あづみ》「盛大に勘違いしちゃってる…」

《ベガ》「そういう話では無いのですけどね」

《リゲル》「?どういう話…?」

《ソリトウス》「あの…えっと…飲み物、飲む…?」

《リゲル》「ええ、頂くわ」

《ベガ》「ソリトウスさん…丁度良いタイミングですね。一つ、お願いしたい事が有ります」

《ソリトウス》「は、はいっ?!?な、なんででしょう?!?」

《ベガ》「…そこまでガチガチにならなくても…何も、取って食ったりしませんから、安心して下さい」

《あづみ》「取って、食べちゃうの…?」

《ベガ》「食べませんよ?」

《森山碧》「『意味深』」

《ベガ》「貴方はその口を閉じなさい」

《森山碧》「俺にだけ命令口調かよ!?!」

《リゲル》「ベガ、あれは『貴方』ではなく『オタク』よ?間違うのは失礼じゃないかしら」

《ベガ》「…成る程、確かに。幾ら相手が相手と言えど、失礼な事に変わりはないですね」

《森山碧》「何方が失礼だよ…」

《天王寺飛鳥》「ま、まあ…大祐君以外には手厳しいのは何時もと同じ、流石やなあ」

《ベガ》「『大祐は論外』ですけどね」

《あづみ》「お母さん…其処だけ主張してる…」

《ベガ》「あづみやリゲル、二人だつてそうでしょう？」

《あづみ》「え、えっと…うん…／＼／＼」

《天王寺飛鳥》「あはは…こりや、大祐君以外の男は近付けそうにもあらへんな」

《森山碧》《リゲル》「何を今更」

《ソリトウス》「……………ハモった」

《天王寺飛鳥》「意外に気が合うんやな」

《リゲル》「誰がこんな奴と…」

《森山碧》「偶然、タイミングが重なっただけだろ」

《リゲル》「それに、気が合うって使い方、間違ってるわよ」

《天王寺飛鳥》「…何か…僕が指摘されてるちゃうか…？」

《ソリトウス》「……………恋愛においても……………色々、指摘された方が……………」

《ベガ》「それは禁句ですよ。指摘した所で、伝わる事すら無いでしょうし」

《森山碧》「まく、こう言う鈍感系男子には、当たって砕けろで攻めた方が良かったりするんだよな」

《あづみ》「一発本番…告白…？」

《天王寺飛鳥》「なんや皆して。もう少し僕にも聞こえる声でー」

《森山碧》「…なあ、知ってるか？鈍感系男子の特徴、此れだけは絶対に外せない要素が一つだけ有る」

《天王寺飛鳥》「き、急にどないしたんや」

《リゲル》「…例えば？」

《森山碧》「難聴」

《ソリトウス》《リゲル》「「ぶっ」」

《ベガ》「…納得ですね」

《あづみ》「なん…ちよう?」

《天王寺飛鳥》「…僕!」

《森山碧》「んな、あつたりまえだろ。やっぱ天王寺氏、そろそろお歳が…」

《天王寺飛鳥》「まだ16歳や!現代を生きる若者の一人やて!!」

《リゲル》「只…鈍感な男性が難聴な事は、否定出来ないわね」

《ソリトウス》「うんうん…」

《あづみ》「なんちようって…蝶々?」

《ベガ》「軟らかい蝶、軟蝶…可能性は有り得ます」

《森山碧》「話が脱線する」

《天王寺飛鳥》「こう…倒れる感じやな」

《ソリトウス》「…違う方向に進んでる」

《リゲル》「言いたい放題ね」

《??》「大祐くんの前でも、自分の気持ちを言いたい放題出来れば良いのにね」

《森山碧》「はっ…!此奴、直接脳内に…!」

《ソリトウス》「普通に…聞こえるよ…?」

《ベガ》「…ん、厄介者が来ましたね」

《リゲル》「何時迄も嫌ってちゃ、仕方無いわよ。…あづみなんて、ほら」

《あづみ》「ナナヤちゃん、久し振りだね…?」

《ナナヤ》「うんっ、久し振りだね、あづみちゃん」

《リゲル》「…ね?」

《ベガ》「…流石です、あづみ」

《天王寺飛鳥》「だ、誰や…この女の子」

《ソリトウス》「…初見さん…いらっしやいませ」

《ナナヤ》「ん…?見掛けない人が二人居る…貴方達は?」

《森山碧》「…あらら?俺の事は知ってたのか」

《ナナヤ》「インパクトが強過ぎて、嫌でも頭に残っちゃうんだよね」

《森山碧》「そりやどうも」

《リゲル》「それより、早く自己紹介を済ませてしまえば?」

《天王寺飛鳥》「せ、せやな。長引かせるのもアレやし……じゃあ僕から。本来なら相手方から名乗る筈なんやけど……コホン、僕は天王寺飛鳥。白の世界のZ/X使い……そか、もう世界とか関係あらへんかったな。えーと……あ、好きな物はー」

《森山碧》「女の子」

《ナナヤ》「……え」

《リゲル》「ドン引きね……」

《森山碧》「アンタらの旦那にも言える事だぞ……」

《リゲル》《ナナヤ》「大祐（くん）はー」

《森山碧》「わかったわかった、大祐は天王寺氏みたいな女誑しじゃ無いって言うんだろ？」

《天王寺飛鳥》「女誑しちゃうわ！又そうやってへつきーはんは……さつきから僕をいじり過ぎやわ……」

《ソリトウス》「……それで、飛鳥君の好きな物は……？……？」

《天王寺飛鳥》「……せやなく、今この瞬間……平和な世界や！」

《ナナヤ》「ふーん……」

《天王寺飛鳥》「…………」

《リゲル》「……はあ、ナナヤにそんな事言っただって無駄よ。関心が無いんだもの」

《天王寺飛鳥》「なっ……平和な世界に、関心が無いやて……？」

《森山碧》「当たり前だろー。誰だって、天王寺氏と同じ様に『皆の為に』みたいな思考じゃ無いんだからよ。それに其奴……」

《ベガ》「神々の戦い……戯れ、その為だけにこの世界を支配しようとした、デインギルなんですから」

《ソリトウス》「……デインギル……要するに……」

《天王寺飛鳥》「あの訳分からなかった『ルル』って奴と、同じだって言うんか……」

《ナナヤ》「うんっ。私はデインギル……昇熱の『壊做』ナナヤ。だからこうして、空中にも浮けちゃうよ〜♪」

《天王寺飛鳥》「おおっ、ホンマや！神様つてのは、相変わらず凄いやなく。………ん？けど、神様を信奉する子達とか居らへん

かったか?」

《森山碧》「何方かと言えば、信奉させてるが正しいな。願いを叶えさせてやる、その代わりに我が軍として戦え、的なの?」

《リゲル》「そんな感じね」

《ソリトウス》「:じゃあ、ナナヤちゃんを……信奉している子達も多いの……?」

《ナナヤ》「ううん? 1人しか居ないよ」

《ベガ》「自分に対しての利益より、愛を選びましたからね」

《天王寺飛鳥》「愛? どう言うことや?」

《ナナヤ》「私と契約を結んだのは只1人: 大祐くんだけだからね:
♪」

———

各務原あづみ happy birthday! No.

12

《リゲル》「…ん、あづみがきさらと遊んでる…ヴェスパローゼ、私も近くにお邪魔するわ」

《ヴェスパローゼ》「ええ」

《きさら》「りげゆ、そえ、とって」

《リゲル》「…これかしら？」

《きさら》「あいがとっ」

《あづみ》「えへへ…リゲル、優しいね」

《ヴェスパローゼ》「少し前まではきさらも貴女も、敵視していた仲だと言うのに。人は変わるものね」

《ナナヤ》「……………ま、私の自己紹介は此れくらいかな？」

《天王寺飛鳥》「でも、なんで大祐君だけと契約したんや？他の神様は、沢山契約者を増やしてるんやろ？」

《森山碧》「確かに。大祐だけってのは気になる」

《ベガ》「それこそ、彼女の愛なのでしょう」

《ナナヤ》「当たり前だよつ。大祐さんと契約する為だけに、今まで願いを叶えさせて来た子達の契約を、全部解除したんだもんっ」

《ソリトウス》「……………それって、意味……………有るの…………？」

《天王寺飛鳥》「確かに。態々全部解除なんてせえへんでもー」

《ナナヤ》「私が、大祐くんだけを見てるって証♪……………それに、大祐くんから言われたの。『俺と契約したいのなら、他の子達との契約を解除しろ』って」

《森山碧》「…ん？告白か？」

《ナナヤ》「私も最初は期待しちゃったなあ…でも、全然違った。神様と契約を結び、その深度が深くなるとどうなるか、それは知ってるよね？」

《森山碧》「ああ」

《ソリトウス》「世羅ちゃん…ムリエルちゃん、あの辺りは……………至って純粹…」

《ベガ》「独占したいと思える様な存在、という事は否定しません」

《ナナヤ》「独占したいって事も否定は無しかなっ♡」

《森山碧》「うわ…怖っ…」

《ナナヤ》「何か言った？」

《森山碧》「はて？幻聴では？」

《ナナヤ》「…別に、良いんだよ？貴方の日常生活全てを、この世に生きる人達全員に晒しても」

《森山碧》「待って、それだけは勘弁して下さい。何でもーしないから」

《天王寺飛鳥》「受け答えにセンスを感じるなあ」

《ソリトウス》「日常生活…晒されると、まずい事を…？」

《森山碧》「人には人のー」

《ソリトウス》「乳酸菌…」

《森山碧》「そうそう、すっかり摂取しないと駄目だよ……………じゃねえ！プライベートだ、プライベート!!」

《ベガ》「プライベート…」

《ナナヤ》「大祐くんのプライベートを含めた全ては、私が一番知っているよ…」

《森山碧》「知るかよ！」

《ベガ》「……………それより。先ず聞かなければならない事が有ります」

《ソリトウス》「…聞かなきゃ…？」

《天王寺飛鳥》「ならない事？」

《森山碧》「どうしたら大祐を墮とせるか？」

《ベガ》「……………。どうして貴女は、此処に来たのです？」

《ナナヤ》「ん…？私？」

《森山碧》「おい何だ今の黙り込んだ時間!!」

《ベガ》「それは置いて下さい」

《森山碧》「お、おお…」

《天王寺飛鳥》「(キリッとしとるなあ…)」

《ソリトウス》「(でも……………大祐くんの前だと…)」

《ナナヤ》「私が…此処に来た理由？」

《ベガ》「はい」

《ナナヤ》「…あつ！そうだった！今日つて、あづみちゃんの誕生日なんだよね？」

《ベガ》「やはり、関係しているんですね」

《ナナヤ》「関係も何も、大祐くんに色々頼まれたんだつた…思い出せて良かったよ…」

《森山碧》「因みに俺もその口だ」

《天王寺飛鳥》「僕は一人で勝手にお邪魔しただけやけど…てつきり、皆んな集まっているかと思つて来たら、殆どが薄弱な人ばっかやな」
《ベガ》「まあ、変に人が集まられても困ります。最低限の人数で祝えれば、それで」

《ナナヤ》「とか言つて、本当はあづみちゃんを盛大にお祝いしたいんでしょ？最大限の人数で、ド派手に…パーティーと♪」

《ベガ》「……………あづみ次第です」

《天王寺飛鳥》「苦し紛れな正論やな…」

《ソリトウス》「……………苦し紛れでも…正論を言えるつて、凄い……………」
《リゲル》「ま、ベガにとつてもあづみが全つてつて事ね」

《ヴェスパローゼ》「実の娘を愛するのは、当たり前前の事であり…何も恥ずかしい事では無いわ？」

《ベガ》「…貴女に諭されるとは、思つてもみませんでしたよ」

《きさら》「ろーぜ、あそぶっ」

《ヴェスパローゼ》「ふふっ、きさらつたらまだ遊び足りないの？」
《きさら》「うい」

《ソリトウス》「…其処ら辺にあるものなら、好きに使つて…？……………あ、あと……………何か探つてこよつか…？きさらちゃんが遊べそうな物…」
《きさら》「そいとうす、あいがと！」

《ヴェスパローゼ》「私からも、お願い出来るかしら」

《ソリトウス》「うん…少し、待つて…」

《天王寺飛鳥》「流石、ソリトウスさんは気が利くなあ」

《森山碧》「疲れそ」
《あづみ》「……あ、えつと……お母さん」
《ベガ》「あづみ？なんでしよう」
《あづみ》「ソリトウスさんに、お話聞いた？」
《ベガ》「……今から聞きます」
《リゲル》「意外と忘れっぽいのね？」
《ベガ》「人を揶揄うのは宜しく無いですよ、リゲル」
《ナナヤ》「大祐くんを揶揄ったりはしないのよね」
《リゲル》「そ、それはっ……別でしょう……？………というか、ナナヤ……
貴女まだいたの」
《ナナヤ》「だって大祐くんから色々頼まれたんだもんっ」
《ソリトウス》「ん……何か無いかな……」
《ベガ》「ソリトウスさん……立続けにすみません、少しばかり空いている部屋を借りても宜しいですか？」
《ソリトウス》「あつ、は……はいっ……お好きにどうぞっ……！」
《天王寺飛鳥》「なんやソリトウスさん、ガチガチやな？」
《森山碧》「おいおい、忘れたとは言わせないが……相手はアドミニストレーターだぞ。そりや固まるだろ」
《天王寺飛鳥》「それは百も承知やけど……もつと、こう……」
《森山碧》「フレンドリーに、つてか？」
《天王寺飛鳥》「せや！」
《ベガ》「……私が、限られた人物以外に、心を許すとても？」
《天王寺飛鳥》「無理やったわ……」
《森山碧》「諦め早くないか!？」

各務原あづみ happy birthday! No.

13

《ソリトウス》「ほ、ほら…飛鳥くんっ…謝らないと…!」

《ベガ》「…ですが、ソリトウスさんは別です。貴女は見知らぬ人にも優しく、弁える所はしっかりとしてますから」

《ソリトウス》「えっ……………と……………えへへ……………、ありがとう…ごさいます…」

《ベガ》「それに、雰囲気は何処と無く…こう、あづみに似ているのです」

《森山碧》「性格の問題じゃないのか?」

《天王寺飛鳥》「一概にそうとは、言えへんけどな」

《ソリトウス》「…?」

《ベガ》「物静か、という接点でしょうか」

《あづみ》「お母さん、どうしたの?」

《リゲル》「あづみがベガに対して『お母さん』、ね…相変わらず慣れないわ」

《ベガ》「慣れるも慣れないも個人次第ですよ、リゲル。ですが…私が各務原あづみの母親である事に、何ら変わりはありません」

《ヴェスパローゼ》「あら、良い事言うのね」

《きさら》「いいこと?」

《リゲル》「…ヴェスパローゼとベガって、何方の方が立場上なのかしら…」

《ナナヤ》「同等?」

《天王寺飛鳥》「はつきりとは分からんやろな」

《森山碧》「おーい、知ったかみたいな発言は止しとけ」

《あづみ》「お母さんと…ヴェスパローゼさん…?」

《ソリトウス》「あづみちゃんは……………実感…湧いてないみたい……………」

《ベガ》「まだ、馴染めていないというのもありますね」

《リゲル》「ベガが馴染めていないのなら、私が慣れないのも仕方ない

わよね?」

《ベガ》「それとこれとは話が別です。他人の所為にしてはいけませんよ」

《リゲル》「…う…諭されてる気分だわ…」

《ヴェスパローゼ》「ま、何方が上であろうと…大祐の妻になるのはきさらで決まっているから、あまり関係無いわね」

《ベガ》《リゲル》「…い…」

《きさら》「つ、ま…およめさん?」

《ナナヤ》「そうだよ」

《きさら》「だいすけ、の?」

《ナナヤ》「うん」

《きさら》「なゆっ!」

《ナナヤ》「だめっ、私になるの」

《きさら》「うゆ…きい、まけないっ」

《ヴェスパローゼ》「小競り合いが始まってるわね」

《ベガ》「…ヴェスパローゼ、今の言葉は聞き捨てありませんね」

《ヴェスパローゼ》「小競り合いの事かしら」

《リゲル》「いいえ、その前よ」

《ベガ》「ヴェスパローゼ、大祐の妻に相應しいのはあづみです。それだけは頭に入れておいて下さい」

《あづみ》「ふえっ…!」

《リゲル》「そうね、あづみ意外有り得ないわ」

《あづみ》「リゲルまで…」

《天王寺飛鳥》「なんやなんや…大祐君争奪戦かいな」

《森山碧》「ああいうのには、ぜってー首を突っ込んでんじや駄目だ。二次災害が飛んでくるぞ」

《天王寺飛鳥》「はははっ、大祐君も大変やなあ」

《ソ　　リ　　ト　　ウ　　ス》　　《森　　山　　碧》

「……………」

《森山碧》「(先ずは自分の心配をしろよ…)」

《ソリトウス》「飛鳥君…鈍感過ぎ……………」

《天王寺飛鳥》「？」

《ナナヤ》「ちよつと！私を抜いて話を進めるの禁止っ」

《ヴェスパローゼ》「ふふつ、確かに…その可能性がなきにしもあらず、ね」

《ベガ》「なきにしもあらず、ではないです。あづみの将来は、大祐に全て託してますから」

《あづみ》「お、お母さんっ」

《リゲル》「だからあづみ以外に有り得ないって話ね」

《あづみ》「り、リゲルく…」

《きさら》「あづ…、きい…」

《あづみ》「…うん…きさらちゃんも、嫌だよね…」

《きさら》「うい」

《ヴェスパローゼ》「こういう時の為に、予め大祐に伝えておいて良かったわ？きさらが大人になったら、1人の『女性』として見て頂戴っ
て」

《ベガ》「大祐がその子をどう見ようと、大祐自身があづみを大好きな事に偽りは生まれません。彼自身、あづみの事を妻にしたいと思ってるでしょうし」

《リゲル》「それに、きさらが悪いとは言わないわ。自分の望みをきさら
らに押し付ける、貴女が悪いのよ」

《ヴェスパローゼ》「ブーメランね」

《リゲル》「…と、兎に角、私達で唾み合ってたって仕方無いじゃない」

《ベガ》「親の意見より子の意見を優先しろ、という事ですか？リゲル」

《リゲル》「ええ」

《ヴェスパローゼ》「急に正論を並べ始めたわね」

《リゲル》「正論なんだから、良いじゃない。………けど、私だって

大祐の事……」

《ベガ》「リゲル？」

《リゲル》「………はっ、な、何でも無いわっ」

《ヴェスパローゼ》「あらあら、自分に素直になれば良いじゃない」

《リゲル》「う、五月蠅いわねっ。余計なお世話よ」

《ナナヤ》「…………あれ、私…放置されてる?」

《森山碧》「安心しろ、俺達も同類だ」

《ナナヤ》「そういう話じゃないもんっ、大祐くんは渡さないからね!」

《森山碧》「…俺に言うなよ!」

《天王寺飛鳥》「確かに二次災害喰らつとるな」

《ソリトウス》「…色々、付いていけない…」

《ヴェスパローゼ》「リゲル、貴女も本当は大祐のー」

《リゲル》「最初はあづみって決まってるもの。私は…次点、かしらね」

《ベガ》「…意外に消極的ですな」

《リゲル》「だ、だって、大祐の1番はあづみじゃない。私の大切な2人が結ばれてくれるのであれば、大歓迎よっ」

《ヴェスパローゼ》「無理しても良い事無いわよ?」

《ベガ》「リゲル、貴女は優しいのですな」

《リゲル》「そんな事…無いわよ…?」

《ヴェスパローゼ》「…それでも、大祐の1番の妻になるのはきさら、だけれど」

《ベガ》「いいえ、あづみです」

《リゲル》「……………」

《あづみ》「…お母さん、リゲル」

《きさら》「ろーぜ…」

《リゲル》「…あづみ、どうかしたの?」

《ベガ》「大祐の事でしようか」

《ヴェスパローゼ》「それなら…ふふっ、きさら…貴女なら大祐の良い妻になれるわよ?」

《きさら》「ろーぜ…あかった」

《ヴェスパローゼ》「あら、意外とやる気満々ね。その意気で…大祐を我が物にしてみなさい?」

《リゲル》「何だか、きさらに対しての試練みたいになってるけれど…

私達がそうはさせないわ」

《ベガ》「ええ、それに、あづみと大祐の愛は崩れませんか」

《あづみ》「お母さん、リゲル…じゃあ…」

《あづみ》《きさら》「私（あづ）ときさらちゃん（きい）の2人だけ、大祐くん（だいすけ）のお嫁さんになる（なゆ）」

《ベガ》《リゲル》《ヴェスパローゼ》「……………っ!？」

《森山碧》「……………んあ？ 凄い事になってきたな…ってか、何時になったら来るんだよ…大祐」

《ナナヤ》「ちよつと！ オチは譲らないからねっ。さつきからずっと放置されてたんだもんっ、少しは見せ場を…」

《森山碧》「いや、知るかよ!？ 早いとこ大祐に頼まれた事を熟せ…」

《ナナヤ》「…あ、そうだった」

《天王寺飛鳥》「この子、天然なんか…？」

《ソリトウス》「さ、さあ……………？」

《ナナヤ》「私だっつて、大祐くんは譲る気無いからねっ」

――

各務原あづみ happy birthday! No.

14

《あづみ》「だって…私もきさらちゃんも、大祐くんの事…だ、大好きなんでもんっ」

《きさら》「だいすけは、きいとあづのものっ」

《ナナヤ》「ちよつと〜!」

《ヴェスパローゼ》「…………ふふっ、これは…予想外ね」

《ベガ》「してやられた、と言うのが…一番でしょうか」

《リゲル》「大祐の事になると、流石のあづみも大胆ね」

《あづみ》「…え、えつと…／＼／＼」

《森山碧》「おうおう、其処の2人がタッグを組んで攻め込めば…大祐は直ぐに落ちるだろうな。誰も勝てないだろ」

《ソリトウス》「…大祐くん…やっぱり、ロリコン説…濃厚……………」

《天王寺飛鳥》「あづみが14歳に、きさらちゃんが7歳。大祐君の恋愛年齢対象が、危ういな…」

《森山碧》「もう、ロリコン認定で良いだろ」

《ベガ》「それは論理的に可笑しいです。大祐は小さな子供達からも好かれるというだけで、大祐が幼女好きとは…」

《ヴェスパローゼ》「ええ、事実、戦斗怜亜が良い例じゃないかしら」

《ナナヤ》「世羅ちゃんは既に、恋愛対象として大祐くんを見てるけど」

《リゲル》「だからこそ、大祐はロリコンなんかでは無いって話でしょう?」

《森山碧》「…まあ」

《天王寺飛鳥》「正論でロリコン説論破されとる」

《ソリトウス》「…確かに…大祐くん、グラマラスな女性も……………近くに沢山居る……………」

《あづみ》「えつと、リゲルとか…お母さん?」

《きさら》「ろーぜー!」

《ヴェスパローゼ》「あらあら」

《リゲル》《ベガ》「…ふえっ!?!」
《森山碧》「随分と珍しい声を上げたな、ははっ」
《天王寺飛鳥》「殺されるで」
《森山碧》「そら勘弁」
《ナナヤ》「…あれ、私って…?」
《ソリトウス》「何方かと言えば…少女…?」
《リゲル》「そうね」
《ナナヤ》「じゃあ大祐くんはロリコンで決定!」
《ベガ》「都合が良いですね」
《ナナヤ》「ふっふくん」
《森山碧》「ドヤ顔されても反応に困るよな」
《きさら》「うい」
《天王寺飛鳥》「ドヤ顔する場面やったんか?」
《ナナヤ》「なんで皆で私を否定するの…!?!」
《ベガ》「今日はあづみの誕生日です。あづみ以外は静かに、出しや張らない様にしましょう」
《ナナヤ》「更にスルーされたよう…」
《リゲル》「…ナナヤが珍しく、悲しんでる」
《森山碧》「こりや、大祐に見せるしか無いな」
《ナナヤ》「…っ!わ、私、悲しんでなんかないもんっ」
《森山碧》「本当か?顔に出てるぞ」
《ナナヤ》「…ふんっ」
《森山碧》「なんで拗ねるのお…!?!」
《天王寺飛鳥》「…:…:な、なあ…:ナナヤちゃんって」
《ソリトウス》「…:…:案外…:…:健気…:?!」
《天王寺飛鳥》「せやな…」
《ヴェスパローゼ》「好意を抱いている異性との関係を、ずっと否定されているのよ?悲しむのも当たり前じゃないかしら。向ける愛が深ければ尚更、ね」
《リゲル》「…:…:でも、今日はあづみの誕生日。ナナヤだけじゃなく、私達も自重しましょ?」

《あづみ》「そ、そんな…私は大丈夫、だよ…？」

《天王寺飛鳥》「なら僕は…何であんなに否定されてもうたんや…」

《ソリトウス》「あ、飛鳥くんっ…！…！…！私が…！…！その…！…！居るよ…？」

《きさら》「うゆ？」

《ヴェスパローゼ》「どうかしたのかしら、きさら？」

《天王寺飛鳥》「ソリトウスさん、天使やく…！此処に天使が居るわく…」

《森山碧》「おいおい、男がふらふらしてるとか、情けないぞ」

《リゲル》「本当ね」

《ベガ》「大祐は疲れた時も、私達には頼りませんし甘えませんよ」

《あづみ》「えっ…？」

《ベガ》《リゲル》「…えっ？」

《森山碧》「おっと？此処に来てまさかの展開か!？」

《ベガ》「静かにして下さい」

《森山碧》「…さーせん」

《リゲル》「あ、あづみ…？今の「えっ」って？」

《ナナヤ》「えっ？だって大祐くん、本当に疲れた日は…確か、あづみ

ちゃんに甘えに行くよ？」

《あづみ》「そ、その…甘えに来るってよりは、悩み相談…とか…」

《ナナヤ》「あづみちゃんの声を…むぐむぐ…聞いて、んくっ…癒され

たいって、前に言ってた」

《リゲル》「…ナナヤ、カステラを食べるのか喋るのか、何方かにしな

さい」

《ナナヤ》「だってこのカステラ、美味しいんだもん」

《ソリトウス》「…！そ、それ、何処から…持って来たの…？」

《ナナヤ》「其処にあった貯蔵庫」

《森山碧》「飛鳥くん、いい加減起きましようねー」

《天王寺飛鳥》「嫌や」

《森山碧》「チツ…此奴、もう駄目やつ…」

《ソリトウス》「…うう…！…！後で世羅ちゃんに…！怒られる…」

《天王寺飛鳥》「人を駄目扱いすんのは、駄目なんやで？」

《森山碧》「子供か」

《ナナヤ》「?…むぐむぐ…おいしっ♪」

《ヴェスパローゼ》「…ねえ…ベガ、少し良いかしら」

《ベガ》「どうかしました? 貴女からとは、珍しいですね」

《ヴェスパローゼ》「それは置いて。…あづみやリゲルに、性の話を教えるだのなんだの。そんな事を考えていたの?」

《ベガ》「はい。あづみは兎も角、リゲルも知らずでは後々が恐ろしいので。バトルドレスの機能、データベースを参照すれば、性の事なんて色々載ってる筈ですが…」

《ヴェスパローゼ》「そう…成る程ね。無知な娘達に彼方の世界を教えるのは、結構気が引けるでしょう? 細かい所は、大祐が教えてくれるだろうと信じてても」

《ベガ》「だとしても、何れは必ず頭で理解する必要が有ります」

《ヴェスパローゼ》「…ふふっ、そう。それなら早く済ませてしまいたいさかい? もう直ぐ大祐も来る頃合い、でしょう?」

《ベガ》「…! そうですね。気にはしていましたが…まだ余裕があると思っただけかりました。…であれば、少しばかり三人で席を外します。後は貴女が場を纏めて下さい。…任せましたよ、ヴェスパローゼ」

《ヴェスパローゼ》「言われなくても、その積もりよ?」

《ベガ》「頼もしい限りです」

《ヴェスパローゼ》「此処から出て、行き当たりにも有る部屋。其処が丁度良いわ。…つて、ソリトウスが」

《きさら》「そいとす、やさしい」

《ベガ》「…ふふっ。そうですね。ソリトウスさんにも…ええ、ヴェスパローゼにも感謝します」

《ナナヤ》「なにになにく、何の話?」

《ベガ》「いえ、今から私とあづみ、リゲルの三人で席を外す。そんな話です」

《ナナヤ》「ふくん…:…まっ、私は此処に居た方が面白そうだから、ちよっかい掛けるのはやめとこうかなっ」

《森山碧》「俺がちよっかい掛けたるか」
《ベガ》「…あづみ、リゲル。少しばかり部屋を変えますよ。又此処に戻って来るので、話の内容は部屋を変えてから伝えます」
《あづみ》「は、はいっ、お母さん」
《リゲル》「…？ええ」
《天王寺飛鳥》「女性だけで集まる大事な話に、ちよっかいはアカンて」
《森山碧》「ああ」
《ソリトウス》「碧くんも…：…本気じゃ…無いと思う…：…」
《ヴェスパローゼ》「本気で言われても困るだけね」
《きさら》「ゆうえん、じっこお？」
《ナナヤ》「大祐くんが良く言ってる」
《ヴェスパローゼ》「軽く言う割には、言葉の意味が重いわ」
《ナナヤ》「うん…：…けど、大祐くんにとっては、それが丁度良いんじゃないかな」
《きさら》「だいすけ、せきにん、とゆ？」
《ヴェスパローゼ》「きさらもきさらで危なっかしいわね」
《きさら》「うゆ？」
《ベガ》「…：…さて…：…では、ソリトウスさん。有難く部屋をお借りします」
《ソリトウス》「…：…ど、どうぞ…：…！」
《ベガ》「あづみ、リゲル。移動しましょう。其処まで長話にはなりません。内容は濃い、かもしれないませんが…：…」
《あづみ》「ちゃんと…：…聞かなきゃっ」
《リゲル》「あづみが意気込む位の話…：…ね。確かに興味有るわ」
《ベガ》「話の冒頭で直ぐに分かります。どんな内容なのか、大切な話ですからね？」
《あづみ》「リゲル、頑張ろ？」
《リゲル》「何をどう頑張れば良いのか…：…分からないけれど。あづみがそう言うのであれば、頑張らせて頂くわ」
《ナナヤ》「んじゃ、いつてらっしやくい♪」
《ヴェスパローゼ》「リゲル、ショートして帰って来そうね」

|
|
|

《リゲル》「どうして部屋を変える必要があったのかしら？」

《ベガ》「そう言った話だから、です。公共の場で話せる様な内容ではないですから」

《リゲル》「ふーん…。あづみはもう分かった？」

《あづみ》「私は…お母さんと、色々話してたから。その時一緒に聞いたよ。」

《ベガ》「詳細は未だに、ですけど」

《リゲル》「丸で『この期に』って感じね。大祐と関わりが有りそう」

《あづみ》「寧ろ、大祐くんとか…」

《リゲル》「？」

《あづみ》「う、ううん、何でも無いよ？」

《リゲル》「意味有りげな切り方ね。あづみのそれは、絶対に何か隠してる証拠よ？」

《あづみ》「私、何も知らない…よく…？」

《リゲル》「…あづみって、嘔吐くの、あまり上手く無いわよね」

《あづみ》「うう…」

《ベガ》「さあさあ、兎に角です。お話は此れからですよ。もう着きましたから。この部屋に入ったら、早速始めたいと思います。一応覚悟を決めておいて下さい」

《リゲル》「…え？何、そんなに重い話なの…？」

《あづみ》「り、リゲル、心の準備…しないとね」

《リゲル》「…何だか怖くなって来たわ」

《ベガ》「では、行きますよ」

《リゲル》「躊躇無いわね」

【ベガが扉を開ける音】

《ベガ》「何も、過度に心配する必要は無いですよ。軽い気持ちで聞き、しつかりと頭に入れておけばー」

《リゲル》「…つと…、ベガ、急に止まらないで…って、ベガ…？」
《あづみ》「お母さん？どうかしたのー」

《ベガ》「……………ふふっ、いえ……………タイミングが少し遅かったです。けれど、これで私が教える事は無くなってしまいましたね」

《リゲル》「何を言ってる…、っ…！」

《ベガ》「ええ…、あづみ。貴女の大好きなー」

《あづみ》「くっくっ!!」

《??》「…………おっ、と」

《リゲル》「…ま、そりやそうなるわよね？」

《ベガ》「私に疑問系でぶつけないで下さい。…………ですが、こうなりますよね」

《??》「2人共、一見和んでる風に見えますけど…見せ物じゃ有りませんからね」

《ベガ》「貴方が此処まで、焦らす様な事をしたのがいけないのですよ？…あづみの誕生日なんですから、一番乗りで祝って貰わないと…困ります。あづみの夫になりたいので有れば尚更です、大祐」

《九条大祐》「…ご最もな意見、感謝します。確かに今回の件は、全面的に俺に非が有りますからね。自覚はしてますし、責任も負うつもりです」

《リゲル》「貴方の胸元に泣き付く少女を見ても、そんな事を言えるのかしら？…ね、責任なんてどうだって良いの。今はあづみだけを見てあげて」

《九条大祐》「リゲルさん…」

《あづみ》「…大祐っ…くん…」

《リゲル》「…ほら、ね？」

《九条大祐》「…熟、俺は男として最低ですね。あづみさんを泣かせてしまうとは」

《ベガ》「又ネガティブな発言をー」

《九条大祐》「責任とか何やらは、やっぱり考えてしまう。だからこそ。最低な俺がするべき事は、あづみさんに最高の時間を過ごして貰う事だ」

《リゲル》「…あら、意外」

《九条大祐》「…今まで散々待たせて、申し訳無い。本当は、誰よりも先に会いたかった。祝いたかった。あづみさんが、この世界に生まれてきてくれた事を。今じゃ何を言っても、言い訳にしか聞こえないかもしれないけど…」

《あづみ》「…ううん…私、気にして…無いよ…?こうして大祐くんと会えたのが…一番嬉しいから…//」

《九条大祐》「じゃあ、今からもっと幸せな時間を、一緒に過ごそうか。」

あづみさんの望む事なら、何でもするから」

《あづみ》「えっ…えっ…」

《九条大祐》「遠慮無く、どうぞ?」

《あづみ》「…じゃ、じゃあ…ぎゅ…って、したい…な」

《リゲル》「して貰いたいの間違い、でしょう?」

《あづみ》「り、リゲルっ」

《九条大祐》「…ん?あづみさんの事、抱きしめて良いのかな?」

《あづみ》「…んと…その…、大祐くんが…良いなら…」

《九条大祐》「やったぜ。…とか、言って良いのかね。まあ、遠慮無くあづみさんを抱かせて貰うけど」

《ベガ》「大祐も危ない言葉を使いますよね」

《あづみ》「…えへへ…幸せ…//」

《リゲル》「あづみが嬉しそうで、何よりじゃないかしら?」

《ベガ》「勿論です」

《九条大祐》「…あれ、そう言えば、手紙…見てくれたかな。へっきーに任せただけど」

《あづみ》「うんっ。ちゃんと、全部見たよ」

《九条大祐》「今思うと、小っ恥ずかしいな」

《あづみ》「私は…嬉しかったよ?」

《九条大祐》「そう言っ貰える此方としても、嬉しい事この上無いね」

《あづみ》「……………大祐くん、その……………」

《九条大祐》「祝いの言葉、俺も早いところ…この口から言い放ちたいところだ。けど、もう少し待ってくれるかな。これ以上待たせるのも癪に触るけど…誕生日プレゼントと一緒に、あづみさんに届けたい」

《あづみ》「誕生日プレゼント…?」

《九条大祐》「喜んでくれると嬉しいけど…不安で仕方がない。こういう事のセンスって、丸で無いから」

《リゲル》（苦笑いしながら…）

《ベガ》（ほんとに不安なのです）

《あづみ》「わ、私は…大祐くんから貰えるプレゼントなら、何でも…」

《九条大祐》「あづみさんの誕生日なんですよ?この世で一番素晴らしい日です。…各務原あづみという、可憐で、何にも勝る可愛さを持つ少女が誕生した日。そんな特別な日に、本人にプレゼントするものから。悩みに悩みまくりましたよ」

《あづみ》「大祐くん…」

《ベガ》（…っ!ま、まさか…誕生日プレゼントが…あづみとの、こ、子供…っ!?)

《九条大祐》「…あ、自分で言ってる、誕生日プレゼントがこれで良かったのか、益々不安になってきました」

《あづみ》「大祐くんって、不安になりやすい…?」

《九条大祐》「あづみさん達の事になると、異常に」

《あづみ》「それ位…」

《九条大祐》「愛してやまないから、ですかね。なんて」

《あづみ》「え、えへへ…」

《九条大祐》「あづみさんのその笑い方、俺、大好きです」

《あづみ》「あうっ…えっ、と…ありがと…」

《九条大祐》「ふふっ、さつきからずっと、顔が真っ赤ですね。何時見ても可愛らしい」

《あづみ》「うう…」

《九条大祐》「…うん。俺も良く、今まで理性で欲望を抑えられたもん

だ」

《あづみ》「…あっ！」

《九条大祐》「どうかしました？」

《あづみ》「大祐くん…敬語」

《九条大祐》「…あつ、懐かしいですね」

《あづみ》《九条大祐》「……………」

《あづみ》「えへへ」

《九条大祐》「あ、はは…」

《あづみ》「大祐くん、笑い方がぎこちないよ…!？」

《九条大祐》「この笑い方に慣れてないもんで」

《あづみ》「そ、そうなの…?……………確かに、そうだね」

《九条大祐》「ほんと、笑顔ですらぎこちないとかどういう。笑い方が

分からないですよね、ははっ」

《あづみ》「顔が笑って無い…」

《九条大祐》「ね？」

《あづみ》「う、うん」

《九条大祐》「…反応に困る様な話題を出して、申し訳無い」

《あづみ》「ふふっ、私は楽しいから大丈夫、だよ?大祐くんとお話す

ると、つい時間を忘れちゃう…」

《九条大祐》「…あづみさん」

《あづみ》「…ん…と、大祐くん…?」

《九条大祐》「ああいや、ずっとあづみさんの事を抱き続けてて良いの

かなって」

《あづみ》「私は…此処が、良い…な…?」

《九条大祐》「ベッドの上に俺が座って、その俺の膝上に、あづみさん

が乗る。なんだこの…言い表せない感情はっ…!」

《あづみ》「…何時も思うの。大祐くんの膝の上、胸元、腕の中、凄く

安心するな…って」

《九条大祐》「あづみさんが側に居て、あづみさんの笑顔を見ていられ

るなら、それで満足です。俺が何かをする事で、あづみさんが笑って

くれるのなら…どんな事だっけますよ」

《あづみ》「大祐くん…ありがと。でも、無理はだめ…だよ?」

《九条大祐》「いえ、無理でも熟してみせますよ。それが俺の幸せですから。…あづみさんが笑顔で居てくれる事が」

《あづみ》「…じゃあ、大祐くんも、私に…あ、甘えて…? 私は何時でも、大祐くんを受け入れるから」

《九条大祐》「それは嬉しい…けど、あづみさんに負担が掛かるなら、話は別。『甘えたい気持ち』というか…こう、癒されたい気持ち…?」

《あづみ》「わ、私に出来る事…なにかないかな…?」

《九条大祐》「俺の側で、笑顔で居てくれる事。…それが俺幸せで有り、同時に癒しにもなる。あづみさんの笑顔は、最高に可愛いですから! …なんて」

《あづみ》「…えつと…私、大祐くんと会ってから…ずっと、照れてばかり…
／／／

《九条大祐》「その照れてる表情のあづみさんも、可愛い事この上ない。…そんな娘が、俺の胸元に顔を埋めているんですよ? 理性が吹き飛んでしまいそうで怖いです」

《あづみ》「…そ、そのまま…襲われちゃうのかな…?」

《九条大祐》「頬どころか顔全体を真っ赤にしてまで、無理しなくても大丈夫だよ。…襲い兼ねないのは間違いないけど」

《あづみ》「大祐くんになら、良い…よ…?」

《九条大祐》「…じゃあ、今直ぐ襲わせて貰いますね」

《あづみ》「ふえっ…?」

――

各務原あづみ happy birthday! No.

16

《あづみ》「大祐くん…今ー」

「九条大祐が、各務原あづみをベッドに優しく倒す音」

《あづみ》「……えっ………あっ…だ、大祐くん……ほんとに…？」

《九条大祐》「………あづみさん…相も変わらず、可愛らしいこと…」

《あづみ》「んっ…」

《九条大祐》「こんな美少女に此処まで誘われて、我慢出来る男性が何処に居ますって？…それに、あづみさんは本気じゃなかったと？」

《あづみ》「ち、違うのっ………ただ、少しびっくりしちゃって……」

《九条大祐》「何時もなら、否定の意を示してましたからね」

《あづみ》「………ね、ねえ…大祐くん…？…大祐くんは、ほんとに私で…良い、の…？」

《九条大祐》「今から何をするのか、多少は理解している様な口調ですね」

《あづみ》「………」

《九条大祐》「…いや、やっぱり…あまり分かってない…？」

《あづみ》「わ、分かっているもんっ。………ちよつと、だけ」

《九条大祐》「まあ、細かい説明は俺がしますよ。順を追って。今は取り敢えず、あづみさんを襲わせて下さい。我慢ならない」

《あづみ》「だ、大祐くん………が、決めて…？」

《九条大祐》「…あづみさん、何処か何時もと違いますね」

《あづみ》「だって…大祐くん、が…急に変わっちゃう…から」

《九条大祐》「………ははっ…。ふう、やっぱり、あづみさんには敵いませんね」

《あづみ》「えっ…？」

《九条大祐》「俺の態度が急に変わっても、俺にその身を捧げる気満々じゃないですか」

《あづみ》「…大祐くん、だから。攻めてくる大祐くんも…えへへ…」

／＼

《九条大祐》「先の攻撃的な態度、謝ります。…その、本当にこの誕生日プレゼントをあげて良いのか、という悩みからつい…」

《あづみ》「凄く…気になる…」

《九条大祐》「今此処で渡しても良いんだけど…ちよつとロマンに欠けるかな」

《あづみ》「じゃあ、皆の前で…？」

《九条大祐》「そういう事になりますかね。へっきー辺りが茶化しに来そうでなりませんけど」

《あづみ》「…あっ」

《九条大祐》「どうしました？」

《あづみ》「…お母さんとリゲル、何時の間にか居なくなってる」

《九条大祐》「い、今更…!？」

《あづみ》「だ、だって…分からなかったんだもん」

《九条大祐》「あの二人が居る目の前で、こんな大胆な事…出来ませんよ」

《あづみ》「…私、幸せ」

《九条大祐》「…？」

《あづみ》「こうして大祐さんと、2人つきりで…その…お互いに凄く近くて…」

《九条大祐》「……………」

《あづみ》「……………」

《九条大祐》「…そうやって口に出して言われると…意識してしまうな」

《あづみ》「す、少し…近いかな…？」

《九条大祐》「あづみさんが望むのであれば、離れますよ？」

《あづみ》「…ううん、嫌…このままが良い…な」

《九条大祐》「俺が覆い被さっている感じになつてますけど…良いのかね」

《あづみ》「えと…うんっ」

《九条大祐》「…言うて、そろそろ皆の集う場所へ移動しなきゃ、ですけど」

《あづみ》「それまで…このままが、良い…」

《九条大祐》「…姫、仰せの通りに」

《あづみ》「…っ!?!ひ、ひ…姫っ…?…って…お姫様の、事…だよね?」

《九条大祐》「ふふっ、なんてね」

《あづみ》「…びっくりしちやったよう…」

《九条大祐》「まあ、俺からすれば強ち間違っではないない」

《あづみ》「ふえっ…」

《九条大祐》（顔を真っ赤にしてあたふたしてる…）

《あづみ》「その…じゃあ、大祐くん…：が、私の王子様…?」

《九条大祐》（更には上目遣いで、目を逸らしながら、大胆な質問）

《あづみ》「…それなら…良いな…：／／／」

《九条大祐》「…ああ、あづみさんが可愛過ぎて死にそうだ」

《あづみ》「え、ええっ…!?!それはだめだよ…」

《九条大祐》「昇天しまいそうな位に、あづみさんが可愛いって事ですよ」

《あづみ》「あう…」

《九条大祐》「…何方かと言うと、あづみさんがショートしてしまいそうな勢いだ」

《あづみ》「大祐くんが、私の事…かわ、可愛いって…沢山…」

《九条大祐》「言うてはなりませんかね?…少なくとも、俺は事実だと思ってますよ」

《あづみ》「うう…：／／／」

《九条大祐》「…：ま、取り敢えず。皆、あづみさんの誕生日を祝いに来てくれてるん…だよね?」

《あづみ》「う、うんっ。お母さんとリゲル、ソリトウスさんに…ヴェスパローゼさんにきさらちゃん。あと、ナナヤちゃんとへっき…：さん?」

《九条大祐》「本名、森山碧」

《あづみ》「えつと…森山碧…と、天王寺飛鳥」

《九条大祐》「おつ…!? 久々にあづみさんの、冷淡な口調を耳にしたね」
《あづみ》「大祐くんと出会う前…リゲルとも、こんな感じだったの」
《九条大祐》「へえ…意外な過去が…まあ、でも何故2人だけフルネーム？」

《あづみ》「…男性を呼ぶの、慣れてない」

《九条大祐》「口調、無理して維持しなくても…」

《あづみ》「大祐くんは…どっちの方が、好き…？」

《九条大祐》「迷わない。何方もだ」

《あづみ》「…！今…」

《九条大祐》「…あ…、申し訳無い…」

《あづみ》「ううん…私も、どっちの大祐くんも…大好きだから…」

《九条大祐》「ん？最後なんて？」

《あづみ》「何でもないもんっ♪」

《九条大祐》「…どんな口調でも可愛いとか、反則だと思ってしまちな」

《あづみ》「…？」

《九条大祐》「いえ、何も言ってますんよ？」

《あづみ》「口元、にやけてる…」

《九条大祐》「…それは置いといて、話を急に戻すけど良いかな」

《あづみ》「あ…うんっ」

《九条大祐》「先の『誕生日の件』、全員が全員…あづみさんを祝う為に来てくれているのであれば、主役がその場に居なきやつまらないでしょうよ？」

《あづみ》「…主役」

《九条大祐》「だから、そろそろ戻ろうか。待たせてしまってるだろうし」

《あづみ》「…あ、えつ、えつと…大祐くん」

《九条大祐》「ん？」

《あづみ》「…我儘、言っても…良いかな…？」

《九条大祐》「ええ、勿論ですよ。今日はあづみさんの誕生日なんですし、どんな要望にも応えます。…誕生日じゃなくても、ですけど」

《あづみ》「えへへっ……ありがとう。あのね、その……あと少しだけ、二人つきりで居たいの……。ほんとに、少しで良いのっ」

《九条大祐》「……了解致しました。いえ、あづみさんが彼方に足を運びたくなったら、お好きにどうぞ。俺の事は気にしないで下さいね」

《あづみ》「やっぱり……大祐くん、優しい」

《九条大祐》「これが素つてものですよ」

《あづみ》「ふふっ、リゲルも大祐くんには、我儘とか……」

《九条大祐》「言つて欲しいものですねぇ……」

《あづみ》「リゲル、私や大祐くんの事になると頑になっちゃうから……もつと、甘えて欲しいな……」

《九条大祐》「まあ……リゲルさんからすれば、情け無い姿は見せられない、とでも思っているのでは」

《あづみ》「甘えるつて、情け無い事なのかな」

《九条大祐》「いえ、全然そんな事有りませんよ。ただ……リゲルさんは恐らくプライドの高い女性ですから。自分に厳しく、相手に厳しく。甘えは許さない、みたいな……」

《あづみ》「でも、私と大祐くんには優しいし……甘えさせてくれる」

《九条大祐》「んく……、其処はやはり、本人にしか分からないのでしようね。甘えさせる対象や、どの程度までが甘えなのか」

《あづみ》「……あのね……こういう時に言うのつて、変かもしれないけど……」

《九条大祐》「どうかしました？」

《あづみ》「うん。甘いもの、食べたいな……つて……えへへ」

《九条大祐》「『甘え』に関して、話していたからでしょうか」

《あづみ》「た、多分っ……」

《九条大祐》「それなら其処に、沢山置いて有りますよ。ほら……」

《あづみ》「えっ……？あつ、ほんと……だ。……けど、この部屋に入った時は、何も無かったよ……？」

《九条大祐》「ん、確かに。誰かが用意して下さったのでは？……飲料に菓子類、主食と言うには少し遠く、それでも胃に溜まりそうな物ばかり」

《あづみ》「…これ、気になる」

《九条大祐》「カレー味の菓子…つて、ふふつ…相変わらずカレーがお好きな様で」

《あづみ》「カレー、の味も好きだけど…温かい物が好き」

《九条大祐》「俺とは逆な様で」

《あづみ》「そうなの…?」

《九条大祐》「ええ。まあ…猫舌故の、とでも言えば説明つきますか。かと言って冷やしてある物を口にすれば、胃に来ます。何分、腹部の耐久性が脆くてですね…」

《あづみ》「た、大変…だね」

《九条大祐》「それでも、食べれるだけマシ、という意見には賛成ですよ」

《あづみ》「……………そう言えば、これ…誰が持って来てくれたんだろう…。お母さん…リゲル…?」

《九条大祐》「有り得ますね。……………ですが、正直1人しか居ないと思います」

《あづみ》「……………??」

《九条大祐》「ああいえ、此方の話です。きっと神様が、あづみさんと一緒にゆっくりしろ、つて言ってくれているんだなと」

《あづみ》「神様……………ナナヤちゃん…?」

《九条大祐》「違うと思います」

《あづみ》「そ、即答…」

《九条大祐》……………「……………」

《あづみ》「……………ふふつ」

《九条大祐》「……………」

《あづみ》「お菓子食べながら、飲み物飲んで…」

《九条大祐》「ええ…他愛の無い話をしながら、2人で笑い合う」

《あづみ》「…ちよつと違うかもしれないけど」

《九条大祐》「?」

《あづみ》「…なんだか…夫婦、みたいだね」

《九条大祐》「なりたいたいものですねー……………」

《あづみ》「……………」

《九条大祐》「……………」

《あづみ》「くくく／＼／＼」

《九条大祐》「何言ってるんだ、俺」

――

《リゲル》「あら？楽しい時間はもう終わり、なのかしら」

《九条大祐》「あづみさんや貴女方と居られるのであれば、楽しい時間というものは…何時になっても終わりませんよ」

《ベガ》「ロマンチスト、ですね」

《九条大祐》「光栄です、ベガさん」

《ヴェスパローゼ》「何時になっても終わらない、変わらないのは、大祐の敬語やさん付けじゃないかしらね」

《きさら》「…？」

《あづみ》「あ、そつか…きさらちゃんは、敬語もさん付けも使われてなかった…ね」

《ベガ》「羨ましい限りです」

《リゲル》「ヴェスパローゼ》《ヴェスパーローゼ》
「……………」

《ベガ》「……………はっ…！ち、違います。羨ましく等…」

《ヴェスパローゼ》「前言撤回の余地は無いわよ、ベガ」

《ナナヤ》「完つ全に大祐くんに落とされてるよね」

《リゲル》「人の事言えないわよね」

《ナナヤ》「ブーメランアタック！」

《あづみ》「…確かに」

《リゲル》「な、あづみまで…」

《九条大祐》「それ程までに俺を好いて下さるとは、有難き幸せ」

《森山碧》「…おいおいキザ野郎さんよ。親友が目の前で恥ずかしい台詞を吐いてるんだぞ？少しは、聞かされてる此方の身にもなろうぜ」

《九条大祐》「聞かなければ、問題無い」

《森山碧》「それがこの俺、碧ルール」

《九条大祐》「何時からライドオンしてたんですかね」

《森山碧》「メタいぞ、大祐」

《天王寺飛鳥》「な、なんの話をしとるんや…?」

《ソリトウス》「…私、知ってる。けど…ノーコメント…」

《九条大祐》「メタ発言なんてしよっちゆう。日常茶飯事みたいなものの、でしよう」

《森山碧》「あのなあ…少しは方向性を決めてからー」

《九条大祐》「あ、ほら。へつきーも。この話の方向性を決めてからって…」

《森山碧》「ちやうわ! いや、合ってるけどな!?! その話じゃねえんだ。発言に問題が大有りなんだよ…!!」

《ルクスリア》「はいはくい♪呼んだ?」

《森山碧》「呼んでねえから…引っ込んでくれ…なあ…? 確かに発言に問題が大有りだけだよ…」

《ソリトウス》「…同じく」

《ルクスリア》「もう! 酷い人達ばかり。…あ、大祐くん♪」

《九条大祐》「Don't Touch Me」

《ルクスリア》「…最早【触れるな】の領域にまで…うう」

《天王寺飛鳥》「皆、ルクスリアさんが可哀想やん。もつと仲良くしよ
うや〜」

《ルクスリア》「良いもんっ。大祐くん、強がってるだけだからっ」

《九条大祐》「何でそうなー」

《ルクスリア》「んふふ♪大祐くん、勿論覚えてるよね? 今日の夜中、2人だけで会おうねって。密室であんな事やこんな事、しようねって。約束したの覚えてるからねっ。まさか忘れたとか言わせないよ〜? ちゃんと、この耳で聞いて、この口で約束したんだから。じゃあ、大祐くんの用事が終わったら、貴方のお部屋にお邪魔するからね。ちゃんと教えてね〜。ばいばい♪」

《九条大祐》「…はい!?!」

《森山碧》「…マジか、大祐。お前…遂に色欲の七大罪にまで手を出したのか…」

《九条大祐》「こら」

《ソリトウス》「…ルクスリア、さぞ満足…あの娘の事…宜しく、

お願い…」

《九条大祐》「こらっ?!?ソリトウスさんまで…乗らんで良いですって」

《リゲル》「大祐も…大変ね」

《あづみ》「う、うん…」

《九条大祐》「ルクスリアさんはそれっぽい事言って…周りを騙すのがお上手なんですよ、本当…」

《森山碧》「相馬氏涙目」

《ヴェスパローゼ》「意外と『ラッキー』程度にしか、思っただけの気がしなくもないわね?」

《ベガ》「他人の恋愛事情に、首を突っ込みたくは有りません。面倒です」

《リゲル》「…大祐が一番、面倒だと思ってるわよ」

《ヴェスパローゼ》「そうね…、私達全員に気を配って、且つ構ってさん達を相手して。疲れ知らずなのかしら」

《九条大祐》「疲れ知らず…というのは間違いですね。実際、精神的な面はあづみさんに頼らせて貰ってますし」

《あづみ》「えへへ…私、大祐くんから頼られてる…?」

《九条大祐》「ええ、相当」

《あづみ》「やった…♪」

《リゲル》「もう。あづみだけでなく、私達全員を頼って欲しいわね」

《九条大祐》「その前に…リゲルさん。貴女は少しでも周りに甘えた方が良いですよ。でないと、リゲルさんの疲労した心身共に、癒しが…」

……………」

《リゲル》「…まさか大祐から心配される、なんて」

《九条大祐》「何時でも何処でも、心配はしてますよ」

《リゲル》「く／＼／／」

《ナナヤ》「……ん! そうだ!」

《天王寺飛鳥》「なんや、どないしたん?」

《ナナヤ》「んっふふ…あづみちゃんが、大祐くんの心を癒しているなら。私は大祐くんの『か、ら、だ』を癒してあげたいなく、って♪」

《九条大祐》「…へえ。有難い話だね。確かに相当ガタが来てるから、

純粹に助かる」

《森山碧》《ベガ》《ヴェスパローゼ》「!?!?!」

《ソリトウス》「これは……意外な、展開……」

《天王寺飛鳥》「大祐君、意味分かつとるんか……?」

《あづみ》《リゲル》《きさら》「:??」

《ナナヤ》「:っ!だ、大祐くん:ほんとに良いのっ?」

《九条大祐》「ん?ああ。最近、少し溜まって来てるからな……:ところでー」

《ナナヤ》「:溜まって来てるって:大祐くん、やっぱり:大胆だね:♪」

《九条大祐》「はい?溜まってるのは確かだけー待て、ナナヤ。勘違いはよくない……」

《ナナヤ》「それだけ、私に発散したいって事、だよね:ふふつ……:もし出来ちゃったら、ちゃんと責任取ってよねっ。大祐くん♪」

《九条大祐》「:ナナヤ、一体何の話をしている。俺が話していたのは『疲労が溜まっていて』という意味での、溜まっている、だ。主語が無かった俺が悪いが:ナナヤのお腹に子供を作るとはー」

《リゲル》「ちよ、ちよと待って?どうしてこんな話になったのか、経緯が知りたいのだけれど……」

《森山碧》「:なあ、大祐」

《九条大祐》「ん?へっきーがナナヤの相手してくれるの?」

《森山碧》「待て待て待て、何でそうなった。流星の俺でも、神様2人からの過度な恩恵は耐えられん。寧ろ俺が神になりそうだわ」

《ベガ》「更に話が脱線しますよ」

《森山碧》「:あ、俺の所為?」

《天王寺飛鳥》「結構、理不尽やな」

《森山碧》「まあ良いけどよ……:話を戻そうか。金髪さんやあつづみくんー」

「青い閃光と共に、森山碧の頬から血が流れる」

《森山碧》「:……おい!完全に殺す気だっただろ!」

《リゲル》「次は無いと言ったわ?」

《九条大祐》「へっきー…リゲルさんに何したのさ」

《リゲル》「…危うく、この男に襲われるところだったのよ」

《森山碧》「言葉を選べ言葉を！大祐はその刀を下に下ろせ!!」

《九条大祐》「問答無用！」

《ヴェスパローゼ》「……色々と、大変な事になってるわね」

《きさら》「きい、たのしい」

《ヴェスパローゼ》「…そう。じゃあ…きさら、お願い。大祐を止めて来て貰えるかしら」

《きさら》「きい、が…だいすけ、とめゆ！」

《ベガ》「…あづみ、大好きな人が、ストレスを発散している姿は…」

《あづみ》「…っ。私、頑張るっ…！」

《ベガ》「………全くもって、私は貴女の親としてあづみを尊敬します」

《ナナヤ》「ねく、大祐くん。私、大祐くんのお手伝いしたよ？だから、報酬が欲しいなって」

《九条大祐》「待ってて、ナナヤ。へっきーに洗いざらい話して貰わんと気が済まん」

《森山碧》「少し落ち着けて！又ソリトウスの部屋が壊れーって、然りげ無く狙撃するんじゃないよ！ったく、十字砲火かよ…!!」

《天王寺飛鳥》「………ぷはっ！ソリトウスさん、もう一杯貰える？」

《森山碧》「おいこら！のんびりしてないで止めに入っつと…危ねえ…！」

《ソリトウス》「…うんっ………はい…、どうぞ…」

《天王寺飛鳥》「つと、ありがとさん。………こうして、騒がしい場所からは一步身を引いて傍観するのが一番や。全く…大祐君が来たら来たで、女性陣のやる気が格段に違う。流石、ハーレムの上を行くハーレム。レベルが違うなあ」

《ソリトウス》「………飛鳥くん、人の事…言えない……」

《天王寺飛鳥》「なんか…いうたか？」

《ソリトウス》「う…うん………何も……」

《天王寺飛鳥》「…言うて、ソリトウスさんにも魅力が沢山有る。さっ

きからずつと楽しんでる、彼女達に負けない位に。ソリトウスさんは……良い嫁さんになる、というのが目に見えて分かるわ〜」

《ソリトウス》「……えっ……と……き、急に……そんな……／＼／＼」

《天王寺飛鳥》「フイエリテはんも、もう少し『お淑やか』って感じが欲しいって言うか……何時も怒られてばかりやから、偶には優しくして貰いたいって言うか……」

《ソリトウス》「……飛鳥くんは、女心……察せないタイプ……」

《天王寺飛鳥》「？」

《森山碧》「……どわっせい!? 好い加減、平静を取り戻してくれって……ちょ、おまつ!」

《九条大祐》「リゲルさんの言葉に、偽りは無い。間違ってるなら、否定して!」

《森山碧》「否定も肯定も、曖昧なラインなんだって!」

《九条大祐》「なら、へっきーに当たるまで俺はライフルを撃つ事をやめない!」

《森山碧》「狡賢いなっ……この部屋を傷付けない為に、態々『フィールド』を発動させるとは……後々の謝罪会見から逃げる気だろっ……」

《九条大祐》「……まあ、へっきーがリゲルさんを襲っただなんて。嘘に決まっているだろう。恐らく、リゲルさんの言葉の意味が紛らわしかった、というのが正解だ!」

《九条大祐》「だが……何があるうと、俺は彼女達の所為だとは認め……?」

《きさら》「だいすけ、おちついて……? きい、やつ」

《九条大祐》「……きさらちゃん」

ぎゅっ【九条大祐が抱き締められる】

《九条大祐》「っ!」

《ヴェスパローゼ》「捕まえたわ。これで、動きたくても動けない、でしよう?」

《九条大祐》「……ええ、動く気、もう更々無いですよ」

《ヴェスパローゼ》「話し合いも大切だって、教えてくれたのは貴方の筈よ。大祐。あまり私達の事で熱くなるのは、頂けないわ」

《九条大祐》「…ですね。申し訳御座いません」

《ヴェスパローゼ》「そしてリゲル、貴女も紛らわしい事を口にするのは駄目。でないと、今回みたいに大祐が暴走してしまうわ？」

《リゲル》「…そうね」

《ヴェスパローゼ》「最後に森山碧」

《森山碧》「ぜーっ…はーっ…：…：…、は、はい、なんすか…」

《ヴェスパローゼ》「大祐の色々、ぶつける相手になってくれて感謝するわ」

《森山碧》「結局そんな感じですか、知ってましたよ…!!」

《ベガ》「…やはり、多少のカリスマ性が有れば違いますね」

《ヴェスパローゼ》「少しでも、状況を把握、理解出来ていれば直ぐに収める事が出来るのだけれど。大祐が得意な分野の筈…でも、私達の事になると、手が付けられなくなるわね」

《リゲル》「其れ位、想ってくれている、という事よね…」

《ヴェスパローゼ》「ふふっ…ほら、今じゃ膝の上いきさらを乗せて、2人で楽しくお喋りタイムね」

《ベガ》「背中にナナヤが引っ付いてますけどね」

《ヴェスパローゼ》「鎮圧出来て、何よりだわ？」

――

《リゲル》「あれ…あづみ…？」

《あづみ》「リゲル？私、此処に居るよ？」

《リゲル》「…周りと一緒に騒ぎ過ぎて、あづみの存在に気が付かないなんて…：…：…うう…」

《あづみ》「そ、そんなに落ち込まなくても…」

《ナナヤ》「ねくねく、大祐くん、ご褒美はー？」

《九条大祐》「ん？何の話？」

《ナナヤ》「もうっ、そうやってはぐらかそうとしても、駄目なんだからねっ」

《九条大祐》「…悪かった。そう…：…だな。何が良いか、とは聞けないのが残念だ」

《ナナヤ》「うく…：…私に選択権は無いの？」

《九条大祐》「…とはいえ、ナナヤの御蔭で此処に来れた訳だからなあ」

《ナナヤ》「そうだよっ。だからその分の、報酬！」

《森山碧》「…ん？ナナヤが大祐に何かしら施して、お前は此処に来れたって話か？」

《きさら》「ろーぜときいも、がんばった」

《森山碧》「益々話が分からん」

《九条大祐》「あく…：…まあ、簡潔に説明すると、俺が眠れなかった。その一言に尽きる、かな」

《あづみ》「眠れ…：…なかった…？」

《ナナヤ》「…：…：…：…大祐くんってば、あづみちゃんの誕生日を祝うのを心待ちにし過ぎて、ずっと興奮状態。御蔭で眠れなかった…：…ね、大祐くん」

《森山碧》「マジかよ…」

《リゲル》「大祐、相変わらずね」

《ベガ》「それ位あづみが愛されている、という事でしょう。親として、

私は嬉しく思いますよ」

《ソリトウス》「……皆で集まって…お話タイム…? 私も…混ざって良い…?」

《天王寺飛鳥》「ほな、僕も混ぜて貰うで」

《ヴェスパローゼ》「…誰も意図せず、段々と集まってしまうものね」

《九条大祐》「それで、良いのでは無いでしょうか」

《きさら》「こおこ…しゅき…♪」

《九条大祐》「ふふっ。きさらちゃんは、安定の位置だね」

《きさら》「ういつ」

《ヴェスパローゼ》「大祐の腕に包まれて…ほんと、羨ましいわね。きさらっ。」

《きさら》「ろーぜも、くゆ?」

《ナナヤ》「…話を戻そうよく…じゃなくて、戻すからねっ」

《森山碧》「惚気を聞かされ一向に進まん」

《九条大祐》「俺が寝れない、ナナヤがこの部屋に干渉、意識を無理矢理此方に飛ばす。終わり」

《ナナヤ》「…説明が簡素過ぎるっ…!」

《九条大祐》「ま、強制的に眠りに就いた、というイメージか」

《ナナヤ》「確かに…間違っはいいないけど…」

《森山碧》「神様は何でも有りなんだな」

《ソリトウス》(遂に…:神様にまで干渉されちゃったんだ…:…:…この部屋…:…)

《ベガ》「ソリトウスさんが、げんなりされてますよ」

《リゲル》「又一つ、問題が増えたからじゃないかしら」

《ソリトウス》「カステラと言い…:…どうしよう…」

《天王寺飛鳥》「…た、大変やな」

《ナナヤ》「それは置いといて…」

《天王寺飛鳥》「置いとくんかいな…!」

《ナナヤ》「うん。…だって、大祐くんからの報酬が今一番だもん」

《九条大祐》(何故ナナヤは其処まで俺に拘るのだろうか…)

《森山碧》(…とか何とか、大祐なら絶対思っているだろうな。女心の

分からん奴め。人の事言えないけどな！」

《あづみ》「…あつ、大祐くん…その、誕生日プレゼントの話って…今聞いても、良い…かな」

《きさら》「きいもがんばった…だいすけ、ほおしいう…」

《ヴェスパローゼ》「きさら…少しの間、待ってあげましょ。大丈夫、そんな顔しなくても、大祐はきつとくれるわ？」

《きさら》「…うい！」

《ナナヤ》「…えつ、私…又放置コースの流れ…？」

《九条大祐》「誰も忘れてたりしてないから、悪い…少し待っててくれる…？」

《ナナヤ》「う、うん…」

《森山碧》「…んあ？俺も貢献した気がしないでも無いが…此処は敢えてノーコメントだな。面倒ごとに発展しかねない…」

《天王寺飛鳥》「空気を読むのが上手なんやな」

《森山碧》「俺自身、空気だからな！」

《ソリトウス》「…ミスト…」

《森山碧》「人を霧扱にするんじゃない…」

《リゲル》「存在感が強い割には空気のように影が薄いから、濃くても空気に変わりにない霧なんじゃないかしら？」

《森山碧》「…ははん？」

《ベガ》「今はそんな事、放っておきましょう。私達があづみと大祐から一步離れただけで、2人が良い雰囲気になりますから」

《リゲル》「私達が距離を置いてから一瞬よ…？凄いわよね…何時も2人だけだったら、お互い依存になっちゃまわらないか…心配だわ」

《ベガ》「あづみとリゲルにも言える事ですよ」

《リゲル》「わ、私は……あづみが大切だから、絶対に守ってあげたいってだけで…」

《ベガ》「私も、その気持ちはリゲルに負けず劣らずと自負します」

《ヴェスパローゼ》「…それに、あの2人は依存を超えた先の愛を育もうとしている途中よ？」

《ベガ》「2人共、お互いに依存していないと言えば嘘になります。…」

ですが、私達だって少なからず、あづみや大祐に依存している節は無きにしても非ずです」

《ヴェスパローゼ》「私ときさらも、似た様な物ね」

《きさら》「ろーぜ、しいき！」

《ヴェスパローゼ》「ふふっ、ありがと、私の可愛いきさら」

《ソリトウス》「……………依存……………かあ……………」

《ベガ》「…難しいところですね」

《天王寺飛鳥》「……………なあ、そんな真面目な話をしているとこ悪いんやけど…」

《森山碧》「ああ、大祐が遂に誕生日プレゼントを渡しそうだぞ」

《リゲル》「…！大祐、あづみに何をプレゼントするのかしら…？」

《ベガ》「楽しみですね…」

《ヴェスパローゼ》「ベガが柄にも無く、ワクワクそわそわしてるわ？」

《森山碧》「母親さん、意外なところで可愛いよな」

《リゲル》《ソリトウス》「!?!」

《ベガ》「かつ、かわっ…!?!」

《ヴェスパローゼ》「あらあら」

《天王寺飛鳥》「おお！へっきーはん、大胆やな」

《森山碧》「んあ？俺は素直な感想を述べただけだぞ。美人な女性がワクワクそわそわとか…男として、反応しない訳無いだろ」

《ベガ》「……………」

《天王寺飛鳥》「せ、せやなく…確かにベガさんは、かなりのべっぴんさんやからな。そんな女性に可愛い姿を見せられたら、もうあかんで」

《ベガ》「…か、かわいいというのは……………」

《リゲル》「べ、ベガが…大祐以外の男から可愛いって言われて、反応してる…!?!」

《ソリトウス》「……………実はベガさん……………ちよろイン…？」

《森山碧》「あ…それは違うと思うぞ」

《ソリトウス》「え……………？」

《ヴェスパローゼ》「森山碧、貴方…意外と察しが良いのね」

《森山碧》「そらどうも」

《リゲル》「…?どういう意味…?」

《ベガ》「／／／」

《ヴェスパローゼ》「…実は、少し前の話。何時もの様に、ベガが大祐の寝室に忍び込んだの」

《ベガ》「し、忍び込んではいません…!ただ…少し、お邪魔しただけで…」

《森山碧》「それ、何時からだ?」

《ヴェスパローゼ》「去年から、ね」

《天王寺飛鳥》「なんやなんや、大祐くんの寝顔でも見たかったんかいな」

《ナナヤ》「…仕方無いね…大祐くん、寝る時は何時も一人で部屋に誰も入れないもん…ふあ…」

《リゲル》「二応、特別な日は別よ?あづみが何度か一緒に寝ている様子だから」

《ソリトウス》「…という事は…?」

《きさら》「きいも、たまいしのびこんでゆっ」

《ヴェスパローゼ》「…ま、その時の話ね」

《森山碧》「あー、あー、聞きたく無い聞きたく無い。これ以上の惚気は勘弁だ」

《天王寺飛鳥》「ええやないか。こんな高貴な女性に、どんな秘密が有るのか…気になるやろ?」

《ソリトウス》「…大祐くんを夜這いしに…」

《ナナヤ》「…へっ…!」

《ヴェスパローゼ》「違うわ」

《ナナヤ》「良かった…」

《ベガ》「貴女に先を越される位なら…大祐には悪いですが、恥ずかしくてもさせて頂きます」

《ナナヤ》「ふくん…じゃあ、私が一番乗りでも文句は言わせないからねっ」

《天王寺飛鳥》「ちよつと待ったー!話がずれるから、言い争いは後に

してくれへんか…?」

《森山碧》「賛成だ」

《ヴェスパローゼ》「…で、強制的に戻すわよ。その時大祐が起きてしまつて…」

《森山碧》「戸惑つてる母親さんを見て、大祐が『可愛い』の一言を言い放ち、落とされたと」

《ヴェスパローゼ》「洞察力は頭一つ抜けてるわね。その通りよ」

《森山碧》「ちよつと待て、誰情報だ、それ」

《ヴェスパローゼ》「……………さあ? 私には分からないわ」

《天王寺飛鳥》「今の間、凄く怪しかったで」

《リゲル》「でも…ベガ、よ? 幾ら大祐からの一言だとしても…流石に他の男性から言われて、それを思い出して欲情する様な女性じゃ…」

《ベガ》「リゲル、言葉に気を付けて下さい。私は…」

《ヴェスパローゼ》「強ち間違つてはいないと思うわ?」

《森山碧》「激しく同意だ」

《ソリトウス》「…大祐くん、こんな美しい女性から……………欲情される事……………気付いてないんだ……………」

《きさら》「よくじお?」

《ナナヤ》「……………ZZZZ」

《ベガ》「わ、私はつ…その……………大祐には、あづみにとって相応しい旦那になつて貰いたくて、ですね……………」

《天王寺飛鳥》「な、なんや…話が変わったで」

《リゲル》「…?だ、大丈夫? ベガ」

《森山碧》「おいおい、顔真っ赤になつてんぞ」

《ヴェスパローゼ》「ふふつ、ベガも『乙女』の1人ね」

《ベガ》「私を乙女と言うのはやめて下さいっ…!」

《ヴェスパローゼ》「……………あら」

《天王寺飛鳥》「…!さ、流石に気に障つたんちゃうか…」

《ベガ》「……………っ、急に声を上げてしまうなんて……………」

《リゲル》「珍しい事も…有るものね」

《ベガ》「情け無い…ですね。こんな事で平常心を失つて…大祐絡みの

話になると、何時も何時もです…」

《ソリトウス》「……………その位、大祐くんを……………意識してるって事……………」

《天王寺飛鳥》「せや、ベガさんは想いが純粹なだけや」

《森山碧》「どうかよ…母親さんまで色々我慢してんじやないのか？
…あんまりだと、ストレスで肌に影響が…」

《リゲル》「そう言う話をしてる訳ではないでしょう…」

《ベガ》「…ふふっ、確かに…女性は肌が大切ですからね」

《ヴェスパローゼ》「何と無く、分からない気がしなくもないわ」

《森山碧》「だろ？だから、悩み事でも何でも、全部大祐にぶつけちまえば良いんだ。難しい事なんて考えなくて良い。それで『どうしよう』の無限ループに入ってしまうよりは、言ってスッキリした方が楽になる。…あのベガさんからのお話だ。大祐なら、どんな悩みだろうが不安だろうが、願いだろうが聞いてくれるだろうよ」

《リゲル》「…極稀に、良い事言うのね」

《森山碧》「あまりこういう事を口にしたくないだけだ」

《ソリトウス》「……………飛鳥くん…大祐くん…碧くん……………
凄い派閥が出来そう……………」

《森山碧》「既に出来上がってるだろ」

《天王寺飛鳥》「…えっ、そうなんか!?!」

《リゲル》「私やあづみは、当然大祐のに加わるわよ？」

《ヴェスパローゼ》「きさらは、私もね」

《きさら》「ういっ……………はあっ…?」

《ナナヤ》「……………わたし……………も……………んにやむにや……………」

《森山碧》「知ってるから、安心しろ」

《天王寺飛鳥》「確定事項からは変わらない、という事やな」

《ソリトウス》「……………ブレない精神……………」

《ベガ》「……………悩み…大祐、聞いてくれるでしょうか……………?」

《リゲル》「もう…そんなに抱え込んでどうしたの?らしくないわよ…
?」

《ベガ》「い、いえ…大祐は…私の事、どう思っているのかと…」

《森山碧》「少なくとも恋愛対象じゃあ無いだろ」

《ヴェスパローゼ》「理由付きで、ね」

《ベガ》「…理由…？」

《天王寺飛鳥》「……………そらそうやな。大好きな女の子の『母親』やで？ 幾ら大祐君でも、其処は弁えてるやろ」

《森山碧》「ふとしただけで、好きな女の子の母親に『可愛い』とか……どんな精神だ」

《ヴェスパローゼ》「少なからず、大祐もベガに対して気が有るといのは確かだね」

《ベガ》「ほ、本当でしょう…？」

《リゲル》「問題はベガが、大祐をどう想っているのか、よ？」

《ベガ》「私…は…」

《ソリトウス》「素直が……一番……………」

《ベガ》「…！わ、私は……………大祐の事、大祐に対して……………好意を……………」

《天王寺飛鳥》「…っ、す、ストップ！み、皆！あれ見いや!!」

《森山碧》「おいおいおい天王寺氏、ちよつと待てよ。母親さんが言葉を振り絞って、自分に素直になれる直前でそれはなーは？」

《ヴェスパローゼ》「……………先を越すだの何だの、馬鹿馬鹿しくならんのかしら…？」

《ベガ》「…ヴェスパローゼ、それは私に言っているのでしょうか。……………ですが、確かにそうですね。大祐は…何時も然りげ無く、大胆で

す」

《ソリトウス》「あれが……………あづみちゃんへの……………誕生日プレゼント……………」

《きさら》「きあきあしてゆ…」

《ナナヤ》「……………んく…？」

《リゲル》「…大祐…あづみにとって、一番の誕生日プレゼントね。……………年齢的には、まだ早いかもだけれど」

《ベガ》「ふふっ…2人なら、きつと……………いえ、絶対に、大丈夫でしょ

う
|
|
|

《九条大祐》「彼方は随分と騒がしいこと」

《あづみ》「お母さんの事…話してゐるのかな…？」

《九条大祐》「耳から入ってくる情報からすれば、恐らくは」

《あづみ》「みんな、楽しそう」

《九条大祐》「あづみさんも混ざりに行きます？」

《あづみ》「う、ううん…大祐くんからのプレゼントの方が、その

……」

《九条大祐》「大事、とでも言ってくれるのです？」

《あづみ》（無言の頷き）

《九条大祐》「…有難ね。俺なんかの渡すプレゼントでも良ければ、受け取って貰えるかな…？」

《あづみ》「だ、大祐くんからのが…一番、嬉しい…！」

《九条大祐》「わお、相変わらず…嬉しい事を言ってくれますね」

《あづみ》「えへへ…あつ、勿論リゲルとお母さんから貰うプレゼントも、嬉しいよ…？」

《九条大祐》「それは俺も同感します」

《あづみ》「プレゼントの中身が、凄いいけど…」

《九条大祐》「ですがまあ…あづみさんという途轍も無く可愛い美少女、リゲルさんにベガさんという麗しく艶やかな、美しい女性。3人から貰えるプレゼントなら、誰でも…どんな物でも嬉しいですし、貰った側は舞い上がりますよ」

《あづみ》「でも…そう考えてみるとね、大祐くんって凄い人だなんて思うの」

《九条大祐》「何故、故？」

《あづみ》「だって、リゲルからお母さ…：…ヴェスパローゼさんとか、ナナヤちゃんとか…皆んなが、大祐くんを…す、好きって言うんだよ…？それに…大祐くんは、この世界を変えた人。そんな人と、

私は……………えと……………んと、一緒に…居られるんだって…」

《九条大祐》「一緒に…居られる。俺は貴女方の様な沢山の魅力を持ち得ている女性と一緒に居られて、というか…関係を築けて、もう一生死にたくないと思える様になりましたよ」

《あづみ》「大祐くん…それって、どういう…?」

《九条大祐》「ん?…んく…まあ、あづみさん達と出会える前までは、何時死んでも可笑しく無い。だからこそ、自分の好きな様に生きようって考えだったんです。けど…ね。貴女方と出会って、こういう関係になってからは…絶対に死なない。何が有っても死ぬものかって、考えに変わったんです」

《あづみ》「死んじゃ、いや…」

《九条大祐》「ふふつ…ええ、勿論。死にませんよ。『もう二度と、こんな素晴らしい人生は歩めませんし過ごせません』。生まれ変わっても、なんて言うのは嫌いです。今この瞬間が、一番幸せなのでですから。叶うなら…あづみさん達と、そして大切な人達全員と、一生生きていたいんです」

《あづみ》「大祐くん…私も、どんな事が有っても、死にたくない…。ずっと、ずっと…皆人など、大祐くんと…一緒に居たいから」

《九条大祐》「…じゃあ…本当に、俺とずっと一緒に居てくれますか?」

《あづみ》「うんっ…!」

《九条大祐》「……………有難う、あづみさん」

《あづみ》「急に改まる大祐くん…何だか、久し振りに見た」

《九条大祐》「確かに、久し振りですね」

《あづみ》「こういう時は何時も、大事な話をする時なんだって…えへへ、もう知ってるもん」

《九条大祐》「流石、としか言えません…」

《あづみ》「前にも…大祐くんの事は、何でも知りたいって…自分で言ったから…//」

《九条大祐》「それじゃ、俺はあづみさん以上に、あづみさんの事を知りたいです。……………いえ、知ってみせます」

《あづみ》「わ、私だって負けないもん」

《九条大祐》「…ふふつ、そう言ってくれるなんて、可愛いったらありやしない」

《あづみ》「も、もう…大祐くんは、直ぐに私を可愛いって…」

《九条大祐》「事実だからこそ、こうして何度も口に出れるのですよ？
要は、何時見ても可愛いって事です」

《あづみ》「く／＼／＼」

《九条大祐》「然りげ無く俺の右手を、両手で、ぎゅつと握ってくれるなんて」

《あづみ》「ぐ、具体的に言わないでよ…！」

《九条大祐》「つつい」

《あづみ》「うう／＼／＼」

《九条大祐》「ずっと顔真つ赤ですけど…大丈夫、です…？」

《あづみ》「だ、大祐くんが…私の嬉しくなる事、言ってくれるから…」

《九条大祐》「只のキザ野郎とか言われなくて、安心しましたよ」

《あづみ》「私、大祐くんにそんな事…絶対言わないもん」

《九条大祐》「それは…有難う、としか言えませんね。俺の親友は容赦無いから…優しいあづみさんに感謝です」

《あづみ》「そ、そんな…私、別に優しくないよ…？」

《九条大祐》「いいえ、天使の様に優しいです。…天使が優しいかどうかは置いて」

《あづみ》「えへへ…ありがと、大祐くん」

《九条大祐》「…そんな、誰にでも優しくして、何時見ても可愛くて…俺が、この世に生きる意味であるあづみさんに、俺からの誕生日プレゼント。貴女に渡すと、覚悟を決めました」

《あづみ》「だ、大祐くん…？急に…どうしたのー」

《九条大祐》「俺は貴女の事が…あづみの事が、大好きだ。だから…失敗しても後悔は無いさ」

《九条大祐》「確かに、ずっとこのままでも良いって…心の何処かで微かに思っていた。幸せで楽しいこの時間。あづみが側に居てくれるだけで、俺は満足『だった』。…けど、今のままの関係で収まる

程、俺があづみに対して抱くこの想いはそんな微かな物じゃ無い」

(…そうだ)

《九条大祐》「あづみからも、こんなに好いて貰っている。何度も何度も、あづみは俺に………その…なんだ、あづみの想いを、色んな形で俺に伝えてくれた」

(何時も何時も、お互いの距離を縮めようと頑張っていたのは、彼女だ)

《九条大祐》「だから今日は、俺からあづみに…自分自身の本心を、形として伝えたい。これを受け取ってくれるかどうかは、あづみ次第だ」

(…最後の壁位は、俺から当たって砕くと決めたんだ)

《あづみ》「…っ！………大祐くん………こ、これ………」

《九条大祐》「ああ、俺は貴女と……あづみと、ずっと一緒に居たいから。この一線を越えなきゃ、これ以上の関係は築けないと確信したから……。だから、あづみさえ良ければ……」

(頼む、届いてくれ……この想いつ……！)

《九条大祐》「俺の、あづみに対する想い、その『形』を…受け取ってくれませんか……？」

………

【流れる沈黙】

《あづみ》「………」

《九条大祐》「………」

《九条大祐》(此処まで引き伸ばしたのは自分だ。駄目なら駄目で………諦めー)

《あづみ》「あ、あのねっ………こういうの、渡された時の受け取り方とか………私、ちゃんとは、分からない……けど」

《あづみ》「えっとね、その…ほんとに、私で…私なんかで、良いの…？大祐くんはっ……」

《九条大祐》「あづみが良い…いや、あづみじゃなきゃ、嫌なんだ。だから…お願い」

《あづみ》「私、が…受け取っても、良いの…かなっ…」

《九条大祐》「それは…あづみ次第だよ。俺からの誕生日プレゼント、受け取ってくれるかな」

《あづみ》「…う、うんっ…、凄く、嬉しい…」

《九条大祐》「それなら…良かった。ずつと、あづみに渡すか悩んで居ただけど…決心して正解だった」

《あづみ》「あり、がとっ…大祐くん…」

《九条大祐》「ふふっ、此方こそ。…あづみ、此れからも2人で、皆んなで、ずつと一緒に。笑い合つて、この幸せな時間を未来にも築いて行こう」

《あづみ》「んっ…ひうっ……………」

【頭を下げ、頷きを見せる各務原あづみ】

《九条大祐》「…だから、ね？もう…泣かないで？どんな経緯であれ、あづみが泣いている姿を見るのは…耐えられない」

《あづみ》「…！ご、ごめん…なさい…」

《九条大祐》「どうして謝るのさ。あづみが謝る理由なんて、何一つ無いのに。…………ごめんなさい、って言われる位なら、あづみの笑顔が見たい。何時も俺に見せてくれる、その…可愛い笑顔」

【手に取ったハンカチで、各務原あづみの閉じている瞼を、頬へと伝う涙を優しく拭き取る】

《あづみ》「…………んっ……………」

【九条大祐からのプレゼントを両手で、自分自身の胸に押し当てながら、笑顔を見せる】

《あづみ》「ありがと…大祐くん」

《九条大祐》「俺は何も…………それより、あづみの笑顔が見られて嬉しいよ。こんな俺からの、こんなプレゼント…あづみは喜んでくれたかな…」

《あづみ》「はい…凄く、嬉しいです。…大祐くんからの、プレゼント。私と貴方が…一緒に居る、ずつと一緒にって、そんな『証』みたいな気がして…／／／」

《九条大祐》「…それが、そういう『証』になってくれるのであれば…

一生外す事は無いです」

《あづみ》「私も……でも、例えこの証が無くても……私はずっと一緒、だよ……？」

《九条大祐》「ええ、勿論……俺だっけと一緒です」

《あづみ》「えへへ……大祐くん」

《九条大祐》「ん？」

《あづみ》「私だっけ……大祐くんの事、だ……大好きっ……／＼／＼」

《九条大祐》「……有難う、あづみ。此処まで一緒に歩いてくれて……俺からのプレゼントを受け取ってくれて」

《九条大祐》「あと……さつきは言うタイミングを見付けられなかったけど……」

《あづみ》「……？」

《九条大祐》「誕生日おめでとう、俺の大好きなあづみ」

《あづみ》「くく／＼！！」

《九条大祐》「……ずっと言いたかった事を、想いを、やっと伝えられた。これで一步は進展出来たかな？」

《ベガ》「一步と言わず……何段か踏み越えていきましたよ、2人は」

《あづみ》「お、お母さんっ」

《九条大祐》「ベガさん……」

《ベガ》「……とは言え、折角大祐から貰ったプレゼント。あづみは早く身に付けたいでしょう。ですが……まだその時では無い事、大祐は重々承知してますよね？」

《九条大祐》「はい、勿論です。かなり段を飛ばしてしまったので……次からはしっかりと、段を踏んでいかなければ……」

《あづみ》「大祐くんと……一歩ずつ」

《ベガ》「……ふふっ、前よりあづみは大祐にべったりですね」

《森山碧》「とか言ってるけど、今日の夜にでもしちゃうんですよね？ やっちゃうんですよね？ いや、期待してますわ」

《九条大祐》「あ、ああ……あづみさえ良ければ……」

《あづみ》「え、えっと……？」

《森山碧》「……マジかよ。あんなに手を出したく無い、とか言ってた

奴が…踏み切ったな、おいおい〜！」

《あづみ》「な、何の話…？大祐くん、何かするの…？」

《ベガ》「段を飛ばす、どころか蹴り飛ばしてますね」

《九条大祐》「…あ、ベガさん。予めご了承を頂けると幸いです…」

《ベガ》「？」

《九条大祐》「あづみさんを絶対幸せにします。何が有っても、俺がどうなろうと、彼女だけは守ってみせます。…どうか、あづみさんを〜」

《ベガ》「大祐」

《九条大祐》「は、はいっ」

《ベガ》「今更、私の許可が必要ですか？2人の幸せに、私が口を出す理由は有りません。大祐なら、安心してあづみを任せられる、そう思っていたのは今に始まった事では無いです。…あづみだって、相手が貴方だから、こうしてデレデレになっている訳で」

《森山碧》「デレデレ…って、凄く照れているか、べったりくつついたりする事だよな。2人の現状にお似合いだ。笑ってやる」

《九条大祐》「…あづみさんの母親である貴女から…ベガさんからそう言った言葉を頂けて、光栄です」

《あづみ》「大祐くん、何だか騎士みたい」

《九条大祐》「あづみさんを絶対に守り抜くと決めたから、かな？」

《あづみ》「えへへ…ありがとう」

《ベガ》「…ですが、大祐。此れだけは何が何でも守って下さい」

《九条大祐》「…？」

《ベガ》「あづみを絶対幸せにする。それは当たり前の事です。ですが、口では無く行動として。…此れからずっと、それを私に示して下さい。万が一あづみを不幸にした場合、幾ら大祐と言えど…」

《森山碧》「許しません！っ的な？」

《ベガ》『消しますよ？』

《あづみ》「お、お母さんっ…!?消すって…」

《九条大祐》「…っ！はいっ！」

《森山碧》「何で若干嬉しそうなんだよ、お前は…」

《九条大祐》「ん？いや…其れ位、ベガさんはあづみさんが大好きなんだって。まあ、俺と比べる時点で雲泥の差だけど」

《ベガ》「…………私からは以上です。後はあづみと大祐、2人で好きな様に過ごせば良いと思います。例えそれが…子作りでも」

《あづみ》「ふえっ…」

《森山碧》「…下がらせて貰おう」

《九条大祐》「ベガさんからも了承頂けましたし…あづみさん、早速現実に戻ってしちやいますか」

《あづみ》「はうっ……………あ、あの、えっと……………はい……………／／／」
《ベガ》「事は迅速に…では無いですよ。お姫様抱っこから、あづみを下ろして下さい」

《九条大祐》「…冗談ですって。以前お話しした通り、あづみさんの体の事も有ります。出来てしまった場合の事だって、考えないといけませんから。生々しい話ですけど」

《ベガ》「分かっているなら良いのです」

《九条大祐》「……………ですが、ベガさん。正直、此処まで来て止まる様な関係ではいたくない。それも分かって頂けると」

《ベガ》「強気な姿勢…ええ、私を押し切っても、あづみと結ばれてみて下さい」

《あづみ》「は、話に付いていけないよう…」

《九条大祐》「どんな壁も乗り越えてみせますよ。…あづみさんと一緒に」

《あづみ》「一緒に…って、何だか嬉しいね」

《ベガ》「流石、頼りになります」

《九条大祐》「…とは言え、あづみさんの事が最優先なのは確かです。この判断は全て、彼女に委ねさせて頂きますよ」

《あづみ》「…えっ、わ、私…!？」

《ベガ》「悪くない判断ですね」

《あづみ》「わ、私は……………知識なんて、全く無いけど……………大祐くんと、したい…な…／／／」

《九条大祐》「何をするのか、詳しくは分からないです…よね？」

《ベガ》「手取り足取り、大祐が教えてあげれば良いと思いますよ」

《九条大祐》「俺だつてした事無いですからね：!？」

《あづみ》「大祐くんも：初めて」

《ベガ》「2人がお互いを理解していれば、何も問題無いです」

《九条大祐》「：もう、ベガさんからそう言われてしまうと、引き下が
る事は出来ませんね。あづみさん、取り敢えず現実に戻りましょ
うか。話はそれからです」

《あづみ》「う、うんっ：！」

《あづみ》（心の準備、しておかないと：！）

《ベガ》「：あづみを、絶対に傷付けないで下さいね」

《九条大祐》「あづみさんが傷付く様な真似をしたら、自害しますから」

《ベガ》「その覚悟でお願いします」

《九条大祐》「ええ、承知致しました。：：：：：さて、あづみさん。

：行きましようか」

《あづみ》「は、はいっ」

《九条大祐》「：お手を」

《あづみ》「うん：／／／」

――

《ベガ》「手を繋ぎながら、微笑ましいですね」

《リゲル》「：：：：：」

《ベガ》「リゲル？」

《リゲル》「：：：：：な、何かしら？」

《ベガ》「：いえ？何でも無いですよ」

《リゲル》「：：？」

――

《九条大祐》「……………ん、ん……………うあ……………」

《あづみ》「……………ふあ……………」

《九条大祐》「……………あ……………精神的にぐったりだな、こりや……………ははつ……………あづみさんの可愛さにやられた」

《あづみ》「えへへ……………大祐くんからのプレゼント、大事にしなきゃ……………ふう、ちよつとだけ、落ち着……………まだ、ドキドキしてるよう……………」

《九条大祐》「……………ん？」

《あづみ》「ふえ……………」

《九条大祐》「……………あ……………あ……………あ……………」

《九条大祐》「……………あづみ、さん……………!?!」

《あづみ》「だ、大祐くん……………!?!」

【後退りした各務原あづみの片手が空に着き、ベッドの上から落ちそうになる】

《あづみ》「きやつ……………!」

《九条大祐》「つ、危ない……………!」

【九条大祐は咄嗟の判断で各務原あづみの腕を引き、背中に手を回し、彼女が落ちないように支える】

《あづみ》「……………?」

《九条大祐》「……………何とか、間に合った」

《あづみ》「あつ……………大祐くん……………ご、ごめんなさい……………!」

《九条大祐》「あづみさんが大丈夫なら、それで良いのです……………さ、取り敢えず此方に……………」

《あづみ》「う、うん……………」

【2人でベッドの上に座り、改めて話を始める】

《九条大祐》「……………しっかし、びっくりしましたよ……………。あのままあづみ……………」

みさんが落つこちてたら…なんて、考えたくも無い」

《あづみ》「大祐くん…あ、ありがと。私もちよつと…びつくりしちゃって…」

《九条大祐》「俺もです…まさか、起きたらあづみさんが隣で寝ていたんですもの」

《あづみ》「ここ…大祐くんのお部屋、だよ…?」

《九条大祐》「ええ、ですけど…俺がナナヤに頼んで寝始めた時は…この場にあづみさんは居なかった筈…」

《あづみ》「わ、私も…どうしてここに居るのか、分からなくて…」

《九条大祐》「謎が一つ、誰がこんな事…?置き手紙、か…?」

《あづみ》「大祐くん、それ…なに…?」

《九条大祐》「紫色の封筒に、ハート形のシール…まさか、な。どうやら、誰かからの置き手紙のようです」

《あづみ》「誰かからの…リゲル、は…私と大祐くんがソリトウスさんのお部屋から退出した時は…居たもんね」

《九条大祐》「まあ、何と無く察しました」

《あづみ》「…?」

《九条大祐》「…ふんふん…ははん…?はあ…はいはい」

《あづみ》「だ、誰か…分かった…?」

《九条大祐》「…!!…全く…相変わらず的を得た事を言ってくれますね…」

《あづみ》「まとをえた…」

《九条大祐》「ええ…ルクスリアさんの事です。この置き手紙…そして、あづみさんを此処に寝かせたのは、彼女の仕業です」

《あづみ》「で、でもっ…どうして…」

《九条大祐》「…端的に言えば、彼女なりの背中の後押し、です」

《あづみ》「(何て、書いてあったんだろう…?)」

《九条大祐》「…何だか、気にしてる表情を浮かべてるね」

《あづみ》「ふえっ…!か、顔に出てた…?」

《九条大祐》「ん…、パツと見？」

《あづみ》「…その、私が大祐くんと同じベッドの上に寝かせられてた事が、やっぱり…気になって…」

《九条大祐》「半分正論、半分彼女の下心。そんな感じの内容でしたね」
《あづみ》「あ、あはは…」

《九条大祐》「あづみさんの苦笑いも、新鮮なことで」

《あづみ》「……………そう言えば、大祐くんからの手紙…」

《九条大祐》「態々ポケットに取っておいたのですか…!？」

《あづみ》「だ、駄目…だったかな…？」

《九条大祐》「ああいえ…嬉しい、けど恥ずかしいな、と…。要ります？…それ…」

《あづみ》「えへへ…大祐くんからのお手紙、大事にとっておきたくて……………」

《九条大祐》「……………あー、もう…可愛過ぎますって…あづみさんは」

《あづみ》「大祐くんだったって、か…かっこいい、よ…？」

《九条大祐》「…ありがと、お世辞でも嬉しいよ」

《あづみ》「お世辞じゃないもんつ。…ほんとの事だから」

《九条大祐》「相変わらず、さらっと言われる一言に悶えそうです…。

あづみさんの放つ言葉は驚異的ですな」

《あづみ》「大祐くんも、私の事言えないよ…？」

《九条大祐》「そうですね…」

《あづみ》「然りげ無く、大胆な事を言うって…ソリトウスさんも言うてた」

《九条大祐》「…ほう？」

《あづみ》「自覚…」

《九条大祐》「無い…ですね。平常運転ですので」

《あづみ》「…むう…」

《九条大祐》「…っ！頬を膨らませたあづみさん、やばいですって…!」

《あづみ》「…？え、えつと…？」

《九条大祐》「可愛い」

《あづみ》「うう…／＼／」

《九条大祐》「…ふふつ、ほんと…何度言っても足りない位だ」

《あづみ》「……………私だって、何回言っても足りないもん」

《九条大祐》「？」

《あづみ》「う、ううん…何でも、ないよ…？」

《九条大祐》「あづみさんの小さな眩きを聞き逃すの、好い加減どうにかしなきゃな…」

《あづみ》「だ、大祐くんが気にする事…無いよ…？…私も、ふと口に出しちゃうから…」

《九条大祐》「それが又可愛さの一つ」

《あづみ》「あ、ありがと…？」

《九条大祐》「……………」

《あづみ》「…大祐くん…ど、どうしたの…？」

《九条大祐》「……………あ、いえ…」

《あづみ》「？私の顔に、何か付いてる…？」

《九条大祐》「…ご安心を、何も付いていませんよ。ただ単純に…一生、こうしてあづみさんと過ごせたらなって…」

《あづみ》「……………私も、そう思ってる。リゲルとお母さん、そして…大祐くんとずっと一緒に。えへっ…楽しく過ごすの」

《九条大祐》「ええ…ずっと、一緒です。あづみさんさえ良ければ、ですけど…」

《あづみ》「…誰に何て言われても、私は絶対…大祐くんの側から離れないよ…？」

《九条大祐》「ふふっ…なら俺も、絶対にあづみさんの側から離れない。

…ストーリーカーみたいだけど」

《あづみ》「そんな事無いよっ」

《九条大祐》「……………ありがとう、あづみ」

《あづみ》「…っ、大祐くんの…偶に、そう呼んでくれるの……………ずるい…／／／」

《九条大祐》「あづみが嫌なら…やめますけど？」

《あづみ》「あうう……………いい、いやなんかじゃ…ない」

《九条大祐》「それなら良いんだけど……………」

.....
【安定の沈黙】

《九条大祐》「.....」

《あづみ》「.....だ、大祐くんー」

《九条大祐》「..あづみ」

《あづみ》「は、はいっ..!」

《九条大祐》「...?ふふっ、そんなに緊張しなくても、大丈夫だよ?何も食べる訳じゃ無いから」

《あづみ》「.....う、うん..」

《九条大祐》「性的な意味は除いて、ね」

《あづみ》「ふえっ..」

【九条大祐が、各務原あづみをベッドに優しく押し倒す】

《あづみ》「あっ.....だ、大祐くん..?」

《九条大祐》「ん?」

《あづみ》「えっと、あの..ね、わ、私.....」

《九条大祐》「..うん」

《あづみ》「..まだ..心の準備、出来てなくて.....」

《九条大祐》「.....じゃあ、あづみはどうしたい?」

《あづみ》「えっ..?」

《九条大祐》「このまま先へ進むか、一度ストップして、あづみの心の準備が出来るまで待つか」

《あづみ》「.....」

《九条大祐》「..なんて、ね」

《あづみ》「...?大祐く..っ.....んっ..」

.....

...この時、恥じらいなんて有ったのだろうか。

?頬を真っ赤に染め、内股をもじもじと擦り合わせ。

? しばかり荒い吐息を吐きながら、何かを欲求する様な彼女の瞳。

? 自分の瞳に映るそんなあづみが、どうしようも無く愛おしくて?
?

? 俺は何の躊躇いも無く、自分の唇を、あづみの唇へと重ね合わせた。

「ん……んんっ………っ」

? あづみにあまり無理はさせられない。

? 勝手にそう思った俺は、少し、ほんの少しだけ、あづみの口の中へと舌を這わせる。

? すると彼女は甘い声を上げ、それでも俺を受け入れようと…俺の手をぎゅつと握ってきた。

「…んっ………ふあっ、あっ……ん………」

? そんな彼女の右手を、俺は優しく握り返す。

…細くて綺麗なあづみの指。

? そして俺の指。

? 丸で絡み合わせる様に、俺とあづみは互いの手を握り合う。

「………っ、あづみ……大丈夫かい……?」

? ふと、彼女の心臓が過剰に鼓動している事に気が付く。

? これは…一度落ち着く為の時間が必要だ。

? そう思った俺は、ゆっくりと、彼女の唇から自分のを離す。

? 自分で言うのも癪に触るが…どうしても駄目だ。

? 少しでもあづみに何か有ると、心配で不安になってしまう。

? 愛して止まない彼女が苦しむ姿は、二度と見たく無いから。

「ふあ……はあっ……はあっ………」

「あづみ、やつぱり…体の事が最優先………」

「いや…だ。大祐、くん…」

…あづみのトロンとした目が、物欲しさを語っている。

? 表情も何だか、ほわつとした雰囲気で……そんな瞳で見つめられ
たら、我慢も何も出来なくなってしまうだろ。

? 俺だって、男だ。

?好きな女の子が目の前で、自分を欲している姿を見て…理性を保つ事なんて到底出来やしない。

?言うなれば、今直ぐにでも襲いたい位だ。

?けど…、ここは抑えろ。

?流れは自分で掴め。

?勢いに身を任せて、あづみを傷付ける様な真似だけは絶対に許されない。

?何より、俺が俺を許さない。

「…あづみ、一旦ストップ。ちよつと落ち着かないと、あづみの体がー」

「~~~~」

「…ごめんね。でも…あづみの体を優先したいんだ」

?俺がストップをかけると、あづみは、我慢していた自分の想いに耐えられなくなったのか。

?胸元に、ぎゅゅと抱き着いてくる。

?これは…俺が支えてあげないとな。

?自分の右腕を彼女の背中に回し、右手の平で後頭部に触れる。

?かなりきつい体勢では有るが…あづみの為だ。

?俺はそのまま、ゆっくりと彼女の体を、ベッドの上へと寝かせる。

…彼女も自分の気持ちを抑えるのに、必死なのだろう。

「大祐くんっ…」

?俺の名前を呼びながら、細んだ瞳で此方を見つめている。

?そんな彼女をじつと見つめ返すと、右手の握る力を強くしつつも、ほにやつとした笑顔を見せてくれた。

?うっとり…といった表情、何とも可愛らしい。

「あづみ…、唐突に悪いけど…少し質問して良いかな」

「…?」

「一度落ち着く為に…少しだけ」

「…ん」

「夢とか…将来的に何がしたいとか、あづみは何か有る…?」

「……………夢……………うん、沢山ある…」

「あづみが良ければ、聞かせて貰えるかな…」

？先程までの言動からはかけ離れてしまったが…俺がこれを訊ねるのには、ちゃんとした理由が有る。

？単純な考え…では有るが、俺にとっては大事な物。

？此れからのあづみの事。

？今此処で、しっかりと聞いておきたい。

「……………あ、あのね……………私、学校に行きたい…な」

「学校、ですか？」

「うんっ！……………小さい頃から、体が弱くて…あまり通えなかったから」

「あづみさん…」

？気落ち…とは違う。

？彼女は明らかに、落ち込んでいた。

？瞳に、少しばかりの滴を溜めながら。

？学園生活…辛かった事の方が多かっただろうに。

？俺だって、楽しくは無かった。

？無理をしても周りに合わせて…一体何が楽しい。

？それでも俺は…確かに、しょうが無く周りと合わせた。

？遅れを取るまいと勉強して、他愛も無い話に相槌をうって、頼まれた事をこなして。

？結果、ただただ自分が疲れてしまった。

？周囲に溶け込めない、周りと違った事をする。

？その軽度がどうであれ、痛い視線は飛んで来るものだ。

？周りの目線を気にして生きていく程、不自由で辛い物は無い。

「……………私が…小学生だった頃」

「確か……………保健室への出入りが多かったとか…？以前あづみさんが、そう言っていました…よね」

「うん。…だからね、周りの子から、色々言われてたの」

「……………はあ、相変わらず、苛々する話に変わりはないな」

「あっ……………、ごめんなさい…」

「違う。あづみの事をとやかく言っていた、その周りの奴等に対してだ」

?俺も…あづみの気持ちは嫌という程、理解している。

?いや、あづみの気持ちを理解出来たという時点で、嫌なんかでは無い…嬉しかった。

?俺の小学生時代、あづみと境遇が似ていたからだ。

?体が弱く、大体二時限目から昼前近くに登校、それでも保健室には出入りし。

?周りからの視線は、丸で針を刺された様な鋭い痛みを伴った。

?心身両方に。

「…だからね…?私は、周り子と違うんだって…」

「悪い意味で捉えてしまった…」

「…それでも、学校には通いたかった。お母さんも、お父さんも…優しくして…」

「ですけど、それは子供の義務では無い。優しくしてくれていた母親、父親に対しての恩返し…とでも?」

「うん…ただけど、それだけじゃないの」

「私…学校、好きだったから、かな…」

?彼女は涙目で、それでも笑顔を浮かべて…。

?俺の左手を、ぎゅつと握って離さなくて。

?あづみは…昔から相当苦しんでいた、それは少し前までずっと…続いていた。

?…ただけど…。

「…外の世界は、如何でした…?好き、ですか?」

「えへへっ…私は、大好き。学校…自由には出来ないけど、同じクラスメイトの人と喋って…遊んで。そんな学校生活を…夢、見てて…私…私の夢、叶わなくて…」

?あづみ…泣かないでくれ。

?あづみが悲しんでいる姿を見ると、心の奥底が握り潰される感覚に襲われる。

?彼女の事が、大好きだから。

?もう嫌なんだ、あづみが苦しみ悲しむ姿を、この目で見るのは。

? そんな、目に見えない物からも…彼女を守ると誓ったから。
? してあづみの願いは、全て叶えさせると決めたから。

「………ねえ、あづみ。じゃあ…その夢、俺が実現させても良いかな」
「…っ、ど、どう…やって…?」

「至つて単純。学校を設立させて、学園を築き上げる。其処があづみの…通う学校」

「で、でも…」

「大丈夫、心配ご無用さね。クラスメイトは沢山居ますし…多世界からも連れて来ます。Z/Xと人間…そんな蟠りや隔たりの無い、学校。…出来れば女の子だけのクラスに、あづみさんを入れさせてあげたいなあ」

「…大祐くん…」

「ん?」

? あづみの夢は、俺の夢でも有る。

? 夢は、一度見れば風船の様に膨らんでいくもの。

? その膨らんだ風船を、そのまま空高く飛ばすか、諦めて割るか。

? 自分自身に委ねられた判断。

? 夢を叶えるのも諦めるのも、自分で選ぶ事。

? 俺は…あづみの夢や願い、望みを全てを実現させたい。

? 責任は全て俺が持つ。

? だから、あづみには自由になって欲しい…。

? 今迄苦しんで来た事全てを、忘れ去るかの様な幸せな時間。

? 彼女には…そんなひと時を過ごして欲しいんだ。

「…大祐くんって、やっぱり…優しい、よね」

「今のままじゃ、所詮建前を飾っているに過ぎないさ。あづみの学園生活…全力で実現させる。可愛い『俺のあづみ』の為だから、何だつてこなしで見せるさね」

「あう…うう…／＼／＼」

? かなり大胆な発言を口にしてしまったが…あづみは頬を赤らめ、目をぎゅつと瞑っていた。

? 何時もなら両手で顔を隠しているのだが、今回はその手が塞がっ

ている。

？だから目を瞑ったのだろうか。

「あづみは相変わらず、可愛いこと……まあ、学園の案件は全て任せて。ベガさんやヴェスパローゼさんにも手を借りますから、安心でしようし。多世界にもZ/X使いがいるやもしれない。俺はその子達を優先して、探しに出る旅にでも出ますかね」

「大祐くん……何処か、行っちゃうの……？」

「ん……あづみと似た境遇の子が居れば放っては置けないし………Z/X使いつてだけで、かなり苦労してるだろうから」

「離れるの……やだよ……」

「大丈夫、ずっと居なくなる訳では無いよ。必ず帰ってくるから……ね？」

「ん……！」

「おっと……」

？俺がこの家から当分離れる。

？そう聞いたあづみは、赤らめていた頬を膨らませ、俺の体を自分に寄せようとしていた。

？が……。

？何とも可愛らしい力で。

？此方が少し力を入れるだけで、あづみに寄せられるこの体は微動だにしない。

？その位、彼女の力が『可愛い』という。

？可愛い……可愛いんだ。

？あづみの華奢な腕からすれば、納得させられる位の。

？そんな必死なあづみが、可愛くて愛おしい。

「……ずっと、一緒って決めたんだもん……」

「……そうだな。じゃあ、1日2日だけ、出掛けるってのは？」

「う、うんっ……」

「不安かな……？」

「ちよつと、だけ……」

「……大丈夫、リゲルさんにベガさん、皆さん此処に居ます。もし……俺の

事なら、御心配無く。直ぐに帰って来ますから」

？此方をじつと、不安そうに見つめるあづみ。

？何度も『大丈夫』『心配しないで？』『直ぐ戻る』という言葉を、彼女が安心するまで言っただけだ。

？逆に俺の方が心配でなくなりそうさ。

：事実、本当に持ち場を離れて良いのか、なんてのはずっと思っ
ている。

？その間にあづみが、リゲルさんが、彼女達が何かに襲われたら。

？そんな不安が頭をよぎって仕方が無い。

？絶対に守ると決めたんだ。

？彼女達は誰にも奪わせない。失って堪えるものか。

？だからこそ、俺が何からでも守るんだ。

？これは：ああ、俺の方が心配性じゃないか。

？だが、何としても守りたい大切な人、物が出来れば：必然的に心配性となってしまうものだろう。

？失う事が怖いから。

？自分の全てと言っても、過言では無いから。

「俺だって：不安で不安で、怖くて仕方が無い。だけど、ずっとそれを言っていたらあづみの夢を叶えさせてあげられない。それに俺は、貴女達を信じてますから」

「：！」

「だからあづみも、俺を信じてくれるかな。絶対に：帰ってくるって」

「：うんっ」

「ふふっ：有難う。何も死地に向かう訳じゃないから、そんな大袈裟に考え無くても良いのは知ってるけど：」

「だ、大祐くんっ」

「ん」

「あのね：何か、私にも出来る事、無いかな：？大祐くんが私の夢を叶える為に頑張ってくれてるのに：私だけ見てるのは、いやだ：。私は大祐くんの望みを、叶えたい：から」

？相変わらずというか何というか。

? されたら返すという、献身的な部分はある部分の一つだな。
? それ彼女自身の負担になったり、疲れに繋がらなければ良いの
だけだ…。

? 人からの好意は素直に受け取れ。

? 俺が良く言われる言葉の一つ。

? 折角、あづみが、恥ずかしがりながらも言ってくれたんだ。

? 此処は甘えてみるのも、良いかもしれない…か。

「うくん…とは言われたものの」

「な、何でも良いのっ…」

「何でも？」

「うんっ」

「…じゃあ、少し早いけど…あづみの学生服姿が見たい、な」

「わ、私の…学生服姿…？」

「ああ。…これから設立を始める学園の制服は、色々決めてからになるからまだまだ先って事で…無いけど」

「…！確か、リゲルが用意してくれた筈…」

「凄まじいな、リゲルさん…」

「えっと…小学生の頃をイメージして、リゲルが着せてくれたの。『せめて形だけでも』って」

? 優しいし行動力は流石としか言いようが無いので、俺がリゲルさんを尊敬してしまうのは当たり前前の事だろう。

? あづみへの愛は、リゲルさんが一番深い事は知っている。

? だが…俺も負けてはいないと自負、したい。

? それはリゲルさんに対しても、だ。

? 彼女達への愛は誰にも負けない、負けたく無い。

? そういった意思を強く持っているからこそ、彼女達を失いたくないという想いも強くなってしまうのだろう。

? この言葉、建前だけでは終わらせない。

「えっと…じゃあ、あづみの制服姿…見てみたいな。あづみさえ良ければ…」

「は、はいっ…ちよっと…恥ずかしい、けど…」

「恥じらうあづみも可愛いこと」

「う、うう……／＼／＼」

「……………って、あれ…そう言えば衣服は何処に…？」

「あ、えっと…多分…私の部屋に有ると思う…。だから、大祐くんのこと待たせちゃうよ…？」

「大好きなあづみの制服姿が見れるなら、何時までも待つさ。…後は…お互いに落ち着く時間には丁度良いだろう」

「…じゃあ…少し、着替えてくるね…」

「焦らないで…ね？」

「？そう言つて俺は彼女の頭を撫で、覆い被さる様な形からあづみを解放し、そのままベッドの上へと胡座で座る。

「えへへ…また、お邪魔します」

「何時でもおいで」

「？可愛らしい笑顔を見せる彼女に、俺も笑顔で、返答を返す。

「？そしてあづみは部屋の扉を開け、一度退出。

「？1人の、少し寂しいが落ち着く為の時間が訪れた。

「？こうして1人になってみると、ふとした事であづみさんを思い浮かべてしまう。

「？このベッド…さつきまで、あづみさんが仰向けで寝転んでいたんだよな、とか…。

「？あづみさんと俺は、本当に釣り合っているのか…やら。

「？今更そんな事を気にしたって仕方が無いのは分かっている。

「？だがやはり…頭の隅で考えてしまうのは変わらず、か。

「？完全に自分だけの、と認識が持てれば気にならなくなる…と信じたい。

「？それも…今日で決まる。

「？彼女の実の母親であるベガさんからも許可は下りた。

「？あづみさえ良しとするならば、未成年だろうが何だろうが、その一線を越えてでも。

「？彼女と一つになりたい。

「？あづみと…繋がりたい。

?もう、うだうだとこの関係で止まるのは嫌なんだ。
?周りからも認められて。

?いや、例え認められなくても…あづみがその壁を越えたいと言うのなら。

?俺は彼女と一緒に進むだけだ。

――

「お、お邪魔…します…」

「…えっと、あづみ、さん」

「あ、あまり見ないで…！恥ずかしいよう…／／／」

?少しして、彼女は戻って来た。

?戻って…来たのだが。

「俺…あづみさんに手を出して、犯罪者と間違われる気が…」

?あづみさんの制服姿。

?まあ…可愛いのは当たり前だ。

?だが…何故ランドセルまで一緒に付いてきた。

「だ、大祐くんっ…少し、私の部屋に来て貰える、かな…?」

「…っ、は、はい…?」

?何事だ…。

――

「…これは?」

「え、えと…」

「その様子ですと、あづみさんにも分からない状況…?」

「うん…そう、なの…」

? あづみの部屋。

? に、お邪魔した訳だが。

? 何故こうなった。

「…部屋、間違えてませんか？」

「あ、あつてるもん」

「ですよね…」

? 本当に見間違いと思ってしまう位だ。

? 本来のあづみさんの部屋は、リゲルさんと2人で過ごす為に作られた物だ。

? 俺の部屋と同じく、寝室は別。

? その寝室に問題が有った。

「…リゲルさんは？」

「まだ、帰つて来てないみたい…」

「此処で寝た、という訳ではないのですね」

「うん…」

? まあ…リゲルさんが居れば、即座に元の部屋へと戻すだろう。

? 壁紙まで変えられちゃつてまあ…。

?

? ベッドは何時ものダブルベッド…に、枕はご丁寧に青と桜色の2つが並べられて。

? 掛け布団まで少しお洒落な模様…：ハート型の抱き枕(?) みたいなのが1つ。

? ベッドの横には、先程あづみさんが背負っていたランドセルが。

? 壁紙はピンクのラインが入った…何これ…。

「徐なピンクで染まつてる…」

「ね、ねえ…どうしよう。リゲルに怒られちゃうよう…」

「いや、それはないでしょうけど…」

? あづみさんがあたふたしてる。

? 右往左往しながら、何処から片付けようか…何から手を付けようか。

? 大丈夫なのか、これ…。

「取り敢えず、あづみさんはベッドの上にも座ってて下さいませ。俺が何とかしてー」

「むう…だめ。大祐くんも…一緒に座るの」

「あはは…了解、です」

「け、敬語もだめっ」

「駄目です?」

「だ、だめ…」

? 強気で攻められると弱いらしく。

? 一瞬にして日和りを見せた。

? けれど…今日はあづみの誕生日だ。

? 素直に彼女の言う事を聞き入れよう。

「…分かった。それじゃあ、お言葉に甘えようかな」

「っ! うんっ」

? 元気良く返事を返してくれること。

? ふと…ベッドの上に設置されている物置台に、気になる物体が2つ。

「あづみ、これ…」

「大祐くーわくっ!」

? 俺がその物体に話を持って行こうとした瞬間、あづみは慌てて

『それ』を隠そうと抱きしめる。

「……………リゲルさんの、小さなぬいぐるみ…?」

「…っ! さ、流石大祐くん…! これ、リゲルが作ってくれたの」

「リゲルさん自身が?」

「えっと…私が、作って欲しいって…お願いして…」

「成る程」

「えへへ…」

「もう片方は?」

「……………な、内緒」

? リゲルさんの小さなぬいぐるみ。

? 彼女はそのぬいぐるみを手に乗せて、嬉しそうに此方へと差し出してくれる。

?可愛い。

?だが。

「……………っ!」

「はひゃあっ!?!」

?俺は見逃さなかった。

?あづみかもう一つ、片手に『誰かの』小さなぬいぐるみを握って…それを自分の胸元に抱きしめていた事を。

?どうやら、彼女なりに隠している様子だ。

?然しあづみが隙を見せた瞬間、俺は彼女の肩に片手を回し、首元を撥る様にもう片方の手を動かす。

?間違えてあづみが倒れたりでもしたら、危ないからな。

?なら撥るなどという話だが。

「んー!?!」

「…随分と頑なですね」

?だが、彼女は『それ』を断固として見せたく無いのか、遂には自身の服の中へと、ぬいぐるみを隠してしまった。

?凄まじい早業…丸で刹那の如く。

「……………やゝ!?!」

「あづみがこんなな幼げな態度を取るというのも…珍しいな。ごめん、悪かった…」

「あつ…だ、大祐くんの所為じゃなくてっ…!」

?あまりしつこ過ぎるのは宜しく無い。

?少しやり過ぎたと、自分で反省した上で彼女に謝罪する。

?すると、あづみは焦って否定を始めた。

?そんな否定する必要は無いのだが…。

?そう思った矢先。

「……………あづみ、さん…?」

「…?」

「あの…落ちてます、よ?」

「……………っ、きやあ!?!」

?焦って否定をした瞬間、彼女は両手を自分の膝上に置き、胸元に

隠していたぬいぐるみが落ちてしまった。

? その際…誰を催して作られたのか、一発で分かった。

「あづみ…えつと…」

「〜! / / /」

「あづみさんストップ! 其処に隠しちゃ駄目ですつて!」

? 彼女は一拍置いて顔を真っ赤にし、ぬいぐるみをスカートの中へと隠そうと試みていた。

? だが…流石にそれを許す訳にはいかない。

? 俺は咄嗟に彼女の手を掴み、少しキュツと握りしめる。

「……………一旦、落ち着こう」

? 落ち着く、という言葉を今日だけで何回言った事やら。

? 取り敢えず俺は、掴んでいたあづみの手を離す。

? そして至つて冷静にそう言う、彼女は恥ずかしがりながら、そのぬいぐるみを又胸元に抱きしめて…。

? 兎に角…収まってくれた様子だ。

? 今なら話を進めても問題無いだろう。

「…あづみ、そのぬいぐるみ…見間違ひじゃなければ、『俺』を催して作られたのか…?」

「……………(くくん)」

「そう、か…」

「ごめんなさい…いや…だったよね」

「大丈夫、全然嫌なんかじゃないさ。寧ろ嬉しい位だから…けど、問題は…」

? 俺を催して作られたぬいぐるみが、あづみの胸元に当てられていたり…服の中に入れられたり、終いにはスカートの中へと入れられるところだった。

? 自分自身の見た目に似せて作られた小物が、好きな女の子のあんなところに…という気まずさ、それに。

? こう、なんと言うか…あれだ、そう…あれ。

? 恥ずかしくて言葉も浮かんで来ないって…!!

「と、兎に角…一体何の為に俺のぬいぐるみを…?」

「……………」

「…言いたくない、かな」

「……………御守り」

「御守り？」

「うん…………リゲルと、大祐くんの。この2つを側に置いておくだけで…何時でも、何処でも三人一緒って…」

「…成る程」

「後は、リゲルと一緒に眠る前…………大祐くんのぬいぐるみを、私とリゲルの間に置いて…………二人でー」

「あづみさん…………ストップ、それ以上は俺の精神が持たなくなります、から…」

？これは、完全に俺の責任だ。

？何時も何時も、就寝する時は1人だけで眠りに就いていた。

？こんなにも魅力的な女性達と一緒に夜を過ごす等、俺が襲ってしまいう可能性が有るが故に、到底無理な話で。

？だが…………あづみさんは。

「…えつとね…………私、寂しかったんだ…………。だから、リゲルに2人を作って貰って…………」

「眠る時は…………」

「ううん、違うの…………」

「？」

「…眠る時だけじゃなくて、何時も。私が寂しくなった時に、大祐くんのぬいぐるみをぎゅってすると…………何だか安心して…………」

「あづみ…………さん」

？そう言う、彼女の表情は微笑んでいた。

？どうやら本当の事…………なのか。

？あづみさんの事もリゲルさんの事も襲って堪るかという、俺の勝手な思いは、逆に彼女達を寂しくさせてしまっていたのか。

？何時だって、そうだ。

？自分の思い込みが楔となって、彼女達を縛り付けていた。

？俺は自身の抑制を図ってやっていた事だが…………それが仇となって

しまうとは。

…ならば、その償いを含めて。

「あづみさん、今日は貴女の誕生日です。何か…他に欲しい物は有りませんか…？」

「…？私の欲しい…物」

「ええ、何でも構いません。俺が全て用意しますから」

「ほ、ほんと…？」

「はい、勿論ですよ」

「…あの、えつと…じゃあ、私が一番欲しい物を言う…だから、大祐くんの欲しい物も教えて欲しい、なあ…」

「あづみさんの誕生日ですのに…ですけど、今日は貴女の言う事を一番にさせて頂きます。例えばイエスマンになろうとも」

「じ、じゃあ…私が一番欲しいの、言うね…？」

？彼女は何故、返してくれようとするのか。

？今日はあづみさんの誕生日なんですよ、返す必要は…と、以前なら言っていただろう。

？だが、逆に考えろ。

？今日が誕生日の人、その人の願いを優先すべきでは無いのか。

？ならば、あづみさんの願いを最優先にするべきだ。

？ああ、今に始まった事では無いという突っ込みは受け付けない。

？話がずれそうなので強引に撤去するが。

？果たして彼女は、一体何を欲しがるか。

？今の俺はイエスマンだ、何を言われてもイエスと答えるだけー
「えと、その…」

「イエス」

「…？い、いえす…？」

？間違えた。

「…申し訳御座いません、続けて頂けると」

「う、うん…。あのね…」

「……………」

「私、大祐くんがずっと一緒に…側に居てくれるっていう、幸せが欲し

い…な」

「……………ふふっ、あづみさんってば……………」

「だ、だめ…？」

「…いや、違います…あづみさんの願い、直ぐに叶えられる事で良かったって」

？あづみさんの一言。

？その一言で、又もや『あの』雰囲気を訪れる。

？俺は、あづみさんの体を、ゆっくりとベッドの上へ倒していく。

？彼女の肩に回していた手…腕を、自分の体を前へ倒すのと同じペースで。

？あづみさんの体を支えながら。

？先程と同じ様な、瓜二つの状況へと変貌させた。

「…他に、欲しい物は…？」

「……………さっきの、続き……………」

「して欲しい事、になっちゃいますね？」

「欲しいの…は…、大祐くん……………こ、こ…っ！」

「こ…？」

「こっ…こど、も…／＼／」

「…あづみさん、大胆なこと」

「だ、だって…！大祐くんは、何が欲しいの…？」

「ん？あづみさん、ですかね」

「はうっ…！うう…」

「…本当、ですよ」

「大祐…くん……………んっ」

？以前にも違う誰かさんから言われた気がするが…その時は真っ向から否定した覚えが有る。

？だが然し、今回そう言ってきたのは紛れも無い、あづみさんだ。

？大好きで大切に大事な彼女からそう言われてしまうと、気が狂いそうで仕方が無い。

？幾ら抑制しようと、我慢しようと思うも、体は言う事を聞いてはくれやしない。

?俺は思わず、あづみの唇に口付けを交わした。

「んっ……んん……ふぁ……あっ……」

?彼女の甘い声、そして交わるキスの音。

?俺の脳、精神は、其れ等の音に溶かされていく。

?この流れ……もう離しはしない。

?先程は自ら手放してしまった様なものだが、あづみさんの体の為。

?致し方無かった。

?だが今回こそは、必ず一步を踏み出してみせる。

?あづみさんの願い、欲する物を聞かせて貰ったのだから。

?俺がそれを、プレゼントしてあげねば。

「……………はあっ……………ん、くっ……」

「……………っ、はあっ……」

「……………」

「……………あづみさん……」

?お互い息切れを起こし、一度、重ねていた『それ』を離す。

?どうやっても彼女の体が心配なのは、最早どうしようも無い。

?やはり気になってしまうものだ。

「……………大祐、くん……………」

「……?」

「あの、ね……大祐くんが、プレゼントしてくれた……あの『指輪』……はめて、みる……?」

「……………いえ、まだ。あの指輪は、その時が訪れたら。……それ以前に、いけない事をしようとしているのですが……」

「えへへ……分かった。じゃあ、大祐くん……」

「はい……?」

?あづみさんへの誕生日プレゼント。

?そう……あの場で彼女にプレゼントした物は、『指輪』。

?あづみさんとの関係を進める為には、これしかない、と。

?自分の考えをぶつけている様で……彼女が喜んでくれるか、ずっと不安だった。

?だが、その不安は要らない、不要物と化していた。
?泣きながら…喜んでくれたのだから。

?俺まで嬉しくなった、のは当たり前の話で。

?まだ早い…お互いの年齢を考えると、先走り過ぎたかも分からない。
い。

?それでも、俺はプレゼントしたかった。

?年齢なんてどうだって良い。

?あづみさんの事が大好きだから…年齢なんて壁に、阻まれて止まる様な物では無い。

?一方的な愛だしたら、止まっていたかもしれないが…。

?その、あづみさんにプレゼントした指輪。

?彼女は大層喜んでくれたのか、今からする事に重ね、指輪をはめようか悩んでいた様子だ。

?然し…其処はちゃんとした場所で、初めて彼女の指にはめてあげたい。

?順序が逆だと、ベガさんからお叱りを受けてしまいそうだ。

?だがそれも又、一興。

?今はその時では無い、そうあづみさんに伝えると…彼女は体を起こし始めた。

?押し倒され、一方的に攻められるのは苦手だったのか…?

?まさかな。

?そんな考えが脳裏を掠める。

…が、彼女は予想外の行動に出た。

?一般的に言われる『女の子座り』をし、上に着ている自身の服を口に啜えて。

?魅惑の腹部を見せながら、たくし上げ。

?そして一言。

「…大祐くん…続き、しよ…?」

「…っ!!」

「えへへ…」

「あづみさんっ…!!」

「んっ…♡」

?まさか、あづみさんがこんな事をしてくるだなんて。

?もう…我慢ならぬ。

?其処からは、2人だけの、きやつきやうふふな展開を繰り広げる夜の始まりだった…。

――

…朝。

?何時もとは違う、彼女が隣で寝ている朝。

?「くー…すー…」と寝息を立てるあづみさんの頭を、思わず撫でたくなってしまふ。

……………いや、既に手は動いていた。

?此れだけは何時も通りと言えるだろう。

?それはさておき。

?昨夜は中々、説明し難い夜だった。

?あづみさんのあづみさんがあづみさんにあづみさんを…みたいな。
な。

?最早狂気である。

?ただ一つ言える事は…あづみさんが可愛過ぎて死ぬ寸前だった。

?後は…避妊って何ぞ?みたいな展開になってしまったのが、一番
気まずかったというか…。

?これ、話して大丈夫な内容か…?

?駄目だろ駄目…駄目だ。

?思い返すと、今隣で寝ているあづみさんを襲ってしまふ。

?落ち着け…先ずは、彼女が起きた時の為に何かしら用意しておく
のが、出来る旦那の一つだろう?

？取り敢えず、あづみさんが寝ている間に作れそうな物…とか、飲み物…。

？此処、俺の部屋じゃなかった…!!

「う、あああ……」

？変な声を出してしまった。

？実は昨夜、全く眠れなかったのだ。

？誰かさんが用意してくれた青い枕の所為でな！

？とか、単純にあづみさんの隣だったから…か。

？記念日位だからな…一緒に寝るといふのは。

？後は旅の途中、野宿する時とか…。

？懐かしいな…あづみさんと出会って間も無い時の事、色々な事を

思い出してしまうな。

？あの頃から、もうこんなに経ったのか…。

「思い出に浸るのは悪く無いけれど、私の事も頭に入れてて欲しいわね…？」

「…っ！リゲルさん…お早う御座います」

「ええ、お早う…大祐」

「昨日は…眠れました？何処にも居なかったの…」

「……………／／／」

？ふと、何時の間にか背後に居たりゲルさん。

？質問の答えが頬を赤らめて目を逸らすって…一体どうしたのだろうか。

「リゲルさー」

「……………ベッドの『ギシギシ』と軋む音に、私の聞いた事が無いあづみの声。それに加えて大祐の…ええ。眠れると、思うのかしら…!?!／／」

「この部屋に居たのですか…!?!というか俺の…ええ、って何です!?!」

「私とあづみの部屋だもの…居て、当然よ…」

「…まさか、全部聴いてました…?」

「……………／／／（こくん）」

「あー…もう、リゲルさんってば!」

「な、何よ……！私は何も悪くないー」
「何故あづみさんと言い、貴女まで……そんなに可愛いのですか!!」
「か、かわつ……!?私に聞かれても、困る……わ」
「リゲルさん」
「な、何かしら……?」
「……俺とあづみさんの声を聞きながら、何をしていたんです?」
「…….……………何も、してないわ……?」
「ほんとに?」
「し、してないわよっ……」
「……………」
「……………してない……から……/ /」
「……目、泳いでますよ」
「……っ!」
「……………」
「べ、別に……あづみと大祐の関係が羨ましい訳じゃ……無いんだから……!」
「……………そう、ですか……まあ、俺も深い詮索は止めですかね」
「……………えっ……あっ……」
「申し訳御座いませんでした……プライベートに土足で踏み込む辺り、何も考えてない事がバレバレですね」
「大祐……ね、ねえ……」
「……さて、あづみさんが起きた時の為に、何かしら用意してー」
「~~~~!!」
「つと……!?り、リゲルさん……?急に抱き着かれると……」
「……わ、私だって……寂しかったんだから……!」
「……………」
「ずっと、大祐とあづみみだけ……関係が進んで行って、私だけ取り残されてく感じがして……。遂には、あづみと……し、したんでしよう……?私だって……大祐とあづみの事、大好きなんだからっ……!」
「……………ふふっ……その本音が聞けて、良かった」
「えっ……?」

? リゲルさんは…可愛くて、美しい。

? 素直じゃない所も可愛いし、怒っている時の表情、必死な時の表情も大好きだ。

? 無論、そんな彼女が照れている姿なんて、精神が耐えられない位に可愛らしい。

? 他の人には素っ気無い態度を取りながらも、俺にはこうして自分を出して話してくれる。

? リゲルさんは…本当に。

「…食べてしまいたいな」

「…っ!? た、食べるって…えっと…」

「あづみさんとした事を、リゲルさんともしたいって事です。ええ、クズ発言ですけどね」

「……………だ、大祐が…」

「はい?」

「…大祐がしたいって言うなら、してあげても…良いわよ…?」
? 全く…。

「リゲルさんは卑怯ですーっつと…!?」

「きやつ…!」

? と、リゲルさんは何かに躓いてしまったのか…此方に勢い良く倒れて来た。

? そんな彼女を受け止めようとしたものの。

? 俺まで一緒に倒れてどうするんだ。

「…つてて…大丈夫ですか、リゲルさー」

「ええ…私は平気ー」

「……………」

「……………」

…何と無く、察してはいた。

? 俺は…アニメや漫画で、女の子が此方に倒れてきて、気付けば男性に跨っていたというシチュエーションを何度も見た事が有る。

? 良く見るのは、男性の胸元や腹部、或いは○○。

? だが、何時も思っていた。

? 物理的に、法的に、それは有り得ないんじゃないかと。
? それは何故か?

? 大体は女性より男性の方が身長が高いだろ?

? 女性が男性側に倒れて来て、男性も一緒に倒れる。

? 身長を考えると、女性は精々、男性の足元近くに跨ってしまう筈だ。

? それが…今この状況、せめてそうなって欲しかったと言える。

「…リゲルさん」

「え、ええ…分かってる、わ…」

? 男性は反動で少し後ろに倒れる。

? 女性は男性にぶつかる為、余程加速がついてない限り、あまり前には倒れない。

? それが相まってしまおうとどうなるのか。

? 結論。

? リゲルさんの豊満などある物が、俺の何かに乗っている。

? 何か、とは言わない、言いたくない。

? 下ネタは大嫌いだから。

「……………」

「……………」

? 取り敢えずこの状況から脱出しよう。

? そう思った矢先。

? タイミングとは、何時も悪く。

? 2人の部屋の扉が、思い切り勢い良く開いた。

「大祐くん! あづみんとの一夜は、どうだった? 今度は私と一緒に……………」

「む…あづみちゃんに先を越されちゃったけど、次は私だからねっ。

大祐くん、神様と人間の……………」

? 誤解だ。

「誤解」

「ええ…誤解よ」

「…誤解には、見えないわ?」

「こうなったら…私も混ざっちゃうからね！」

「待て、ナナヤ！ストップ！騒ぐとあづみさんが起きちゃうから…つて、聞いてないだろ…!?ルクスリアさんもどさくさに紛れて、ああもう!!」

? あづみさんの誕生日の朝は…波乱の幕開けとなってしまった。

「一度落ち着いてくれ…!!」

「んー…いや、かなっ♪」

「私もいやだからねっ」

「ちよ、ちよつと…大祐が…」

「次はリゲルさんって決まっていますから…!」

「ええっ…!?!?!」

? 次は、というか…本来であるならば2人共…いや、何でもない。

? それはそれで、色々と問題有りな気がするから。

? 兎にも角にも…あづみさん、誕生日おめでとう。

? happy birthday。

――

『……………大祐くん……………大……………好き……………』

――

h a p p y V a l e n t i n e , s d a y

? 2月14日。

「くー……………すー……………」

? 今年もこのイベントがやって来た。

「……………うみゆ…」

? 色々と大変な1日。

「……………ゆ…」

? そう、バレンタインだ。

「……………だい……………しゅけ……………」

? 朝っぱらから、中々ハードな事態になり兼ねている。

? 起きたら、自分の寝ているベッドに7歳の少女が…布団の中へと
潜り込んでいた。

「……………うゆ……………」

…きさらちゃんは、相変わらずの調子だ。

――

「だいすけ、おはよう」

「おはよう、きさらちゃん」

? 暫くして、きさらちゃんが俺のベッドから元気良く起きてきた。

? 彼女が起床した時の為に、軽く口に出る物を用意しておく。

? するときさらちゃんは、俺の膝の上に座り、此方をじっと見つめて来る。

「…うゆ」

「食べる前に、歯磨きしに行こうか」

「うい」

? 早く食べたい。

? そんな心の声が、彼女の表情から察せた。

?だが然し、寝起きは歯磨きをしてから物を口にしないと、色々大変な事になる。

?詳しくは語りたく無い。

?強いて言うなら、寝て起きたばかりの口内には菌が沢山湧いているから。

?とでも言えば説明つくか。

?兎に角それは置いて、だ。

?何故きさらちゃん、俺のベッドに侵入していたのか。

?確かに何時もと変わらないが…部屋の鍵が最早意味を成していない。

?まさかきさらちゃんが解錠出来る訳が無い。

?という事は必然的に。

「ヴェスパローゼさんか…」

「…ろーぜ?」

?歯磨きを終わらせ、俺の膝の上に乗りながら菓子類を口にするきさらちゃん。

?しっかりと主食を用意したつもりが、まさかデザートから食べ始めるとは。

?今度からは、きさらちゃんが主食を食べ終わってからデザートを出すか…。

「…ん、そう。ちよつとね。ヴェスパローゼさん…」

「ろーぜ……………、っ!だいすけ、こえ、みてっ」

「?」

?ヴェスパローゼさんの名前を口にすると、きさらちゃんは気にする素振りを見せたが…。

?逆にヴェスパローゼさんの名前を聞いて、思い出した事も有った様だ。

?きさらちゃんは何かを両手に持ち抱える。

?俺は、彼女の持つそれが何なのか、パッと見て直ぐに思い付いた。

?帽子だ。

?いや、帽子というよりかは…つばの長いハット、という方が正解

か…？

？魔女達が被っているようなハロウィンハットだ。

？ハロウィンとか何時の話だ。

？変な事に巻き込まれたく無いと、自室に立て籠もっていた思い出しか無いぞ。

？関係の無い話に逸らしてしまったが…。

？強制的に路線を戻すでしょう。

？きさらちゃんが両手で持っているハット。

？然し、驚かされたのはその素材だ。

？少しばかり光沢が目立つなど気になったが、明らかに、材質が従来の帽子に使われる物では無い。

？そして漂う若干な甘い香り。

？これは…。

「チョコレート…？」

「うい。ろーぜが、つくうてくえた」

「絶妙な硬さを維持させて…良く作ったもんだなあ。でも、何故に」

「だいすけ、こっち、くゆ」

「？」

？あまり詳細を確認出来ないのは怖いが、きさらちゃんは迷わずに俺を引つ張って連れて行く。

？何処に。

？さあ。

？俺には全く分からない。

？ヴェスパローゼさんの企み然り。

？流石に此ればかりは察せないからな。

…ふと、少し移動した所で、きさらちゃんが足を止めた。

？その場所とは。

「……………風呂場？」

「どあいやー」

「ど、ドライヤー…？えっと……………これで良いの、かな」

「あいがとっ」

? 朝のシャワー。

? それが俺の日課だ。

? 然し何故、俺が愛用しているこの風呂場に来たのか。

? そして何故、服も着衣したままなのか。

…いや? 衣服は着たままで無いと、色々大変な事になる。

? 幾ら何でも7歳の少女の裸体を見る訳無いだろう。

? 間違い無く警察沙汰に繋がってしまう。

? だが、それにしても謎だ。

? どうしてきさらちゃんは、態々此処に――

「だいすけ、あっち」

「…後ろを向いてれば良いのかな?」

「ういつ。きいがいってゆうまで、むいちゃだめ」

「…了解」

? きさらちゃん、何をするつもりだ。

? 抑、ドライヤーを扱えるのか。

? 俺として火傷やら何やら、心配で心配でならないのだが。

? 間違つてきさらちゃんの可愛らしい手に、あつつい熱風が…。

? 駄目だ止めろ、それが現実になったら俺は死ぬ。

? きさらちゃんを傷付けたという責任を負って。

? 本当、彼女が何をするのか気になって仕方が無い。

? あまり危険な事はしないで欲しいが…。

? ふと、ドライヤーのスイッチが入った音が耳に響く。

? それと同時に、少しばかり弱めの風音が頭にも響いた。

? 弱め…という事は熱い筈だ。

? 十分に気を付けてね…きさらちゃん。

? 心でそう願うばかりだった。

? というか何故ドライヤー。

「……………ん…だいすけ、いい」

「きさらちゃん…火傷とかー」

「…はっぴい、ばえんたいんちおこ」

? 呼ばれたから振り返ったものの。

? ハッピーバレンタインチョコ。

? 彼女は確かにそう言った。

? てつきり、振り返ったらチョコを手渡されるという、夢の様な展開かと思っただが…。

? きさらちゃんの行動は、俺の想像斜め上へと突き進んでいた。

? 先程見せてくれた、チョコレートで出来た帽子…それをきさらちゃんが被り。

? ドライヤーで溶かす。

「…!? な、何してるのきさらちゃんっ…!!」

「うゆ…ばえんたいんちおこ、きい…」

「……まさか、きさらちゃん自身がバレンタインチョコレートって…?」

「…うい。ろーぜが、こうすれば、だいすけ…たべてくえるって…」

? 待て。

? 頼むから待ってくれ。

? 突っ込みどころ満載過ぎて、何から手をつければ良いのか分からない。

? ? というか、きさらちゃんって普通にドライヤー使えたのか…!?

? 待て…その前に、えつと…ヴェスパローゼさんが、きさらちゃんに変な事を吹き込んでー

「だいすけ…べたべた、すゆ…」

「っ…仕方無い…きさらちゃん、この風呂場を使ってチョコを流そ。出来るだけ急がないとー」

「きい…ひとり、おふよ…はいれない…」

「あの方はこれを見越した上できさらちゃんにさせたのか…!!」

? 本当に、ヴェスパローゼさんは…。

? 良くも悪くも頭が働く事。

? 『悪どさ』まで目立っている事、本人は気付いているのだろうか。

? いや…承知の上で仕掛けて来たのだろう。

? 兎に角、チョコレートまみれのきさらちゃんを浴槽に連れてかねば…。

「…だが、どうしたものか」

「だいすけ、いっしょはいゆ」

「それは……………」

？ 思考の停止…なんて、している暇等無い。

「…取り敢えず、そのチョコレート…流そうか」

「うゆゆ〜♪」

？ 駄目だ…きさらちゃん、純粹過ぎていけない。

？ 本当、一切の曇りも無い純粹さ。

？ そんな幼い少女を穢す訳にはいかない。

？ 早いところチョコレートを流してあげて、事を済ませよう。

？ 最悪リゲルさんやあづみさんをお願いする他、無いか…。

――

h a p p y V a l e n t i n e , s d a y
o . 2

? さて、準備が出来たのは良いものの。

? 俺ときさらちゃんは互いに、タオル一枚巻いただけ。

? ひよんな事でずり落ちない事を願おう。

? 因みに、あづみさんやリゲルさんは未だに就寝中だ。

? それならいつそ、誰にもバレずにこのまま終わってくれ。

? ヴェスパローゼさんは音信不通だしな…態とというのはバレバレだけれど。

? ふと、手を握られる感触が伝わってくる。

「だいですけっ」

? 目線を下にやると、きさらちゃんが此方を見つめていた。

? チョコレートでべたべたになっているきさらちゃんが。

? これは…改めて見ると凄まじい光景だな。

「きさらちゃん…、そうだね…まずはシャワーでチョコレートを軽く流そうか」

「うい」

「問題はチョコレートを完全に落とす方法だけど…其処ら辺は詳しく無いからな。何にせよ、助っ人は必須か…」

「ろーぜ?」

「ヴェスパローゼさんが主犯の様な物だからね…違う方をお願いするしか無いかな」

? 彼女とそんな会話を交わしつつ、シャワーの蛇口を捻る。

? すると、温水が勢い良くシャワーヘッドから噴出された。

? 噴出口を下に向けておいたから良かったものの、反動でシャワーホース其の物が全体的に震える。

? 最悪顔面に水圧アタックをかまされる所だった。

? 次からは気を付けねば…。

? と、大分温度が調節出来た所で、風呂場用に作られた柔らかな

クッションの上へと、きさらちゃんに座って貰う。

？ 勿論タオルは巻いたまま。

？ 何方かと言えばクッションの方が気になる？

？ そうだな…材質は…忘れた。

？ 今はそれどこれでは無い。

？ 最早クッションの設定がガバガバだ。

？ こちとら焦っているのですよ、ええ…！

？ 何故が故、バレンタインデーに、7歳という幼い少女と風呂場に居るんだか…。

？ だが、まあ…あまり深く気にしても仕方が無い、か。

？ こうなってしまうた以上は何とかするしか無いだろう。

「…きさらちゃん、お湯、当てるね」

「うゆ…」

「ふふつ、大丈夫だよ。怖くないから」

？ 水圧を低めに、出来るだけ熱過ぎず冷た過ぎず。

？ 彼女の体に対しての適温を調整し、シャワーから流れ出る温水を、ゆつくりときさらちゃんの体に当てていく。

？ あまりに急だと、きさらちゃんがびっくりしてしまうからな。

「…どう、かな。この温度で大丈夫そう？」

「…う…ういっ」

「無理しないでね、言われた通りに調節するから」

「だいじょぶ、だいすけ…やさしい」

「ありがと、きさらちゃん」

？ 何だか…微笑ましいな。

？ 本当、きさらちゃんに対して異質な感情を持たない自分に感謝だ。

？ 急に話が変わるが…俺はこう言った幼い少女を性的な目で見るのは、熟大嫌いだな。

？ 少しばかり言葉遣いが悪くなるが…胸糞悪くなる。

？ そう言う趣味を持つのは勝手だが、実際、行動に移すという奴は少なからず居るからな。

? 因みにだ。

? 俺の中での基準、それはあづみさんまでの年代に言える事。

? 要するに14歳。

? 未だ14歳以下の少女に、手を出すやら自らの欲をぶつけるやら

…意味は同じか。

? 何れにせよ、そういった幼い少女が穢される姿は見ても聞いても気分が悪いな。

? 心理学的には13歳以下がどうか言われているが…如何せん、14歳の少女達が周りに多くてな。

? 後は先程話していた『穢される姿を』という話…それが2次元であろうが一緒だ。

? いやまあ…2次元だからこそ、自分の欲をぶつけられるのだから。

? じゃあ俺自身、そういった物を視界に入れなければ良いという話だが…ああ、知っているさね。

? 簡潔に終わらせよう。

? 世の中物騒だからな。

? 何としても俺が守らねば、という話だ。

? 大分狂ったな…。

? うむ、そんな自己主観的な話は置いといて。

「…あづみさんもきさらちゃんも、まだ幼い。だからこそ、守ってあげなければ。彼女達に手出しした輩は…生かしておかない」

「…だいすけ、しゃわ…たおゆ」

「ん？」

「とえた」

「…っ!？」

? 考え込み、その最中。

? きさらちゃんから名前を呼ばれたと思いきや。

? 少しの間、温水を当てていた為かタオルの巻きが緩くなり。

? きさらちゃんのタオルがずり落ちてしまっていた。

? てっつきり、タオルが肌にくっついてくれるかと…甘い考えが招い

た悲惨な結果。

？俺は慌てて目線を横に向け、きさらちゃんに一言伝える。

「き、きさらちゃん…タオル、巻けるかな…？」

「ちおこ、おちてきた」

「…っ…きさらちゃん、良い、此方に体を向けちゃ駄目だからね…!?急いでチヨコレートを落としてあげるから…！」

「ういっ」

？もう何が何だか良く分からない。

？慌てふためく自分に『落ち着け』と言い聞かせるものの、頭では色々と考えてしまい。

？取り敢えずきさらちゃんの方を向き。

「えつとね…タオルの端、此処ね。これを脇で挟んで貰えるかな…？」

？そう言つて見ると、きさらちゃんは無言で頷き、両脇でキュツとタオルを挟み込む。

？最初からこうしておけば焦る必要は無かった…というのは知っている。

？兎に角、きさらちゃんの裸体を見ない様に全力を尽くしているからこそ、こうしてあたふたしてしまう。

？まだまだ冷静さが足りないな…そう、痛い程実感した。

？そんな事を思いながら、きさらちゃんの髪の毛に付いたチヨコレートを、温水で流していく。

？だが…チヨコレートがそんな簡単に落ちる筈が無い。

？分かつてはいたが、まさか洗剤を使う訳が無いだろう。

？きさらちゃんの綺麗な髪の毛を、傷ませる訳にはいかないからね。

？だとするとどうするか。

？まずは応急処置程度に、以前の俺が使用していたシャンプーを使うしかないか…。

？今は髪の毛を切ってしまったから、あまり気にしていないが…一応ながら気に掛けてはいた。

？ヘアーがロングしていた時の話。

? 傷むとパサパサになって、変に跳ねてしまうからな。

? そんな時に使っていた、このシャンプー。

? まあ便利な事で。

? つて、商品説明みたいな話は捨て置いて。

? 例のシャンプーを泡立たせ、きさらちゃん髪の毛の毛へと絡ませていく。

? 長い髪を洗うのはお手の物さ。

? 然し…実際に女性の髪の毛を洗うのは初めてで。

? 扱いが中々、難しい。

? 特にきさらちゃんの髪の毛は畝り、要はウェーブが掛かっているからこそ、更に難易度が上がっている。

? 出来る限り優しく、チヨコレートはしっかりと落とす様に、彼女の髪を洗っていく。

「…きさらちゃん、痛くない…?」

「ふゆ……………きもち、いい…………」

「なら良かった…。泡が目に入らない様に注意してるけど、万が一の時は教えてくれると嬉しいな」

「んっ」

? 少しばかり体を揺らし、反応を示してくれるきさらちゃん。

? 可愛い。

? そして、らんらんと鼻歌を歌うきさらちゃん。

? とてつも無く可愛い。

? 彼女の鼻歌には、何時も癒される。

? そんな癒しのひと時に、ふと。

「……………だいすけ、だえかきたっ」

「えっ、と…誰だろうか。今は申し訳無いが出られないー」

「へあ……………はいてきた」

「っ…!?まさか…!!」

? アクシデントが発生した。

――

h a p p y V a l e n t i n e , s d a y
0. 3

? 誰かが俺を訪ねて来た様だが、部屋に入って来たらしい。
? この時間帯に誰だ、というの言うまでも無い。
? 朝、俺の部屋を自由に出入り出来る人間は1人だけだ。
? 何時も自室の扉には鍵を掛けているのだが…。
? 今は緊急で出られないと、後で来訪者に謝る事で大体は許される。

? だが今回は違う。

? 毎朝俺の部屋に来てくれて、『おはよう』の声を掛けてくれる優しい少女。

「あづみさん…そう言えば、きさらちやんの事で焦ってたばかりに…」
「あづ、まいにちだいすけど、あつてゆ?」

「…そう、だね。彼女と約束してる事が有るから…毎朝来てくれるんだよ」

「きい、うあやましい…」

「まさかの…!」

? しゅんとしたきさらちやんから、意外なる一言。

? 羨ましい…のか…?

? いや、良く考えろ。

? きさらちやんはまだ7歳。

? 起きたらヴェスパローゼさんが出掛けている、という事は少なからず有るのだろう。

? まだ幼い彼女にとっては、寂しい事この上無いのかも知れない。

? 成る程、納得する。

「…だが、どうしたものか。これは誤解を招き兼ねない」

「……………?」

「あづみさん…頼みますから、風呂場には…!」

「…あしおと、すゆ」

? 来ない筈が無いよな。

? あづみさんと顔を合わせたら、何て言えば良いのか。

? 言い訳を考えようにも、所詮は言い訳。

? 更なる悪い展開へと進んでしまう。

? とは言え正直な話をして、こんな話を信じてくれるかどうか…。

? いや。

? あづみさんなら。

? 信じてくれる、そう信じられる。

? おどおどしている方がよっぽど怪しまれるだろう。

? なら最初から、正々堂々と。

? 事実を言えば呑み込んでくれるかもしれない。

? と、悩み込んでいたその時。

コンコン

? 風呂場のドアをノックする音が、全体に響いた。

? 何だこの…一歩間違えれば終わってしまう緊迫感。

? というか抑、バレンタインに違う意味での胸の高鳴りを味わうとは。

? 流石、色々な意味で戦場と謳われる日だ。

? 去年然り今年も戦場だな、こりゃあ。

? ふと、彼女の声が風呂場に広がった。

「……だ、大祐くん? その……もしかしてシャワー浴びてる、のかな。タオル忘れてるみたいだから、持ってくるね」

? あづみさんの声の後に続く様に、パタパタという走る音が一つ。

? 相変わらず、なんて気が利く子だ事。

? そうか、俺は焦って体を拭く為のタオルを忘れてたのか。

? 何時もこんな調子では、あづみさんに申し訳無いな…。

「…今の内、きささらちゃん。髪の毛濯いじゃうね」

「あいがとっ」

? ならば彼女が離れた今しか無い。

? 俺は泡に包まれたきささらちゃんの髪の毛に、又、シャワーから流れ出る温水を当てていく。

? かなりしつかりと洗ったからな…途中アクシデントが多々有ったものの、チョコレートに関しては問題無いだろう。

? 全く、ヴェスパローゼさんは複数の意味でえげつないな。

? 加えて自分から来る訳で無い為に、此方からは何とも言えない。

? 本当、つくづく好きな様にされてるなど。

? だがまあ…きさらちゃんに癒されている自分が居るだけ有って、其処には触れないでおきたい。

? やはり可愛さには勝てないな。

? それは今に始まった事では無い、そう思いながら、きさらちゃんの髪の毛を包んでいる泡を流していく。

「……………きさらちゃん、そろそろ終わるからね。……………きさら、ちゃん……………?」

? 後はしつかりとこの泡を流すだけ。

? それで終了だときさらちゃんに伝えるものの、彼女からの反応が無い。

? これは、あれか。

「……………く……………す……………」

「…寝ちゃってる。このままだと危ないな、早めに終わらせよう」

? 幼い子供は、髪の毛を洗って貰っている最中に寝てしまう、というのは割と聞く話だ。

? 然し彼女は座ったまま、何時前に倒れても可笑しく無い状況。

? こくん…こくん…と、体を揺らすきさらちゃん。

? 最早意識は夢の中、一步手前という所か。

? 俺はきさらちゃんが倒れない様に、自分の胸元辺りを利用し、彼女の体を支える様にする。

? 要するにきさらちゃんの背中、後頭部と、俺の体がぴったりくっ付いている状態だ。

? 今更恥なんて感情は持たない。

? きさらちゃんを早く風呂場から上がらせ、寝かせてあげねば。

? と、ちゃんと洗えているか下に目をやる。

? その瞬間、俺は又もや慌てて目を背けた。

? きさらちゃん自身が寝てしまった事により、彼女が脇で挟んでいたタオルが落ちてしまっていた。

? これは… 一大事だ。

? どうする、一度シャワーを置いて、彼女の体を見ない様にタオルを持ち上げるか?

? いやだが… きさらちゃんのを支えてしまっている以上、此処から動けない。

? 地べたに置く、と… シャワーが暴れ出す可能性が限り無く大。

? 後は… 目視出来ないまま、彼女の髪の毛を洗うか。

? それはあまりに適当だろう。

? あとは… 何か無いか…

「大祐くん、タオル持って来たよ… …あれ…?」

? このタイミングで… いや、寧ろ助かったというべきか。

「これ、きさらちゃんのお洋服… …?」

「あづみさん、俺の声、聞こえています…?」

「だ、大祐くん…? えつと… 聞こえてるよっ」

「すみません、緊急事態です… あづみさんに助けて貰いたいのですが…」

(此処に置いてあるきさらちゃんのお洋服… 凄く気になる、けど…)

「う、うんっ。でも… 私、何すれば良いの、かな…」

「その… … あづみさんも、此方に来て頂けると」

「… ふえっ…!?!」

? 可愛い。

? じゃなくて。

「割りと大変な状況です…、無理を承知でお願い出来る」と

「あう… … えと… … だ、大祐くんは、良いの…?」

「あづみさんさえ良ければ」

「くくく! うう… … / / その… … す、直ぐ行くねっ」

「毎度毎度、申し訳無いです…」

? 良かった… 何とか窮地を脱出出来そうだ。

? 然し、あづみさんと会話する為にシャワーヘッドを手で押さえ、

音を極力消したは良いが…。

? 若干彼女の服を脱ぐ音が聞こえる。

? 何時もの暖かそうな衣服…そのリボンを解く音。

? 更には『パサツ』と、衣服が地面に落ちる…

? 止めだ、止め。

? あづみさんに対して、感情を抑えられない自分は確かに居るが、今はそれどころじゃ無いだろう。

? 彼女にも協力して貰って、この窮地を脱すると決めたのだ。

? 上手く行くと良いが……………。

――

「お、お邪魔します…」

「あづみさつー」

? 死ぬ。

「だ、大祐…くん…?」

「……………いや」

? 彼女がタオルだけを巻いた姿、それを目にするなんて初めてで。

? なんか、こう…言い知れぬ感情が…

「…っ、きさらちゃん…?」

「そうなのですよ…事情は後程説明致しますけど、今はきさらちゃんのタオルを持ち上げてくれると……………」

「大祐くんは、大丈夫?」

「ええ、俺は何とも無いですよ」

「ほっ…」

? あづみさんは胸に手を当て、安堵の息を吐く。

「どうかしました?」

「あつ、ううん…緊急事態って聞いて、大祐くんに何か有ったのかなって…」

「ふふっ、怖くなりました？なんて」

「もう、本当に心配したんだからねっ」

「直ぐに心配してくれるだなんて、俺は良いお嫁様を持ったものだし可愛いし」

「お、お嫁さつ…えへへ…／＼／＼」

？照れてる姿も相変わらず可愛いこと。

？それに、もじもじしながら此方に近付いて来るのは反則だ。

？頬を真っ赤にして真横に来られると、此方まで恥ずかしくなってしまう。

？先まで『恥は捨てた』的な発言をしていた自分は、何処に行ったのか。

「本当、新妻新夫みたいね。初々しい夫婦なこと」

「…っ！」

「ヴェスパローゼさん…貴女、キサラちゃんに何て事を教えたのですか」

「ふふっ、私ときさらのバレンタインチョコ、楽しんで貰えたかしら？」

「俺の話…」

「聞いているわ、安心なさい？」

？何時もの黒いドレスを身に付け、堂々と浴室のドア前に立つヴェスパローゼさん。

？全て彼女が仕組んだ事だというのは、最早語るまい。

？そして地味に警戒しているあづみさんが可愛い。

？キサラちゃんは…寝たままだ。

「ふう…大祐も、堅物ねえ。あのまま、キサラを食べてしまえば良かったのに」

「まだ7歳の女の子に手を出せと」

「14歳の少女に、自分の子供を孕ませた男性が、口にする台詞かしら？」

「まだあづみさんのお腹に子供はー」

「ふえっ…大祐くんの、もう私のお腹に…」

「ストップ、あづみ」

「嬉しい、な：／／」

「ヴェスパローゼさんの一言で話が脱線しましたけど!!」

「あら、良いじゃない。微笑ましいわ?」

? いやいや、『微笑ましいわ』じゃないですよ…。

? どちらら必死で問題を解決しようとしてるにも関わらず、ヴェスパローゼさんは何時もの調子で俺を揶揄う。

? 本当、勘弁願いたい。

? そして、その揶揄いに半分慣れて来ている自分が居る。

? 最早勘弁願いたいか言う話では、無いのかもしれないな。

? 兎に角、バレンティン問題を引き起こした張本人であるヴェスパローゼさん。

? 彼女とあづみさんが、今一番頼りになるのは他ならない。

? 自分に引き金を引いて来た人物が、1番頼りって…。

? ふと、そう思ってしまう。

? だが、どんな状況でもヴェスパローゼさんが頼りになる事に、何ら違いは無い。

? 彼女には、色々と見習うべき点があるからな…頭が上がらないのは事実。

? 何方かと言えば、無理矢理上げさせられているというのが正しいか。

? 全てはヴェスパローゼさんのペースで。

? 全く、何時もと変わらないじゃないか。

ロー

happy Valentine's day
0.4

「大祐くんっ、きさらちゃんの髪の毛…」

「っ！そうでしたね…あづみさん、有難う御座います」

「私も手伝おうかしら？」

「抑、貴女がしてあげるべきでは…」

「じゃあ、最初から私に連絡すれば良かった、という話にはー」

「なりませんよ。連絡出来る状況じゃ有りませんでしたからね。あづみさんが来て下さって、本当に助かりましたよ…」

「えへへ…」

「？そう言った会話を繰り返しながら、きさらちゃんの髪の毛を洗って行く。

「？横隣であづみさんが、きさらちゃんの巻いているタオルを手で押えてくれていて。

「？ヴェスパローゼさんは変わらず…。」

「？と、思いきや。

「…ふっつ、流石にその体勢は辛いでしよう？やっぱり私も手伝うわ」

「？そう、此方に近付き。

「？寝ているきさらちゃんの背中を、頭を支えてくれたではないか。

「？正直な話、驚く以外に他は無い。

「？だが。

「…ですけど、ヴェスパローゼさん。それでは貴女が濡れてしまうのでは…？」

「それでも、貴方の目の前で裸体になる訳にはいかないでしょう？」

「？ふっつ、と彼女は微笑み、優しい瞳をきさらちゃんへと向けている。

「？本当に…我が娘に対する笑みの様だ。

「？何とも、母性本能を感じさせられる。

「？だが、その言葉には何とも言えない…返せない。」

?とはいえ、ヴェスパローゼさんは今日もドレス姿だ。

? 相も変わらず、そのドレス姿が似合っているのは…彼女自身が美しいからと偽り無く言えるだろう。

? 派手ながらも黒という色で控えめに見せ、何方かと言えば、その綺麗な肌を露出している方という…。

? 女王様其の物の、基本スタイルなのか。

? 少しグツと来るものが有る。

「…あら」

「あら？」

「…？」

? ふと、ヴェスパローゼさんの一言に、俺とあづみさんが同じ反応を示した。

「もう…仲が良いアピールは、沢山見てきたわよ？」

「いやいやいやいや…、絶対違う話ですよね」

「ええ、勿論。…ふふつ、少し…羨ましいと思うのは、駄目かしら」

「…！」

…まさかの、だ。

? ヴェスパローゼさんのこう言った、急に方向転換して攻めてくるのは卑怯だ。

? 思わずー

「大祐、顔が赤いわよ？」

「っ、話を戻しましょう…」

「あら…残念ね」

「大祐くん、だ…大丈夫…？」

? 俺が顔を赤くした事に対し、弄ぶ様な態度を示すヴェスパローゼさん。

? 一方で、俺が直ぐに逆上せる事を知っているからこそ…心配してくれるあづみさん。

? こう見ると…珍しい二人と一緒に共同作業だ。

? あづみさん&リゲルさん or ベガさんや、ヴェスパローゼさん&きさらちゃん or ベガさん or 和修吉さんは…当たり前前の様に目に

する光景だが。

? あづみさんとヴェスパローゼさん…。

? 二人は、どんな会話を繰り広げるのだろうか。

「……………つて、ヴェスパローゼさん」

「何かしら?」

「先程浮かべられた疑問、一体何に対してだったのです?」

「知りたいのかしら?」

「勿論…このままでは、気になったままです」

「ええ、別に構わないわ」

? 先にも見せた『ふふっ』という優し気な笑みを、彼女は浮かべる。

? 然し、その笑みに隠された邪の瞳を、俺は見逃さなかった。

…ふと、片腕を掴まれる感触が伝わって来る。

「……………」

? 其方を見ると、あづみさんが訴え掛ける様な瞳で此方を見つめていた。

? 『大丈夫か』と。

? そんな彼女に対し、俺は『大丈夫』という微笑みを返し、『心配しない?』という意味を込めてあづみさんの頭を撫でる。

? すると、小動物の様に身を縮こませるあづみさん。

? 頬を赤らめ、それでも、にこにここと笑っている。

? 反則級の可愛さだ。

「…私の口を開かせないつもりかしら?」

「そういう訳では御座いませんよ…」

「ふふっ」

? ヴェスパローゼさんは相変わらずの調子で…だが、確かに。

? 心配してくれるあづみさんへ、反応を返してあげるのも大切だが、会話を交えているヴェスパローゼさんへとしつかり返答するのも大事。

? 其処等辺、器用にこなせなければ…。

? 彼女達から好意を寄せて貰っている身として、情けない。

? とは言え、人には限界が有るのも又事実。

? だからこそ、自分に出来る最大限を、彼女達へ。

? むう…難しい事に変わりは無いが。

「考え事かしら?」

「何故バレたのですかね…」

「貴方と居る時間は、きさらや其処の少女よりも確かに少ない。けれど…此れでもしっかり見ているのよ?」

「…ヴェスパローゼさんはー」

「ふふっ…貴方を何時でも、私の物に出来る様に」

「俺は、物じゃ、御座いませんから!」

? 全く…隙を見せたら直ぐにでも襲って来そうな勢いだ。

? それがヴェスパローゼさんらしい、とも言えるが…。

? あづみさんの目の前でそう言った事を言うのは、狙ってなのか。

? 何れにせよ、此れではあづみさんが…。

「…むう」

「あら、頬を膨らませて…どうしたのかしら」

「だ、大祐は…渡さない…もん」

「…ふふっ、良い表情ね。流石、一線を超えただけは有るわ?」

「はわっ…／＼／＼」

? ヴェスパローゼさんのお言葉に、あづみさんが可愛らしい反応を見せる。

? きさらちゃんは相変わらず、胸元で寝息を立てているし…。

? 可愛い2人と美しい1人。

? こうして考えると、何だか感慨深いものが有る。

? 然し…悩み始めては又、ヴェスパローゼさんに察せられる。

? 此処は取り敢えず、物事をしっかりと片付けてから、だな。

ー